秋田県文化財調査報告書第181集

八木遺跡発掘調査報告書

公害防除特別土地改良事業八木
地区に係る埋蔵文化財発掘調査

1989・3

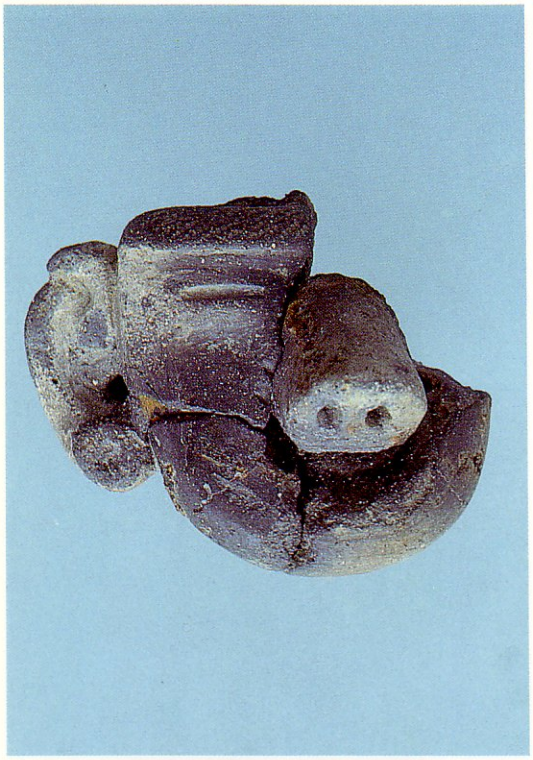
秋田県教育委員会

八木（やぎ）遺跡発掘調査報告書

公害防除特別土地改良事業八木
地区に係る埋蔵文化財発掘調査

1989・3

秋田県教育委員会



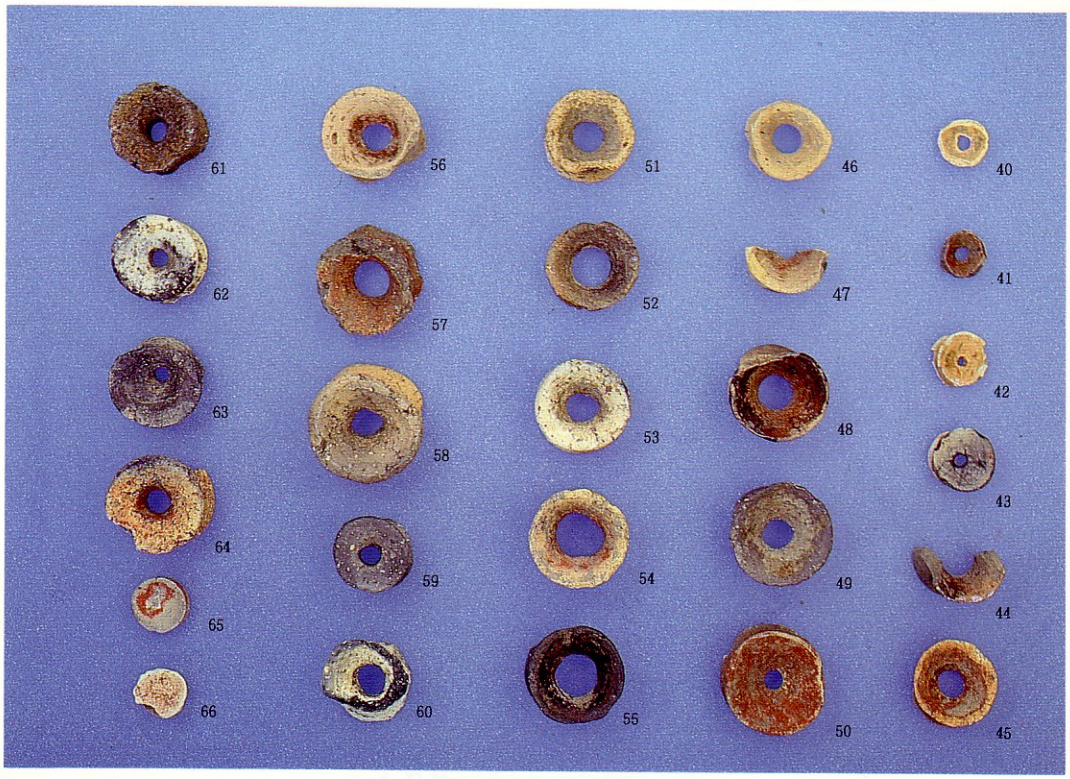
1．第4・5区出土大型土偶頭部

2．第4・5区出土顔面付石製品

3．第7区出土大型土偶足・獣足

1．第２区出土土偶

2．第10区出土屈折坐像土偶



3．各区出土耳飾

1．各区出土土偶・石製品・土製品

2．アスファルト付石錘

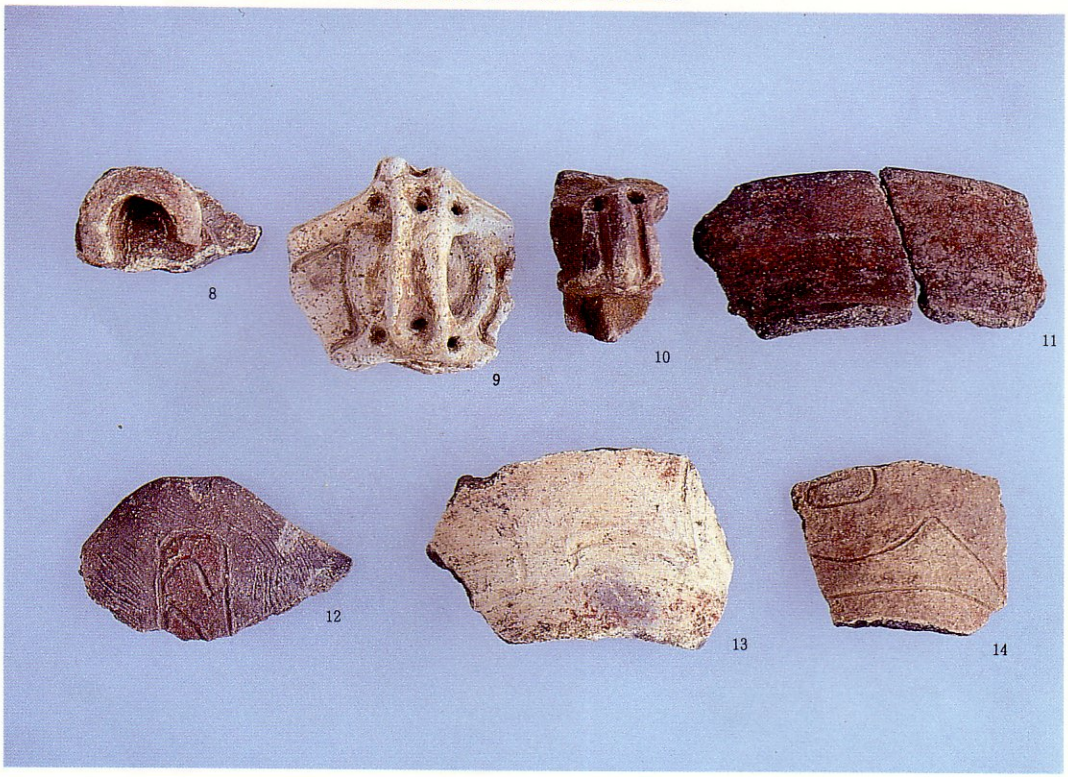
1．アスファルト付打欠石錘、アスファルト付切目石錘

2．切目石錘、打欠石錘

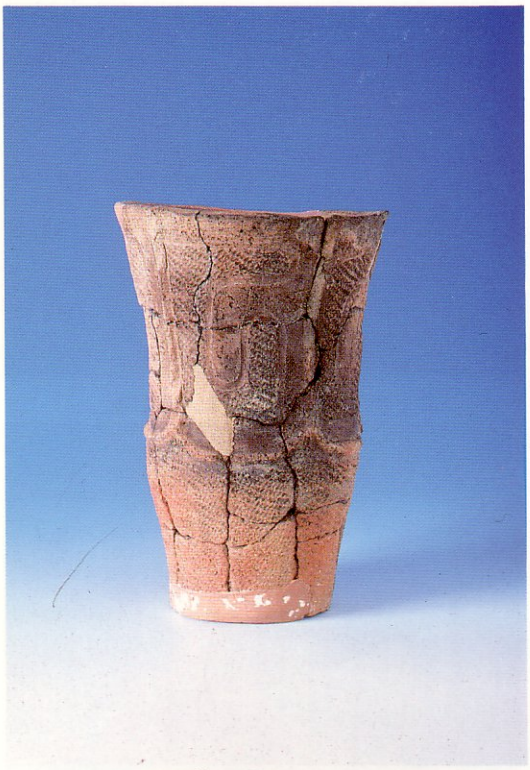
1．石　鏃

2．嘴状石器

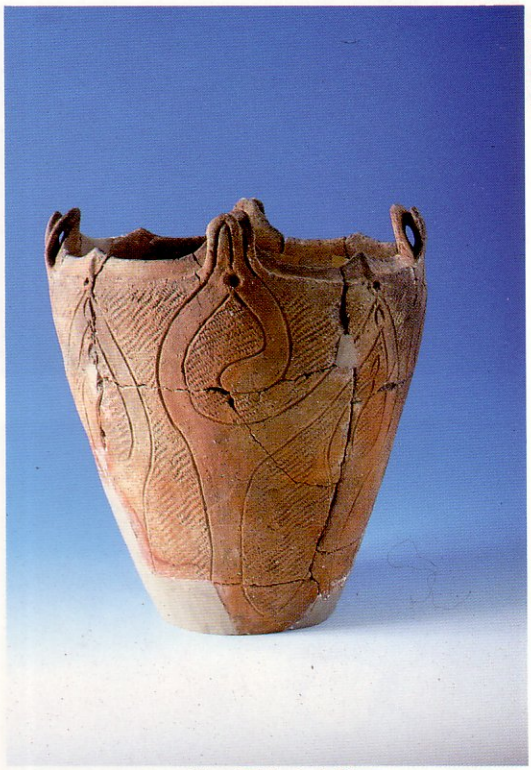
1．各区遺構内出土赤色塗彩土器



2．各区遺構外出土赤色塗彩土器

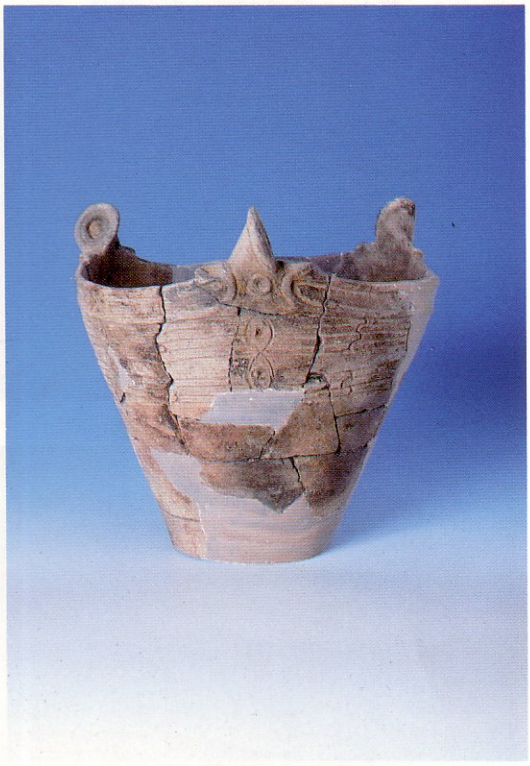


1．第6区出土土器



2．第2区出土土器

3．第4・5区出土土器



4．第2区出土土器

1．第2区KE87遺物出土状態

2．第2区KH81人骨出土状態

3．第4・5区JI 62遺物出土状態

4．第6区SK13

5．第2区MB80土偶出土状態

6．第6区SK13骨出土状態

7．第4・5区JG65土器出土状態

8．第4・5区SK33・SK34

1．第4・5区SK06

2．第2区SK67

1．第２区SKP45

2．第２区SKP282

序

秋田県には、数多くの埋蔵文化財が残されています。この貴重な文化財の保護と県民生活を豊かにする開発との間に、調和をはかる積極的な地域振興策が、今日課題となっております。

このほど、増田町八木地区において耕土入れ替え事業が計画されました。この事業区内に八木遺跡が含まれていることが判明し、工事に先立って失われる最小限の箇所について発掘調査を実施いたしました。

その結果、遺跡はきわめて大規模な縄文時代後期の墓域であることが確実になり、それとともに該期の遺物が多量に出土いたしました。

本書はこれらの成果をまとめたものでありますが、郷土史と文化財に対しての理解を深めていただければ幸いです。

最後に調査にご協力いただきました秋田県農政部農地整備課、秋田県平鹿農林事務所、増田町教育委員会に深く感謝の意を表します。

平成元年３月25日

秋田県教育委員会

教育長　斎　藤　　長

例　　言

1．本書は公害防除特別土地改良事業八木地区に係る八木遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆分担は以下のとおりである。

小林　克……第１章～第３章、第４章第２節／土器、第５章
武藤祐浩……第４章第１節
高橋　学……第４章第２節／土製品・石製品
大野憲司……第４章第２節／石器

3．本書に用いた遺物写真の撮影・整理、遺物実測図作成、遺構図面の整理には船木義勝、三嶋隆儀、近藤智弥、三浦光男、吉田真、久米徹、阿部崇志があたった。

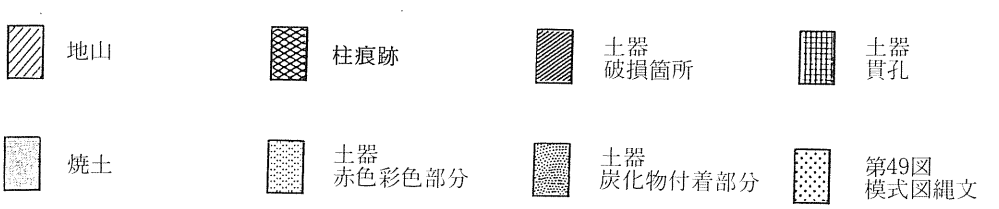
4．本書の作成にあたり下記の方々からの助言を得た。記して謝意を表する。
石川清五郎、小林達雄、後藤和民、戸沢充則、成田滋彦、西脇対名夫、林　謙作、渡辺　誠
小田野哲憲、熊谷常正、本間宏、大沼忠春、高橋与右ェ門

5．「第６章　自然科学的分析」のうち、「第１節　^{14}C年代測定」は学習院大学年代測定室に、「第２節　花粉分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した結果である。また、「第３節　出土人骨鑑定」は、札幌医科大学百々幸雄氏、木田雅彦氏による。

6．土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に従った。

7．付図の第2区、第４・５区、第10区全体図は調査最終段階での垂直写真を図化したものであるが、土壙中には石を取り上げて完掘状態を図化したものと石を残した状態を図化したものの両者がある。

8．挿図に使用したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。



目　　次

巻頭図版１～10
序
例言
目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……4
　第１節　遺跡の位置と現況……4
　第２節　歴史的環境……4
第３章　発掘調査の概要……5
　第１節　遺跡の概観……5
　第２節　調査の方法……7
　第３節　調査の経過……8
第４章　調査の記録……9
　第１節　検出遺構……9
　第２節　出土遺物……21
第５章　自然科学的分析……159
　第１節　^{14}C年代測定……160
　第２節　花粉分析……161
　第３節　出土人骨鑑定……164
第６章　まとめ……170
　第１節　遺跡の変遷について……170
　第２節　墓域としての遺跡の性格……171
図版１～図版126

挿図目次

第１図　八木遺跡および周辺遺跡位置図…… 3
第２図　八木遺跡位置図…… 4
第３図　地形図およびグリッド配置図…… 6
第４図　第10区ＳＩ03竪穴住居跡…… 10
第５図　第４・５区ＳＩ35竪穴住居跡…… 11
第６図　第４・５区ＳＫＰ207、第２区ＳＫＰ282柱穴… 12
第７図　第６区ＳＫ05土壙…… 13
第８図　第４・５区ＳＫ06・36・37土壙…… 14
第９図　第２区ＳＫ67、第４・５区ＳＫ08・16・17・18・252土壙 …… 15
第10図　第４・５区ＳＫ09・10・90・100・138・139土壙 …… 16
第11図　第２区ＳＫ25、第４・５区ＳＫ34・237土壙 … 17
第12図　第６区ＳＫ13土壙…… 18
第13図　第４・５区ＳＲ01土器埋設遺構…… 18
第14図　遺構内出土土器（１）…… 20
第15図　遺構内出土土器（２）…… 22
第16図　遺構内出土土器（３）…… 23
第17図　遺構内出土土器（４）…… 25
第18図　遺構内出土土器（５）…… 27
第19図　遺構内出土土器（６）…… 29
第20図　遺構内出土土器（７）…… 30
第21図　遺構内出土土器（８）…… 32
第22図　遺構外出土土器（１）…… 34
第23図　遺構外出土土器（２）…… 51
第24図　遺構外出土土器（３）…… 52
第25図　遺構外出土土器（４）…… 53
第26図　遺構外出土土器（５）…… 54
第27図　遺構外出土土器（６）…… 55
第28図　遺構外出土土器（７）…… 56
第29図　遺構外出土土器（８）…… 57
第30図　遺構外出土土器（９）…… 58
第31図　遺構外出土土器(10)…… 59
第32図　遺構外出土土器(11)…… 60
第33図　遺構外出土土器(12)…… 61
第34図　遺構外出土土器(13)…… 62
第35図　遺構外出土土器(14)…… 63
第36図　遺構外出土土器(15)…… 64
第37図　遺構外出土土器(16)…… 65
第38図　遺構外出土土器(17)…… 66
第39図　遺構外出土土器(18)…… 67
第40図　遺構外出土土器(19)…… 68
第41図　遺構外出土土器(20)…… 69
第42図　遺構外出土土器(21)…… 70
第43図　遺構外出土土器(22)…… 71
第44図　遺構外出土土器(23)…… 72
第45図　遺構外出土土器(24)…… 73
第46図　遺構外出土土器(25)…… 74
第47図　突起Ａ１類接合法…… 76
第48図　突起変化の模式図…… 77
第49図　文様展開模式図…… 78
第50図　出土土製品（１）土偶（１）…… 87
第51図　出土土製品（２）土偶（２）…… 88
第52図　出土土製品（３）土偶（３）…… 89
第53図　出土土製品（４）土偶（４）…… 90
第54図　出土土製品（５）土偶（５）…… 91
第55図　出土土製品（６）耳飾…… 92
第56図　出土土製品（７）腕輪形土製品…… 93
第57図　出土土製品（８）円盤状土製品…… 94
第58図　出土土製品（９）ミニチュア土器…… 95
第59図　出土土製品(10)土錘・骨角器…… 96
第60図　石鏃一覧…… 98
第61図　石鏃各類長幅分布…… 100
第62図　石鏃各類重量分布…… 101
第63図　石錘一覧…… 102
第64図　嘴状石器一覧…… 103
第65図　嘴状石器（１）…… 104
第66図　嘴状石器（２）…… 105
第67図　嘴状石器（３）…… 106
第68図　石匙一覧…… 111
第69図　箆状石器一覧…… 112
第70図　掻器一覧…… 112
第71図　削器一覧…… 113
第72図　磨製石斧一覧…… 115
第73図　打製石斧一覧…… 117
第74図　石錘一覧…… 118
第75図　有溝石錘…… 119
第76図　切目石錘（１）…… 120
第77図　切目石錘（２）アスファルト付…… 121
第78図　打欠石錘（１）…… 122
第79図　打欠石錘（２）アスファルト付…… 123
第80図　アスファルト付石錘…… 124
第81図　切目石錘・アスファルト付石錘長幅分布…… 127
第82図　打欠石錘長幅分布…… 128
第83図　石皿一覧…… 136
第84図　石皿…… 137
第85図　石皿・砥石…… 138
第86図　剥片石器各器種の数…… 140
第87図　石錘・土錘重量分布…… 141
第88図　出土石製品（１）線刻礫…… 149
第89図　出土石製品（２）有溝礫・研摩痕の認められる石製品（１）…… 150
第90図　出土石製品（３）研摩痕の認められる石製品（２）…… 151
第91図　出土石製品（４）研摩痕の認められる石製品（３）・軽石製品・有孔石製品・盲孔石製品（１）…… 152
第92図　出土石製品（５）盲孔石製品（２）・石刀・石剣…… 153
第93図　出土石製品（６）石棒…… 154
第94図　出土石製品（７）円盤状石製品…… 155
第95図　出土石製品（８）軟質凝灰岩製石製品…… 156
第96図　出土石製品（９）…… 157
第97図　出土石製品(10)顔面付石製品…… 158
付図１　八木遺跡第２区全体図
付図２　八木遺跡第４・５・６区全体図
付図３　八木遺跡第10区全体図

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

八木遺跡は昭和52年刊行の秋田県遺跡地図に収載された周知の遺跡である。遺跡地図への記録のもととなった昭和37年の埋蔵文化財カードによれば、遺跡の確認がなされた昭和37年当時の状況は畑および水田であり、およそ10アールと推定された遺物包含地の一部はすでに耕作によって破壊されたと判断されている。また遺跡の時代については付近の耕作者が所有する出土遺物から縄文時代晩期頃と推定されている。

この昭和37年の確認後、遺跡の試掘が行われたのは昭和57年になってからである。このときには水田１枚に１カ所の割合で試掘坑が設けられ、遺物包含層の厚さと広がりが確かめられた。その結果、包含層の遺存状態は地表面で推定されていたよりも良好で、最も深い箇所では1.2ｍ程もあり、また広がりも当初の予想を大きく上回り、約46,000㎡と確認された。また、何らかの遺構の存在と捨て場的な場所のあることが予想され、出土遺物から遺跡の中心年代が縄文時代後期前葉であることも判明した。

ところで遺跡の所在する増田町では、昭和49年頃から休廃鉱山を原因とする耕作地のカドミウム汚染が問題化し、対策として耕作地の土壌入れ替えの事業が県農政部によって進められてきた。この対策事業（公害防除特別土地改良事業）は大規模な削土を伴い、埋蔵文化財包蔵地ではその破壊が予想されたため、県教育委員会では農政部との協議の上、周知の遺跡内における当該事業の際には計画段階で範囲確認調査を実施し、さらにその必要が認められた場合には事前調査を行うこととした。増田町町内ですでに行われた梨ノ木塚遺跡、平鹿遺跡の発掘調査はこの公害防除特別事業にかかる調査である。

今次の八木遺跡での調査もまた、昭和57年の範囲確認調査をうけた公害防除特別土地改良事業に伴う事前調査である。盛り土を主とする工法がとられたため、調査は工事によって破壊される最小限の範囲に限っておこなわれた（第１表）。

第２節　調査の組織と構成

1	所　在　地	平鹿郡増田町増田字仁井田堰向94番地他
2	調査期間	昭和63年５月12日～昭和63年８月９日
3	調査の目的	公害防除特別土地改良事業八木地区事前調査

4　調査面積　　1,953㎡

5　調査主体者　　秋田県教育委員会

6　調査担当者　　小林　克（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
武藤祐浩（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
吉田　真、久米　徹（非常勤職員）
船木義勝、柴田陽一郎、山崎文幸、和泉昭一、藤原　司、磯村　亨

7　総務担当　　加藤　進　（秋田県埋蔵文化財センター主査）
高橋忠太郎（　　〃　　主事）

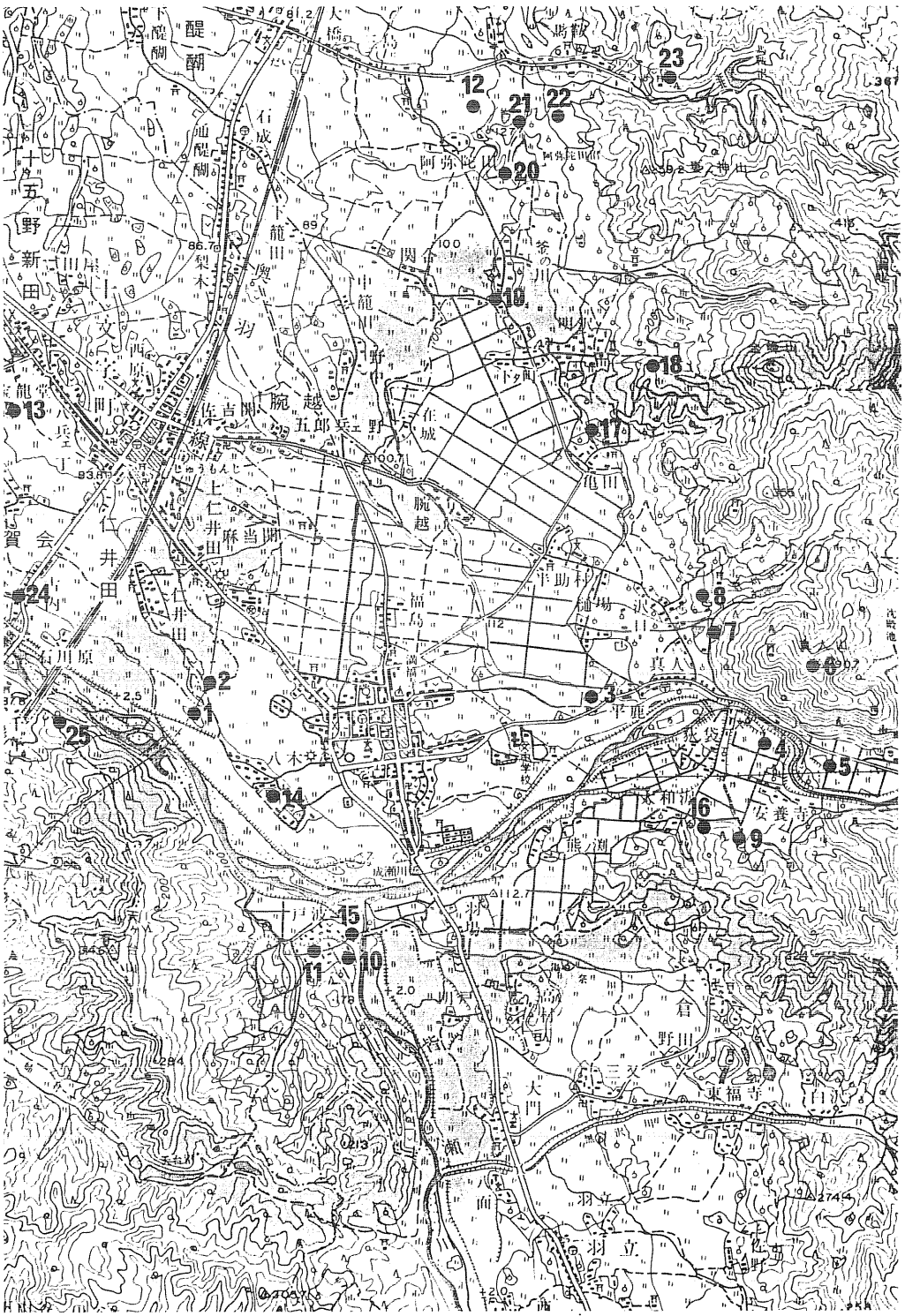
8　調査協力機関　　県農政部平鹿農林事務所・増田町教育委員会・八木自治会

第１表　八木遺跡各調査区と調査面積

調　査　区	面　積	摘　要
第１区	332㎡	用水路部分の調査
第２区（第８・９区を含む）	583㎡	用水路部分　〃
第３区	172㎡	耕作地削土部分　〃
第４区	（両地区併）	耕作地削土部分　〃
第５区	639㎡	耕作地削土部分　〃
第６区	33㎡	耕作地削土部分　〃
第７区	28㎡	試掘のみ、盛土保存
第10区	123㎡	部分調査、盛土保存
第11区	43㎡	第Ⅰ層のみ調査
合　計	1,953㎡	

※　第１図周辺遺跡名

1　八木遺跡　本遺跡
2　町頭遺跡　縄文時代遺物包含地
3　平鹿遺跡　縄文時代墓域（晩期）
4　真当遺跡　縄文時代遺物包含地
5　梨ノ木塚遺跡　縄文時代墓域（晩期）
6　真人山城遺跡　縄文時代遺物包含地、館跡
7　真人公園遺跡　縄文時代遺物包含地
8　亀ケ森遺跡　縄文時代遺物包含地
9　阿弥陀沢遺跡　縄文時代遺物包含地
10　戸波遺跡　縄文時代遺物包含地、魚刻文石出土
11　戸波羽場遺跡　縄文時代遺物包含地
12　久田遺跡　縄文時代遺物包含地（晩期）
13　宝竜堂遺跡　縄文時代遺物包含地（中期）
14　八木城遺跡　館跡
15　戸波城遺跡　縄文時代遺物包含地、館跡
16　片倉山館遺跡　館跡
17　郷土館遺跡　館跡
18　山館堂ケ沢遺跡　館跡
19　館屋敷遺跡　館跡
20　鳥越森Ⅰ遺跡　縄文時代遺物包含地（中期）
21　鳥越森Ⅱ遺跡　古代遺物包含地
22　中拘遺跡　古代遺物包含地
23　馬鼓城遺跡　館跡
24　前田城遺跡　館跡
25　岩崎城遺跡　館跡

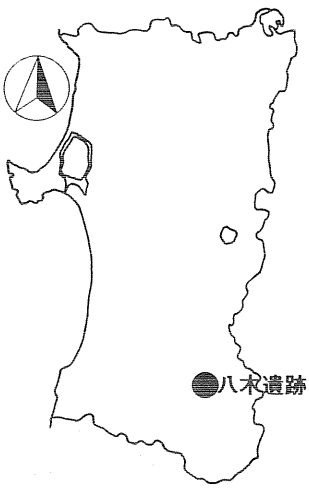


第１図　八木遺跡および周辺遺跡位置図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と現況

八木遺跡は秋田県内陸南部、横手盆地の南端近くに位置する。横手盆地の西側に沿って雄物川が北流するが、遺跡はこの雄物川に西流して接続する支流、皆瀬川右岸の河岸上に立地し、皆瀬川に西流して接続する成瀬川との合流地点から、1.75km北西に離れた地点である。また、遺跡付近は真人山、金峰山などの東側山地の裾に広がる増田扇状地の南西側にあたるが、標高は92m前後を測る。皆瀬川の水面との比高も小さく＋４～６ｍである。現在、遺跡周辺は皆瀬川との間を長大な堤防で区切られた水田、畑地として利用されている。遺跡位置の経緯度は北緯39度12分８秒、東経140度32分17秒である。



第２図　八木遺跡位置図

第２節　歴史的環境

八木遺跡についての記録は古く、江戸時代末期にまでさかのぼる。遺跡の北西側、十文字町下仁井田にある新山神社についての縁起、『八萩山新山宮縁記』（享和三年[1803]）の伝えるところによれば、天和二年（1682）のころ神社付近に雷鳴が轟いて大量の『矢ノ根石』が降り、その後、周辺地域が『動神気(どうみき)』と呼ばれるようになった、としている（図版126）。すなわち遺跡近くに残る地名『道米木(どめき)』を天上での神軍の戦『動神気』の転訛として、いわゆる石器天工説の一つを地名の由来に用いている。ちなみに、遺跡地名についてこの種の石器天工説が伝わる類例には、山形県庄内平野の神矢田遺跡（縄文時代後晩期）などもある。

周辺の遺跡としては昭和52年に発掘調査された梨ノ木塚遺跡が本遺跡の4.8km東側に、また昭和57年に発掘調査された平鹿遺跡が３km東側に位置している。いずれも皆瀬川に連続する成瀬川右岸に形成された遺跡であり、前者は縄文時代晩期前半、後者は同じ晩期後半の墓域跡として著名である。また本遺跡の南東２km、皆瀬川の対岸には魚刻文石（鮭石）を出土した戸波羽場遺跡（図版126）があり、隣接する戸波遺跡は石棒等が出土した縄文時代晩期の遺跡である。この他に東側山地裾野に多くの中世城館が立地し、本遺跡の0.9km南東側にも八木城跡があるが、本遺跡調査の際には竜泉窯系と目される鎬蓮弁文のある青磁碗片が遺跡の西側からも採集されている。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

今回の八木遺跡の調査区は昭和57年の範囲確認調査によってくくられた範囲内に設定されたが、この区域は江戸時代に開かれたという灌漑用水路の東側にあたる。第２章第１節で述べたように、遺跡の現況は水田及び畑地であり、これらの耕作地は基本的にはこの灌漑用水路と平行して走る間道に沿うかたちで地割りされている。これは西北西側ないしは西側に緩く傾斜する地形に規制された結果でもある。しかし、第３図の地形図に示されるように一部に極端に北西側を向いて地割りされる帯状の箇所があり、このような部分では周囲に比較し、やや低いかあるいは地形全体の傾斜が緩くなっていることが観察された。調査の結果、こうした箇所では地山面が周囲よりも低く、遺跡全体の旧地形にある程度うねりのあることが判明した。

これは遺跡の立地する低地が扇状地外側の砂礫段丘にあたり、皆瀬川に向ういくつかの沢筋により開析された結果と推測される。したがって、現在では一面に低平な遺跡周辺の地形も、過去には細い沢筋が通り、部分的には沼池であった可能性も推測できる。

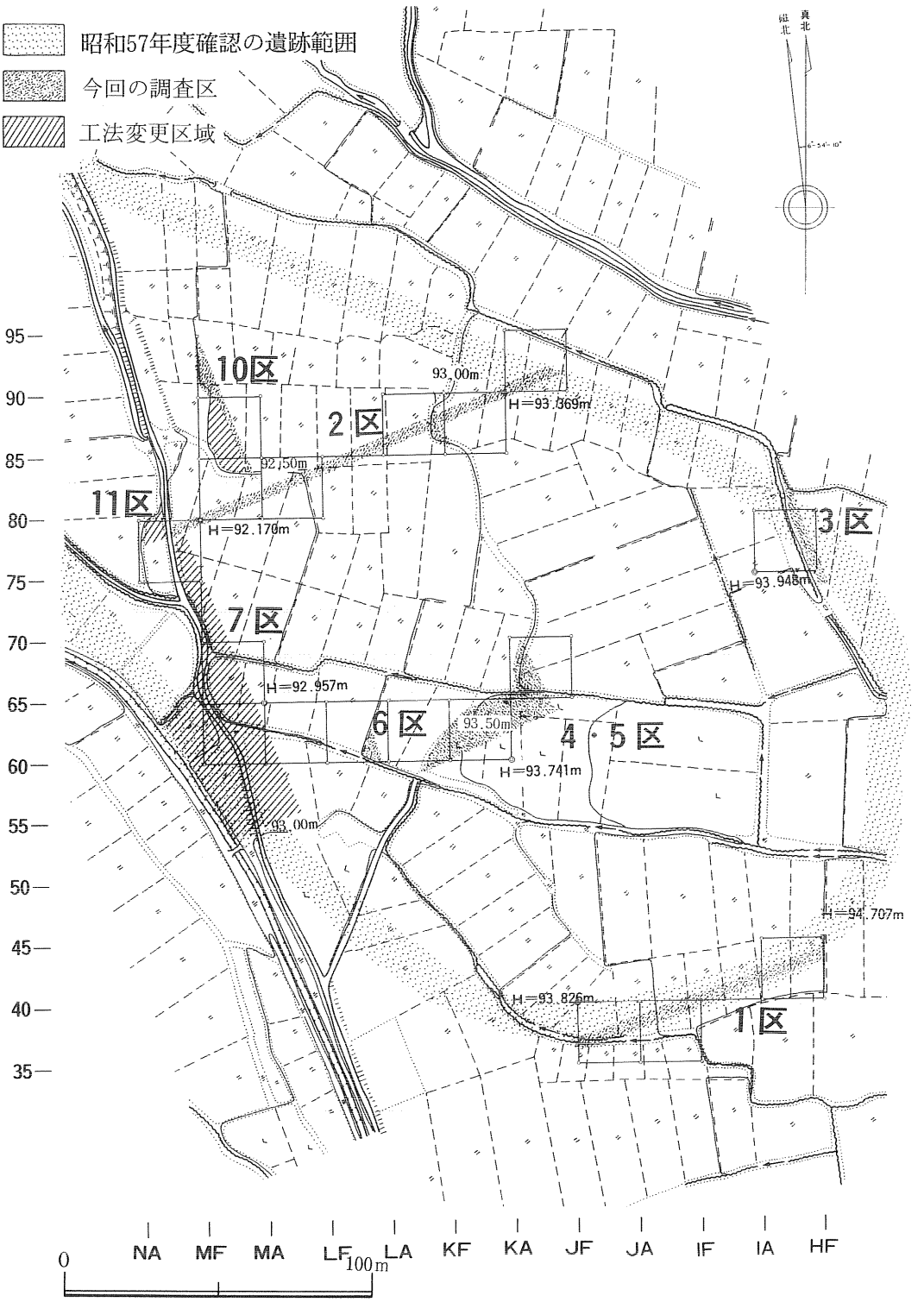
遺跡層位に関しては、表土から地山までの深さが旧地形のうねりの高い箇所では30㎝と浅くうねりの最も低い箇所では170㎝ときわめて深い。地山は表土からの深さの浅い箇所では砂礫層によって構成されているが、深いところでは粘土層の堆積も認められる。また遺跡の現状は大半が水田であるため、土壌中には酸化・沈澱した赤褐色の鉄分層が斑に入り、地山粘土層には暗緑色にグライ化した部分も認められる。すなわち、調査区ごとあるいは同一の調査区であっても部分的な相違が大きいのであるが、以下に第２区での基本層位を略述する。

Ⅰ層；10YR$^{2}/_{2}$ 黒褐色土．粒子細かく．やや粘質．径１㎜の炭化物・径10～20㎜の礫を含む．水田耕作土．層厚10㎝．

Ⅱ層；10YR$^{2}/_{1}$ 黒色土．粒子細かくやや粘質．しまっている．径１㎜の炭化物・径１㎜の白色粒・径５～10㎜の礫を含む．水田耕作土．層厚10㎝．

Ⅲ層；10YR$^{2}/_{3}$ 黒褐色土．粒子細かくやや粘質．幾分孔隙あり．径１～５㎜の炭化物・径５～20㎜の礫・径３㎜程の焼土粒を含む．上部は酸化の程度が強く暗褐色を呈する．遺物を含み組石の上部はこの層中にある．層厚10㎝．

Ⅳ層；10YR$^{2}/_{2}$ 黒褐色土．粒子細かく粘質．孔隙あり．径１～２㎜の炭化物・径１～３㎜の焼土粒・径３～10㎜の礫を含む．地山土をブロック状に含む．遺物包含・組石検出層．層厚20～30㎝．



第３図　地形図およびグリッド配置図

Ⅴ層；10YR$^{2}/_{1}$ 黒色土.粒子細かく粘質.Ⅳ層に比較しやや柔らかい.いくぶん孔隙あり.径２～７㎜の炭化物・径２～10㎜およびブロック状の焼土・径５～20㎜の礫を含む.遺物が包含され骨片・骨粉も部分的に認められる.組石検出層.層厚20～30㎝.

Ⅵ層；10YR$^{2}/_{2}$ 黒褐色土.粒子細かく粘質.しまっている.孔隙あり.径３～６㎜の炭化物・径２～10㎜の焼土粒・径３～20㎜の礫・径５㎜以上のブロック状の地山土を含む.全体に入る層ではなく部分的に認められる層である.土壙墓構築時の排土を多く含むと考えられる.層厚10～15㎝.

Ⅶ層；10YR$^{2}/_{2}$ 黒褐色土.粒子細かく粘質.しまっている.孔隙あり.径２～５㎜の炭化物・径１～３㎜の焼土粒・径３～20㎜の礫・径２～３㎜の地山土を含む.遺物包含層.層厚10～20㎝.

Ⅷ層；10YR$^{3}/_{3}$～10YR$^{4}/_{4}$ 暗褐色～褐色土.粒子細かく粘質.しまり強いが若干孔隙がある.径１㎜の焼土粒・径２～５㎜の炭化物・径２～５㎜のやや砂質の地山土を含む.漸移層であり遺物は少ない.層厚15～20㎝.

Ⅸ層；10YR$^{4}/_{6}$～10YR$^{5}/_{6}$ 褐色～黄褐色土の地山層.

第２節　調査の方法

発掘調査は第１章で記述したように調査区を分けて行われた。工事計画図面によって示された要調査区域は計11カ所であったが、実際の調査にあたっては、このうち第４区および第５区を一括して第４・５区として扱い、第８区、第９区は第２区に含ませることとした。また、第７区については期間内の調査が不可能と判断されたため、工法変更によって保存することとし、調査は部分的な試掘に止どめた。また第10区、第11区についてもほぼ同様の措置を取り、それぞれ試掘溝による調査、第Ⅰ層のみの調査とした（第1表）。

調査は基本的にグリッド方式によったが、遺跡範囲が46,000㎡と広大なため、測量の基準となる方眼杭は20ｍ間隔の大グリッド毎に打設し、適宜４ｍ間隔の小グリッドの方眼杭を打設した。杭打設の基準点は工事計画図面に示された基準点（ＢＭ３）を用い、基準点から真北方向およびそれに直交する方向に座標軸を組んで、それぞれの座標軸を４ｍ毎に刻んでいった。各グリッドを呼称するために、東西の座標軸の刻みには東から西へＬＡ，ＬＢ，ＬＣ，ＬＤ……ＬＪ，ＭＡ，ＭＢ，ＭＣ，ＭＤ……のようにアルファベットの組み合わせを、また南北の座標軸の刻みには南から北へ40，41，42，43……50，51，52，53，54……のように算用数字を振り当てていった。実際に方眼に囲まれた区域を指示する場合には、その区域の南東隅の杭に割り当てられるアルファベットと算用数字を合わせ、ＫＨ62のように呼んでいる。なお、基準点にはＭＡ50の呼称が与えられている。

各調査区を掘り進むにあたっては、機械力は用いず、すべて人力によって行った。また遺物・遺構の少なかった第１区、第３区を除いては10～15cm程度の耕作土除去のみをスコップを用いて行い、それ以下の掘り下げはすべて移植ゴテに拠らなければならなかった。包含層中の出土遺物は出土した調査区名、グリッド名と日付を付して取り上げているが、層位に関しては出土地点の包含層を相対的に上層、下層に分けて取り上げるに止どまった。

遺構名は検出された順に各調査区毎で通し番号を振ることとし、番号の前には遺構の種別を表すＳＩ（竪穴住居跡）、ＳＫ（土坑・土壙）、ＳＤ（溝）、ＳＱ（組石）の略号を付していった。遺構の精査にあたっては、基本的に２分法、４分法を用いているが、重複の激しい遺構に関しては適宜断面観察用のベルトを設けて精査した。遺構の記録は写真撮影、図面、筆記録によって行った。写真は通常35mmカメラによってモノクロおよびカラーリバーサルの２種類のフィルムを用いて撮影したが、必要に応じて60×45mmのカメラも使用した。図面のうち、土層断面図は実測して作成したが、平面図はリフティング・ケーブル・カメラシステムを利用して作成した。平面図作成のための写真撮影は各調査区とも遺物包含層を掘り上げた段階の組み石検出面ないしは遺構確認面での撮影と、遺構完掘後の撮影との２回に分けて行った。

第３節　調査の経過

調査は昭和63年５月12日から８月９日までの、延べ65.5日を費やして行われた。以下に日誌から抜粋して調査経過を略述する。

５月12日、増田町多目的センターにおいて作業員説明会。午後、調査を開始し第１区、第２区、第７区の試掘坑26箇所を掘る。５月13日、第１区の表土除去を開始する。５月17日、調査のためのプレハブハウス建設。発掘資材の搬入。第３区の表土除去開始。方眼杭打設作業開始。５月24日、第３区礫面の精査。５月27日、第１区基本土層図作成。第３区礫面清掃。５月30日、第４・５区、第６区の調査開始。６月１日、第１区調査終了。第１区の全体写真撮影。６月３日、第４・５区に測量用の遣り方を設ける。６月６日、第２区、第４・５区の遺物包含層精査を開始。６月10日、第３区調査終了。調査体制の見直し、調査員・作業員数、調査予算の変更について検討（於埋蔵文化財センター）。６月14日、第４・５区の盛土中出土礫の洗浄作業を開始し、切目石錘、凹石などを検出。第４・５区で組み石面の検出。６月18日、調査面積確定のため測量（第４・５区、第６区、第７区、第10区）。６月23日、第６区遺物包含層精査開始。６月24日、第10区の表土除去開始。プレハブハウス１棟追加建設。６月27日、調査員４名増員。作業員増員。６月30日、第４・５区垂直写真撮影開始。７月16日、第６区調査終了。７月25日、第４・５区調査終了。８月９日、第２区調査終了。資材の撤去・搬出。

第4章　調査の記録

第1節　検出遺構

本調査で検出された遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物用柱穴・土壙・組石遺構・土器埋設遺構など総数700余りに上り、その殆どが縄文時代のものである。尚ここでは、便宜上掘り込みの検出された組石を土壙として扱い、その検出できなっかたものは組石遺構としている。

遺跡内に分割されている各調査区での検出遺構は第2表の通りであり、遺構の上では第6区に検出された中期中葉の土壙が最も古く、中期後葉には第10区付近に集落を形成している。遺跡の中心となるのは後期前葉から中葉で、該期に属する500基を越える土壙墓が遺跡全体を墓域として性格付けている。また第2区、第4・5区は捨て場として形成された遺物包含層が調査区のほぼ全域を覆っている。遺構内より出土した遺物も含めて遺物については第2節以降で扱うが、第2区包含層中より火葬されたと見られる1個体分の人骨が出土している（図版25、第6章）。以下組石遺構及び近世以降のものと見られる溝跡を除き、遺構の種類ごとにいくつかを取り上げて記述する。なお組石遺構3例については、図版23に示した。

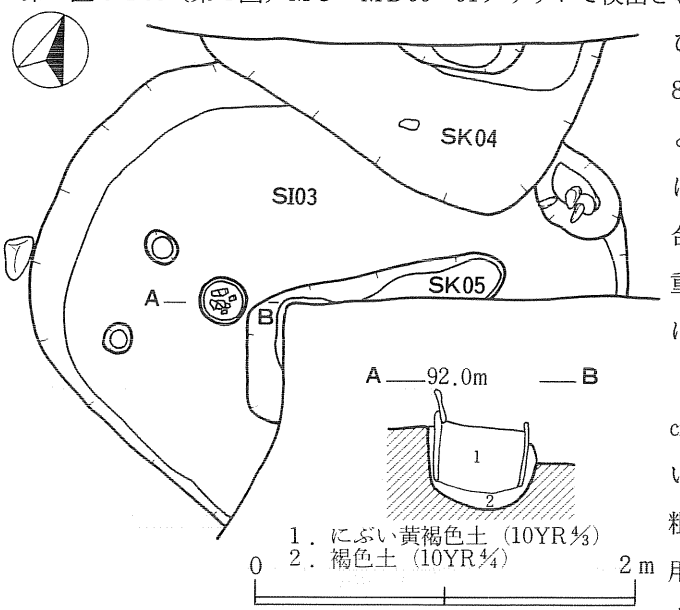
第2表　各調査区検出遺構数

調査区	包含層厚	検出遺構	遺物時期
第1区	30〜150cm	土壙　1基	縄文時代
第2区 （第8区第9区含）	80〜150cm	柱穴　35基 土壙　284基 組石遺構　28基	縄文時代 後期初頭 〜中葉
第3区	60cm	なし	縄文時代 中期後葉
第4・5区	60cm	竪穴住居跡　2軒 柱穴　44基 土壙　242基 組石遺構　2基 土器埋設遺構　1基 溝　2条 Pit　13基	縄文時代 後期初頭 〜後葉
第6区	60〜170cm	土壙　18基	縄文時代 中期中葉 〜 後期中葉
第10区	40〜80cm	竪穴住居跡　2軒 土壙　28基 組石遺構　3基	縄文時代 中期後葉 〜 後期中葉

１．竪穴住居跡

第10区で２軒、第４・５区で２軒検出した。第10区のものは炉に使われた深鉢形土器から中期後葉、第４・５区のものは覆土中より出土した土器から後期中葉に位置付けられる。

第10区ＳＩ03（第４図）ＭＣ・ＭＤ90・91グリッドで検出された。南東側が未調査部分に延びるが、長径４ｍ前後、短径2.8ｍ程度の楕円形を呈するものと考えられる。調査部分の面積は4.3㎡。北側でＳＫ04と切り合い、ほぼ中央部分にＳＫ05が重複する。ＳＫ04・ＳＫ05ともにこの遺構より新しい。



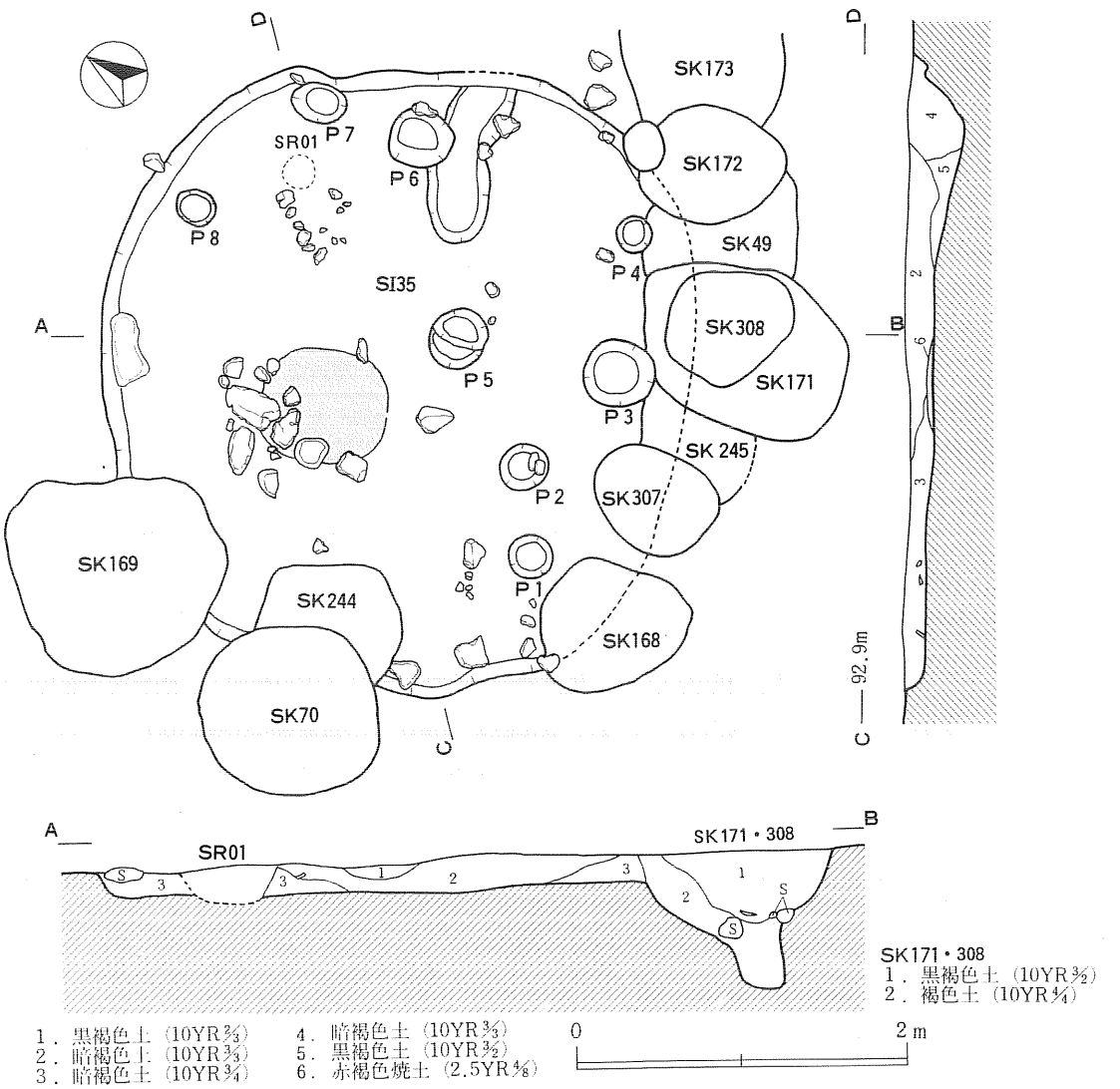
第４図　第10区SI03竪穴住居跡

床面はほぼ平坦で西側に径20㎝前後のピットが２個穿たれている。炉は西寄りに設けられ、粗製深鉢形土器（第14図２）を用いた土器埋設炉であり、土器内面には炭化物の付着が著しい。壁は30㎝前後で東側が若干緩く、西側では急傾斜で立ち上がっている。

第４・５区ＳＩ35（第５図、図版８－１）ＫＥ・ＫＦ60グリッドで検出された。径3.8ｍのほぼ円形を呈する住居跡で、床面積は11.1㎡である。南側は多くの遺構と切り合うが、本遺構より古い土壙はＳＫ49・245であり、また北側ではＳＲ01が覆土を掘り込んで造られている。

床面はほぼ平坦で、幾分堅くしまっているが、西側には幅36㎝、長さ108㎝の落ち込みがある。ピットは８個検出され径22～42㎝を測る。炉は住居内西寄りに設けられた地床炉で、焼土が径68㎝の円形に広がり、掘り込みは認められない。壁は12～20㎝で急傾斜で立ち上がっている。覆土は５層に分けられるが、１・２層中には焼土粒子・炭化物が多く混入している。図中の石は覆土中及び床面より検出したものである。炉付近の石が集中する部分から壷形土器と台付き鉢形土器がセットで出土している（第21図１～５）。

同地区では規模・形態ともに類似する住居跡ＳＩ45（図版８－２）が検出されており、第21図６・７が出土している。ともに後期中葉の住居跡と考えられる。該期の住居跡の調査例は近年徐々に増加しており、特徴として出入り口施設が付設されること、また傾斜面に面して構築された住居では出入り口が斜面方向に設けられ、炉がその方向に寄る傾向にあることが注意されている。第４・５区の２軒ともに出入り口施設は検出されなかったが、ＳＩ35の炉の位置



第5図　第4・5区SI35竪穴住居跡

は非常に緩い傾斜ではあるがこの特徴と符合しており、西側に出入り口を設けた可能性がある。

2．掘立柱建物用柱穴

第2区、第4・5区で79基確認された。調査当初は石を詰め込む土壙の一形態と把えて調査を進めたが、第2区ＳＫＰ282の検出及び他土坑での土層観察によって建物の柱穴と判断されて、この遺構を認識した。建物としては柱配列の明瞭なものを推定復原し、付図中に示した。

覆土中の出土遺物および遺構の切り合いから後期前葉から中葉のものと把えられる。

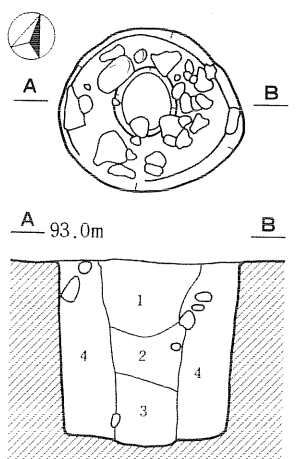
第4・5区ＳＫＰ207（第6図、図版9―3）ＫＣ61・62グリッドにかけて検出された。掘り方の平面形は径1.1m前後の円形を呈し、深さ1.1mを測る。中央には径40cm程の柱痕跡が認

められ、坑底面でその部分がわずかにくぼむ。掘り方内には中央を囲んで幾分大きめの石と径10cm前後の石が充填されている。第２区ＳＫＰ45・286（図版９－１）などが同様の形態のもので、後者は確認時点で上面の石と柱痕跡が把えられる。

第２区ＳＫＰ282（第６図、図版９－２）ＭＡ81グリッド中央北寄りで検出された。掘り方の平面形は径1.1ｍのほぼ円形で、深さ0.6ｍを測る。中央に径40cmの柱痕跡をとどめており、平面のプラン確認でも明瞭である。大きい石を用いるものの、前者と異なり掘り方内に石は少ない。

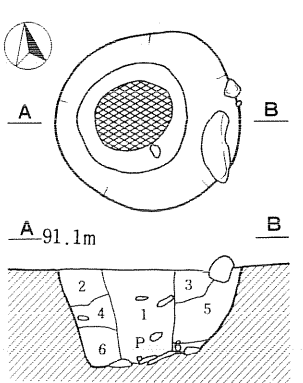
第４・５区ＳＢ１（付図２）ＫＣ・ＫＤ61グリッドに位置する。ＳＫＰ47・199・198・226・219・216の６本の柱からなる建物である。長辺長4.0ｍ、短辺長1.8ｍで、張り出し部軸長3.0ｍを測る。長軸方位Ｎ－73°－Ｅである。

第２区ＳＢ１（付図１）ＫＪ85グリッドに位置する。ＳＫＰ45・82・78・75の４本柱の建物で、柱間距離は南側でやや狭まるもののほぼ1.9ｍを測り、全体は方形を呈する。



1．暗褐色土（10YR3/4）
2．褐色土（10YR4/6）
3．褐色土（7.5YR4/4）
4．褐色土（7.5YR3/4）

第４・５区SKP207



1．黒色土（7.5YR 3/1）
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）
3．明黄褐色土（10YR6/6）
4．にぶい黄褐色土（10YR4/3）
5．にぶい黄橙色土（10YR6/4）
6．黄褐色土（10YR5/6）

第２区SKP282

0　1ｍ

第６図　第４・５区SKP207、第２区SKP282

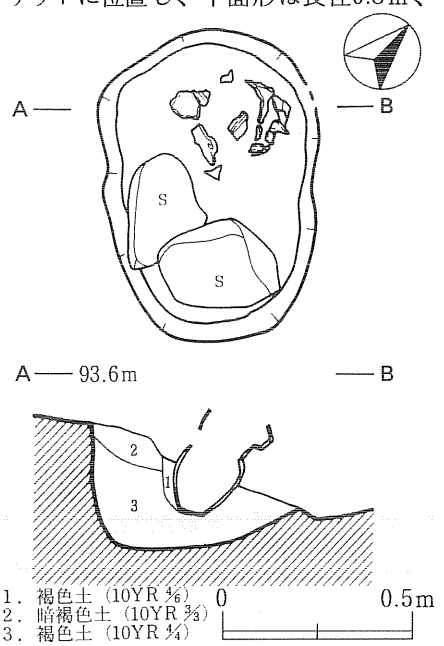
縄文時代の建物跡及び柱穴の類例は、鹿角市大湯環状列石、岩手県萪内遺跡、中期前葉～中葉の例になるが岩手県西田遺跡、晩期の例が秋田市地方遺跡などに知られている。建物跡の機能については、大湯環状列石周辺調査例では西田遺跡例との共通点を検討したのち、中央が墓域となる遺跡全体の中で、祭祀にかかわる施設として位置付けている。細かな検討が不十分ではあるが、本遺跡例も墓域という遺跡の性格を考慮して、同様の機能と把えておきたい。

３．土　　壙

本遺跡内各区より総数573基検出した。中期中葉のものと後期前葉から中葉のものがあるが、その大部分は後者である。後期の土坑の内62基の土壙中からは５～10mm程度の焼骨片が出土しており、また著しい切り合いをみせる遺構の分布から、これらの土壙はすべて土壙墓と考えられる。各区とも遺跡内の一部分を調査したものであるため、土壙墓群全体の配置は把握できないが、第４・５区の南東部分に遺構の希薄になる部分がある。その部分では、遺構の切り合いも少ない。この部分が遺跡全体を大きな墓域とみた

時の一つの構成単位を示唆する可能性がある。遺構は構築時に石を利用したものが多く、壙中全体に石を入れるもの・壙上部または底面に組石を伴うものが特徴的である。以下には、いくつかの土壙を取り上げて記述する。

第６区ＳＫ05（第７図、図版20―１）ＬＡ60・61グリッドに位置し、平面形は長径0.8ｍ、短径0.6ｍの楕円形で、深さ32㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁は南側を除き垂直に立ち上がる。埋土中に中期中葉の精製深鉢形土器（第14図１）が埋納され、上部に30㎝大の扁平な石が２個置かれていた。同様に中期中葉の粗製深鉢形土器を埋納した土壙が同区ＬＢ60グリッドでもう１基検出されているが、中期中葉の土壙はこの２基だけである。



第７図　第６区SK05土壙

第４・５区ＳＫ06（第８図、図版11―１）ＪＧ63グリッドに検出され、他の遺構との切り合いはない。平面形は径1.4ｍのほぼ円形で、深さ19㎝と浅い。壙中東側を中心に長さ40㎝程度の大きな石を入れており、この石の上部は部分的に壙上面に露出する。覆土は炭化物・焼土粒を多く含み、上部からは耳飾りが出土したほか、焼骨片が検出された。

第４・５区ＳＫ08（第９図、図版11―１・15―３）ＪＧ63・64グリッドにかけて検出され、ＳＫ06の北西にあたる。平面形は長径1.6ｍ、短径1.3ｍの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－15°－Ｗである。壙中東側に寄せて大きな石を入れる状態はＳＫ06に類似するが、深さは54㎝を測りＳＫ06よりも深い。覆土中からは焼骨片が出土している。同区ＳＫ125（図版15―１）は同様に覆土に大量の石を含む。

第２区ＳＫ67（第９図、図版14―１）ＭＦ79グリッドで検出された。ＳＫ115・117に切られているが、平面形は長径1.3ｍ、短径推定1.0ｍ前後の楕円形を呈したものと考えられ、長軸方位Ｎ－57°－Ｅである。土壙中央に底面まで及んで径７～25㎝の石が充填されており、それは地山上面で組石状になっている。

第４・５区ＳＫ36（第８図、図版12―１）ＪＩ63グリッドで検出された。上部に組石を伴い、大きいもので50㎝前後の石を、径1.1ｍ前後の円形に積み重ねている。最も高い石の頂点から地山面までの高さは40㎝を測る。組石下部は、平面形が長径96㎝、短径64㎝の楕円形に堀り込まれているが、地山面からの深さは18㎝と浅く、組石最下部の石が底面に接している。土壙の長軸方位はＮ－15°－Ｅである。北側でＳＫ37を切っているが、第４・５区ＳＫ33・ＳＱ40

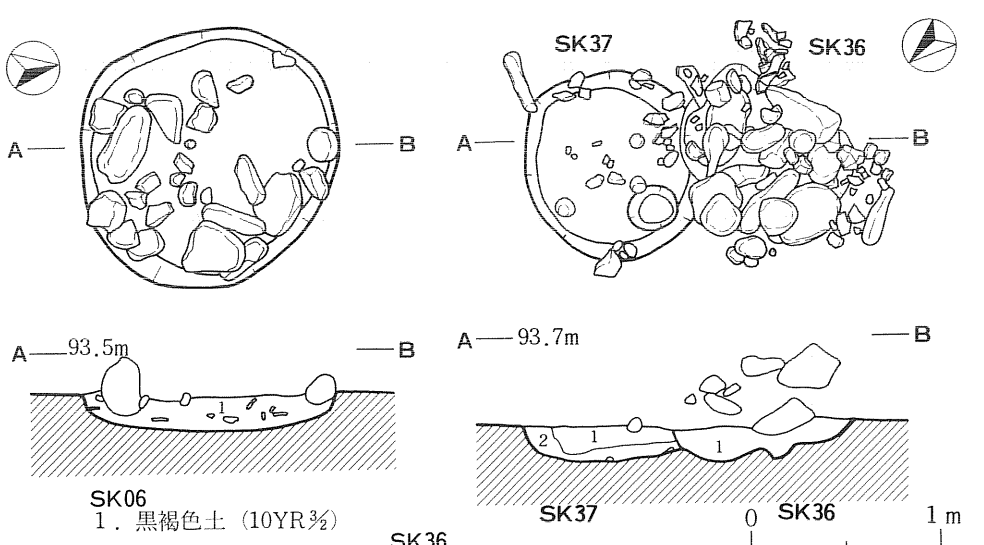
（図版11―２）、同区ＳＫ81・335（図版12―２）のあり方を考え合わせると、土壙と中心をずらして構築される組石として、ＳＫ37と一連の遺構と把えるべきかもしれない。尚、ＳＫ37には第19図３の土器が埋納されており、その点で後述する第４・５区ＳＫ34・74に類似する。

第４・５区ＳＫ18（第９図）ＫＡ63グリッドで検出された径1.1ｍ前後のほぼ円形を呈する土壙で、深さは40cmを測る。土壙南側には底面から50cm前後の石を積み上げており、それが上面にまで続いている。東側がＳＫ16と切りあっており、本遺構が新しいと考えられる。

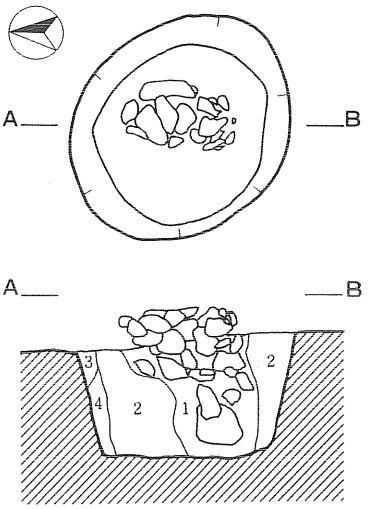
第４・５区ＳＫ252（第９図）ＪＩ68グリッド南東隅に検出された径1.0ｍ前後の円形を呈する土壙で、深さ62cmを測る。覆土中位に一度石を組み、上面西側には２個の石を配している。

第４・５区ＳＫ09（第10図、図版10―１）ＪＪ63グリッドに検出された径1.1ｍ前後の円形を呈する土壙で、深さ41cmを測る。覆土中に石を混入するが組石は認められず、上部西よりに20cm前後の石を用いた組石が存在する。同図中ＳＫ10、第９図中ＳＫ16も同様の形態である。また図版12―３・13―１に上部組石の例として、第４・５区ＳＫ114・263を挙げておく。

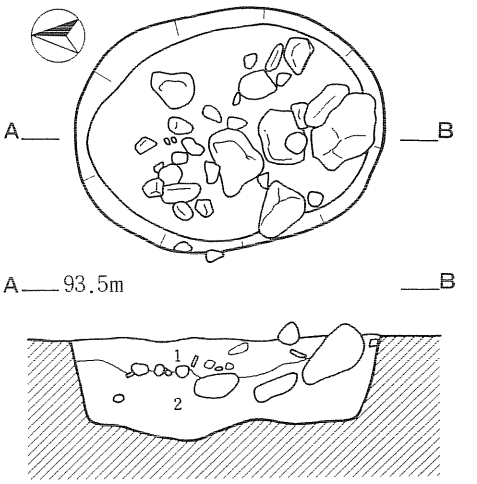
第４・５区ＳＫ190（第10図、図版17―１）ＫＣ60グリッドに検出された。南側がわずかに調査区外にかかるがほぼ全体を調査しており、平面形は径0.9ｍの円形を呈し、深さ30cmを測る。底面に11個の石を敷き詰めている。同様に底面に組石を持つ例は、第２区ＳＫ30・96、第４・５区ＳＫ60・190・336（図版16・17）などがある。これらの土壙は全般に掘り方が一回り小さい傾向にあるが、第４・５区ＳＫ336のように開口部径より底径が広くなるものもある。また第４・５区ＳＫ60は遺跡内では唯一赤色顔料の塗布された例で、顔料は東側に立て掛けられた状態の大きな石の表面を中心に広がっている。



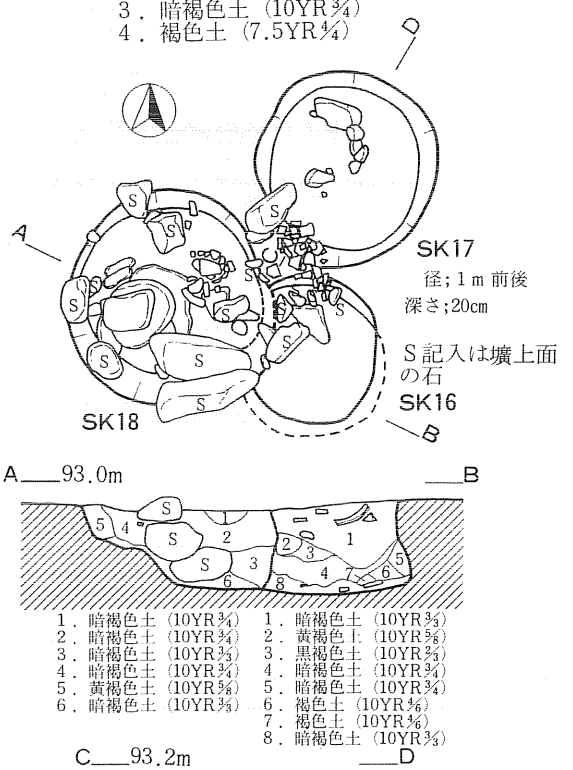
第８図　第４・５区SK06・36・37土壙



第２区SK67
１．黒褐色土（10YR2/3）
２．暗褐色土（10YR3/3）
３．暗褐色土（10YR3/4）
４．褐色土（7.5YR4/4）

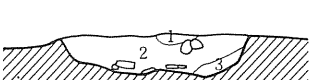


第４・５区SK08
１．黒褐色土（10YR2/3）
２．黒褐色土（10YR2/2）



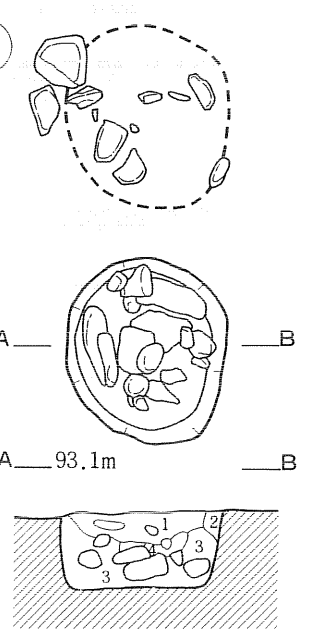
１．暗褐色土（10YR3/4）
２．暗褐色土（10YR3/4）
３．暗褐色土（10YR3/3）
４．暗褐色土（10YR3/4）
５．黄褐色土（10YR5/8）
６．暗褐色土（10YR3/3）

１．暗褐色土（10YR3/3）
２．黄褐色土（10YR5/8）
３．黒褐色土（10YR2/3）
４．暗褐色土（10YR3/4）
５．暗褐色土（10YR3/4）
６．褐色土（10YR5/6）
７．褐色土（10YR4/6）
８．暗褐色土（10YR3/3）



１．黄褐色土（10YR5/8）
２．暗褐色土（10YR3/4）
３．暗褐色土（10YR3/3）

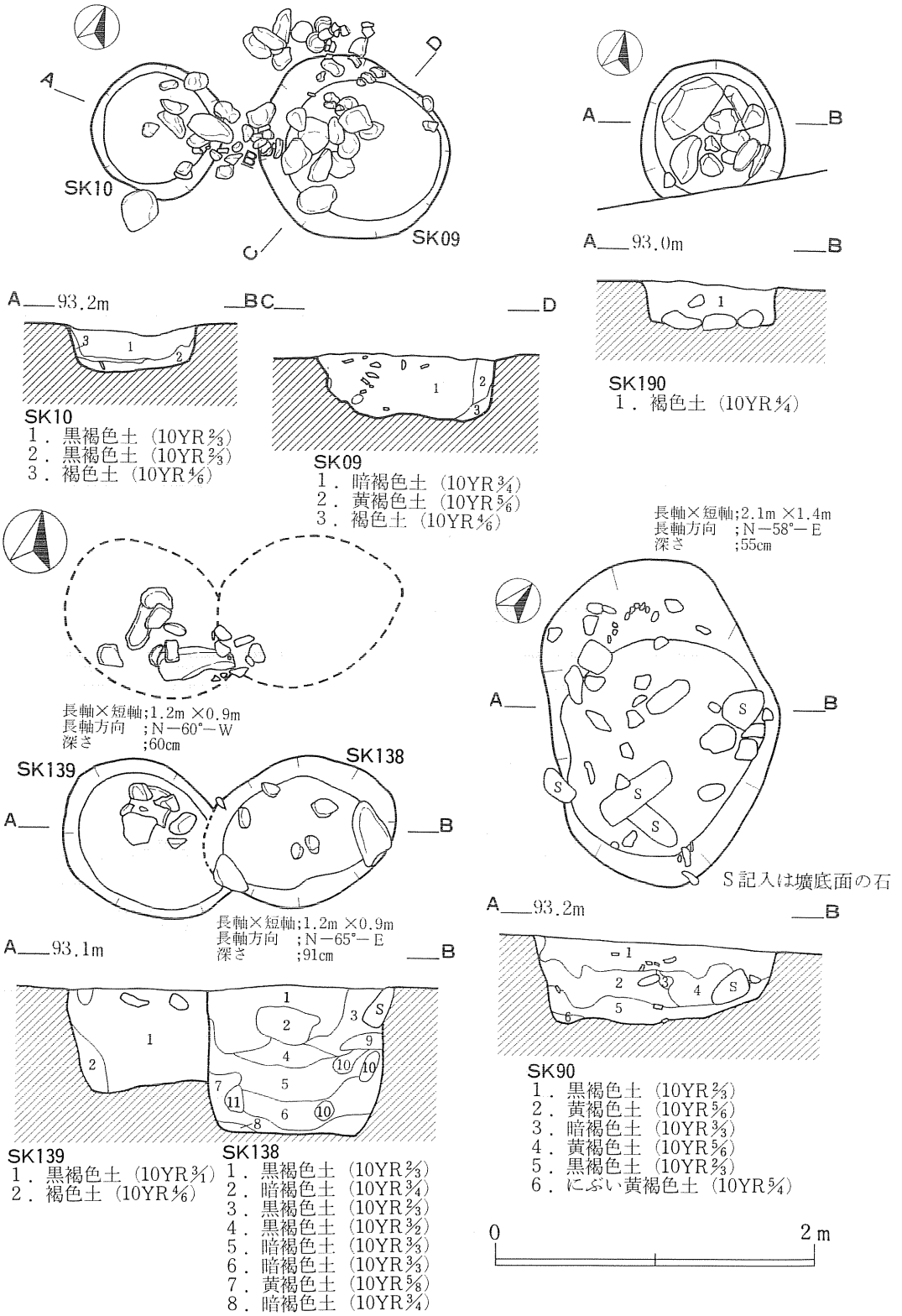
４・５区SK16・17・18



第４・５区SK252
１．黒褐色土（10YR2/3）
２．暗褐色土（10YR3/4）
３．黄褐色土（10YR5/6）
４．褐色土（10YR4/6）

0　2 m

第９図　第２区SK67、第４・５区SK08・16・17・18・252土壙

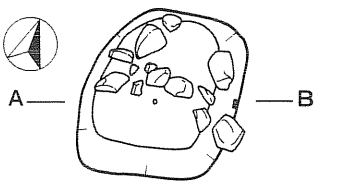


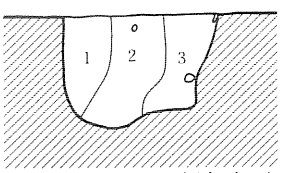
第10図　第４・５区SK09・10・90・100・138・139土壙

第４・５区ＳＫ03（図版14―３）ＪＨ64グリッド西端に検出された土壙で、地山より若干高いレベルでは上面に焼土が広がっていた。平面形は長径1.0ｍ、短径0.9ｍの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－50°－Ｅ、深さ50cmを測る。覆土中位に径５～10cmの石を敷き詰めた後に上部には扁平な４個の石を箱形に立てている。こうした上部と底面ないしは覆土中位に組石を構築した例として第２区ＳＫ38（図版14―２）、第４・５区ＳＫ80（図版10―２）・129（図版13―２，３）をあげることができる。この内ＳＫ80はプランが大きく長径1.3ｍ、短径1.0ｍのほぼ楕円形を呈し、深さ43cmを測る。上部・壙内の組石がそれぞれやや東よりに構築されており、上部組石中には立石が含まれている。

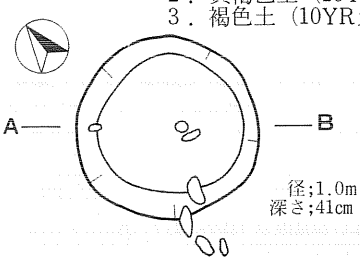
第４・５区ＳＫ34（図版11―２）ＪＩ62グリッドに検出された径1.2ｍ前後の円形を呈する土壙で、深さ24cmを測る。覆土中に土器（第20図34）が埋納されており、その上部に若干位置をずらして、径22cmほどの石が置かれている。また石の直下から第55図54の耳飾りが、覆土上部からは朱塗り土器片・焼骨片が出土している。このように土器が埋納されるもの（図版20・21）に、第４・５区ＳＫ02・12・74・237（第11図・18図２）があるが、ＳＫ02・237では底部が上に置かれている。またＳＫ74では深鉢形土器の口をふさぐように石が組み合わせてある。

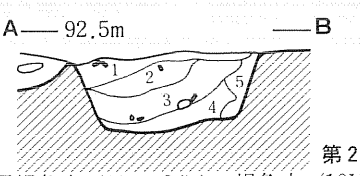
以上の明瞭な組石を伴う土壙以外に、壙底面・覆土中・上部に石が検出される土壙の例として第２区ＳＫ25、第４・５区ＳＫ17・90・138・139については図化し、第２区ＳＫ26、第４・５区ＳＫ91・133については図版18・19に示した。ＳＫ90・91のように底面に検出される石には意図的に置かれた状態のものもある。尚ＳＫ90からは第16図３・第17図２、



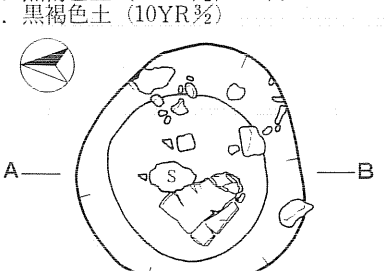


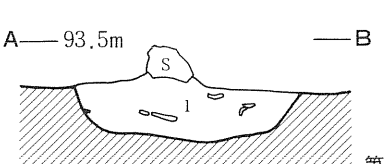
第４・５区SK237 １．褐色土（10YR4/4）
２．黄褐色土（10YR5/6）
３．褐色土（10YR4/4）





第２区SK25
１．黒褐色土（10YR3/2）４．褐色土（10YR4/4）
２．黒褐色土（10YR2/2）５．褐色土（10YR4/6）
３．黒褐色土（10YR3/2）

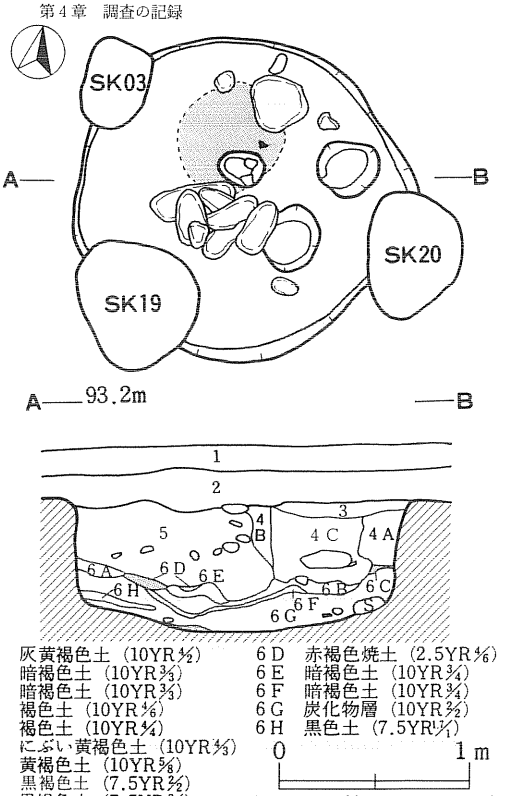




第４・５区SK34
１．黒褐色土（10YR3/2）

0　1ｍ

第11図　第２区SK25、第４・５区SK34・237土壙



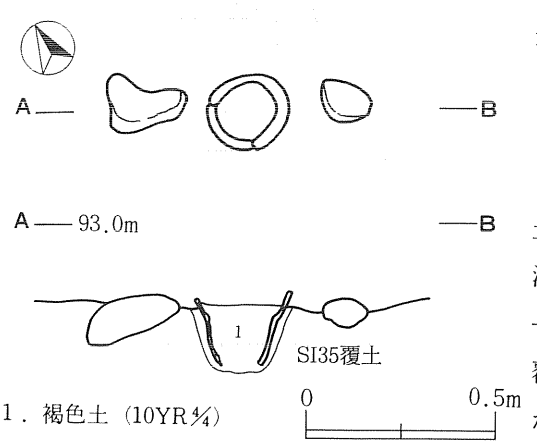
第12図　第６区SK13土壙

ＳＫ138からは第17図１、ＳＫ139から第19図１が出土している。

第６区ＳＫ13（第12図、図版22―１，２）

ＬＡ59・60グリッドに検出された。地山上面の精査では検出されず、ＳＫ03を掘り下げた際に底面下の黒褐色炭化物層が検出されたことから、第６区東壁の精査後その部分を断ち割って、遺構を確認した。平面形は径1.8ｍの円形を呈し、深さ80cmを測る。底面には、北寄りに径46cmの円形に広がるしっかりとした焼土が認められ、また底面・壁とも焼かれた痕跡がある。覆土は遺構確認の経緯からも判るように、その上部４・５層では地山との識別が困難で、この土壙に封をしたかの様な状態であり、６層上部に一度焼土の広がりがあり、その下部が炭化物層になっている。また図中の組石は炭化物層中のものである。壙底面の焼土中からは骨が出土した。この骨の分析を依頼したが、人か獣骨か特定不能であった。この土壙は壙内・覆土の状態が特異であり、他の土壙墓とは違った性格のものと考えられる。

検出数の一割にもみたない記述であるが、これによって該期の葬法について考えてみると、土壙の規模は遺体そのものを埋めることも可能であるが、覆土中に多量の石が含まれること、覆土中から焼骨片が検出されていること、またそれは覆土上部に比較的多いことなどから、遺体を火葬した後に埋葬したものと考えられる。またその場合第６区ＳＫ13については、そうした火葬のための施設と考えておきたい。



第13図　第４・５区SR01土器埋設遺構

４．土器埋設遺構（第13図、図版22―３）

第４・５区ＫＦ60グリッドで検出されており、後期後葉に位置付けられる。ＳＩ35の覆土上にあり、掘り込みは径24cmの円形を呈し、深さ29cmを測る。土器（第18図６）自体より一回り大きいだけの大きさである。土器中の覆土は炭化物を多く含み、土器の東西には石が配置されている。

第２節　出土遺物

１．土器

今回の調査によって出土した土器は整理用コンテナにして800箱分程ある。一括資料についてはある程度の整理が済んでいる。破片資料では出土地点、層位毎の点検等がほとんど進んでいない状況にあるが、ここでは、それらの中から記述可能なものについて報告する。

１）赤色塗彩土器（巻頭図版６）

遺構内外から器面を赤色の顔料で彩色した土器が出土している。顔料の種類は定かではないが、どちらかと言えば暗い色調を呈しており、ベンガラである可能性が強い。彩色される範囲は個体によって異なる。表面では文様の有無、またその文様のもつ区画性の度合いの強弱で彩色範囲が全面に及ぶか、あるいは構図をもって部分的に彩色されるかが決定されるようである。巻頭図版６の５、11は表面の大部分が無文研磨された土器であるが、これらは彩色が全面に及んでいる。また8、9、10の把手のつくものも、その部位に限っていえば彩色は全面に及んでいる。これに対して、１、３、７、12、14では彩色は沈線によって区画された内と外を明瞭に分けて施されている。この５点のうち14を除いては磨消縄文手法による文様の描かれた土器であり、この文様描画法は極めて区画性の強いものであることが顔料の塗り分けによっても明らかである。また一見区画性が強いと思える文様の施される土器でも彩色との関連のないものもある。２、４、６、13は浮文、沈線文によって文様が描かれている。６の縁帯文、直線的構図の描かれる土器を除いては文様自体にある程度の区画性を認めることができるが、これらの彩色は全面に及んでおり、彩色部分と文様との間に関連を認め得ない。ちなみに、２、７は第Ⅴ群土器であり、この種の土器は文様自体の区画性が薄いとも考えられる。内面の彩色は浅鉢形土

第３表　赤色塗彩土器観察表

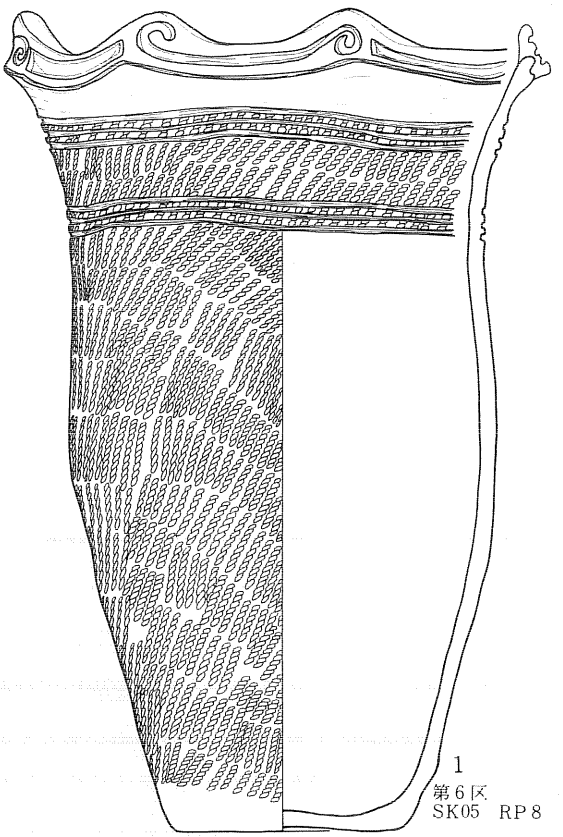
番号	出土地点	器形	器形上特徴	部位	文様上の特徴	彩色範囲 表面	彩色範囲 内面
1	第４・５区SK34埋土	深鉢	波状 外反口縁	口縁～ 体部	口唇部粘土紐貼付、体部磨消縄文（RL縦） 口唇上刺突および沈線文	口唇部、 区画文内無文部分	全面
2	第４・５区SK76埋土	壺		肩部	縦位連環状浮文、曲線的沈線文	全面	なし
3	第４・５区SK253埋土	壺	広口	肩部	縦位連鎖状S字沈線文、縄文（LR横）帯、無文帯	縄文帯を除く無文部分	頸部
4	第10区SK23埋土	壺		肩部～ 体部	２条平行の曲線的連繋沈線文	全面	なし
5	第４・５区SK158埋土	浅鉢	口縁屈曲	口縁	体部無文	全面	全面
6	第４・５区SK135埋土	鉢	有段口縁	口縁	口縁部に縁帯文、頸部無文、 体部直線的沈線文	全面	口～頸
7	第10区SK26埋土	浅鉢	内弯口縁	口縁	磨消縄文（RL斜位）	口縁上端、無文部分	全面
8	第２区LJ81下層	壺？	吊手状突起			全面	なし
9	第４・５区KA64下層	深鉢	口縁外反 体部膨らむ	頸部	橋状把手と連結する弧状貼付文、 連結部および橋状把手端に抉のある凹文	全面？	全面
10	第２区KG86上層	壺	内傾口縁	口縁～ 頸部	橋状把手上に抉のある凹文、 調整ある沈線	全面	口～頸
11	第４・５区JG64下層	浅鉢	口縁屈曲 外傾	口縁	内面に段あり	全面	口～頸
12	第２区KF86下層	鉢	弁状口縁 内弯外傾	口縁	磨消縄文、地文撚糸文(1)、 沈線区画文内に横位S字沈線文	区画文内	全面
13	第４・５区JI62下層	深鉢		体部 下半	曲線的沈線区画文	全面	なし
14	第４・５区JI65下層	深鉢		体部 下半	曲線的沈線区画文	区画文内	なし

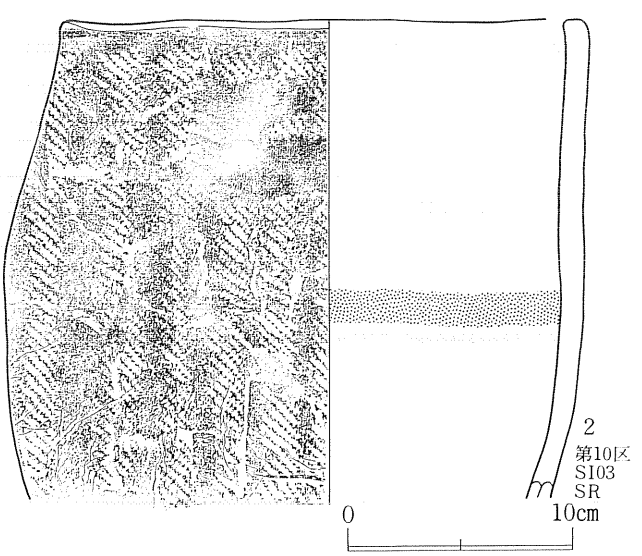
器、鉢形土器などでは比較的深くまで及ぶが、壺形土器では口頸部に限られている。

２)遺構内出土土器

第14図１は、第６区ＳＫ05埋土中に正立して埋設されていた深鉢形土器である。体部上半から口縁部にかけて外反し、口縁上端の文様帯部分は直立からやや内傾して立ち上がる。体部は半ばからやや下に膨らみがあり、以下ほぼ直線的に底部近くまで下降する。底部外周は横位の器面調整が底面まで施される。口縁部は６単位の波状口縁となり、波頂部下には渦巻き状の文様が描かれるが、波頂間を１単位として見た場合、３種類の異なる構成の文様が２単位づつ向き合って配置されていることがわかる。すなわち、図正面の単位では波頂部下の渦巻きを横に連結したＳ字状の文様であるが、その右隣では右端のみに渦巻きをもつ文様が、また左隣では両端ともに渦巻きにならない沈線が、その両側の波頂部間を結んでいる。これらの文様はその向かい合う位置でも繰り返されている。口縁部の文様帯下は横位の器面調整で無文化されている。その下には２段にわたって３条づつの平行沈線が器面を一周しているが、この沈線は地文であるＲＬ縄文が縦位回転施文された後に施されている。

第６区ではこのほか第22図１の土器も出土しているが、これらはいずれも地山の砂礫層に掘り込まれた遺構あるいはその直上から出土してい





第14図　遺構内出土土器（１）

る。

第14図２は第10区ＳＩ03内中央部の炉埋設土器である。火熱を受け器壁は脆い。細かく砕けていたために、復元された形もいびつではあるが、体部上半から口縁部にかけてが内傾し体部半ばで膨らむ深鉢形の器形をとる。口縁上端を除いては全面ＬＲ縄文が縦位回転施文されるが、幅20㎜ほどの施文単位の縄文が、帯状に連続しているのが明瞭に観察される。内面には内容物（液体）上面の痕跡が、幅15㎜ほどの帯状の煤となって付着している。おそらく、この土器は煮沸用の土器からの転用と判断される。

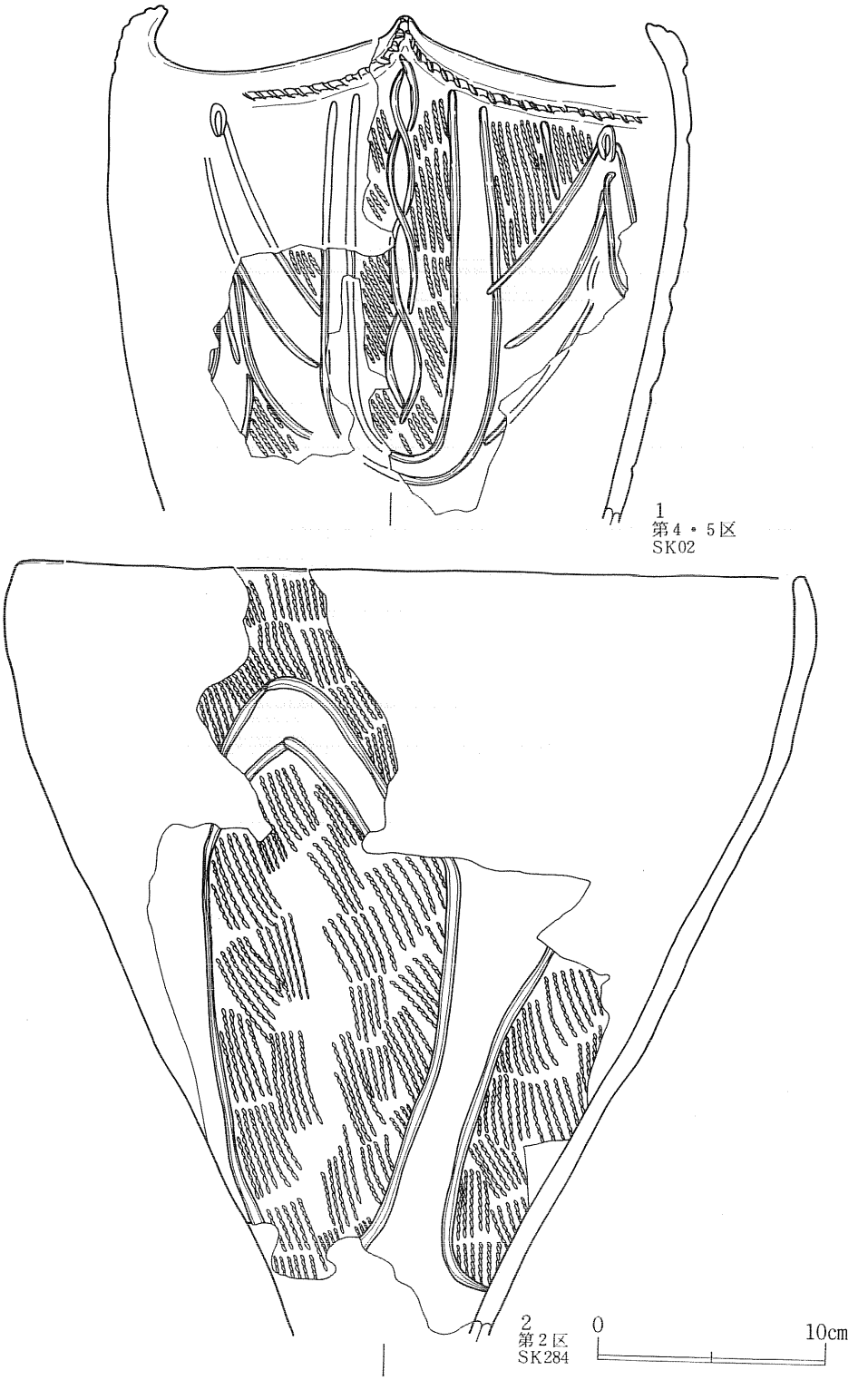
第15図１は、第４・５区ＳＫ02埋土内出土の土器である。口縁部から体部上半にかけての¼個体程の深鉢形土器の破片であるが、やや内弯する口縁はおそらく４単位の突起をもった波状口縁になると思われる。口縁部には波頂部突起を連絡する刻目のある隆線が巡る。体部には地文として撚糸文（１）が縦位に施文された後、口縁の波頂部に対応して連鎖状Ｓ字沈線文とそれを囲む二重のＵ字状区画文、波頂部中間から逆Ｖ字状にこれらの文様を連絡する区画文などが描かれている。また、区画文の内部は磨り消されている。

第15図２は、第２区ＳＫ284埋土内出土の深鉢形土器である。口縁部から底部までの¼程度の破片である。口縁は内弯し体部から底部にかけては急にすぼまる器形を呈する。残存部分が極めて小さく口縁形状は不明であるが、あるいは波状口縁になるかとも思われる。体部には地文に撚糸文が施された後、磨消縄文手法によって鈎の手状の無文部分をつくる区画文が描かれている。

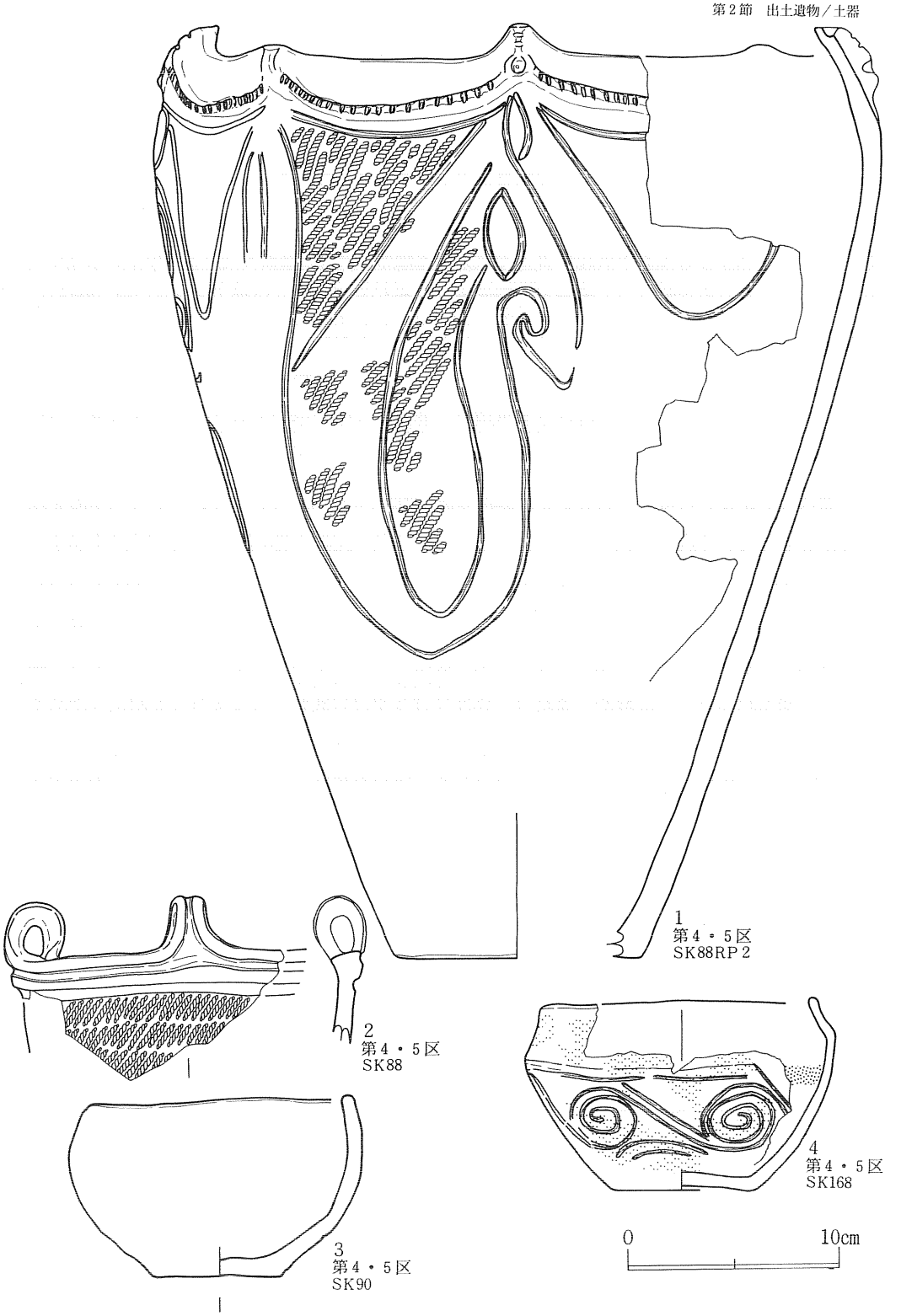
第16図１と２は第４・５区ＳＫ88埋土内出土の深鉢形土器および鉢形土器である。１は口縁部から底部にかけての½個体ほどの破片であり、口縁部はやや内弯し体部上半から底部にかけては、ほぼ直線的にすぼまる器形をもつ。口縁は４単位の突起とその中間に設けられた小突起からなる波状口縁を呈する。波頂部突起から延びた刻目のある隆線が口縁下を巡るが、突起頂部と隆線連結部には抉のある凹文が施されている。体部にはＲＬ縄文が縦位に回転施文された後、口縁波頂部突起下に、鎖状になりきっていないＳ字沈線文を加えた倒卵形のモチーフが磨消縄文手法によって描かれている。

２は口縁部¾周ほどが残存する。体部から口縁部にかけてやや外傾して直線的に立ち上がる器形を呈する。口縁上端は内外両側に肥厚し、広く平らに作られた口唇部の対になる箇所に４つの環状の把手が付けられる。口縁部には２条の太い沈線が巡らされるが、上段の沈線は把手下で大きく切れ上がり、把手上面を巡って背面まで達している。体部にはＬＲ縄文が横位回転施文される。胎土には金雲母を含む。

第16図３および第17図２は、第４・５区ＳＫ90埋土内出土の鉢形ならびに深鉢形土器である。第16図３の鉢形土器は口縁の約半周分を欠くが、他は残存する。口縁部は内弯し体部はbowl



第15図　遺構内出土土器（２）



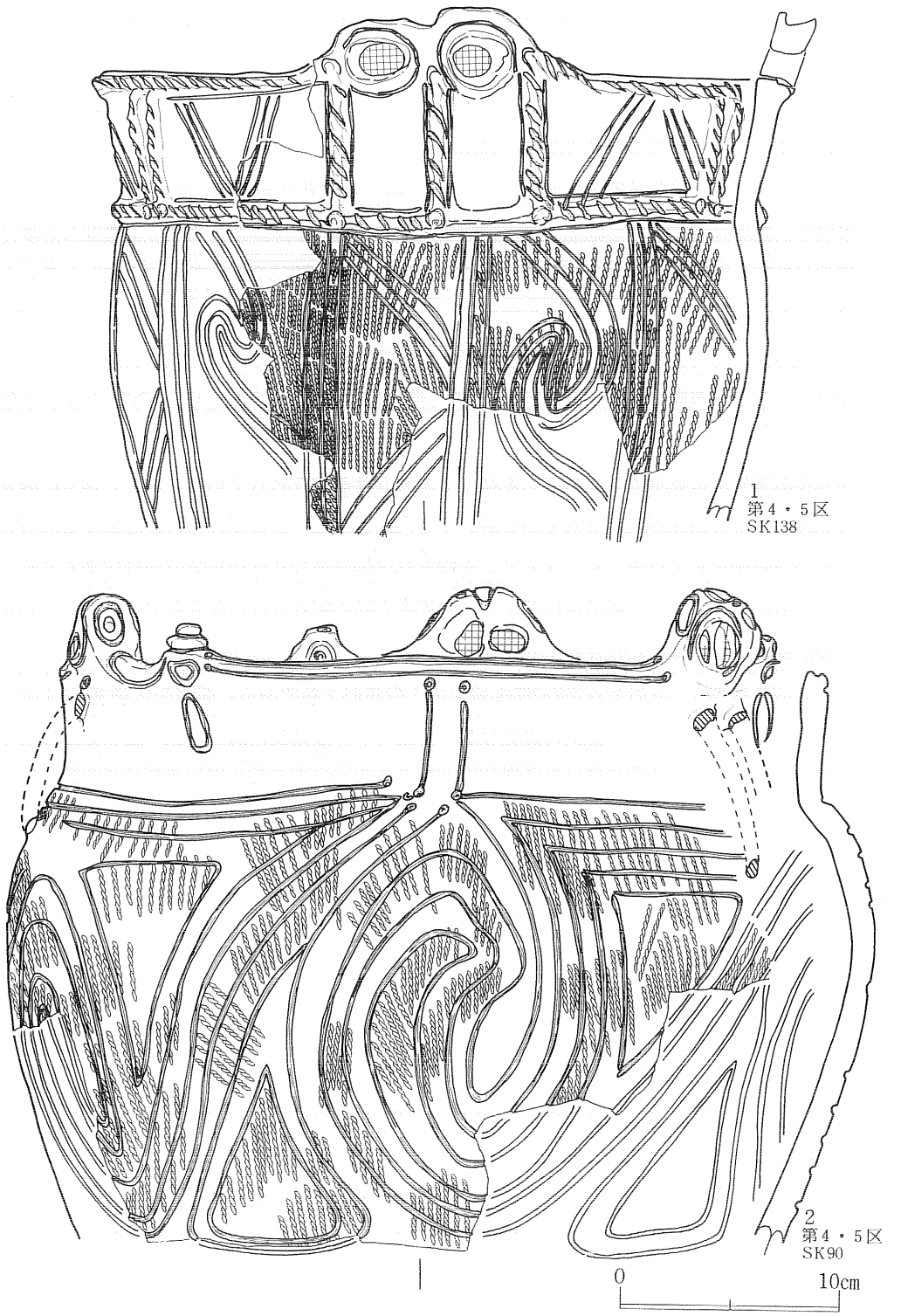
第16図　遺構内出土土器（３）

形に円味をもって下降する。器面は摩滅が著しいが、本来は全面研磨されて無文とされたもののようである。

第17図２の深鉢形土器は、口縁部から体部にかけておよそ¾周分が残存する。口縁部は僅かに外傾し、体部との境は屈曲する。体部はその上半で大きく膨らむ。口唇上に付けられる装飾突起は大小一対の突起３単位からなると思われるが、うち大突起２箇所、小突起３箇所が残存している。３単位とも残る小突起によって観察する限り、突起の装飾の仕方は３単位とも異なっている（図の後面の突起は前面右側の突起背面を図化したもの）。口唇上並びに口縁上端には、突起間を連絡するように末端に竹管状工具の刺突を加えた沈線が２条巡っている。大突起下からは橋状把手が延びていたようであるが、３箇所とも欠損して接合部分の痕跡だけが残されている。また、小突起の下には沈線による楕円文、連鎖状Ｓ字文が描かれている。さらに、突起と突起の間には縦位２条の沈線が竹管状工具の刺突を伴って施文されている。体部には地文に１の撚糸文が施された後、突起および突起間の縦位沈線に対応して、相互にそして屈曲部を巡る沈線とも連続する渦巻き状のモチーフが３ないし４条の沈線で描かれている。またそれによってできる空間には、１条の沈線によって三角形のモチーフが上下交互に対置して描かれている。

第16図４は第４・５区ＳＫ168埋土内出土の鉢形土器である。口縁部分が¾周ほど欠損するほかは残存する。口縁部は内傾し体部との境で屈曲する。体部はやや膨らみをもちながら下降する。口縁部屈曲下には沈線が１条巡り、体部には６単位の渦巻き文とそれらを斜位に連絡する平行沈線、さらに同じく2条の平行沈線によって下向きの弧線文が描かれている。また図の反対側には３条の平行沈線によって上および左右に開いた弧線文が描かれている。この土器は赤色塗彩された土器であるが、彩色の痕跡は底面を除く表面全面に認められ、内面も点々と底面近くまでその痕跡がある。また、内面には液状の内容物表面の痕跡が幅10㎜ほどの黒色の環となって残っている。おそらく副葬するにあたって日常什器を転用して彩色が施された例と考えられる。

第17図１は、第４・５区ＳＫ138埋土内出土の深鉢形土器である。装飾された突起を含む口縁部～体部上半の⅓周分が残存している。口縁部はやや外傾し体部との境で屈曲する。体部上半は緩く膨らみながら体部下半へ続いている。斜位の刻目が施された隆線によって厚く作られた口唇上には沈線が１条施されている。この口唇上に粘土帯をわたして２つのメガネ状突起が付けられている。図では残存する1箇所の突起のみを示したが、この突起は本来口唇上の対になる４箇所に付けられていた可能性もある。口縁部には突起のメガネ状部分を挟んで３条の刻目ある隆線が垂下し、体部境の屈曲部分を巡る隆線と連結する。連結部には竹管状工具の先端を垂直に圧し当てた凹文が施されている。突起部分以外でも口唇部に貼付された隆線と屈曲部を巡る隆線との間は、垂直に貼付された刻目ある隆線によって連絡され、さらにこれらの間は３条



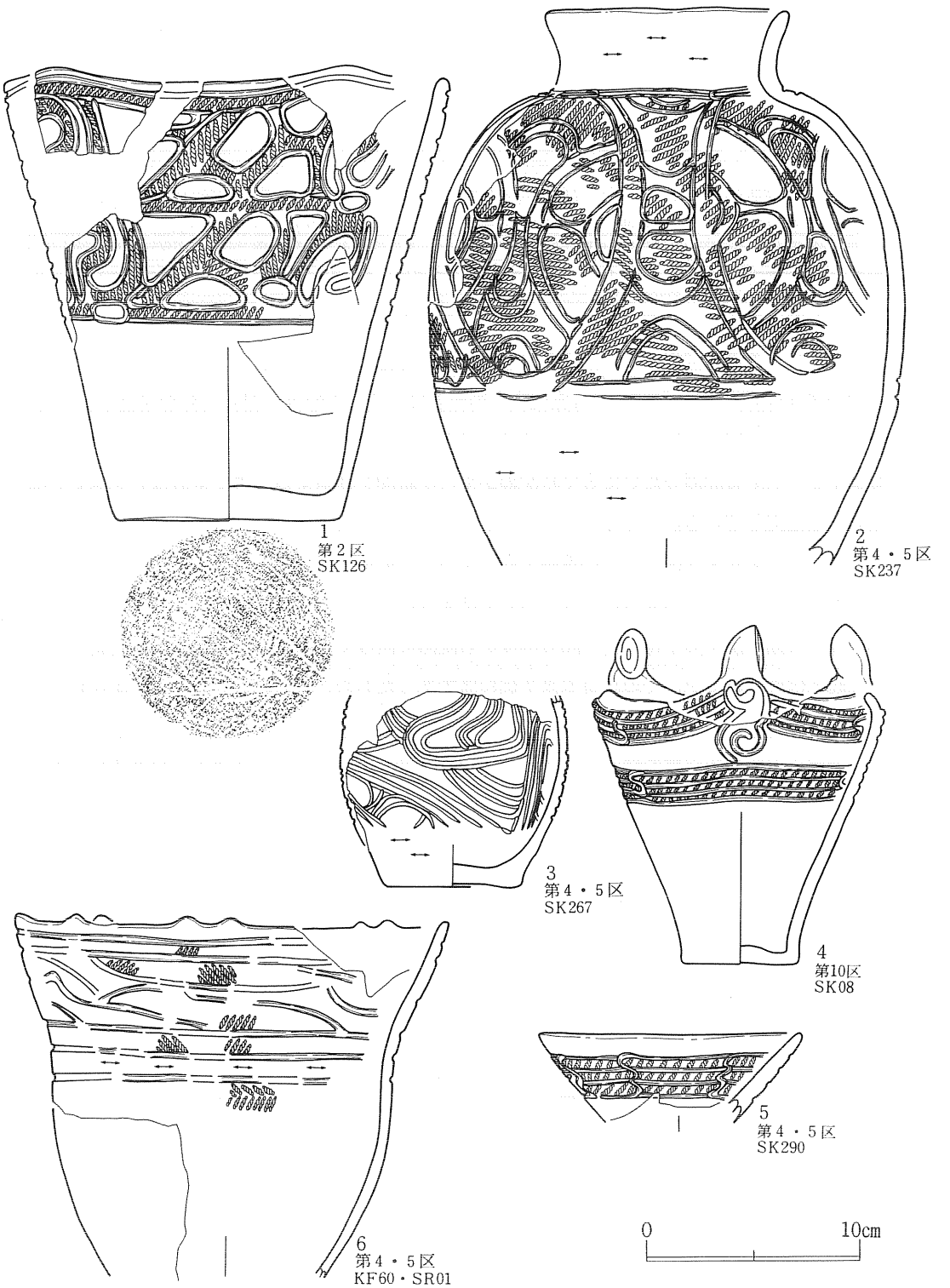
第17図　遺構外出土土器（４）

１単位の沈線がＶ字形あるいは逆Ｖ字形に描かれる。なお、隆線の両側および突起のメガネ状部分の周囲にも沈線が施されている。体部は１の撚糸文施文後、垂下する３条の沈線によって縦に区割りされ、区割りの内部には逆Ｓ字のモチーフと上下２箇所に逆向きに施文される斜位沈線とが、やはり３条１単位の沈線で描かれている。

第18図１は第２区ＳＫ216埋土内出土の土器である。体部上半の½程度、口縁部の¾周ほどを欠く。器形は口縁部から底部まで直線的に外傾して降りる深鉢形をとる。欠損部分が多く口縁部の形状は不明であるが、おそらく４単位の極めて緩い波状を呈するものと思われる。口縁直下に２条の平行沈線で区切られた幅のせまい縄文帯が巡り、以下、体部の⅔程が文様帯となる。文様帯中には磨消縄文手法による文様が描かれている。全体の構成は、波頂部下に上下２段にわたって、渦巻きに似せた入組文(弧状の無文部が入り組む)を配し、さらにそれらの間の縄文地には、枠状の無文部分が秩序なくあけられている。ただし、文様帯半ばに残される縄文帯は器面を水平に巡って、文様帯を更に上下段に分ける形をとっている。また、地文に施される縄文にはＬＲ原体が用いられているが、その回転方向は一定せず、帯状に展開する部分ごとにその方向を変えている。したがって、文様それ自体はかなり秩序を欠いた構成であるが、磨消縄文手法にともなう沈線描画以前に、ある程度文様の割り付けはなされていたものと判断される。底面には木葉痕が残されている。

第18図２は第４・５区ＳＫ237の底面直上出土の壺形土器である。底部を欠損するほか、体部のおよそ半分を欠いている。口縁部は短く外反し、体部は縦に長い球状に膨らむ。体部上半が文様帯となる。入れ子になった４単位の卵形のモチーフを２条１単位の弧状の沈線の組み合わせで構成する文様は、全面にＬＲ縄文を施文した後に施されている。しかし、実際の沈線描画にあたっては、はじめ１条の弧線の組み合わせでモチーフの輪郭を描き、その後それに沿った弧線を加え、さらに残った空間に枠を描くようにして沈線を加えていったことが、沈線の切り合いによって観察できる。また、文様帯の上限を画する沈線は文様帯中の沈線描画の前に巡らされたものであるが、下限の沈線は文様帯中の文様の施文後、主要モチーフである卵形モチーフの下端を連絡するようにして描かれている。体部下半は横位に器面調整され、残った縄文は消されている。

第18図３は第４・５区ＳＫ267埋土内出土の土器である。体部上半を欠損するため確かな器形は不明であるが、体部の膨らみから推して壺形に近い器形をとるものと思われる。下限を画さず底部近くまで３ないし４条１単位の沈線によって曲線的な構図が描かれている。沈線は一見無秩序に束ねられ、至るところで屈曲、接続するかのように見えるが、基本的には束の中の１条が割り付けをかねて最初の文様を描き、他の沈線はそれに沿って描き加えられたものである。また、図の左端ともう１箇所には垂下して描かれた１単位づつの沈線束があり、それらの



第18図　遺構内出土土器(5)

間がおよそ器周の⅓にあたることから、器面が縦位に３分割されていたであろうことが推察できる（さらにもう１箇所の分割部は欠損箇所にあたる）。

第18図４は第10区ＳＫ08埋土内出土の深鉢形土器である。口縁上３箇所に付けられていたであろう突起を除いては、口縁部から底部まで全周分が残存する。口縁は突起を頂部とした波状を呈する。底部から短く垂直に、体下部で外反して角度を変え、口縁部までほぼ直線的に外傾したまま立ち上がる。口縁部上端は内傾して尖る。体部上半には上段３条、下段４条の平行沈線で２段の縄文帯が巡るが、上段の縄文帯中、突起下には逆「の」の字状文が上下に連なって配されるものと思われる。また２段の縄文帯とも突起中間位置下の平行沈線間は、Ｓ字状沈線によって連絡される。縄文帯中はＬＲ縄文を横位に回転施文している。

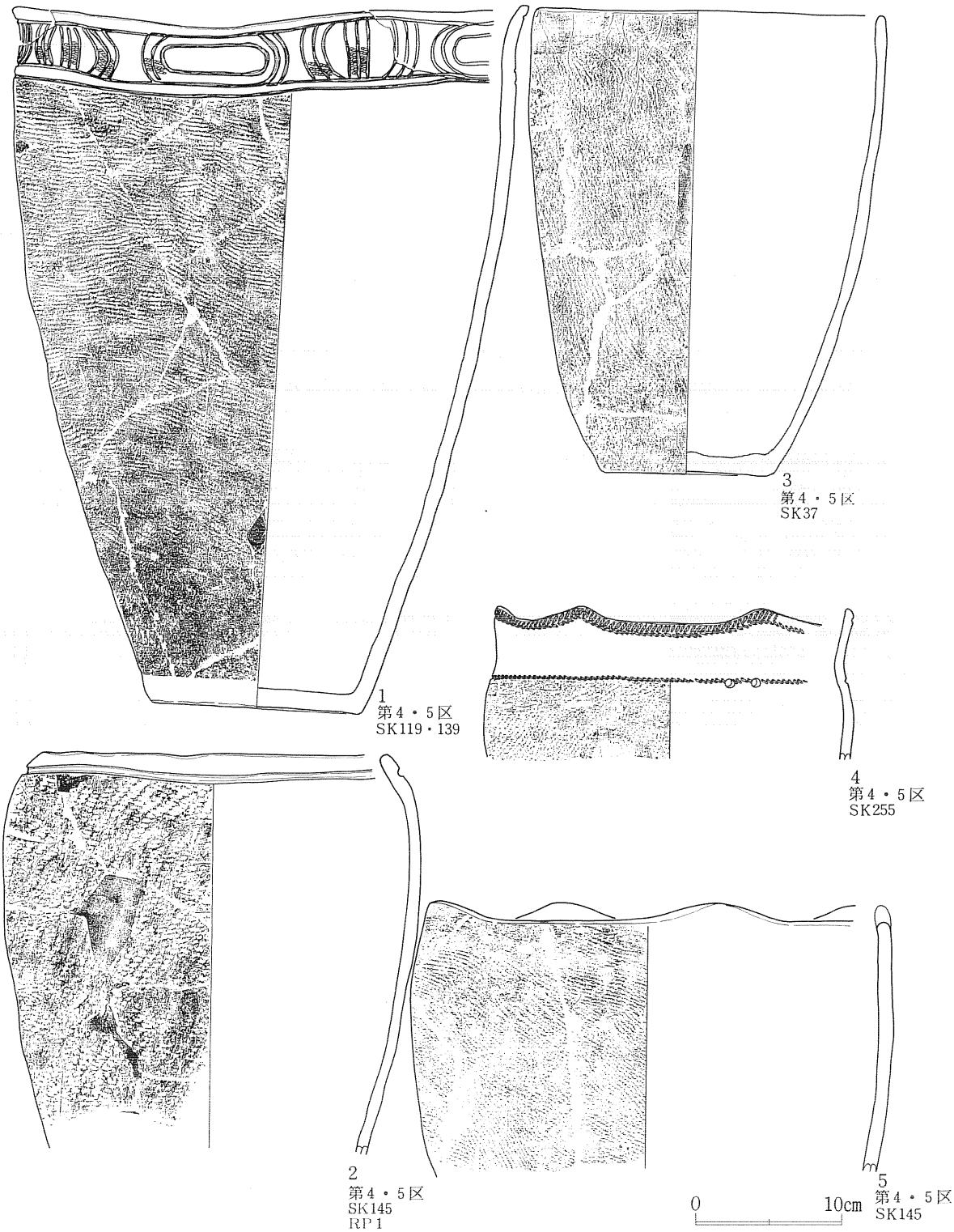
第18図５は第４・５区ＳＫ290埋土内出土の土器である。器形は小型の浅鉢形を呈するが、底部と口縁～体部の約半周分を欠く。体部には３条の平行沈線による縄文帯が巡るが、器周をおよそ８分割する間隔をおいてＳ字状沈線が平行沈線間を連絡する。縄文帯中はＬＲ縄文を横位に回転施文している。

第18図６は第４・５区ＳＲ01の埋設土器である。深鉢形の器形をとり、体下部から底部にかけてと口縁⅓周分を欠損する。口縁部から体部半ばにかけては直線的に外傾して下降する。体部半ばの屈曲部位から下は僅かに膨らみながら底部に向けてすぼまる。口唇部には二個一対の小突起が付けられるが、その数は本来７個程度であったものと思われる。器面は剝落が著しく、文様帯ならびに文様帯中の文様は判然としない。しかし、痕跡的に残る部分から観察すると、体部半ばの屈曲部無文帯を境として上下２段の文様帯が設けられ、それぞれ入組帯状文が施されているようである。比較的残存状態の良好な上段の文様帯はその上限、下限が２条の平行沈線による縄文帯で画され、入組帯状文は器面の半周分にあたる長い単位が４単位施されている。この文様の１単位はそれぞれの入り組み部分に対応して、隣合う単位の末端が上下の縄文帯に接続するよう配置される。縄文帯ならびに入組帯状文内に施文される原体はＬＲが用いられるが、その回転方向は一定していないようである。

第19図、第20図に遺構内出土の半精製・粗製の深鉢形土器を図示した。

第19図１は第４・５区ＳＫ139出土の土器である。口縁部がやや外反し体部は僅かに膨らみながら底部まで下降する深鉢形土器である。上限を１条、下限を２条の沈線で画した口縁部文様帯には、楕円文の左右を２条づつの弧線文で囲んだモチーフと、３条の垂下する縦位沈線を３条づつの弧線文で囲んだモチーフとが交互に配置されている。体部にはＬＲ原体が左上―右下の方向で回転施文され、横走に近い縄文があらわされる。縄文は口縁部文様帯の弧線文にも部分的に残されている。

第19図２は第４・５区ＳＫ145埋土内出土の土器である。体部上半の⅓周分の破片である。

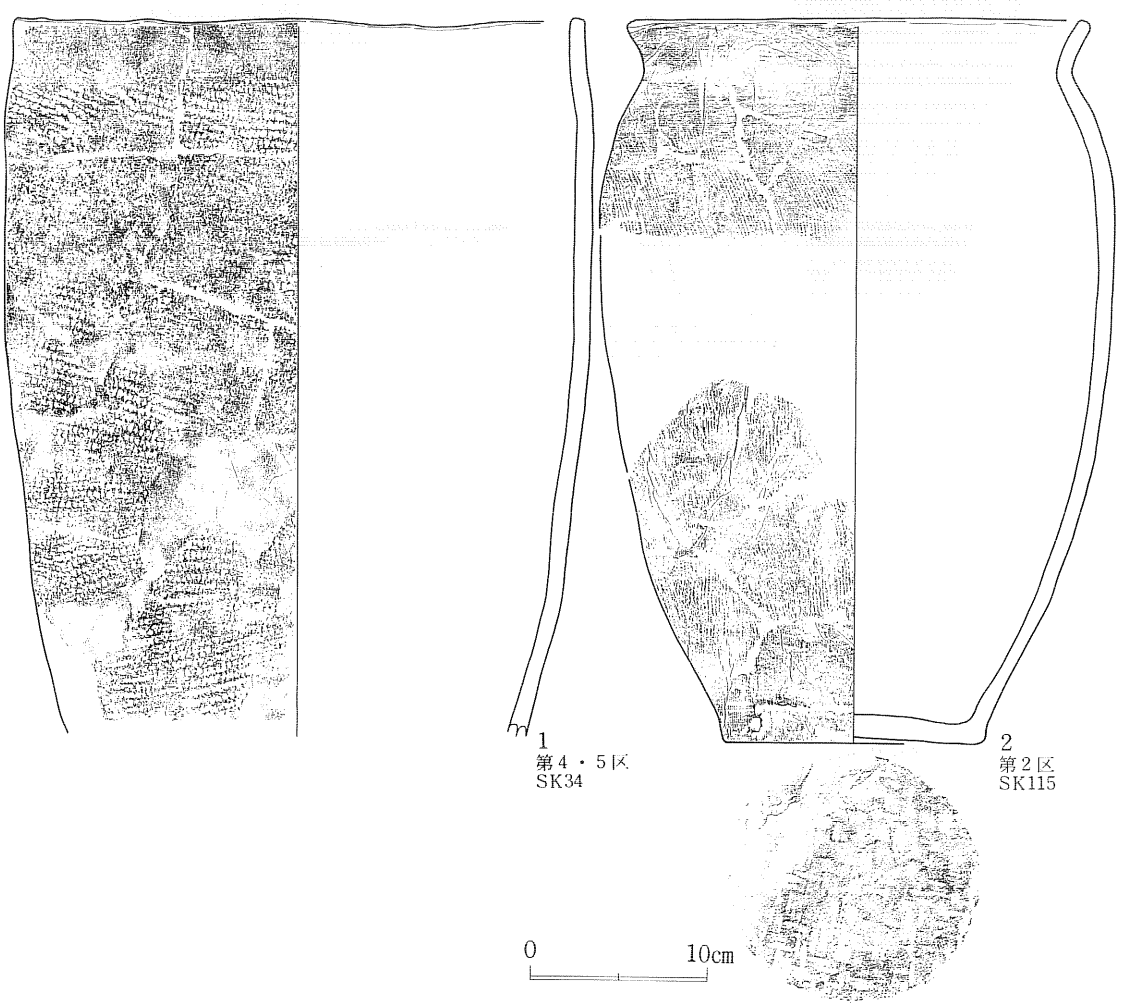


第19図　遺構内出土土器（6）

口縁部は内弯し、体部は緩く膨らんで降りる深鉢形の器形をとる。口縁部には１条の沈線が巡らされ、体部にはＲＬ縄文が縦位に回転施文される。

第19図３は第４・５区ＳＫ37埋土内出土の土器である。口縁部の¾周を欠くが、ほかは底部まで残存する。体部上半から口縁部までがやや内弯し、体部は膨らみをもって降りる深鉢形の器形を呈する。口縁部直下が僅かに無文となるが、以下底部近くまで全面に撚糸文が施文されている。

第19図４は第４・５区ＳＫ255埋土内出土の土器である。口縁部から体部上半まで ⅚周分が残存する。口縁部が外反し、体部は緩やかな膨みをもって降りる深鉢形の器形と思われ、口縁は６単位の波状口縁となる。口縁直下と口縁部・体部の境には縄文原体の側面圧痕文が巡り、その間は横位に器面調整されて無文化される。口縁上端と体部にはＬＲ縄文が横位回転施文さ



第20図　遺構内出土土器（７）

れる。

第19図５は第４・５区ＳＫ145埋土内出土の土器である。口縁部から体部上半までが残存する。体部上半から口縁部にかけて内弯して立ち上がる深鉢形の器形をとると思われ、口縁部は５単位の波状を呈する。体部には１の撚糸文が横位あるいは斜位に回転施文されているが、施文単位の長さは短く４～５㎝ほどである。

第20図１は第４・５区ＳＫ34埋土内出土の土器である。口縁部から体部下半にかけて½個体分が残存する。口縁部が僅かに内傾し、体部はごく僅かながら膨らみをもつ深鉢形土器である。口縁部が無文とされる以外は、体部は全面ＬＲ縄文が左上－右下の斜位ないしは縦位回転によって施文されている。

第20図２は第４・５区ＳＫ115埋土内出土の土器である。口縁部から体部上半の約½個体分と体部下半から底部にかけてとが残存し、体部半ばは欠損している。口縁部は屈曲外傾し、体部はその上半で膨らむ深鉢形の器形をとる。口縁部と底部近くは無文化されているが、体部は１の撚糸文が縦位に施文されている。底面には網代痕が残る。

第21図に第４・５区検出の２軒の竪穴住居跡出土土器を図示した。１～５がＳＩ35、６・７がＳＩ45出土の土器である。

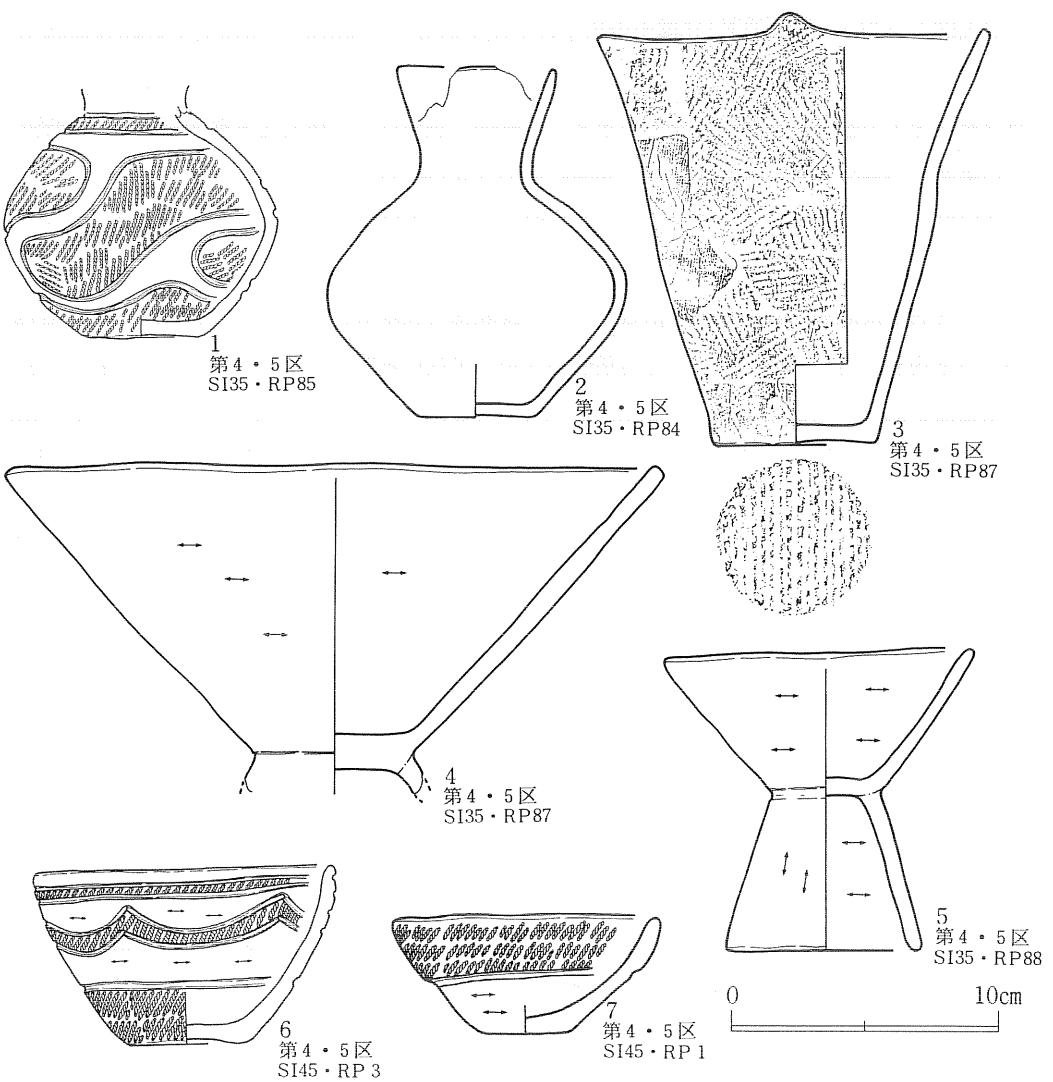
１、２はほぼ同形の壺形土器である。１の口縁部から頸部も、おそらく２と同様外傾する形をとると思われる。体部は１、２とも最大径がその半ばにあるそろばん玉に近い形状を呈する。２は器面が剝落し全面にわたって器胎が露出し、文様については全く判らない。１では、上限を２条の平行沈線による縄文帯、下限を波頭状に巡る沈線で画した文様帯中に、横位に展開するＳ字状の区画文が描かれている。縄文帯、区画文内、体部下半に施される縄文は撚りの細かなＬＲ原体を横位に回転して施している。

３は小型の深鉢形土器である。口縁部から体部にかけて約半周分を欠損する。口縁部は外傾して立ち上がり、体部上半に僅かに屈曲する部位をもつ。屈曲部から下はほぼ直線的にすぼまるが、底部はごく僅かに外側に張り出す。口縁には左右非対象の突起が１箇所作りだされるが、欠損部分にもあったかどうかは不明である。器面には全面ＬＲとＲＬの２種類の原体を用いて羽状縄文があらわされる。屈曲部より上の体部上半ではこの２種類の原体は比較的整然と水平に回転されているが、体部下半では回転方向が乱れ、施文単位は秩序なく交錯している。底部近くには縄文は施文されていない。

４、５は直線的に開く台付きの浅鉢形土器である。4は台部を欠損するが、浅鉢部分は口唇部が直角にそぎ取られている。また、口径に比べて底径が極めて小さく作られている。あるいは、逆位において円筒形のつまみをもった蓋形土器と見るべきかも知れない。器面の調整は内外面とも横位に行われている。５は完形品である。浅鉢部分と台部がほぼ同じ高さをもつ。口

唇部はやや円みを帯びて作られている。器面の調整は、浅鉢部分で内外面とも横位、台部で外面縦位、内面横位に行われている。

ＳＩ45出土の６は小型の鉢形土器である。口縁部の約半周分を欠く。口縁部から底部にかけて緩く膨らんで降りる器形をもち、器面の上位⅔程に文様帯が設けられている。上限を２条の平行沈線による縄文帯で、下限を１条の沈線で画した文様帯中には６単位に分節される連弧状帯縄文が施文されている。帯縄文内、体下部にはＬＲ縄文が横位回転施文される。７は小型浅鉢形土器である。底部から直線的に開き、体部上半から口縁部にかけて僅かに内弯する。体部半ばに僅かに段をもつ。口縁部から体部上半にはＬＲ縄文が横位に回転施文され、体部下半は横位の器面調整が施される。尚、この土器の口縁部は破損箇所の再生で作られている。



第21図　遺構内出土土器（８）

3）出土土器の分類

前項では整理された土器の中から遺構内出土のおもだった資料について観察・記述をおこなった。この項では前項で扱った資料も含めて出土土器の分類をおこない、八木遺跡土器群の特徴をひきだしてみたい。具体的な資料については前項の遺構内出土土器(1)〜(8)のほか、p．34〜p．74の遺構外出土土器(1)〜(25)とそれらのうち一部を掲載した図版118〜125、および破片資料の図版30〜70をあげる。

分類するにあたっては、第一義的に施文上の特徴に留意し、また既知の土器型式の変遷も考慮するよう努めた。しかし、第Ⅰ群土器に含まれるものをのぞいた、器面に地文以外の文様要素が付加されない、あるいはきわめて単純な要素の付加しか認められない土器（半粗製、粗製土器）については、おもに器形上あるいは口縁形状などの特徴をとらえての大まかな分類に止どまった。また、第Ⅱ群、第Ⅲ群土器に関連する口縁部突起についてはある系列を指摘でき、形態上の変化をたどることができるため、さらに説明を加えている。また底部については底面圧痕の残る資料があり、それについては図版70に示した。

第Ⅰ群土器（第14図、第22図、図版30，31）

器面に施される文様が粘土紐貼付の隆線か、あるいは描画後の調整を受けた沈線によって施される土器である。施文上の特徴により3類に分けられる。

1類　粘土紐を貼付して文様を施すが、貼付後その両側に沈線を沿わせ隆線化したもの（図版30—1，2，8，9，12、図版31—4，5，6／以下「図版」省略）。隆線は口縁上端および頸部〜体部で器面を水平に巡る場合（30—1，2，8，9，12）や、鋸歯状に延びる場合（31—2)、口縁部文様帯内で剣先状のモチーフ（30—2）や渦巻き文（30—8，9，12）を描く場合、さらに体部で曲線的に（31—4)、あるいは垂下（31—5，6）して施される場合がある。また口縁部が把手状に加飾される例（30—1，2）があるが、これらから推して把手状の装飾部例（30—2)、太く厚い粘土紐貼付によって文様を描く例（30—3〜5）も同類に扱われるだろう。

第22図3は頸部に4単位の橋状把手のついた壺形土器である。把手の上下は太い隆線によって連絡されている。また把手下の体部にはやはり隆線による文様が施されている。

2類　粘土紐貼付後の調整を施さないことを特徴とする（30－7，10，11，13〜15、31—2)。ただし、この類でも口縁部上端だけは沈線をともなって施文される（30—7）。また、縄文原体の隆線上の側面圧痕文の併存する場合（30—15）も見られる。粘土紐貼付文の展開のしかたはほぼ1類と同じと認められるが、体部資料では、交差するような粘土紐の連結がみられる場合（31—3）もある。

第22図1はキャリパー形の口縁部をもった深鉢形土器である。口縁部文様帯内には地文であ

る縄文施文後、細い粘土紐の貼付けによって渦巻き状のモチーフを含む文様が施されているが、一部は剝落している。縄文はＬＲの原体を用い、口縁部では横位回転、体部では縦位回転して施文している。

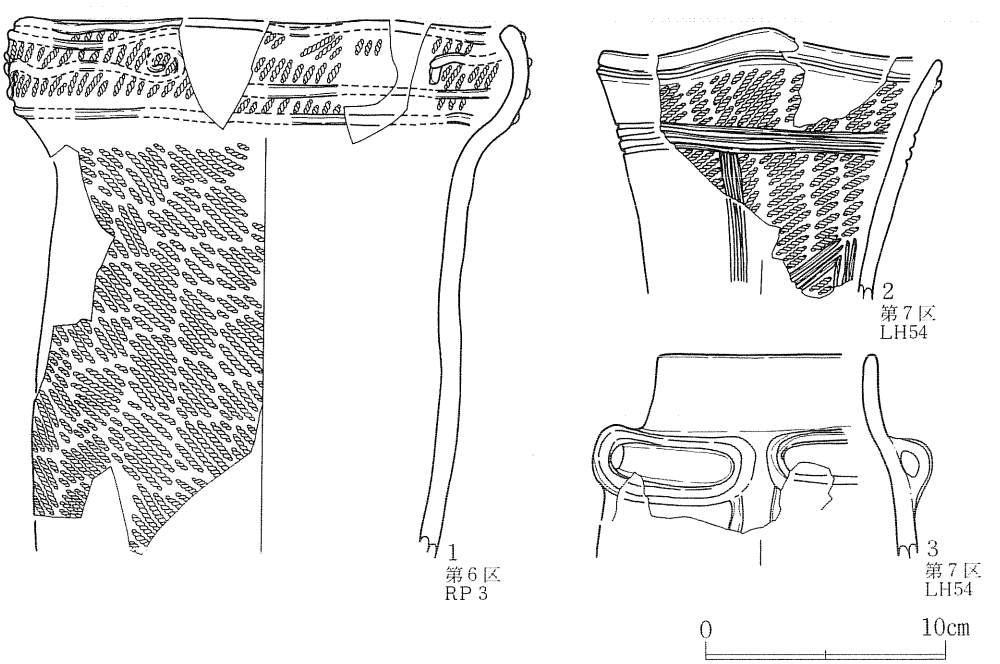
３類　体部の文様を沈線によって描くもの（第14図１、第22図２）。両者とも外反する波状口縁の深鉢形土器である。第22図２の土器は波頂部が１単位であり、頸部を水平に巡る沈線のほかに体部にも縦位あるいは斜位の沈線が３条を１単位として描かれている。

４類　１～３類に伴うと思われる粗製土器である。縄文を施文した後、口縁部下に太い粘土紐を貼付して隆線を巡らしたもの（31―７～９）と、隆線上に爪先を含む指頭圧痕列を施したもの（31―10～12）がある。前者の口縁は短く直立（31―７）あるいは屈曲して外側に張り出し（31―９）、後者の口縁は直立（31―10, 11）もしくは内弯する（31―12）。また、31―13は指頭圧痕列と細い粘土紐貼付文が同じ器面上に施された土器である。

第Ⅱ群土器（第23図１，２、第24図４、第27図１、第28図１、図版32～34、59）

大きな曲線的構図をもった磨消縄文、刻みが施されるか、あるいは鎖状に変形された隆線、円形の浮文、器面全面に施された指頭圧痕文あるいは刺突文などによって特徴づけられる一群の土器である。次の９類の土器を選別した。

１類　口縁部が屈曲内傾し、体部に抱球状の区画文が描かれる（32―１）。口縁部は波状を呈し、波頂部から８字状に貼付された突起が無文化された口縁を経て体部へ降りている。抱球



第22図　遺構外出土土器（１）

状の区画は微隆起線によって行われ、区画内には下から上への方向で竹管状工具による刺突文が充填されている。

２類　磨消縄文による鈎の手状の構図が描かれる土器である（第28図１、32―２）。第28図１の浅鉢形土器は４単位の波状口縁をもち、体部には縦位の刺突列とともに、縄文地の中に鈎の手状の無文部分が貫入的に描かれている。32―２は屈曲内傾する口縁部をもつ鉢形土器である。屈曲部分に沿って短沈線列が施されている。

３類　鎖状の隆線が口縁の波頂部に対応して垂下する土器である（32―３～６）。隆線は波頂部から直接降ろされる場合（32―３，４，６）と口縁部を巡る隆線に接続する場合（32―５）とがある。32―３，４では隆線の両側に弧線を重ねた磨消縄文が施されている。また、32―６の口縁は外反する広い無文帯をもつと思われるが、波頂部には一対の抉のある凹文が施され、そこから左右に沈線が延ばされている。

４類　一対の斜位の刻みの施される隆線が器面を方形に区割りする土器である（第23図１、32―７～９、33―２）。第23図１は32―７の資料とともに平縁の深鉢である。体部半ばで屈曲し、弓なりに外反する口縁～体部上半には、５単位の方形に区割りされた文様帯が設けられる。文様帯内部にはC形の磨消縄文が施されている。

５類　刻みが施されるか、あるいは鎖状に変形された隆線が器面に曲線的な構図を描く土器である（第23図２、32―10～12、33―３、59―１）。第23図２、32―10、33―３の資料では円形浮文も併せて用いられる。第23図２および59―１は二重口縁の深鉢形土器にラッパ状の注ぎ口の付く注口土器である。第23図２では注口部の両脇に円形浮文が、59―１では鎖状の隆線による文様が展開する。

６類　隆線が波状口縁下を巡る土器である（第27図１、33―１，８～12）。隆線から上の口縁部は短く外反する。隆線には鎖状に変形される例（33―１，10）も含まれる。また体部は鎖状隆線の区画文（33―８，９）や沈線区画の磨消縄文（33―１，10～12）が施される。第27図１の土器は波頂部に鎖状の隆線と渦巻き状の沈線文が、隆線上には円形浮文が併用され、体部には磨消縄文が施されている。

７類　磨消縄文と円形浮文とがセットで施される土器（第24図４、33―４～７）。円形浮文は磨消縄文を描く沈線の屈折部分（33―４，５，７）や、口縁に設けられた突起下に施される（33―６）。第24図４は４単位の突起(より新しい段階のＡ１類突起)をもつ深鉢形の土器である。内傾する口縁下に突起と連絡する隆線が巡り、疑似二重口縁を形づくる。また、突起間に小突起が設けられ、円形浮文を介して隆線と連結している。体部には突起正面から延びる沈線によって大柄な構図の曲線的な磨消縄文が施されるが、その全体の構成は第23図２の資料からの変化をうかがわせる。また、第Ⅲ群土器で多用される凹文や、連鎖状Ｓ字沈線文に変化する

以前の向かい合わせの小弧線文が、磨消縄文を描く沈線の屈折部分に施されている。地文に用いられる縄文はＲＬ原体を縦位回転して施す。

８類　比較的大きな曲線的構図の磨消縄文が描かれる土器である（34―１～５）。34―１，２は撚糸文を地文とし、内弯する口縁端から下端を巻き上げたＹ字形あるいはＪ字形の無文部分が表現されている。34―３～５は縄文を地文とするが、区画文の展開する方向に沿って原体の回転方向を変えている。

９類　体部全面に爪先の圧痕を含む指頭圧痕か、あるいは先端の丸い棒状工具による刺突文の施される土器である（34―６～12）。34―６～９（同一個体）は拇指と人差指によって粘土を連続的につまみあげた指頭圧痕が施され、34―10では爪先で、また34―11，12では棒状工具によって刺突文を施している。口縁部分の粘土帯は体部からの粘土帯の内側に接合し二重口縁に成形されるが、34―６～９は屈曲部の側面に、34―10は上面に短沈線列を施している。

Ａ類突起（第24図４、第47図、第48図、図版35～37）

おもに第Ⅱ群土器に関連する突起である。Ａ１類とＡ２類の２つに分けられる。

Ａ１類（35～37―８）

口縁部下に巡らした隆線によって疑似二重口縁とした土器に付く。二重口縁の両端から粘土板を斜めに接合して作り出すが、古い段階から新しい段階にかけて、この製作法とそれに関係する施文上の特徴に変化が認められる。古い段階におかれる突起は正面および背面に貫孔をもつが、この貫孔は二重口縁の両端に架けた粘土板に正面、背面とも左側からの２枚の粘土板を接合して、既に成形時から作り出している（35―２～12）。したがって、貫孔も縦に長く切れ上がったものになっている。これに対し、新しい段階では背面の口縁から立ち上がった粘土板に正面側の粘土板を隆線（疑似二重口縁の正面側口縁端）につないで突起を作り出している（35―13～16）。貫孔はこの粘土板の接合後に穿孔したものである。したがって、孔は円く、内側には穿孔時の粘土のめくれが認められる。さらにこの段階よりも新しくなると貫孔は盲孔に変化し（36―１～８）、最後には盲孔すらも消失し（36―11～16、37―１～８）、突起自体も痕跡的になり極めて小さいものも現れるようになる（37―８）。

また、これとは逆に、古い段階では貫孔の左上側に渦巻き状に施文されていた沈線文が、貫孔の消失過程とともに幅を広げてゆくのが観察される。古い段階の渦巻き状の沈線文は、貫孔の左上側の狭い空間に縦長に描かれ、これと同じ文様が背面にも対称的に描かれているが（35―２～16）、貫孔が盲孔に変わると盲孔の上に位置して施文されるようになる（36―４～８）。そして、さらに新しい段階では背面側の文様はなくなり、正面側の文様は貫孔が消失した分だけ広がった空間一杯に描かれるようになる（37―１～８）。

以上がＡ１類突起の製作法の変化に伴う貫孔消失過程と、渦巻き状沈線文の拡幅過程である

が、例示した資料のうち、古い段階におかれる35―2，3，6，7などでは体部に鎖状隆線を用いた文様が施され、新しい段階におかれる37―1，7では体部の文様として、末端に小渦巻き文のある沈線で描く磨消縄文や連鎖状S字沈線文が描かれている。

A2類（37―9～18）

口縁に環状の粘土板を架けて作り出す突起である。古い段階では二重口縁に付けられた突起部分は内外面に開いた形をとる（37―9，10）。また、突起頂部には隆線がわたされ、隆線端には貫孔あるいは盲孔が穿たれている。二重口縁が消失する段階にいたると突起頂部の隆線は残存するが隆線端の貫孔・盲孔は消失する（37―11，12）。また隆線も省略されるようになると、突起自体がきわめて扁平化（37―13～15）し、最後には1枚の粘土板の上をねじりあげたような小突起へと変化する（37―17，18）。粘土環の空間も突起下の貫孔に変化する。

A2類突起の簡略化の過程は以上のように観察されるが、このうち、二重口縁につく古い段階の資料（37―9，10）の製作方法は、A1類の古い段階の突起の製作方法の一部、すなわち、粘土板を口縁に斜めに架ける方法とも共通するように考えられる。

第Ⅲ群土器（第15図、第16図1、第23図4、第24図1～3、第25図、第26図、第27図2，3、第28図2～5、第29図2、第30図1～3、第31図、第36図、第37図1，2、第38図4、第39図4，5，8，9、図版41～50、58、59）

曲線的構図の磨消縄文、末端に小渦巻きをもった沈線文、連鎖状S字沈線文、直線的な構図へ変化した磨消縄文などによって特徴づけられる土器である。円形浮文から変化した凹文も多用される。また、この段階の土器には深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形などの器種も増える。上記の文様はそれぞれの器種に採用されているが、破片資料では深鉢ないし鉢形土器の口縁部資料を41～46に、体部資料を47～50に、また壺形土器を58に、注口土器を59に例示した。以下に器種ごとに類別する。

深鉢ないし鉢形土器

口縁部資料の図版配列は口縁形状で分類された配列

内弯波状口縁……a種（41、42―1～5）

屈曲外傾波状口縁……b種（42―6～11）

外反波状口縁……c種（43、44、45―1～4）

外反緩波状口縁……d種（45―5～10）

外反（ないし直立）平縁……e種（46）

にしたがっている。

体部のモチーフによって4類に分けられる。

１類　比較的大柄な磨消縄文のモチーフを描くもの（第15図２、第16図１、第23図４、第24図１，２，３、第25図、第26図１、第27図２，３、第30図１，２、41―１～６，８～12、42―１～10、43―３～８、46―１～６、47、48―１～６）。口縁部資料ａ～ｃ種には、波頂部に対応して単独あるいは縦位２箇所に凹文が施される例もある。また、体部資料では磨消縄文の無文部分に短沈線列の施文された例（47―１～３）も認められる。さらに磨消縄文を描く沈線は末端に小渦巻き文をもたせるものが多い。第Ⅱ群土器のうちの磨消縄文を施す土器では体部で隣合うモチーフ同士が連結することはないが、この類の磨消縄文では互いに連結しあうことが特徴である。基本的な構図は第Ⅱ群土器のうち第23図２、第24図４のモチーフを変形していったものであるため、逆三角形のモチーフと入れ子になった倒卵形モチーフとが繰り返し表されることとなる。また連結部分の沈線が省略されて、沈線が逆三角形や渦巻き状の区画を作る例（第24図１，２）や、施文工程を簡略化し口縁部下を１条の沈線が巡るようにした例（第25図２）もある。地文は縄文と撚糸文の２種がある。第25図１は２段の撚紐（ＬＲ）を軸に巻き付けて縦位に回転施文した例である。

１類の資料は波状口縁となるものが多いが、外反平縁（ｅ種）の資料として、第24図３が挙げられる。この土器は器面が方形に区割りされ、おそらく逆Ｕ字形あるいは[illegible]形の構図が磨消縄文手法によって施される。第Ⅱ群土器のうち、第23図１からの系譜をたどれる資料である。

２類　磨消縄文とともに、円文、小渦巻き文が多用され、それが縦位に連なって連鎖状Ｓ字沈線文、蛇行沈線文などにも変化してゆく土器である（第15図１、第26図２、第30図２，３、41―７，13、42―11、43―１，２，９～11、44、45―３～８、46―９～13、48―７～11、49、50―４）。１類では磨消縄文を描く沈線末端（磨消縄文の屈折部）に限定して描かれていた小渦巻き文は、２類では沈線から枝別れして施されたり、磨消縄文の区画内部に描かれたりする。区画内部に描かれる文様としては連鎖状Ｓ字沈線文、蛇行沈線文が特徴的である。また、口縁の波頂部に対応して施されていた１類の凹文にかわって、下向きに開放した円文や、これに似せて向かい合わせに配した小弧線文が描かれるようになる。全体的な構図としては１類同様逆三角形と倒卵形のモチーフを交互に配したもののほか、第24図３からの系譜上にあるものとして、外反緩波状口縁（ｄ種）の資料（第30図３、45―５，７）がある。これらの資料では、方形の区割り内部の磨消縄文の間に、連鎖状Ｓ字沈線文が施されている。また、これと関連して、第30図２の資料では縦に細長く区画した中に蛇行沈線文とＳ字沈線文とが交互に配置されている。

第15図１の資料は第16図１の資料とともに、第Ⅲ群土器の中では古い様相を示す土器である。

３類　蕨手文の施される土器である（第31図１、50－１，２，３）。蕨手文は１条の沈線によって描かれる場合（50―１，２）とさらに１ないし数条の沈線を重ねて描かれる場合（第31

図１、50―３）がある。第31図の１の資料は第Ⅳ群１・４類と類似し広い無文帯の外傾口縁をもつ。口唇上には一対の小突起が付けられ、正面からは１箇所、背面からは２箇所づつの刺突が施されている。口縁上端は突起を連絡して沈線がめぐる。口縁部と体部の境は屈曲し、屈曲部に施された縦位２箇所の刺突を頂点として描かれる蕨手文は、縦位の短沈線列とともに器面を方形に区割りする。体部文様帯の下限は、蕨手文、縦位短沈線列に対応して波頭状に入り組ませた沈線で画している。

４類　きわめて狭長化した連鎖状Ｓ字沈線文が描かれる土器である（45―１，２，９，10、46―７，８、50―５～９）。口縁部資料ｃ種では口縁が幅広に無文化され、ｄ種では短く立ち上がる。しかし、いずれも口縁下を１条の沈線が巡って体部との境を画している。連鎖状Ｓ字沈線文は縦長に細く区画された中に描かれるが、その上端（45―２）や交叉する結節部分に１個あるいは２個の刺突が加えられた例（50―６，７）もある。

浅鉢形土器（第28図、第29図）

１類　口縁の４つの波頂部に対応して、体部が４面に区割りされ、沈線による区画文が描かれる（第28図２，４、第29図２）。第28図2の土器は内弯する口縁に円文を施した４つの突起が設けられている。口縁下には突起間を結んで刻目のある隆線が巡り、突起中間位置では円形浮文がその上下に施されている。体部は突起間を１面として４面に区割りされるが、それはさらに円形浮文の施文位置で２分され、Ｓ字沈線文を含む区画文が地文の撚糸文上に描かれている。第28図４は低い波頂部をもち、波頂部下にはＳ字沈線文、その両脇に方形に区画された磨消縄文が描かれている。第29図２の土器は尖った波頂部から連続する隆線が口縁下を巡る。体部は波頂部下から垂下する「し」の字状、Ｊ字状の組み合わせ沈線で器面の分割がおこなわれ、磨消縄文による曲線的な構図の文様が描かれている。また、波頂部下の隆線には側面からの小貫孔があけられ、さらにその下部および波頂部中間位置の隆線の上下には縦位２箇所づつの刺突が施されている。

２類　口縁波頂部が正面をくぼませ周囲を厚くした突起（Ｂ類突起）に作り出される土器である（第28図３）。突起下および突起中間位置下の体部には連鎖状Ｓ字沈線文あるいは向合わせの小弧線文が施され、その間を２段に亙って磨消縄文手法による横位の区画文が連絡している。第Ⅲ群土器中にあって本資料の体部文様構成法は、第Ⅵ群土器との関連で特に注意される。

３類　全面縄文の施される土器である（第28図５）。他の２類と同様４単位の波頂部をもつため本群に含ませた。

壺形土器（第36図、第38図４、58―１～10）

１類　大口径の壺形土器であり、橋状把手が口縁上端から頸部・体部の境にわたるもの（第36図１、58―１，２，３，６，９）。第36図１は外傾する口縁部の上端から、上面に凹文およ

び凹線の施された橋状把手が、屈曲する頸部と体部の境に連絡している。また、橋状把手下にも凹文が施され、把手の中間位置には円形浮文が貼付けられている。体部には深鉢形土器１類に似たＪ字形の無文部を取り込んだ構図の磨消縄文が、撚糸文を地文として施されている。

２類　大口径の壺形土器であるが、橋状把手が口縁部上端からやや降りた箇所で体部と連絡するもの（第36図３、58―３～５）。第36図３の土器は本来口縁上端に突起が付けられていたものと思われ、橋状把手は突起部位の下から体部に降りている。体部には刺突列を伴う２条の沈線によって縦横に入り組んだ文様や縦位半割の楕円形文などが施され、また、それらを斜位に連絡させてできた空間には、鈎の手状の無文部分をもつ三角形の磨消縄文が配される。

３類　大口径の壺形土器であるが、橋状把手は頸部の屈曲部に付けられる（第36図２、58―７，８）。第36図２は直立する平縁の壺形土器である。頸部の屈曲部に付けられる橋状把手にはＳ字沈線文が施され、把手の上下は互いに隆線によって連絡されている。体部には撚糸文を地文とした磨消縄文が施されているが、その構成は不明。

４類　頸部に横位の把手のつく壺形土器である（58―10）。把手を境とした頸部と体部の屈曲は緩く、口縁部分を欠いているが口径は比較的小さい可能性もある。把手の下部には２条の隆線に挟まれて連鎖状Ｓ字沈線文が描かれている。

５類　小口径の壺形土器である（第38図４）。体部上半に波頭状に入り組ませた磨消縄文が施されている。

注口土器（59―２，５）

１類　口縁が僅かに屈曲する鉢形土器に太く短い注口部がつく土器である（59―２）。口縁の波頂部は注口に対応し、注口の下部および両側には末端に小渦巻きを持たせた磨消縄文が施されている。

２類　細いラッパ状の注口が屈曲外傾する口縁の鉢形土器につく（59―５）。注口上部と口縁部は凹文、貼付文によって装飾された橋状の把手によって連絡される。

小型広口の壺形土器（第37図１，２）

第37図２は口縁から体部上半を欠いているが体部下半の屈曲部から上の立ち上がり状態からみて、広口の壺と判断される。第37図１，２とも深鉢形土器２類の連鎖状Ｓ字沈線文、蛇行沈線文が磨消縄文とともに描かれている。

小型土器（第39図４，５，８）

第Ⅲ群土器の文様が描かれた小型の土器を図示した。小渦巻き状の先端をもつ沈線文（第39図４，５）、曲線的構図の磨消縄文（第39図５，８）などが施されている。

Ｂ類突起（第48図、38～40）

おもに第Ⅲ群土器につく突起であるが、その祖型的なものは第Ⅱ群土器のＡ１類突起とも関

連し、また、より新しい段階におかれるものは第Ⅳ群土器、第Ⅵ群土器とも関連する可能性がある。

Ｂ１類（38―１～４）

疑似二重口縁の土器（第Ⅱ群土器）につく祖型的な形態を示すと思われる突起である。38―１（第48図右最上段）はＳ字状の渦巻きに作り上げた橋状の把手であるが、背面にはＡ１類突起に特徴的な沈線文、並びに盲孔が施されており、Ａ１類突起の古手のものと関連すると思われる。そのほかの突起も基本的に疑似二重口縁に付けられた橋状突起であるが、Ｓ字状に渦を巻く沈線が施されたり（38―２）、正面に貫孔が穿たれたり（38―３，４，６）、螺旋状に捩られた（38―５）形態がある。

Ｂ２類（38―７～13）

Ｂ１類同様、口縁部下に隆線を巡らせた疑似二重口縁の土器に付くが、隆線は突起と連続的に施される。橋状突起の形態を残したり（38―７）、円形の上面に渦巻き文を描く（38―８，９）ａ種と、上面の渦巻き文の末端が、襟を合わせたように施される隆線に沿って流れ出る（38―10，11）ｂ種、突起に連続する隆線が開き（38―13）、突起上面からの渦巻き文が開放部を通って突起下にＳ字文となって連続する（38―12）ｃ種がある。このうち、ｂ種突起は次のＢ３・Ｂ４類に、ｃ種突起はＢ５・Ｂ６類へと系譜を進める。

Ｂ３類（39―１～７）

Ｂ２類ｂ種の系譜をひき、隆線が消失し、突起上面が正面側を向いてやや薄くなる。周りを厚く仕上げた突起内には下端を解放した円文が施されるが、Ｂ２類ｃ種の系譜を引くＢ５類とは異なり、突起下には連続しない（39―１～４）。また突起内円文の下には凹文（39―５）、貫孔（39―６，７）が施される例も出てくるが、これらは次のＢ４類に系譜を進める。

Ｂ４類（39―８～13）

Ｂ３類のうち、凹文、貫孔のある資料から続く。凹文、貫孔が突起内にせりあがり、下向きの弧線に変化した円文に取り込まれるようになる。また、下向き弧線の両端には刺突が施されるもの（39―11～13）もある。なお、39―14の資料は第Ⅳ群土器２類の突起であるが、Ｂ４類にみられる変化は、いずれこの種の貫孔を二重、三重の弧線で囲み、そこから沈線を左右に延ばす縁帯文との関連も充分考えられる。

Ｂ５類（40―１～７）

Ｂ２類ｃ種から変化し、Ｂ３類と対応する。周りを厚く作った突起内に下部の開放部を伝って突起下へ連続するＳ字沈線文が描かれる（40―１～５）。突起の片方の肩の部分に刻みの入れられる場合（40―３）も認められ、この特徴は第Ⅵ群土器へと引き継がれる。また40―６，７はこのＢ５類突起に似せて渦巻き状の粘土紐を突起正面に貼付したものと思われる。

Ｂ６類（40―８～13）

Ｂ５類突起から変化する。突起が扁平化し、突起正面に描かれるＳ字沈線文は体部の文様と連続して、連鎖状Ｓ字沈線文に変化する例も出現する（40―10～13）。また、突起の肩の刻みも多く施される（40―10～12）。

以上がおよそのＢ類突起の分類とその変遷である。第Ⅲ群土器（深鉢ないし鉢形土器）と対応が確実なＢ２類以下の突起については（ただし、Ｂ２類ａ種は第Ⅱ群土器の一部との対応の可能性も否定できない）、およそ以下の通りに考えられる。

Ｂ２類……第Ⅲ群１類
Ｂ３類……第Ⅲ群２類
Ｂ４類……第Ⅲ群２類の一部と４類
Ｂ５類……第Ⅲ群２類
Ｂ６類……第Ⅲ群２類の一部と４類

第Ⅳ群土器（第16図４、第17図、第18図２，３、第19図１、第23図３、第29図１、第30図４、第32図、第33図、第34図、第35図１～３、第37図３～７、第38図１～３、第39図１，２，９，10，12，13、図版51～59）

基本的に地文上に数条の沈線によって文様を描く土器である。また口縁（唇）部に文様帯があることも特徴である。第Ⅲ群土器同様、いくつかの器種があるが、以下では器種ごとに類別する。

深鉢形ないし鉢形土器（第17図、第23図３、第30図４、第32図、第33図、第34図、第35図１～３、51～57）

１類　屈曲外傾する口縁部に橋状把手がつく土器である（第17図２、第23図３、第33図１、第34図１、52―１～６）。把手は口縁部上に付けられた装飾突起に連絡して施されるが、破片資料51―８～14、52―１～６の装飾突起も本類に関連する資料である。第23図３は、口縁上に大突起と小突起の並ぶ土器である。橋状把手は本来大突起の部分から降ろされていたものと思われるが、欠損し、痕跡が残るだけの状態である。突起間を連絡して口唇部には１条の沈線が描かれ、口縁上端と口縁・体部の屈曲部には扁平な枠状の沈線が描かれる。体部には撚糸文を地文として２～３条の沈線で渦巻き状のモチーフが描かれる。体部文様の構成は第17図２と類似する。第33図１は口縁の１箇所に付けられた装飾突起から凹文、凹線の施された橋状把手が降ろされる。口縁・体部の屈曲部に扁平な枠状沈線が描かれる点は第23図３と同様であるが、体部には磨消縄文手法によるモチーフが展開する。第34図１は51―８～14と同種の口縁部突起から、凹文、凹線の施された橋状把手が降ろされている。把手の連結部の両側は弧状の隆線が

上下を連絡する。口縁・体部の境は３条の沈線が巡り、体部には縄文を地文として３～４条の沈線で曲線的なモチーフが描かれる。この種の橋状把手が狭い口縁部文様帯につけられた例が52―１～６の把手および突起である。52―４～６の扇形に広がる突起の形成には、51―１～７の単孔の突起が関連するものと思われる。本類には第Ⅲ群土器３類で扱った第31図１の資料や本群４類の54―１～４の資料も関連すると考えられる。

２類　１類と同じく屈曲外傾する口縁部をもつが、口縁上部にやや広い文様帯が設けられる土器である（第33図２，３、第34図２、51―１～７、55―７～11、56―１～５、57―１～６）。口縁上部の文様帯中には楕円文（第33図２，３、55―９～11、56―１，２）や凹文を、２～３条の弧線で囲み、そこから沈線を左右に延ばした縁帯文（第34図２、55―７，８、56―３～５）が施されている。また、口縁上部文様帯と体部文様帯が２～３条の沈線（56―１，３，４）あるいは列点文を伴う沈線（56―２，５）、あるいはＶ字形に施された隆線（第34図２）などで連結されている。体部には向かい合わせに配した弧線文を数条重ねたモチーフが縄文、条痕文を地文として描かれている。第34図２の土器では、体部文様帯の弧線文を構成する沈線のうちの１条が、文様帯の上下で波頭状に入り組んで描かれている。また、第33図２は段の有る口縁下に枠状のモチーフを構成する弧線文が描かれるが、この種の弧線文で口縁部文様帯を構成する特徴は、第19図１の土器や、本群７類土器にも認められる。57―１～６は本類土器の体部資料である。51―１～７は縁帯文の中心となる凹文が貫孔化した突起である。

３類　１類２類と同じように屈曲外傾する口縁部をもつ深鉢形を呈し、口縁部文様帯の上下を隆線が巡る土器である（第17図１、53―４～６）。また、メガネ状の装飾突起が付けられる場合（第17図１）があり、52―７～11、53―１～３に関連する突起資料を例示した。突起資料には、メガネ状突起の下部からＶ字形の隆線が体部に向かって降ろされる例（53―１～３）もあり、この文様構成は第Ｖ群土器２類にも採用されている。

４類　幅広の無文帯となる屈曲外反の口縁部をもつ土器である（54―１～４）。体部には磨消縄文（54―１）、重弧線文（54―２，４）、渦巻き状入組文（54―３）などが施されている。

５類　屈曲外傾する口縁部をもち、球形に近い体部をもつ鉢形土器である（第35図１）。口縁は波状を呈すると思われる。波頂部下の体部には粘土紐貼付文が残り、本来波頂部から装飾された隆線、あるいは橋状の把手が降ろされていたとみられる。体部には磨消縄文手法によって波頭状に入り組ませた横位に展開するモチーフが描かれている。

６類　口縁部にごく幅の狭い文様帯が設けられ、体部は直線的に降りる深鉢形土器である（第32図、第35図３、第37図３、53―７～12、54―５～11、55―１～６）。口縁部には縦位の短沈線列（第32図６、54―９）や向合わせの弧線文（第35図３、54―８）、刺突文（第32図５、54―10）などが施され、口縁下に続く体部には重弧線文（第32図１，６、第35図３、53―８）

や渦巻き状入組文（第32図４，５、53―７，11，12）、縦位・斜位の沈線および弧線文が描かれている。この類では口縁部の装飾はきわめて簡略化されているが、僅かに口縁端をねじりあげたり（53―７）、突起に貫孔を設けた例（第32図１）が認められる。第32図１では上面に刻みのある２条の隆線が、突起および口縁から降ろされ体部で交差している。

７類　口縁部文様帯に細く鋭い工具によって背中合わせの弧線文を描き、枠状の文様を施す土器である（第19図１、56―６～８）。また、構図は菱形であるが、56―９も細く鋭い工具による施文法がとられている。この種の施文法は壷形土器２類にも共通する方法である。

８類　磨消縄文手法を用いる土器である。器面上では無文部分が圧倒的な広がりをもち、縄文部分は縦位にダルマ状（57―７，８）、菱形（57―10，11）、鋸歯状（57―12）の狭小な区画に限られる。第30図４は外反緩波状口縁の深鉢形土器であるが、体部の逆三角形、菱形の区画文のほかに、向かい合わせの小弧線文が波頂部下、波頂間に施されている。

浅鉢形土器（第16図４、第29図１、第37図５，６）

１類　上面観が四角形となる浅鉢形土器である（第29図１）。四隅のうち３つには円柱状にせりあがった突起が付けられ、１つには注口が設けられている。突起の上面には円文が施され、側面には竹管状工具による刺突が施されている。口縁は屈曲内傾して枠状の沈線が描かれ、突起中間位置には上下に刺突を伴う粘土紐の貼付文が施されている。

２類　屈曲内傾する平縁の浅鉢形土器である（第16図４、第37図５，６）体部に文様帯をもつ場合（第16図４）と口縁部に文様帯をもつ場合（第37図５，６）とがある。第37図５の口縁部文様帯には上下交互に配された二重の弧線文が、第37図６ではＶおよび逆Ｖ字形の沈線と渦巻き状の沈線とが交互に描かれている。

３類　口唇部が屈曲して外側を向き、口縁部が緩く内弯する浅鉢形土器である（第39図13）。波状口縁を呈するが、口縁部の文様帯には波頂部下で入り組ませた平行沈線の区画内に、縦位の短沈線列が施されている。

壺形土器（第18図２，３、第37図４，７、第38図１～３、58―11，12）

１類　橋状把手のついた広口の壺形土器である（第37図７）。頸部から肩にかけて文様帯が設けられている。文様帯中には撚糸文を地文として、上下それぞれに反転させて描く沈線で、入組文を連続的に施している。橋状把手は頸部に４単位つけられていたと思われるが、いずれも欠損している。

２類　先端の鋭い工具によって、２条あるいは数条の沈線で文様を描くもの（第18図２，３）。

３類　体部に数条の沈線で深鉢形土器２類と同様の文様を描くもの（第38図1、58―11，12）。頸部は無文であるが、体部との境を隆線（11）、あるいは平行沈線（12）で画している。体部には蛇行して交差する３条の平行沈線（11）、および斜位に交差する４条の平行沈線（12）が

縄文を地文として施されている。第38図1は条痕を地文として、2条ほどの平行沈線による弧線文を描いている。

4類　磨消縄文手法によって渦巻き状入組文の描かれるもの（第38図2，3）。壺形土器の体部上半あるいは体部の大半を文様帯として使い、3単位の渦巻き状入組文を描く。第38図2の資料では入組文を描く沈線の末端や屈折部に刺突が加えられている。

5類　無頸の壺形土器である（第37図4）。口縁直下に沈線による渦巻き状入組文が描かれている。

注口土器（59—3，4，6）

口縁部が大きく屈曲外傾し体部が球形になる鉢形土器に、細長く上を向いた注口部のつく土器である。いずれも注口部の上端が、装飾された把手によって土器本体の口縁部と連絡している。59—3は深鉢形土器1類と同様、把手の接合部と注口基部の両側が、弧状の隆線によって連絡されている。59—4は注口基部の下に上向きの弧線文が描かれている。また、59—6は注口基部の右側に磨消縄文手法による逆三角形の構図が描かれている。

小型土器（第39図1，2，10，12）

第Ⅳ群土器の文様が施される小型の土器を一括した。第39図1，2はきつく内弯する鉢形土器であるが、口縁部には刺突（1）あるいは縦位の短沈線（2）を中心とした平行沈線文が描かれ、体部には縦位・斜位の沈線（1）あるいは弧線文（2）が描かれている。

第Ⅴ群土器(第18図1、60〜62)

第Ⅲ群、第Ⅳ群、また後述する第Ⅵ群以下のいずれの土器群とも趣を異にするが、一部の器種あるいは文様には、特に第Ⅳ群と共通する特徴が認められる土器群である。以下の4類に類別される。

1類　磨消縄文手法を用いず、粘土紐貼付の両側に沈線を沿わせた浮文あるいは単に2条平行の沈線によって文様を描く土器である（60—1〜10）。口縁部あるいは頸部の資料には壺形土器（60—1〜4）が認められるが、体部の資料（60—5〜10）も壺あるいは鉢形と思われる。浮文は口縁部資料では例外なく用いられるが、体部では2条平行の沈線文のみが施される資料（60—8〜10)もある。したがって、口縁〜頸部と体部では異なる構成の文様帯を設けた可能性もある。浮文あるいは沈線文とも所処で互いに他と連絡するが、体部資料の8と9および10では沈線文の描き方の違いも認められる。口縁部は波状になるもの（60—1，2）と平縁のもの（60—4）があるが、後者には橋状把手が付けられている。

2類　磨消縄文手法をもって文様が描かれる土器である（第18図1、第39図6、60—11〜16、61）。破片資料では口縁部のものを60—11〜16、61—1〜9に、体部のものを61—10〜15に例

示した。口縁部資料はいずれも深鉢形あるいは鉢形の器形を推定できるが、体部資料のうち大きな曲面を示す61―10，11は壺形土器、また、上部縄文帯が弯曲する61―12は、口頸部あるいは体部で屈曲する浅鉢形土器の可能性がある。深鉢ないし鉢形土器はわずかに外反する緩い波状口縁が特徴で、口縁上部と頸部にあたる外反部分には、縄文帯を巡らせて口縁部文様帯を形成している。文様帯は無文とされる場合（61―５～７）も認められるが、磨消縄文手法による細い縄文帯が波状に施されたり（60―11）、２条の沈線が中段を仕切る場合（60―14，15）も認められる。また磨消縄文手法ではなく２条の沈線による帯状の区画内（60―14，15）や、文様帯上下限の縄文帯に沿って縄文原体の側面圧痕文が施文される例（60－16）も認められる。このうち、後者は第Ｘ群２類の粗製土器とも関連する資料である。さらに、前者のうち60―14の文様構成、すなわち口縁上部からＶ字形の区画文を降ろす構成は、第Ⅳ群２類３類の口縁部文様帯の構成に近似する例をみつけることができる（第34図２、53―１～３）。ほかに61―８，９は、口縁部文様帯に竹管状工具による刺突を伴う沈線文が描かれる例である。61―９のような渦巻き状の入組文が描かれる例は、次の３類に関係して行くものと思われる。体部資料では61―11の渦巻き状入組文の描かれる例が、第Ⅲ群壺形土器４類とほぼ同じ文様構成をとる。ただし、第Ⅲ群の例では入組文の上下に三角形の無文部分が形成されるのに対して、この資料の場合は、入組み部の右下に形成される無文部分は入組文の展開方向に沿って細長く延びている。第39図６の小型土器は、枠状の構図をとる点で第18図１の資料と共通する。

３類　２類以来の波状口縁が波頂部を尖らせるようになる（62―１～５）。口縁部文様帯は狭くなるものと思われ、平行沈線間を単に横位Ｓ字沈線文で結んだり（62―１）、短い弧線列を施したり（62―２）、もしくは口縁に沿った平行沈線とその下を水平に巡る平行沈線（62―３，４，５）に省略・変化している。さらに口縁部に沿って施される平行沈線のうち一方が口縁端にまで延ばされると（62―６）、波頂部は沈線によって囲まれる形となり、突起化する（62―７，８）。また、こうした過程の中で次の４類に多用される刺突文が施される例（62―９）もあらわれてくる。ほかに10～12の片口土器もみられる。

４類　器面に刺突文が施される土器である。刺突は全面に施される場合（62―13）や、多条化した平行沈線文とともに施文される場合（62―14，15）、さらに縄文と併用される場合（62―16～18）などがある。

第Ⅵ群土器（第16図２、第18図４，５、第21図、第40図１、第42図、第43図、59―７～14、63～65）

内面に文様のある浅鉢形土器、弧線あるいはＳ字状沈線で区切った平行沈線による縄文帯、耳状に発達した口縁部突起、各種の大型突起、花弁状口縁、口縁端を巡る刻目列、刺突列で縁どられた磨消縄文などによって特徴づけられる１群の土器である。出土した数量は決して少

なくないが、復元し得る個体数が少なく、破片資料が圧倒的に多い。したがって分類も器形全体がとらえにくく、部分をとりあげての作業に傾く。

1類　内面に沈線が施される浅鉢形土器である（第40図1、59―7～9）。内面上部に平行沈線が巡らされる。59―7では弧線によって切られる平行沈線の下にも縄文帯が施されている。59―9は口縁内側上端に刺突列を沿わせた隆線が施されている。第40図1の資料は、外反して開く浅鉢形土器内面に4条の平行沈線を巡らし、器周を4分割する間隔で渦巻き文を配してる。口唇部には斜位の刻目が施されている。

2類　口縁下で縄文帯を形成する3～4条の平行沈線が施される鉢ないし浅鉢形土器である（59―10～14）。平縁（10～12）と波状口縁（13～14）とがある。また、平行沈線間に短沈線が加えられる例（59―12）や平行沈線が波頂部下で反転する例（59―14）、S字状沈線によって区切られる例（第18図5）がある。

3類　3単位の口縁部突起の付く深鉢形土器である（第18図4、第42図1）。63―1～10に口縁部に付けられる突起を例示する。突起の下には曲線的な磨消縄文（63―1）、渦巻き文（63―7）、小弧線、あるいは縦位の短沈線によって区切られた平行沈線文などが描かれるようである。第42図1の土器は、口縁部に3単位の突起が付く波状口縁の深鉢形土器である。突起は3つとも円文の施される平らな面が右側を向き（突起資料63でも1を除く2，3，4，5，7は右向き）、突起の背面下には小さな凹文も施されている。また突起両側には襟状の小突起がついて口縁下を巡る隆線と連絡する。隆線に挟まれた突起正面には円形浮文が施される。円形浮文は突起中間位置の口縁部と口縁下を巡る隆線との間にも施されている。口縁下を巡る隆線の下には、2段にわたって平行沈線による縄文帯が施されるが、上下段の縄文帯とも突起下と突起中間位置（円形浮文下）で、縦位に連なった向かい合わせの小弧線文によって区切られている。また、この小弧線文の中間位置でも縦位の蛇行沈線が平行沈線を連絡している。ところで、この土器には第Ⅱ群、第Ⅲ群土器に施されるいくつかの特徴的な要素を認めることができる。まず突起形態であるが、突起に設けられた平らな面に円文を施す特徴は、すでにB類突起に認められる。本類突起資料の63―4はS字状の浮文が突起下まで連続するものであり、突起モチーフとしてはB2類c種に原型が求められる。また、突起背面下の凹文も第Ⅱ群、第Ⅲ群の要素に見うけられ、口縁下をめぐる隆線や、突起下及び中間位置に施される円形浮文は第Ⅱ群土器6類・7類からの特徴であり、平行沈線を分ける縦位に連なった小弧線文は第Ⅲ群土器にきわめて特徴的な文様である。さらに平行沈線間を連絡する蛇行沈線文も連鎖状S字沈線文の変化として第Ⅲ群土器中に存在する。それでは器面をほぼ水平に巡る2段の平行沈線についてはどうであろうか。この文様構成は本群土器を分ける示差的な特徴であり、第Ⅱ群土器以来の文様構成をその根幹で踏襲する第Ⅲ群土器（深鉢）の構成法（例；第23図2の文様構成から

第24図４を経て第25図１、第26図１などに至る構成法）とは大きく異なる。しかし、やはりこれに類した文様構成も突起形態の系譜と対応して、第Ⅲ群中のＢ類突起をもつ浅鉢形の資料に存在する（第28図３）。以上のようにこの資料については第Ⅲ群土器を中心にした古式の要素を引くように見られる。

４類　刺突列を沿わせた磨消縄文の施される土器である（第42図４、65―１～10）。磨消縄文は曲線的な構図をもって描かれるようだが、８類の突起資料には直線的構図のものも含まれている（63―12）。第42図４の土器は３単位の突起をもつ鉢形土器である。この土器についても古手の要素を認めることができる。体部に描かれる磨消縄文を描く沈線は末端に小渦巻き文をもち、第Ⅲ群１類と特徴を共有する。また、突起の左側には小突起が設けられているが、これもＢ５類突起の片方の肩を刻むものに祖型を求められる。

５類　花弁状の口縁部である（65―11～15，17）。口縁端に刻目の施されるものも含まれている（65―12，13，17）。

６類　刻目列の施される土器である。口縁端に刻目の施された壺形土器（65―16）や、刻目が施された隆線で器面を飾る四耳壺形の土器（第43図２）がある。耳の部分に側面から穿たれる孔は貫通していない。

７類　磨消縄文で文様構成される土器である（第21図１，６，７、第42図２，３、65―18～20）。壺形土器では曲線的な構図（第42図２）と直線的な構図（第42図３）をとるものの二者がある。第42図２は底部近くに貫孔があけられている。第21図の資料は本類土器のセットを示す好例である。

８類　４類土器につく中空の突起である（第43図１、63―11～16）。石灯篭形に２段の中空部分を積み重ねたもの（63―11，12）、キノコ状に膨らむもの（63―16）など各種の形態があるらしい。円形浮文を伴った貫孔があけられること、突起基部に鍔状に広がる部分をもつことも特徴である。後者の特徴は３類の第42図１の土器にも小さいながら認められる。体部には、４類の特徴である刺突列を沿わせた磨消縄文が施されるが、曲線的なモチーフになるもの（63―11，13，14）と、直線的な構図で描かれるもの（63－12）とがある。

９類　大型の突起であるが８類と異なり中実である（64―１～11）。また環状の例（第16図２）も本類に含ませて良いであろう。口縁の両側からせりあがるもの（64―２～６）、棒状に延びた頂部に円盤がのるもの（64―９，10）など、７類同様各種の形態がある。また、64―３～７の文様からは７類と同様におもに４類土器につく突起であることがわかる。

10類　注口土器の注口部分である（64―12～14）。下部に突起のつくもの（64―13，14）とつかないもの（64―12）とがある。

第Ⅶ群土器（66―１～13）

器面に帯状の縄文を施し、貼瘤が施されたり、口縁に突起が付く資料を一括した。これらに近い資料として第18図６のＳＲ01埋設土器がある。

第Ⅷ群土器(第38図６、第39図３，７，11、第40図２～８）

第Ⅱ群～第Ⅵ群に伴う粗製の壺形土器、小型土器、浅鉢ないし鉢形土器を一括した。

第Ⅸ群土器（第41図）

蓋形土器である。つまみの形態によって２類に分けられる。

１類　橋状、あるいは穿孔された板状のつまみのつくもの（第41図１～３）。第41図２では橋状のつまみを囲むように蓋本体に隆線がまわされている。第41図３では板状のつまみを中心に花弁状の磨消縄文が施されている。

２類　円柱（第41図４～７）、円筒状（第41図８）のつまみがつくもの。第41図４の蓋本体は緩く膨らみ、縁には斜位の刻目が施されている。つまみ部分には貫通孔があけられている。また蓋全面に撚糸文が施されている。

第Ⅹ群土器（第19図、第20図、第44図、第45図、第46図、66―15～22、67～70）

第Ⅱ群～第Ⅵ群土器に伴うと思われる半精製、粗製土器である。

１類　「山」形の波状口縁あるいは口縁部に突起がつくもの（第19図５、第44図1，３、69―３～５，９）

２類　口縁部に隆線あるいは縄文原体の側面圧痕文、もしくは沈線の巡るもの（第19図２，４、第45図１、66―15～22、69―８，10，11）

３類　直立ないし内弯口縁のもの（第19図３、第20図１、第44図２，４、第45図３、第46図１，２、68、69―６，７、70―１～６）

４類　屈曲外反口縁のもの（第20図２、第45図２、67、69―１，２）

５類　口径と底径の比率が大きく器形全体が大きく開くもの（第46図３）

施文される縄文には斜行縄文、平行撚糸文、網目状撚糸文、条線文がある。

底部資料（70―８～19）

網代痕（70―８～13）、笹葉の圧痕（70―14）、木葉痕（70―15～19）がある。

小結

前項で、八木遺跡出土土器群をⅠ～Ⅹ群に分類し、記述をおこなった。

資料の整理が十分ではなく、結果として分類の作業には破片資料を多く加えなければならなかった。したがって、器形や全体の文様構成などには多くの推定を交えざるを得ず、それを避けるために、基本的な施文上の要素である文様要素（円形浮文、鎖状隆線など）に分類基準の比重が偏った結果、均質なカテゴリーとしての位置を各類型に与えることはできていない。一般に破片資料を交えて分類を行う場合には、全体の器形と破片部位の関係、器形と文様構成の関係、文様要素間の相関などの把握を作業に入る前段階におこなっておくことが不可欠であろうが、整理にかけることのできる時間的な条件から、そうした手順は、殆ど踏むことができなかった。したがって、前項で扱った土器の分類にも不確実さを残すものがあることは否めない。

分類にあたっては前項冒頭に記したように既知の土器型式とその編年にならうように努め、同時に本遺跡での土器群の一応の流れを把握するよう努めた。分類を行う過程で次第に明確化した各群土器の位置づけは一応以下のようにとらえられる。

第Ⅰ群……縄文時代中期中葉～後葉

第Ⅱ群……縄文時代後期初頭

第Ⅲ群……縄文時代後期初頭～前葉

第Ⅳ群……縄文時代後期前葉

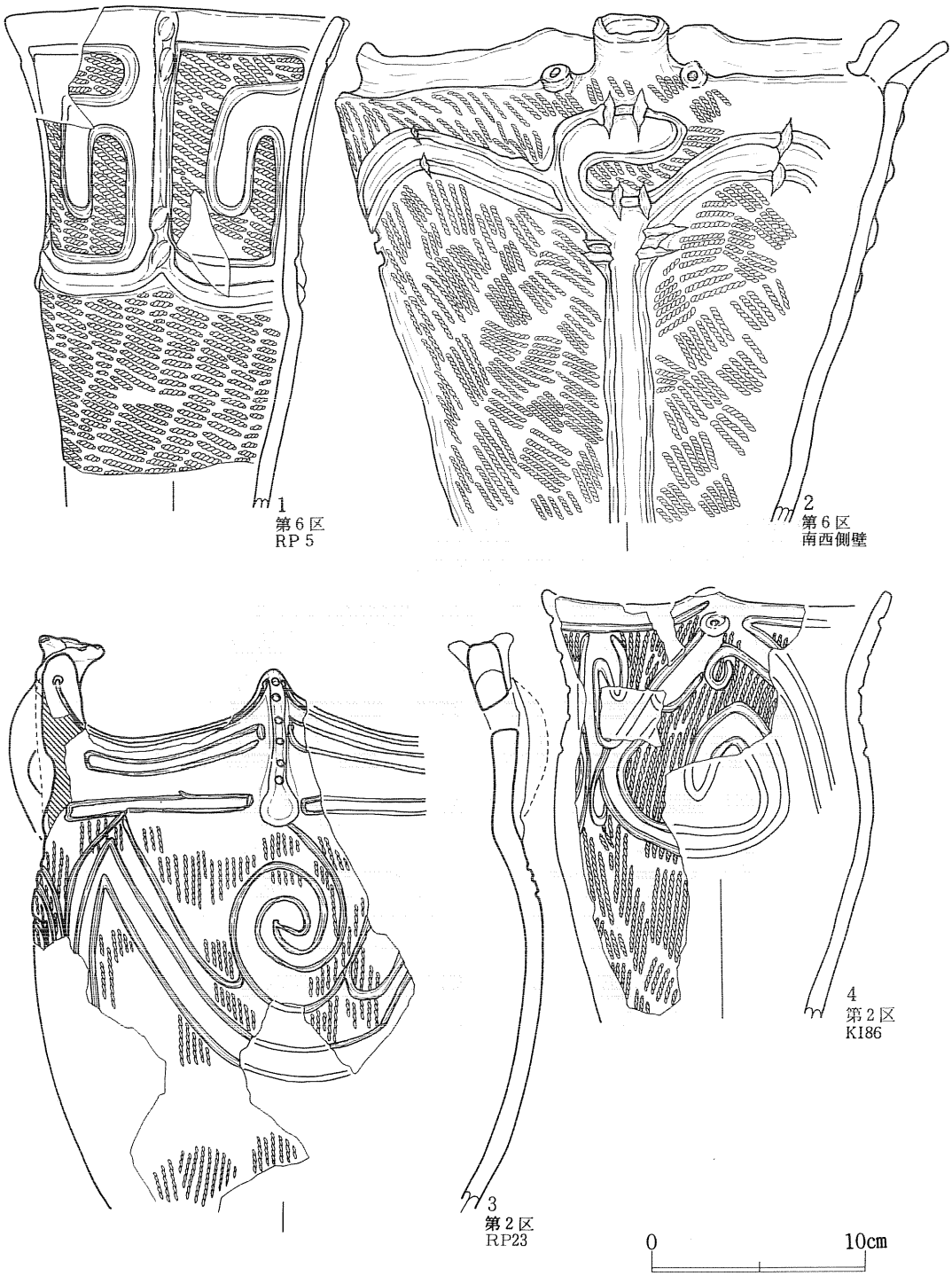
第Ⅴ群……縄文時代後期前葉～中葉

第Ⅵ群……縄文時代後期中葉

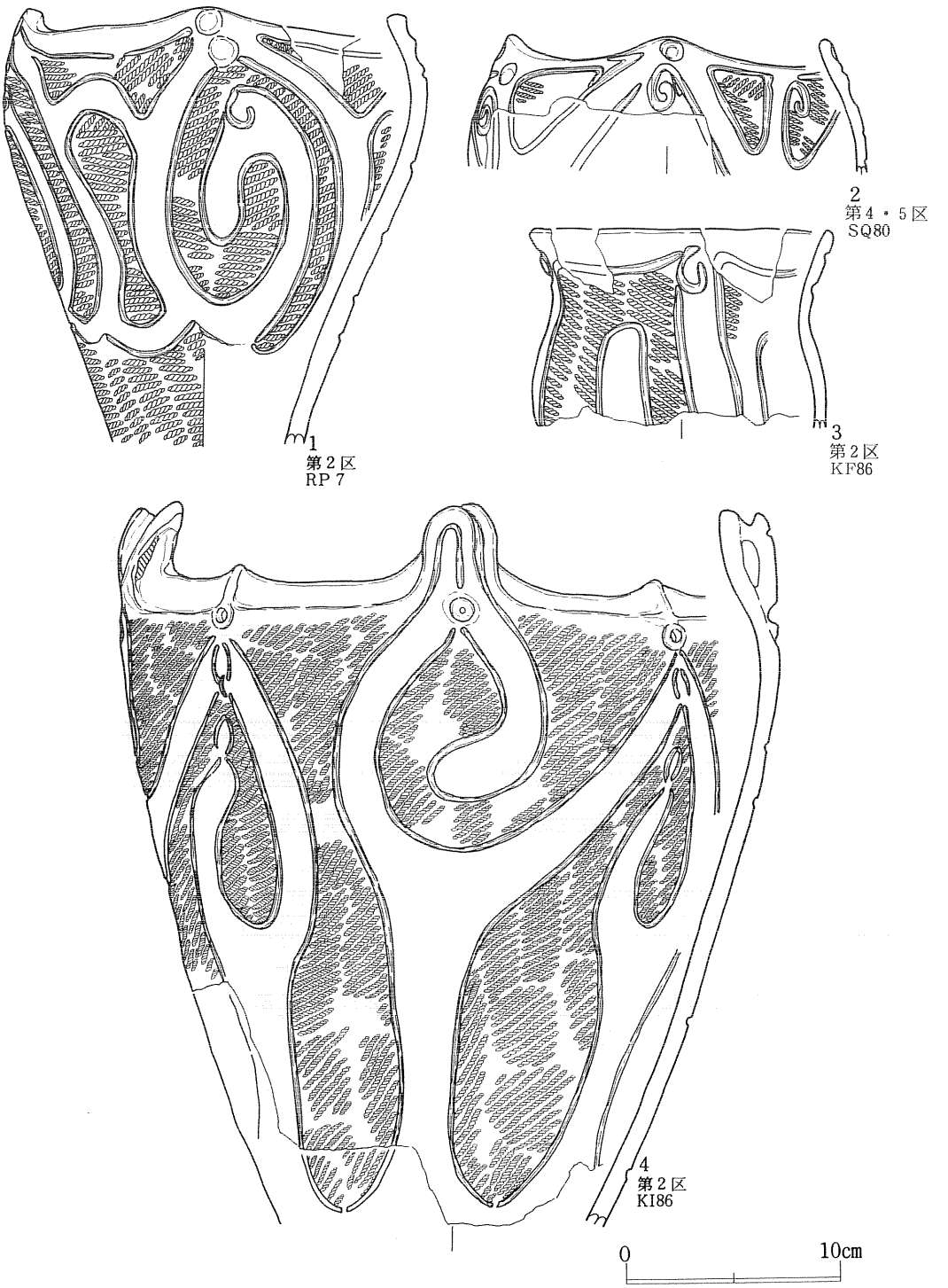
第Ⅶ群……縄文時代後期後葉

第Ⅰ群土器については施文上の特徴から４類に分けたが、およそ大木８ｂ式の範疇で把えられる土器と思われる。しかし、２類のうちの、粘土紐の貼付文がその後の調整を伴わずに施されたり、縄文原体の側面圧痕文の施文される土器については、円筒土器上層式の影響や、より古い型式との比定を考えるべきであろうか。本群土器よりもやや古手の様相を示す土器ではあるが、同一地域内の梨ノ木塚遺跡からは縄文原体側面の渦巻状圧痕文を施した土器が出土している。また、第Ⅰ群土器に伴う粗製土器とした４類は、管見に触れたものでは、岩手県繋遺跡例がある。

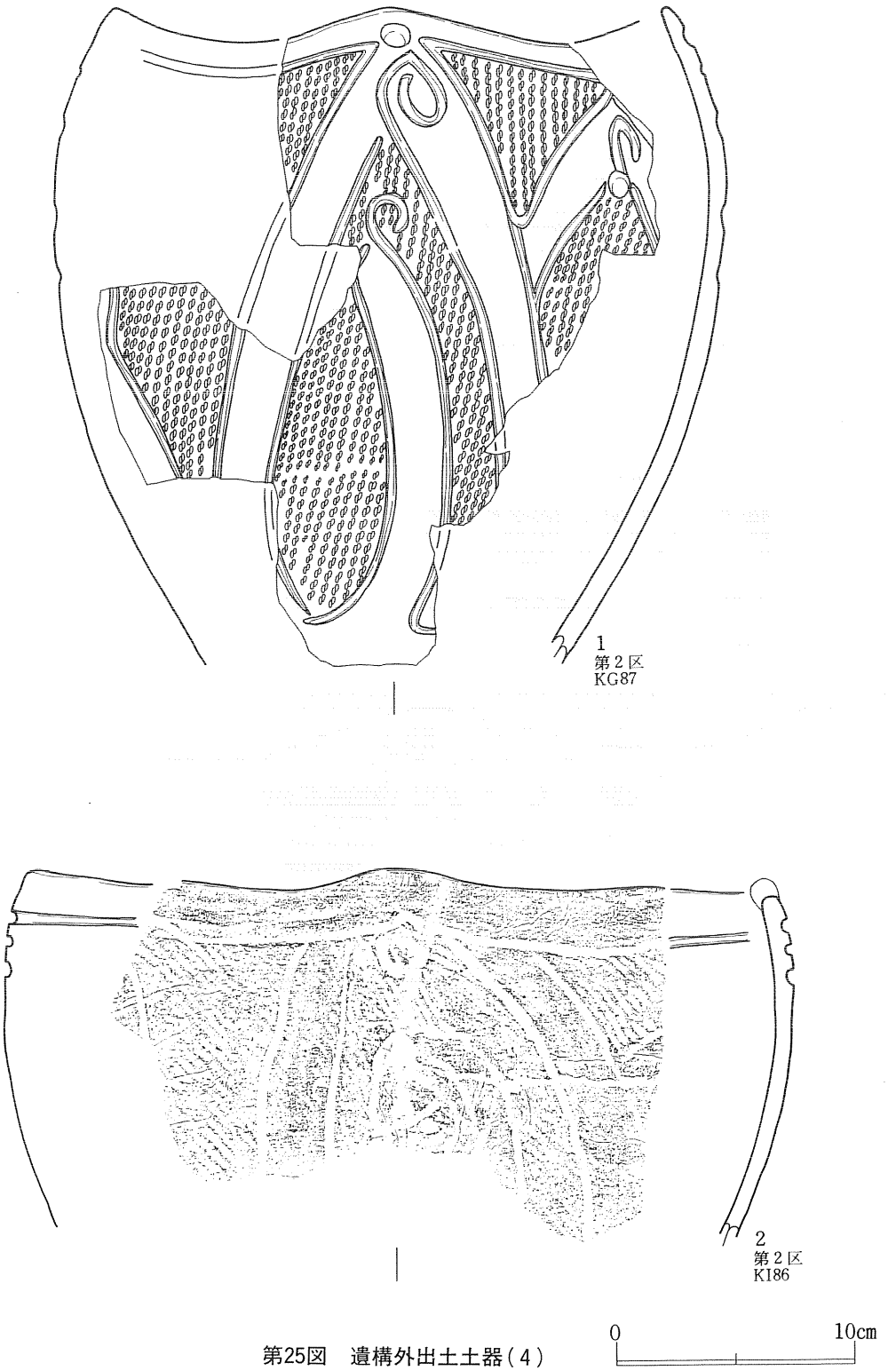
第Ⅱ群、第Ⅲ群土器は、門前式・宮戸Ⅰ式(うちでもⅠｂ式 後藤；1974)に比定し得る土器である。これらの土器については、昭和50年代の始め頃から該期の編年網確立をめざして開始された、全国的規模な細別作業が行われた中でとり上げられ(今村；1977、柳沢；1980等)、最近でも、東日本あるいは東北北部に限っての編年研究の中で扱われている(熊谷；1986、阿部；1987)。そして、このような作業の中で門前式については２～３分案、宮戸Ⅰ式については３



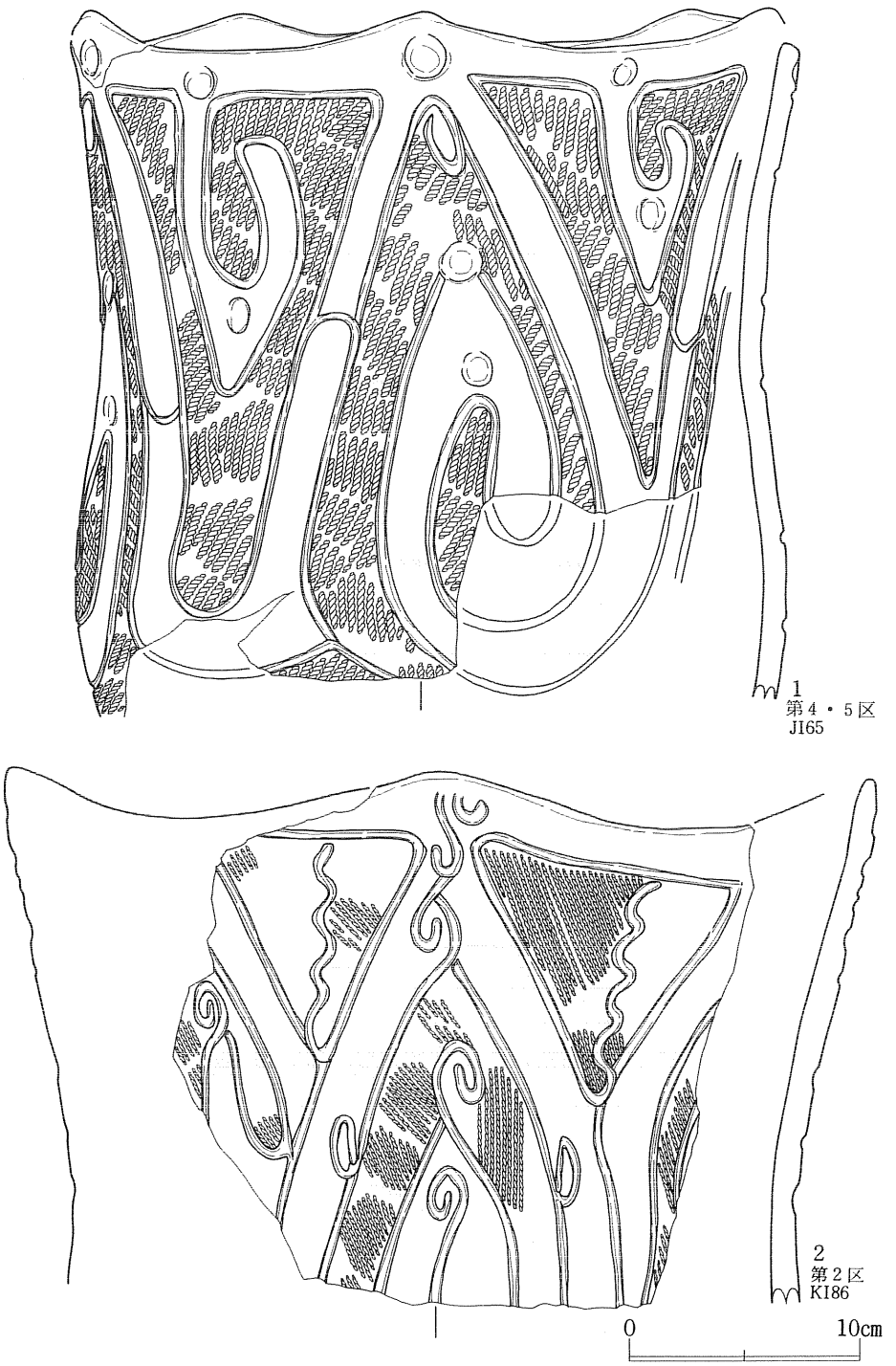
第23図　遺構外出土土器（２）



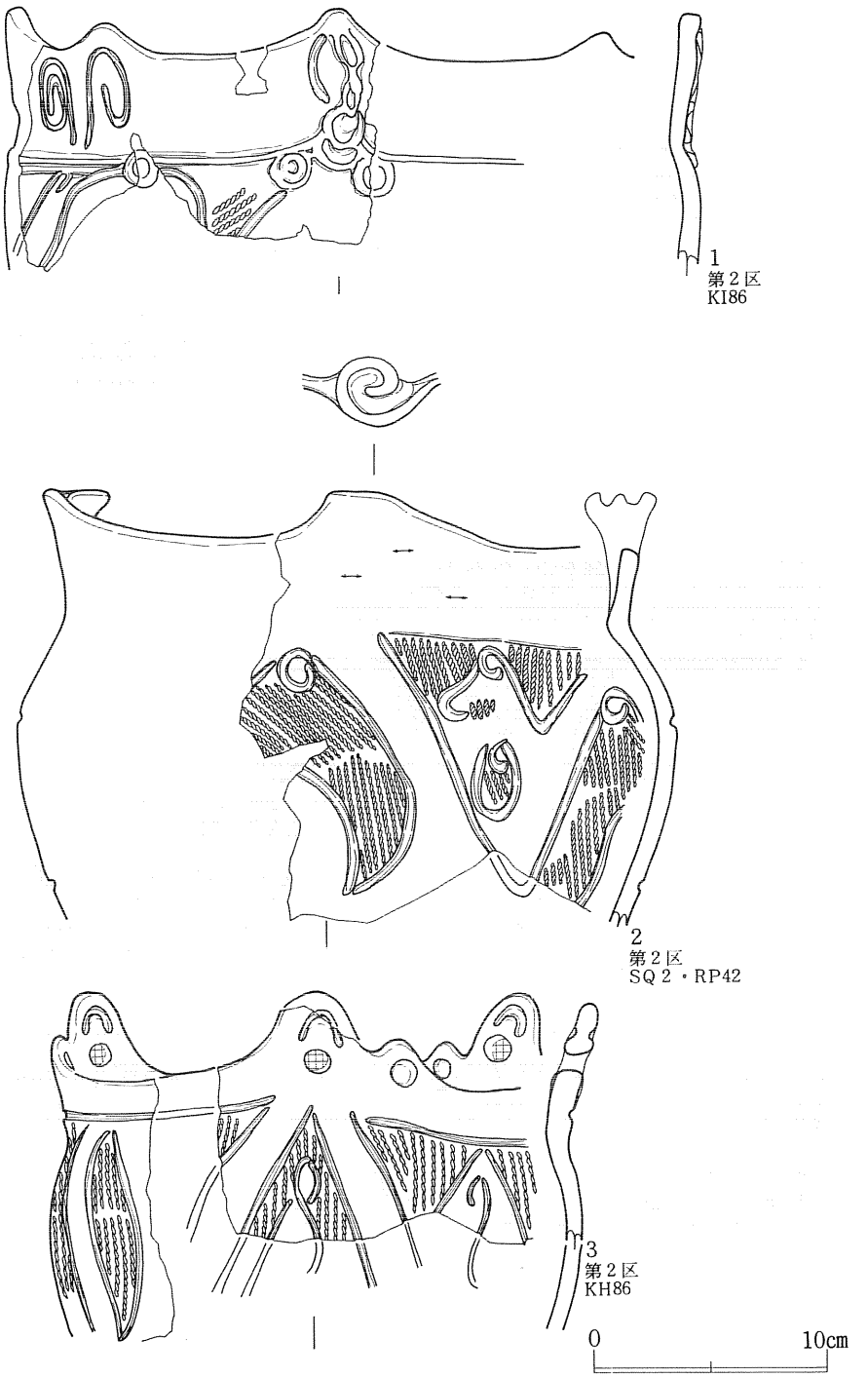
第24図　遺構外出土土器（３）



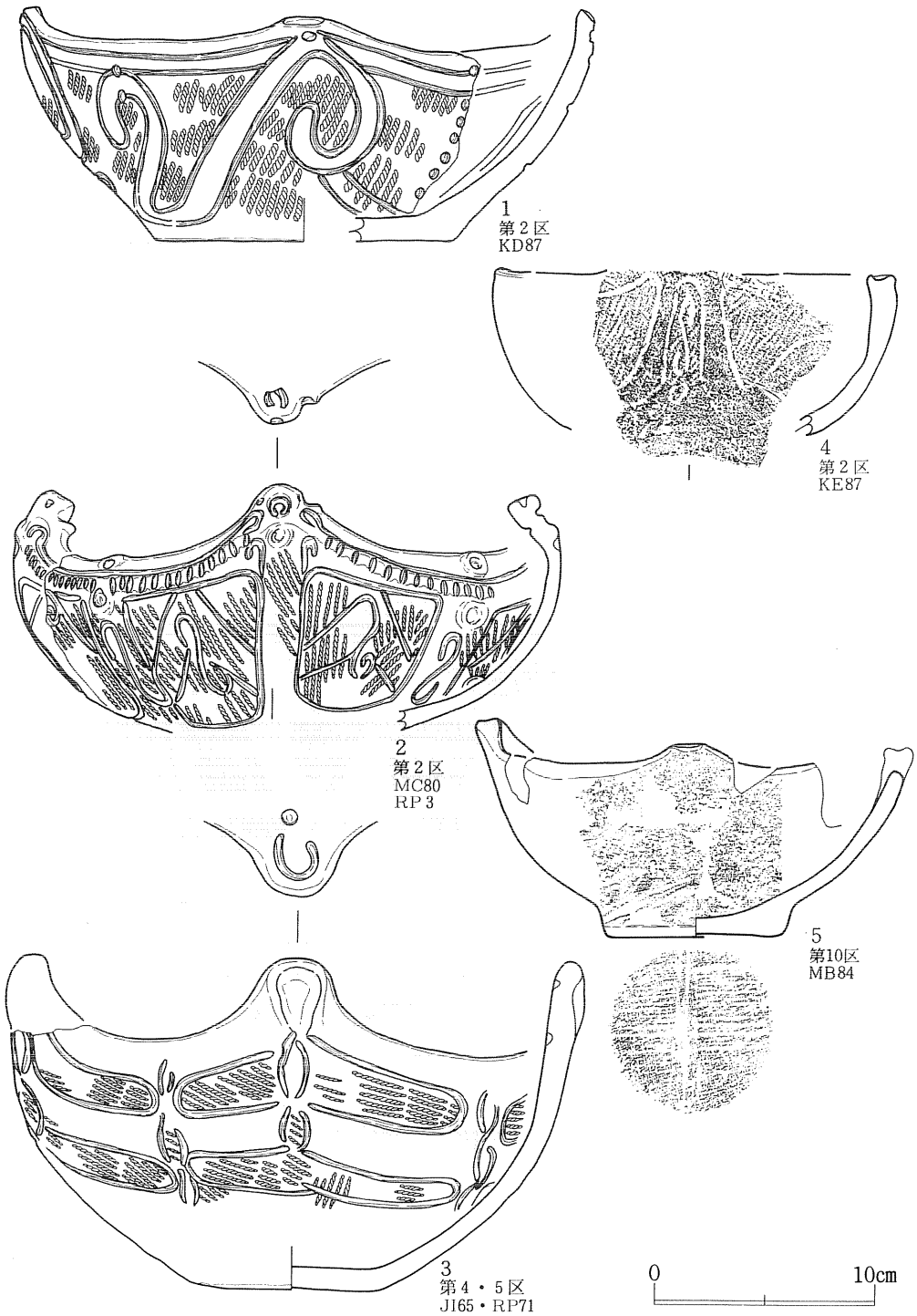
第25図　遺構外出土土器（４）



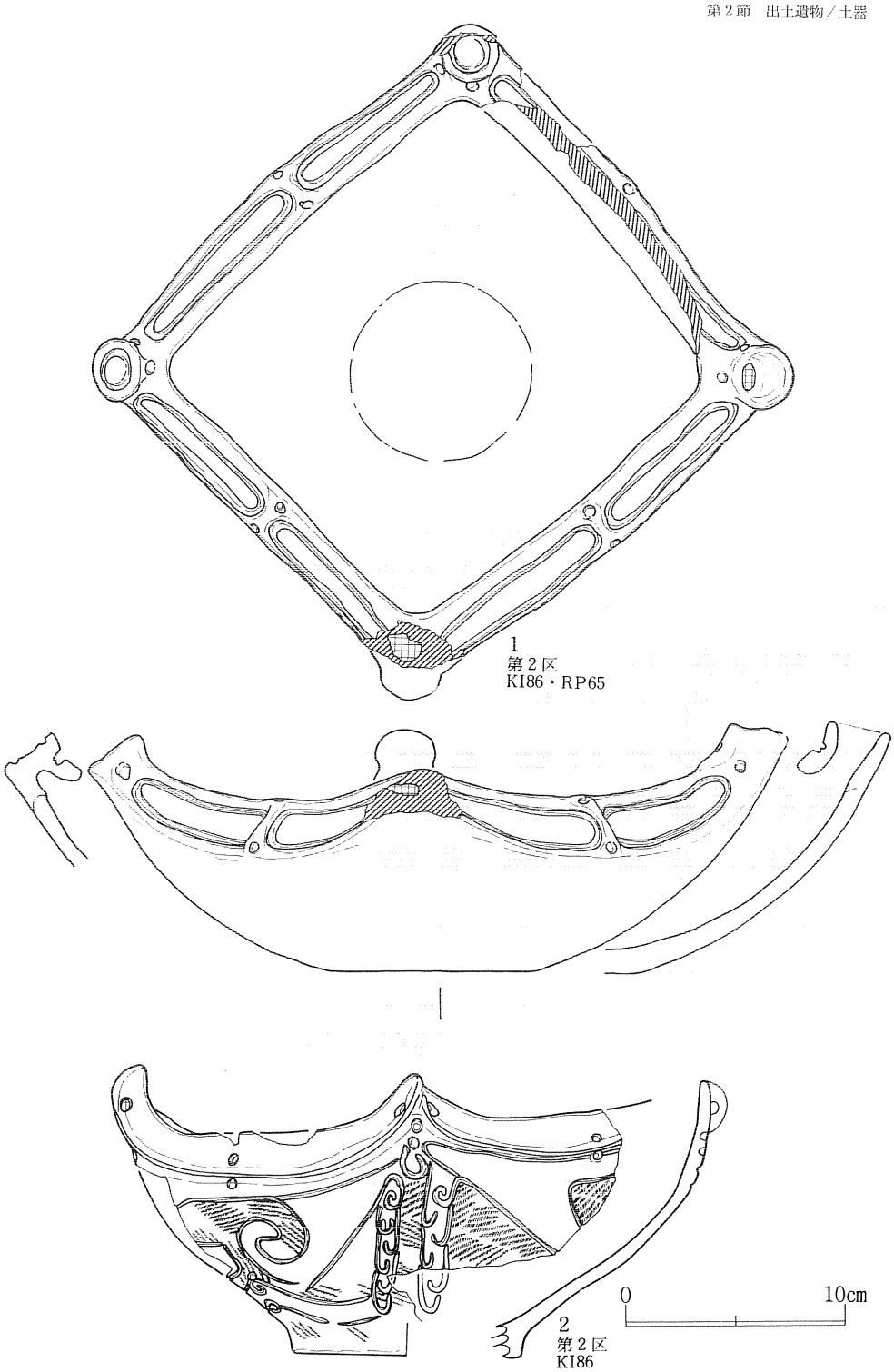
第26図　遺構外出土土器（５）



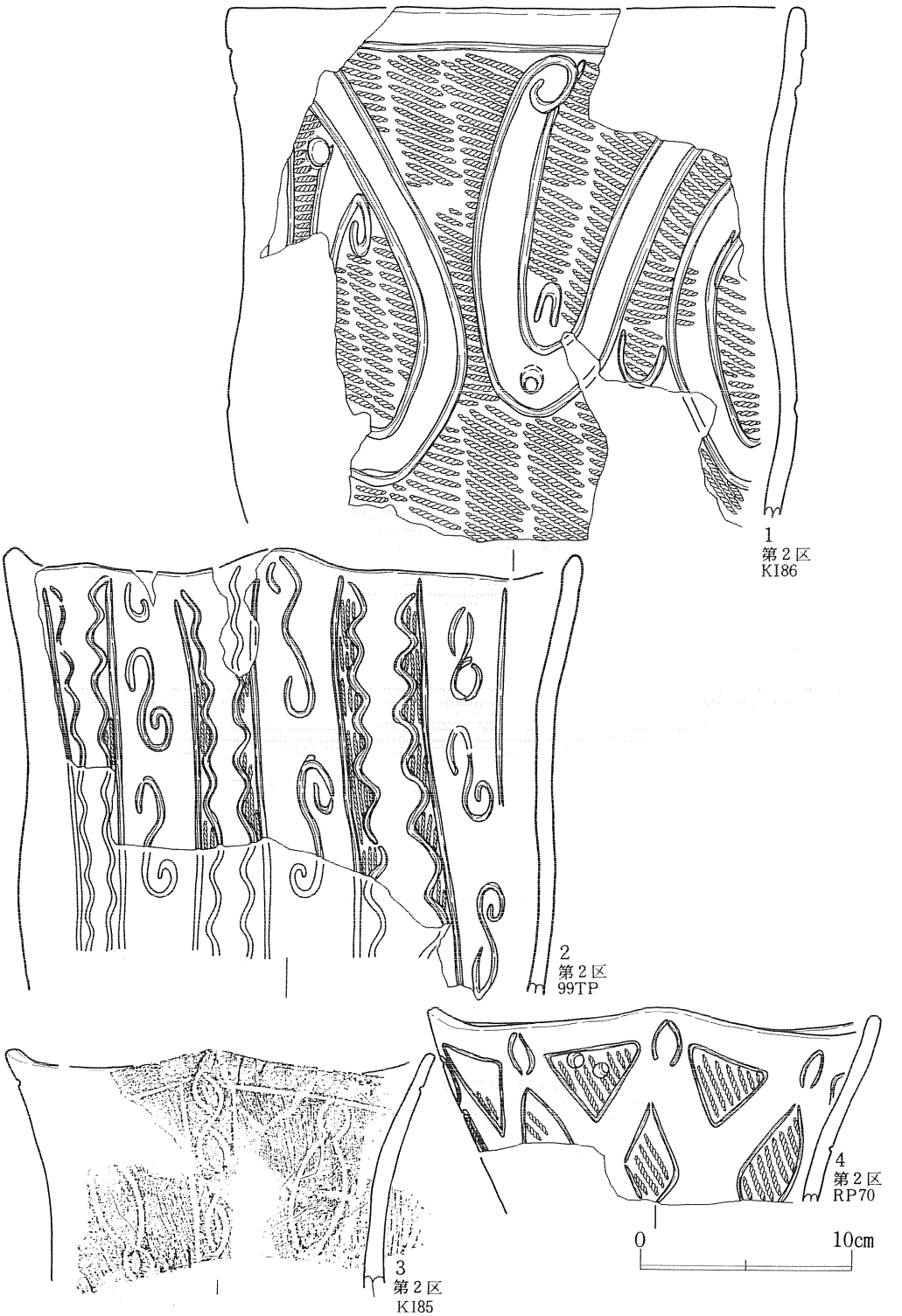
第27図　遺構外出土土器（６）



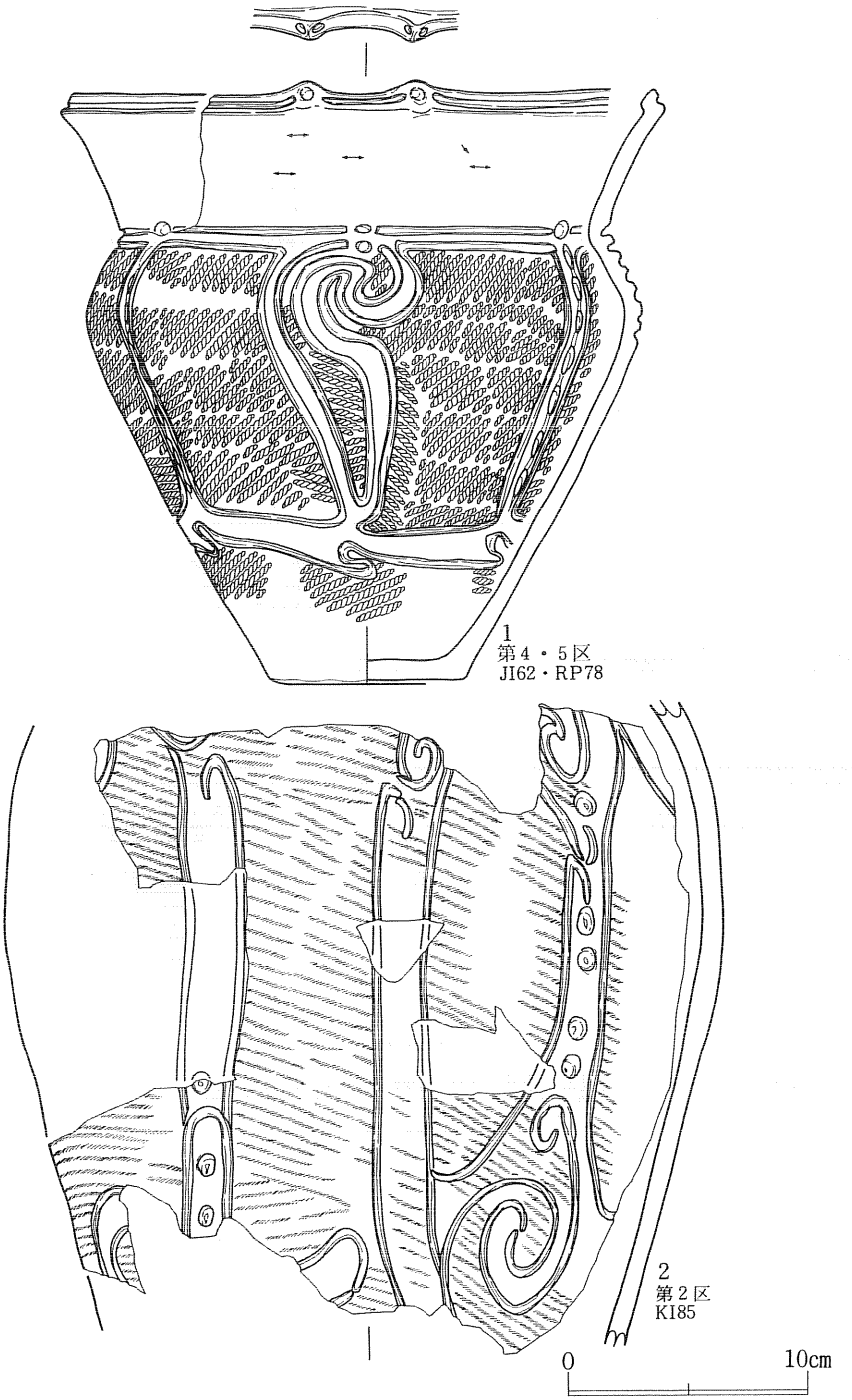
第28図　遺構外出土土器（７）



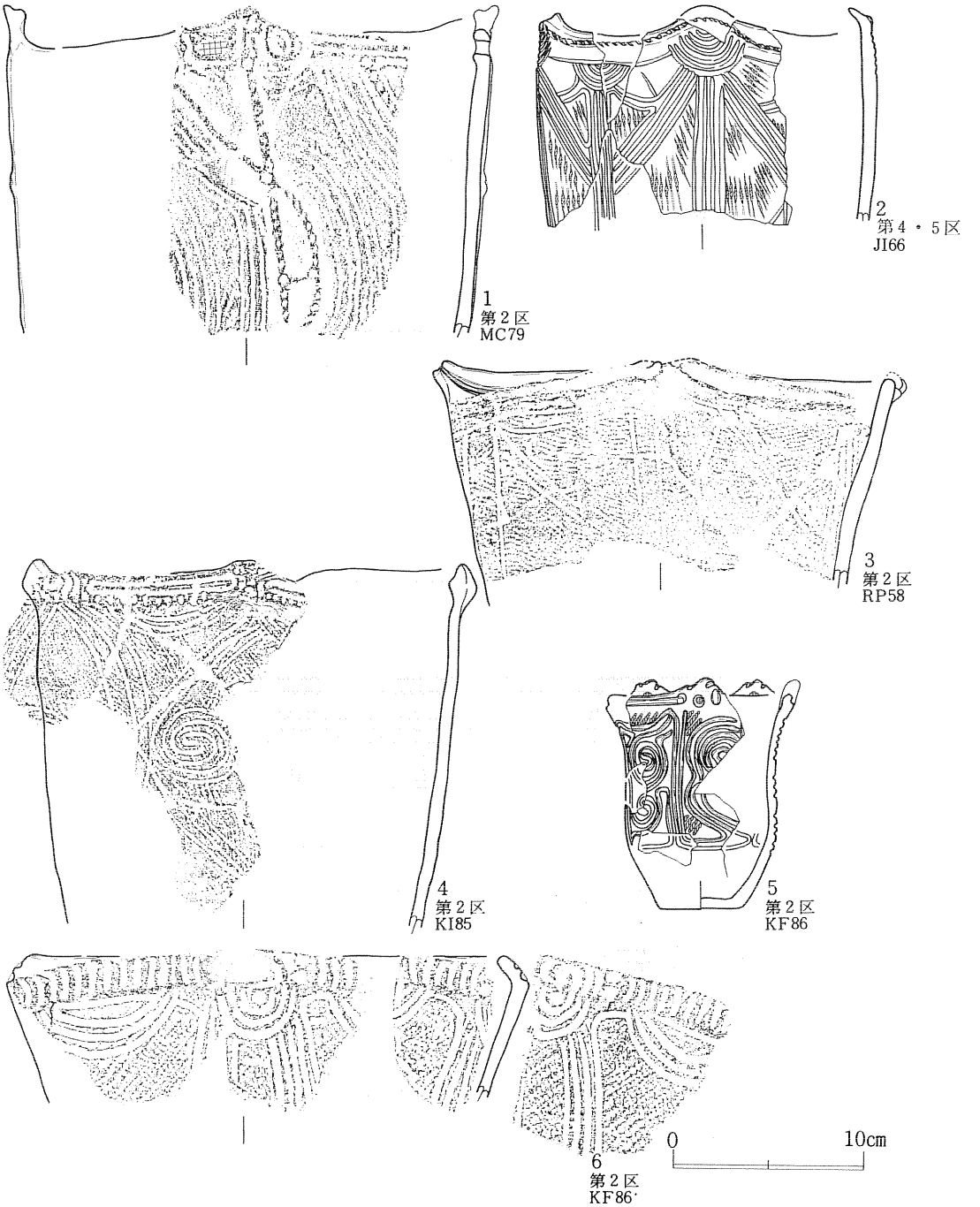
第29図　遺構外出土土器（８）



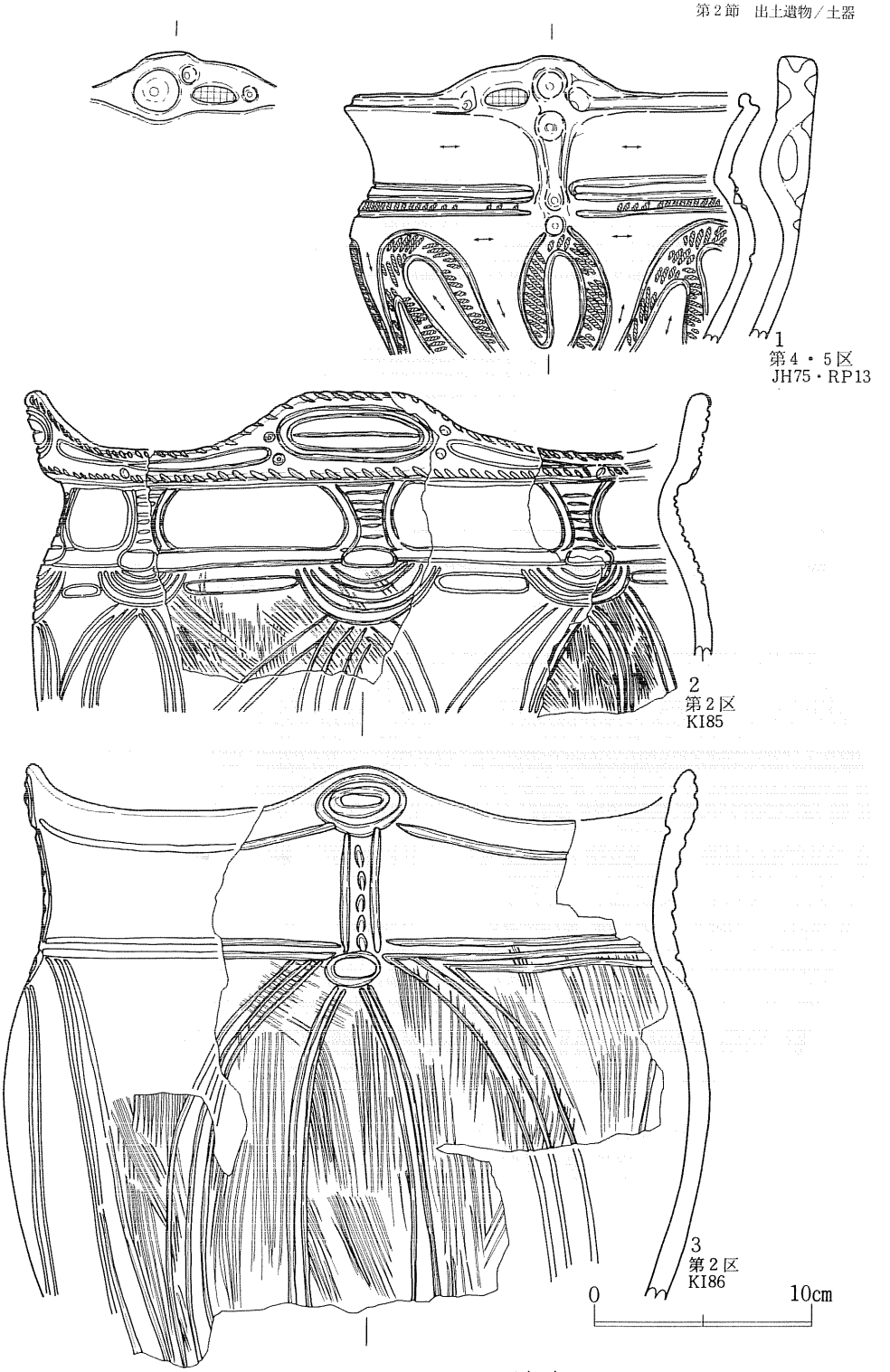
第30図　遺構外出土土器（９）



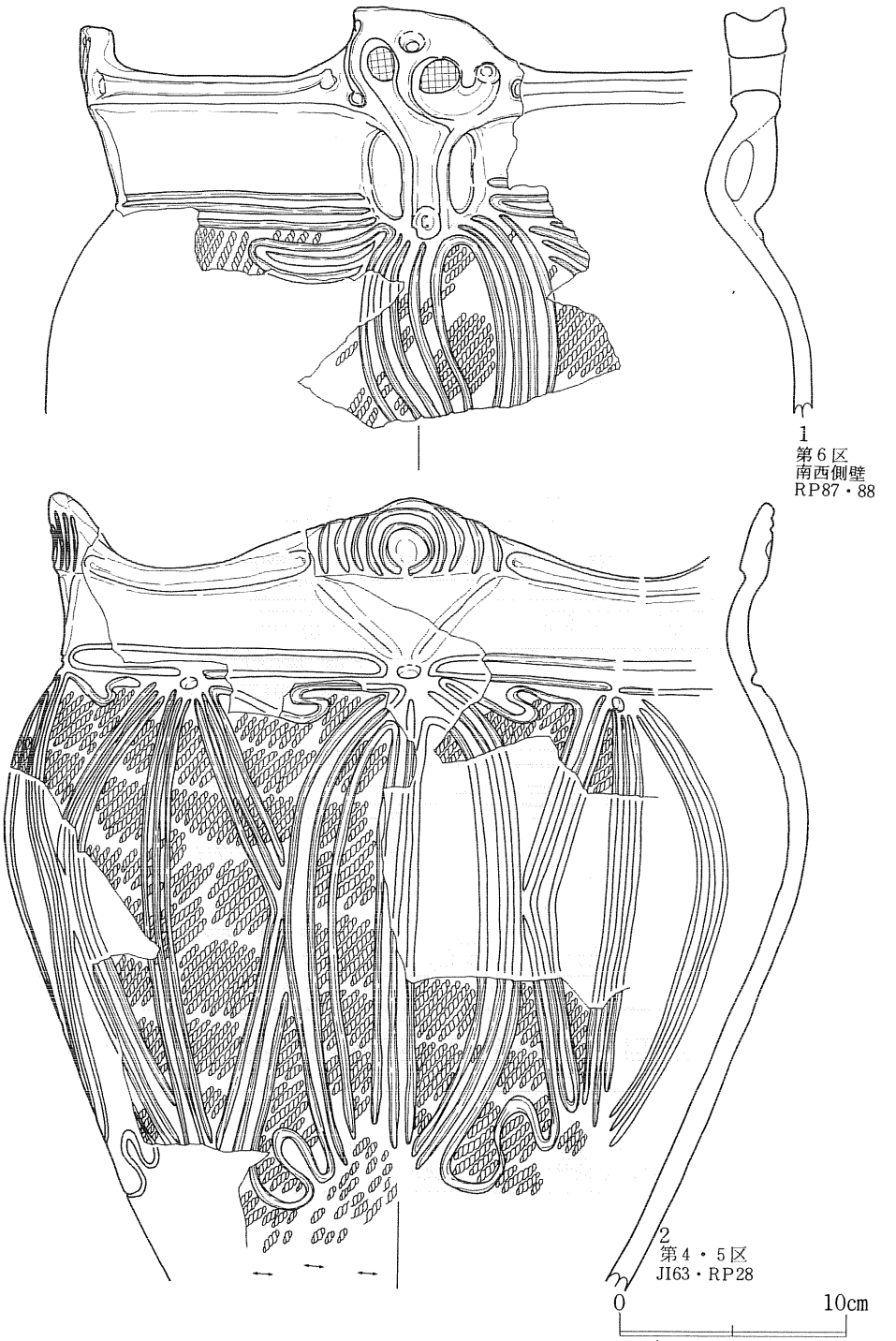
第31図　遺構外出土土器(10)



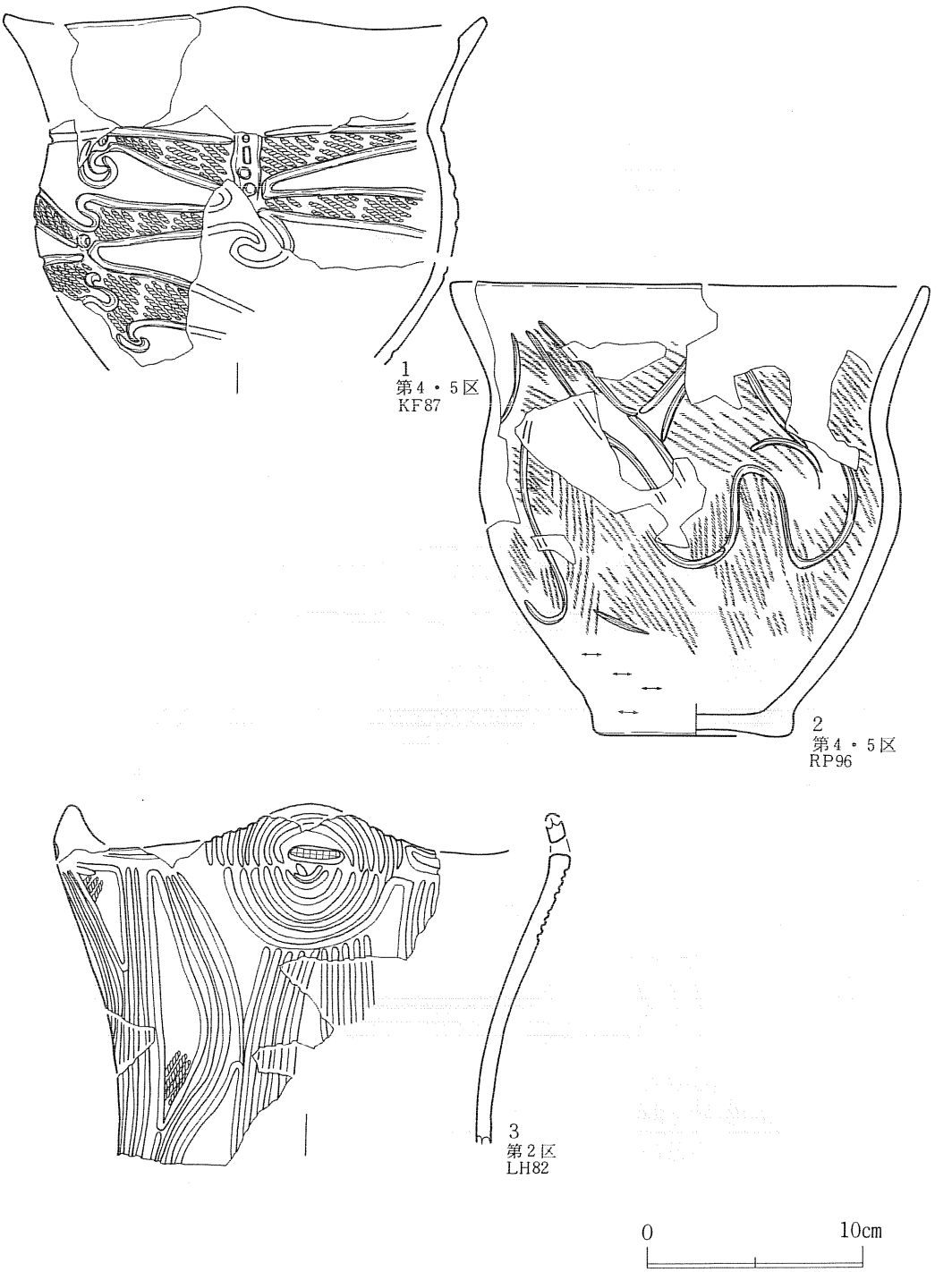
第32図　遺構外出土土器(11)



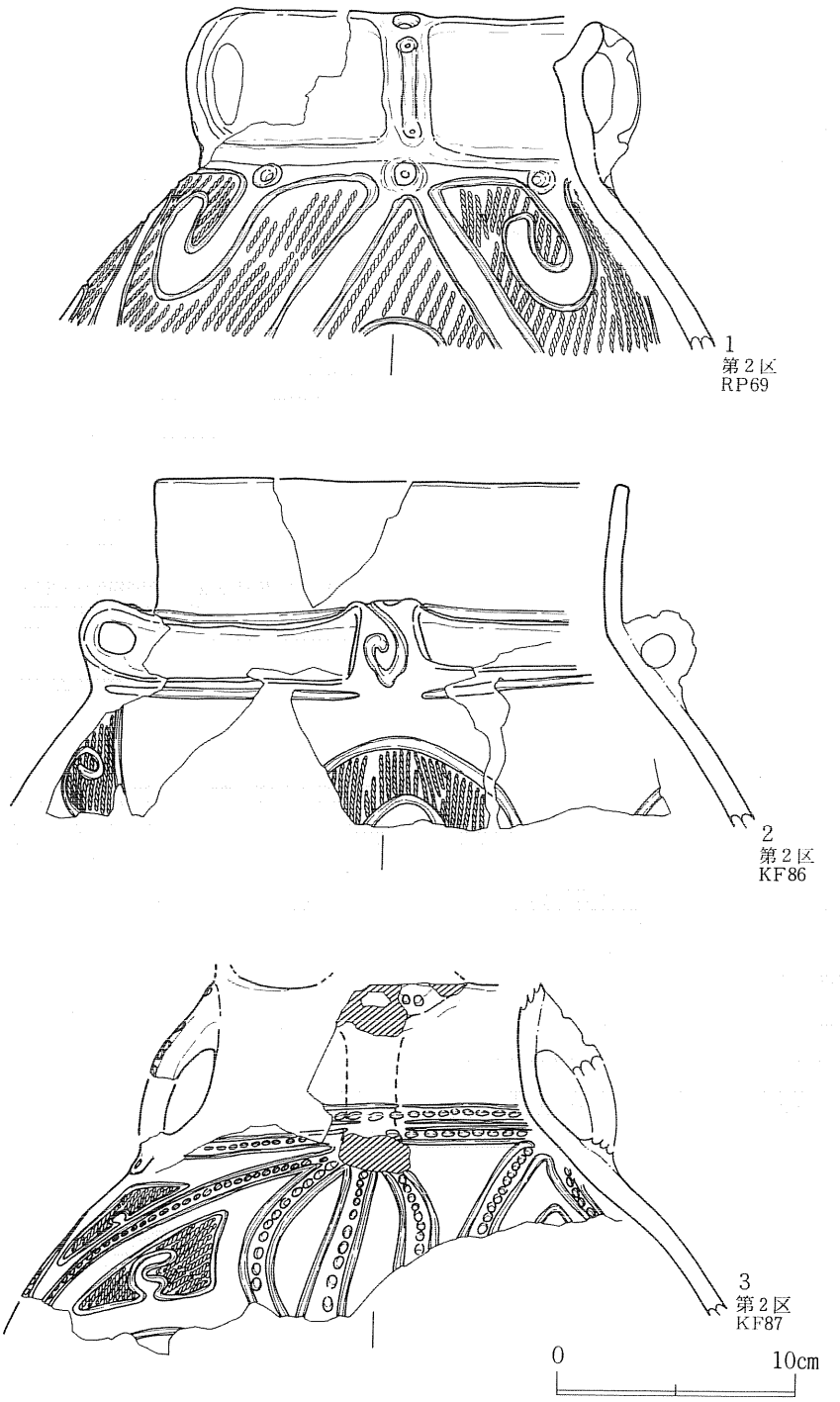
第33図　遺構外出土土器(12)



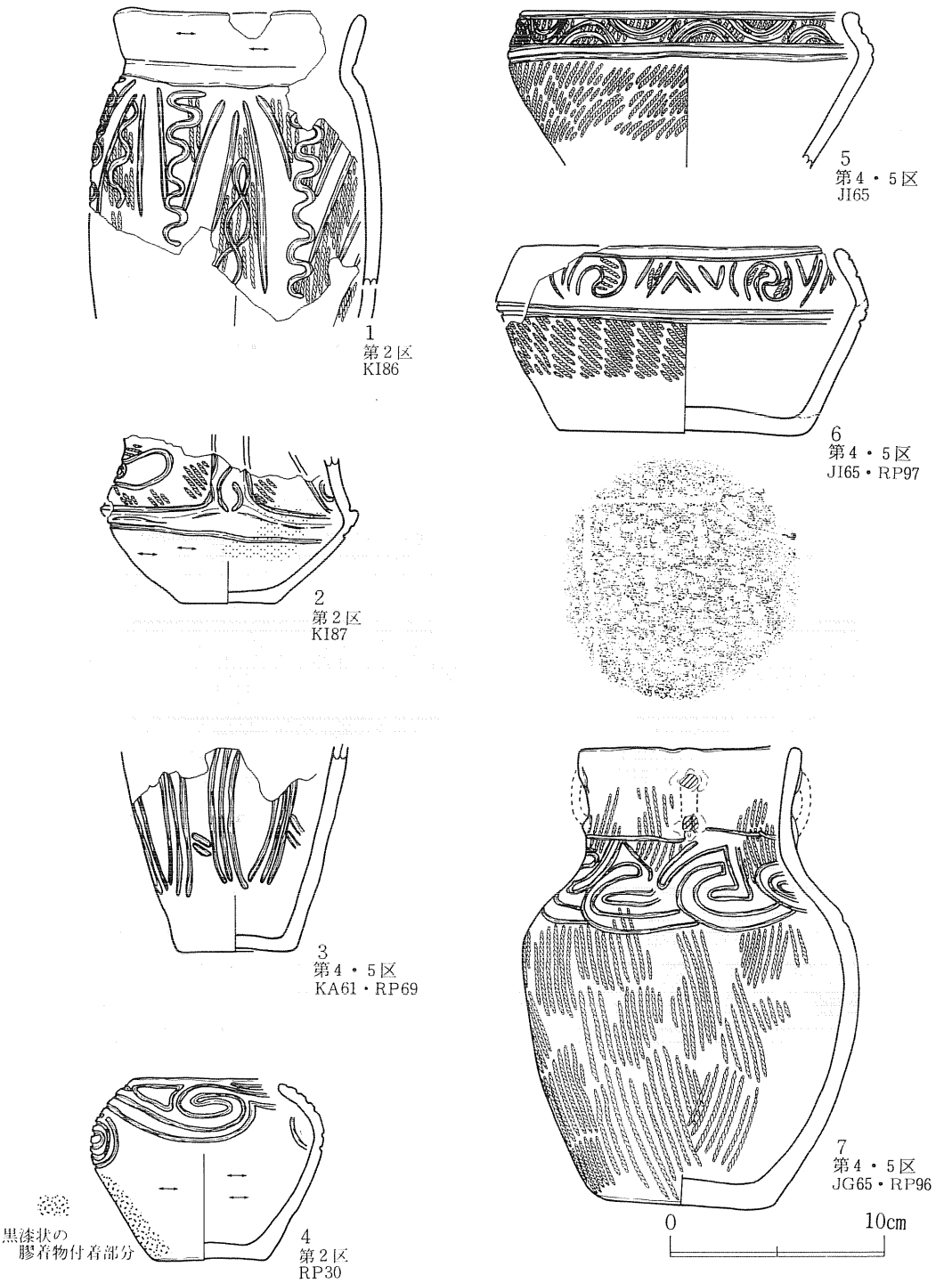
第34図　遺構外出土土器(13)



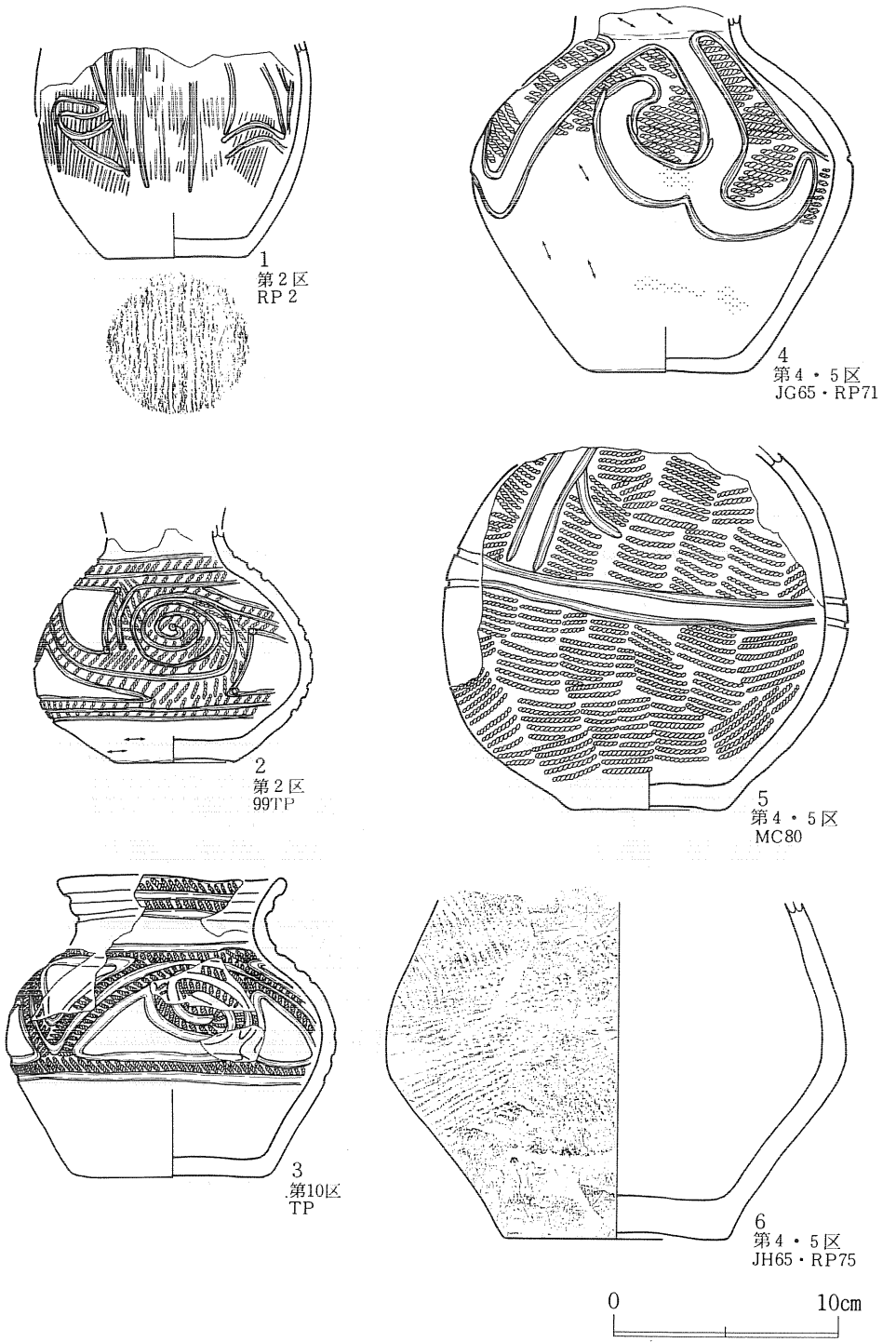
第35図　遺構外出土土器(14)



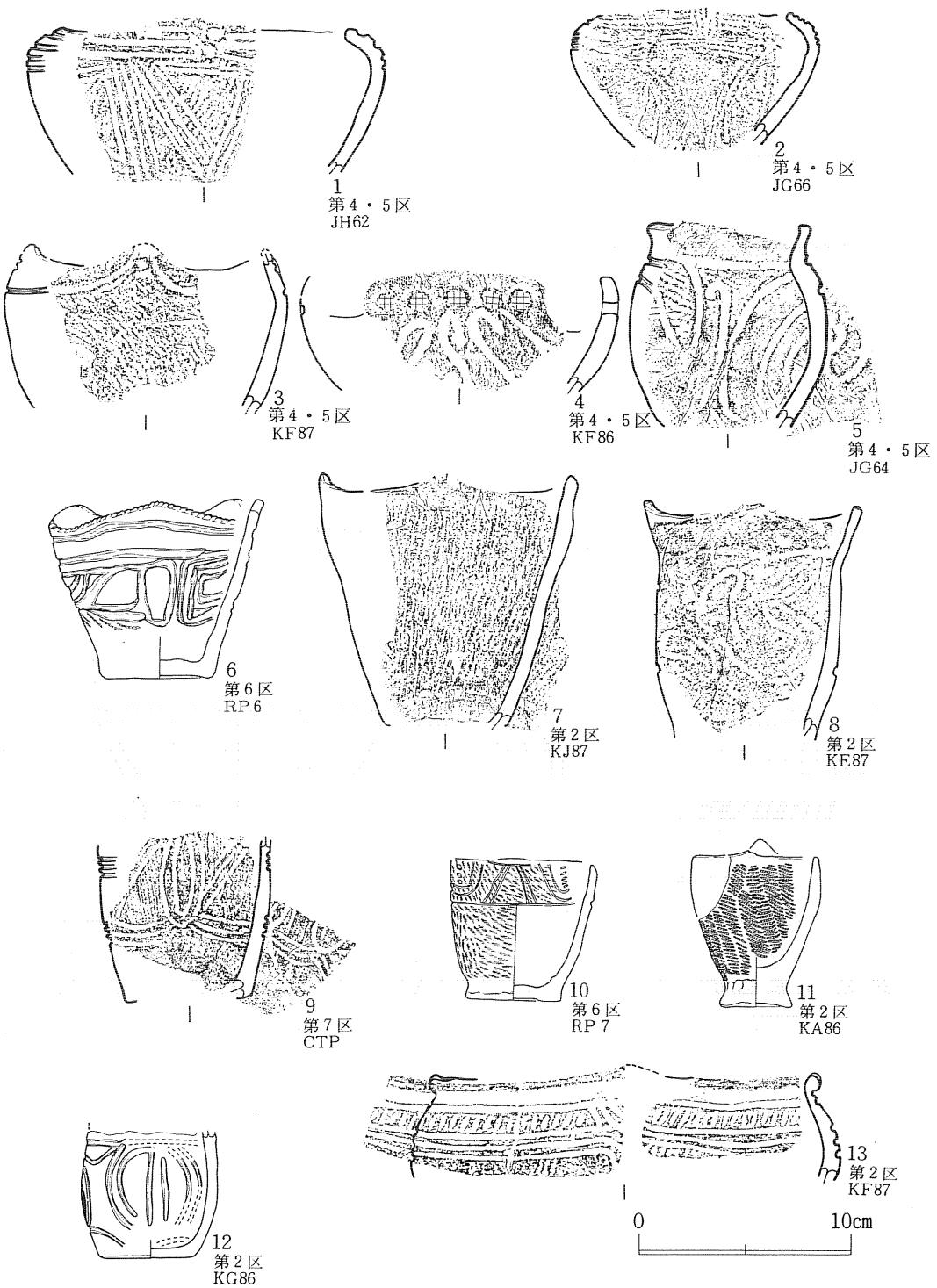
第36図　遺構外出土土器(15)



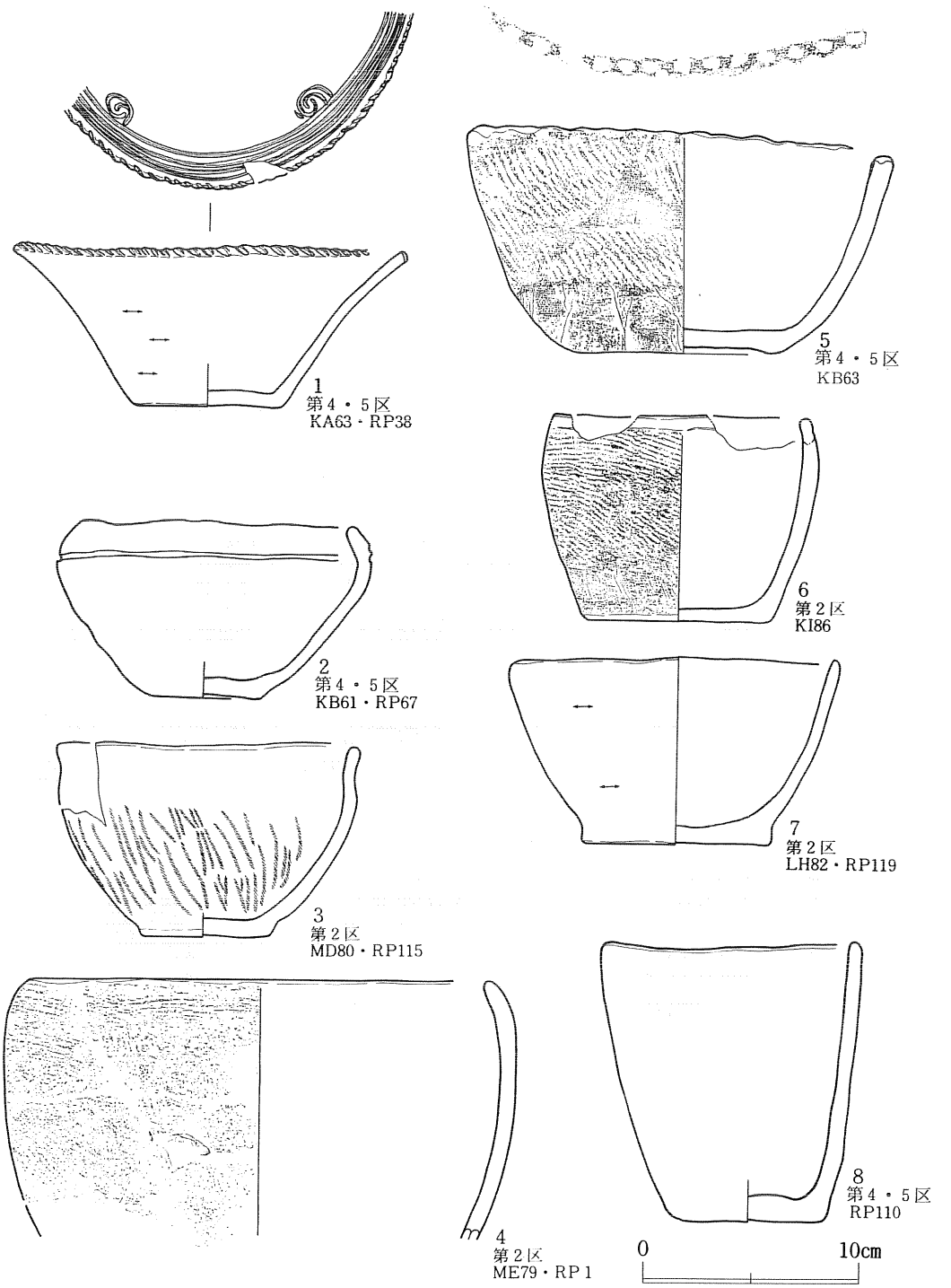
第37図　遺構外出土土器(16)



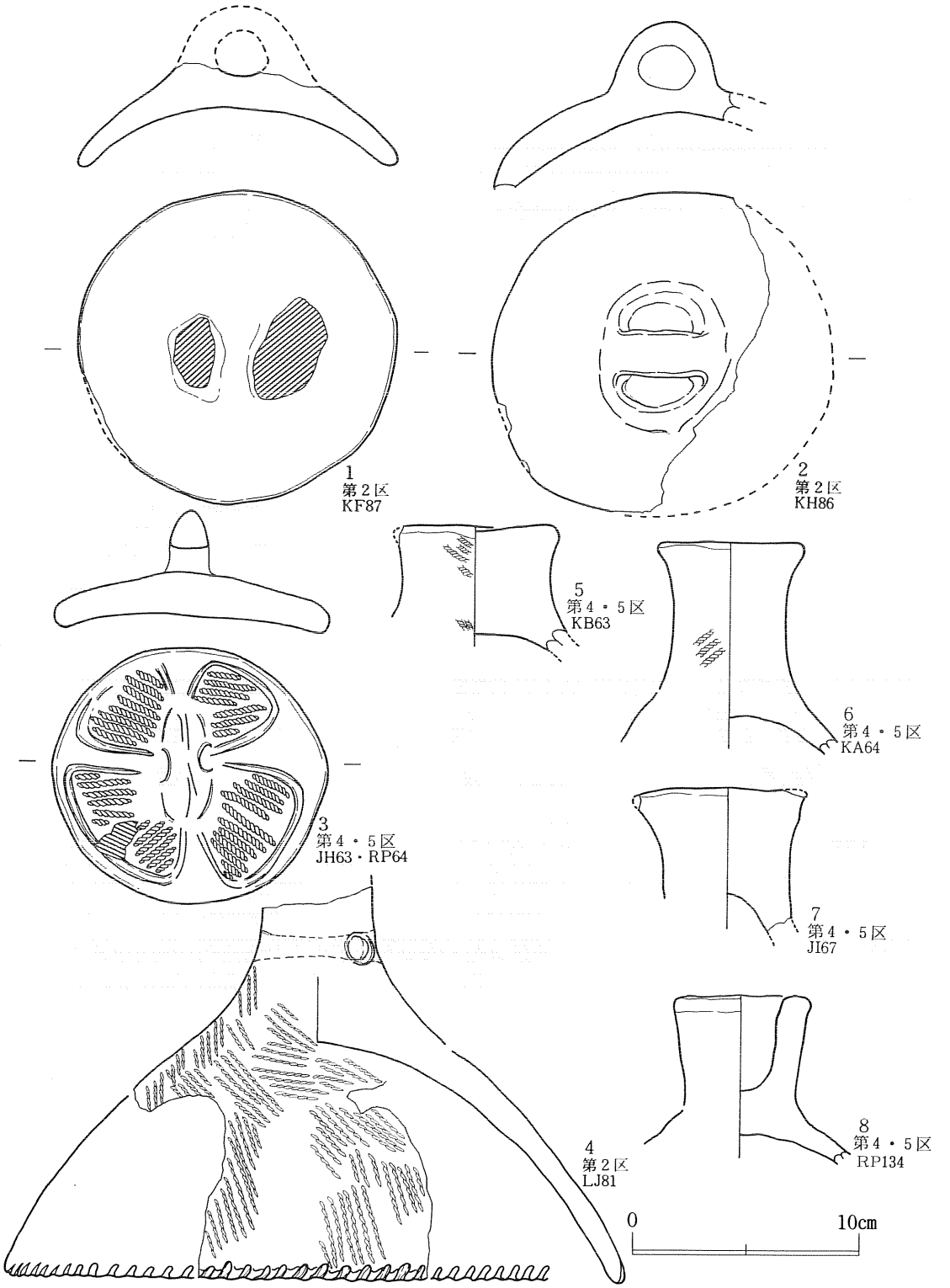
第38図　遺構外出土土器(17)



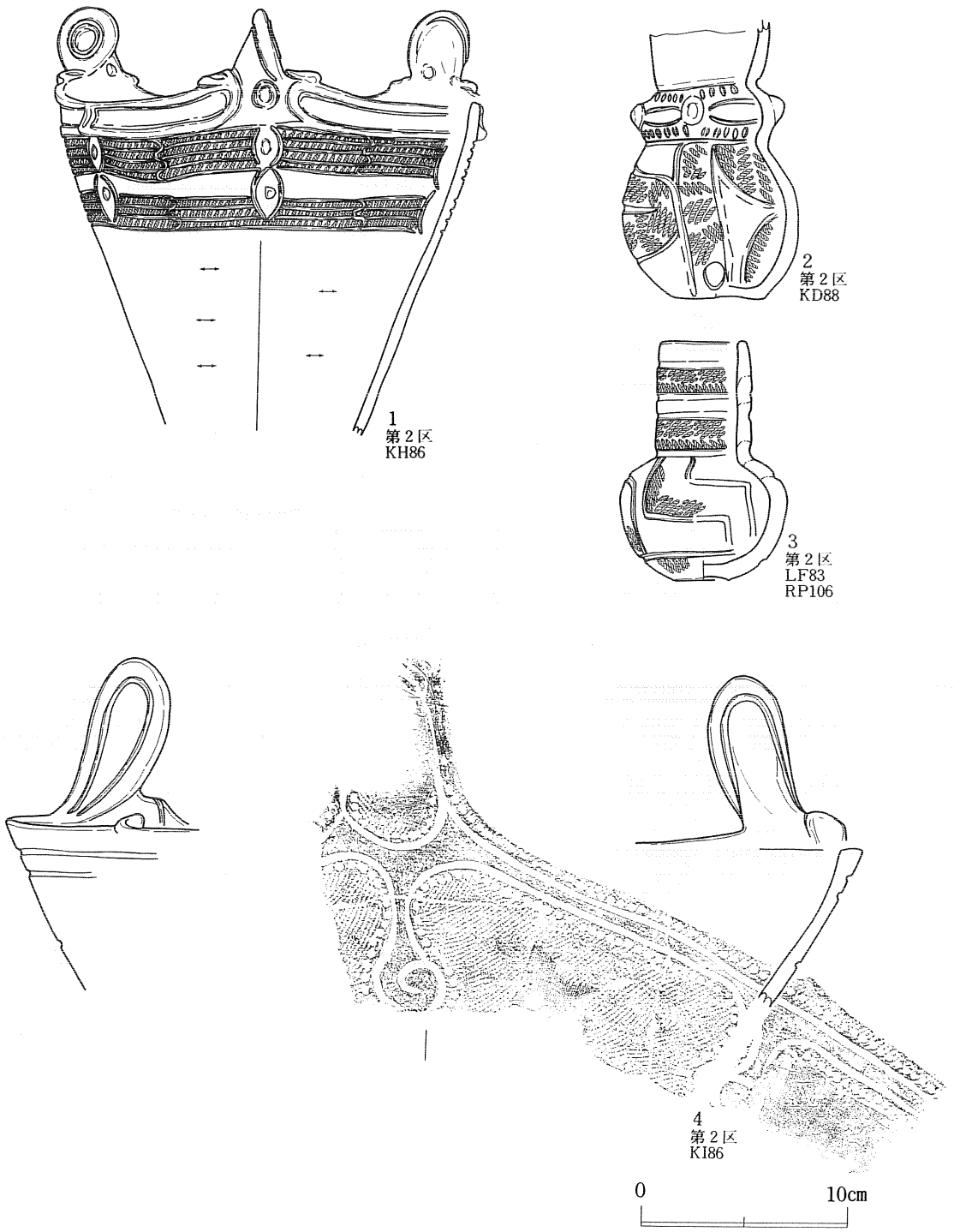
第39図　遺構外出土土器(18)



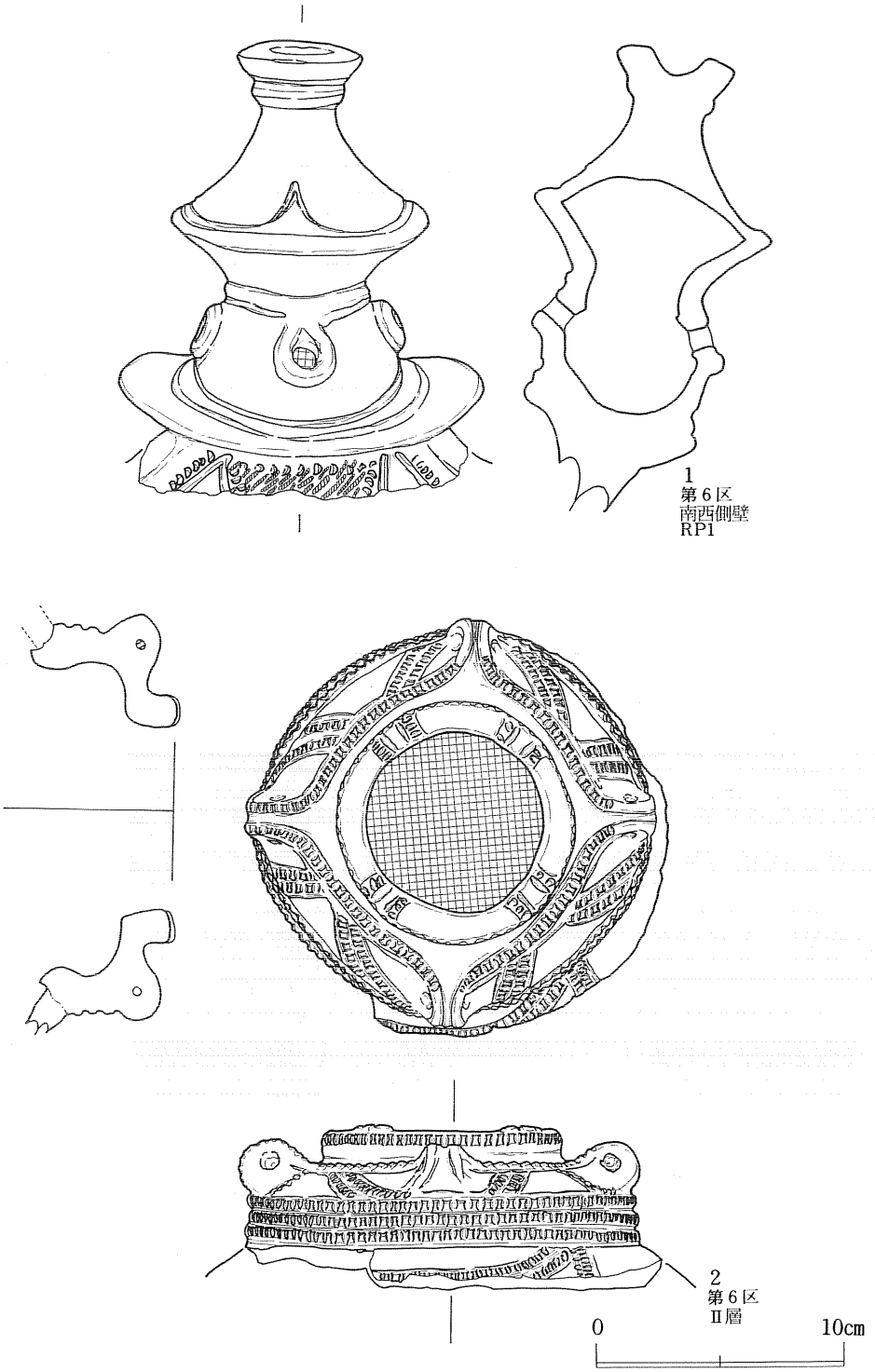
第40図　遺構外出土土器(19)



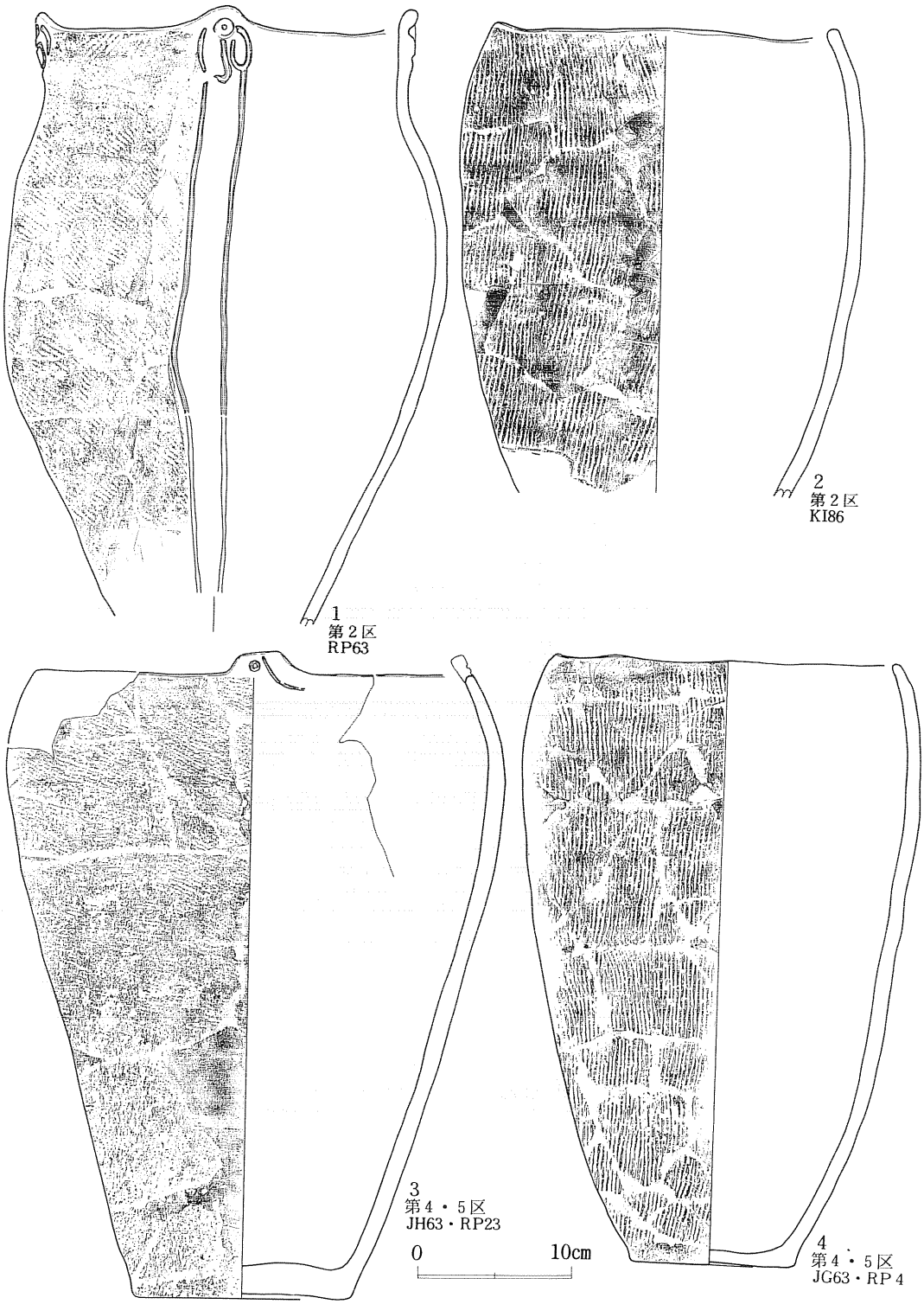
第41図　遺構外出土土器(20)



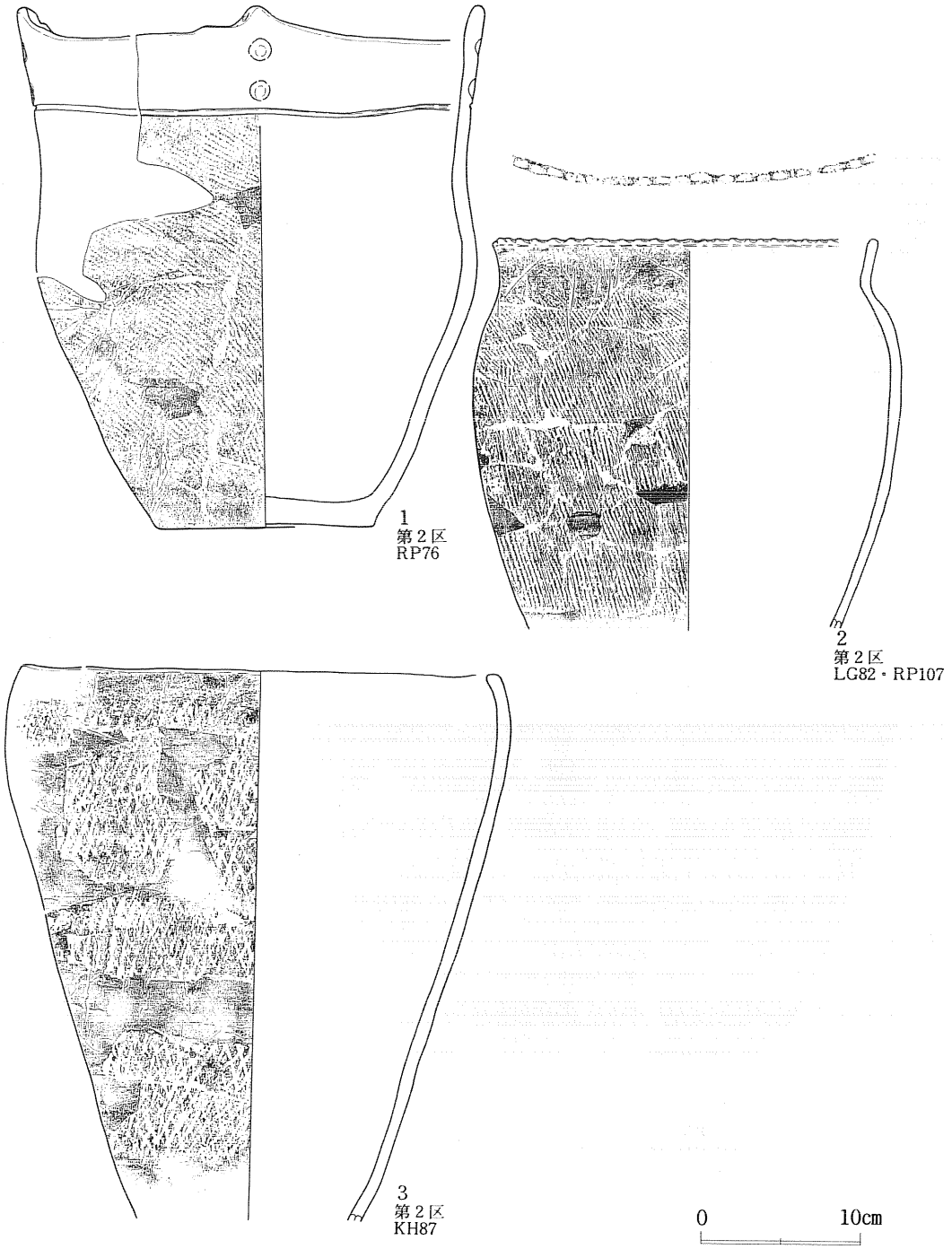
第42図　遺構外出土土器(21)



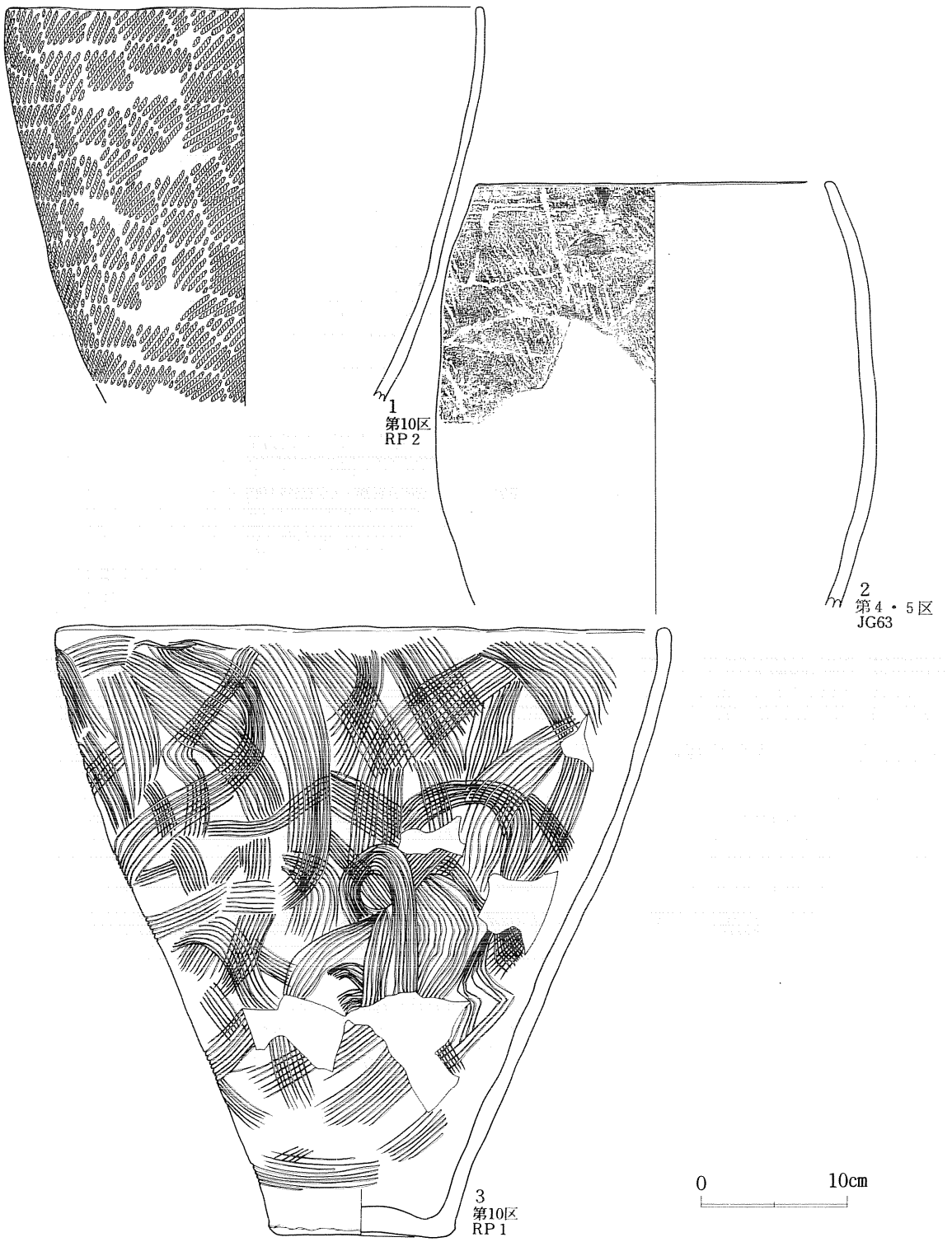
第43図　遺構外出土土器(22)



第44図　遺構外出土土器(23)



第45図　遺構外出土土器(24)



第46図　遺構外出土土器(25)

～４分案が生まれてきている。

本遺跡第Ⅲ群土器を中心においたその前後の変遷は、大きく３段階に分けて考えられるが、第Ⅱ群土器からの過程のうち、Ａ類突起をもつ深鉢形土器から波状口縁深鉢については、鎖状隆線や一対の刻みを施した隆線による区画文を施す、門前式の中で縦の開放部分をもつ横位Ｓ字状磨消縄文をベースとして、①鎖状隆線および刻みをもつ隆線の沈線化（この過程は第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器との間におかれる）、②区画を描く沈線の結合と結果としての倒卵形モチーフの形成、③倒卵形モチーフの解体と縦位の弧状沈線文化（第Ⅲ群土器と第Ⅳ群土器のうち一部のものの間におかれる）、というおおまかな体部文様構成の流れで理解でき、この一系の変遷のほかに、器面を方形に区割りする平縁深鉢は独自の文様構成法の変化をたどる。そしてこの文様全体の構成法変化のなかで、末端に小渦巻き文をもつ沈線や連鎖状Ｓ字文、蛇行沈線文が文様要素として多用される第Ⅲ群土器についてみれば、さらに細かく要素間での変化もたどることが可能である。また、Ｂ類突起としてとりあげた口縁部突起（この種の突起では後藤氏が宮戸Ⅰｂ式の古い部分として呈示した南境遺跡資料に類例がある）についても、形態上の変化が認められる。

ところで本遺跡第Ⅲ群土器の主要部分は、近年の研究での細分型式と比較すると、おそらくは柳沢氏の宮戸Ⅰ式ｃ類・ｄ類を、また、阿部氏の宮戸Ⅰｂ３分型式のうち少くとも（新）式を含んでいない。柳沢氏の宮戸Ⅰ式ａ類・ｂ類とｃ類・ｄ類の間、阿部氏の宮戸Ⅰｂ（古）式と（中）式の間には口縁部文様帯の生成という大きな画期がおかれている。本遺跡の土器群でいうならばこの画期の後を担うものは、第Ⅳ群土器中の資料に求められ、基本的に第Ⅲ群土器が口縁部文様帯をもつことはない。すなわち、この第Ⅲ群土器は柳沢・阿部両氏による宮戸Ⅰｂ細分型式のより古い部分に相当する（宮戸Ⅰｂ式の設定者である後藤氏自身が貝鳥貝塚Ⅱ群などの資料をもって、宮戸Ⅰｂ式の古い部分［Ａ群土器］を細分・分離した経緯があるが、本遺跡第Ⅲ群土器はこの分離された部分に中心をおくように思える）。

本遺跡第Ⅳ群土器の主要なものは、口縁部文様帯をもち、磨消縄文手法によらない多重沈線で体部のモチーフを描くことを特徴とする。しかし、堀之内２式相当と思われる資料（８類）も含まれ、この１群の土器の占める時間的な幅は広く、また、系統的にも異種のものが混在する可能性がある。今の時点では多くを語れない。

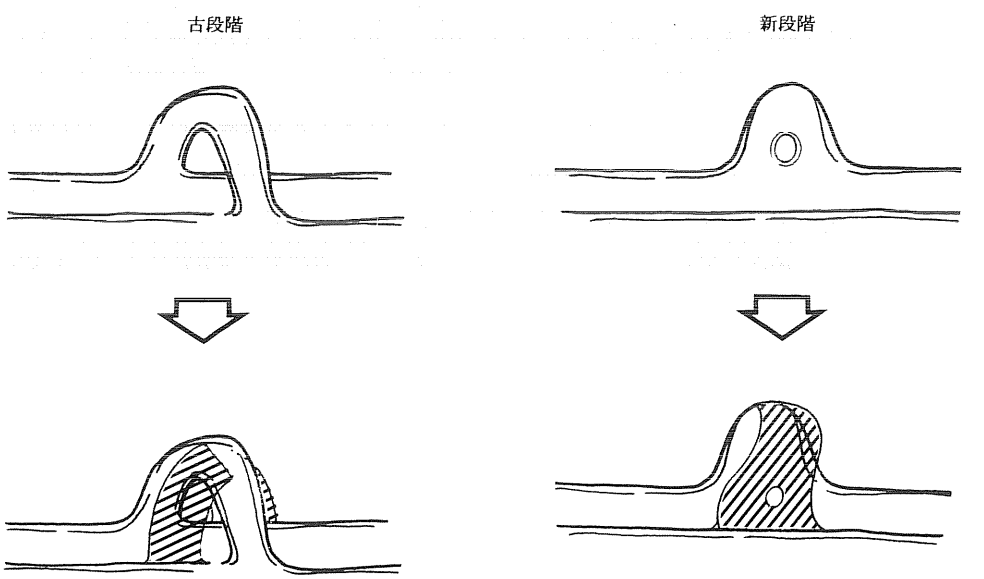
第Ⅴ群土器は十腰内Ⅰ式、大湯式土器の系列にあるものをまとめた。十腰内系列の土器群については鈴木克彦氏による十腰内Ⅰａ式・Ⅰｂ式のⅠ式２細分など、諸氏による研究が行われているが、本遺跡では３類にわけてとらえられた。従来からの多くの見解に従えば（例えば、鹿角市教委；1986）、１類は十腰内Ⅰ式の古手の部分、２類は本遺跡第Ⅳ群土器中の一部とも関連した十腰内Ⅰ式のより新しい部分、３類は本遺跡第Ⅶ群土器に先行し、十腰内Ⅰ式に後続

する土器とみられる。２類の評価については本遺跡第Ⅳ群土器の評価も関係し、３類については大湯式の評価を問題として考える必要があると思われる。

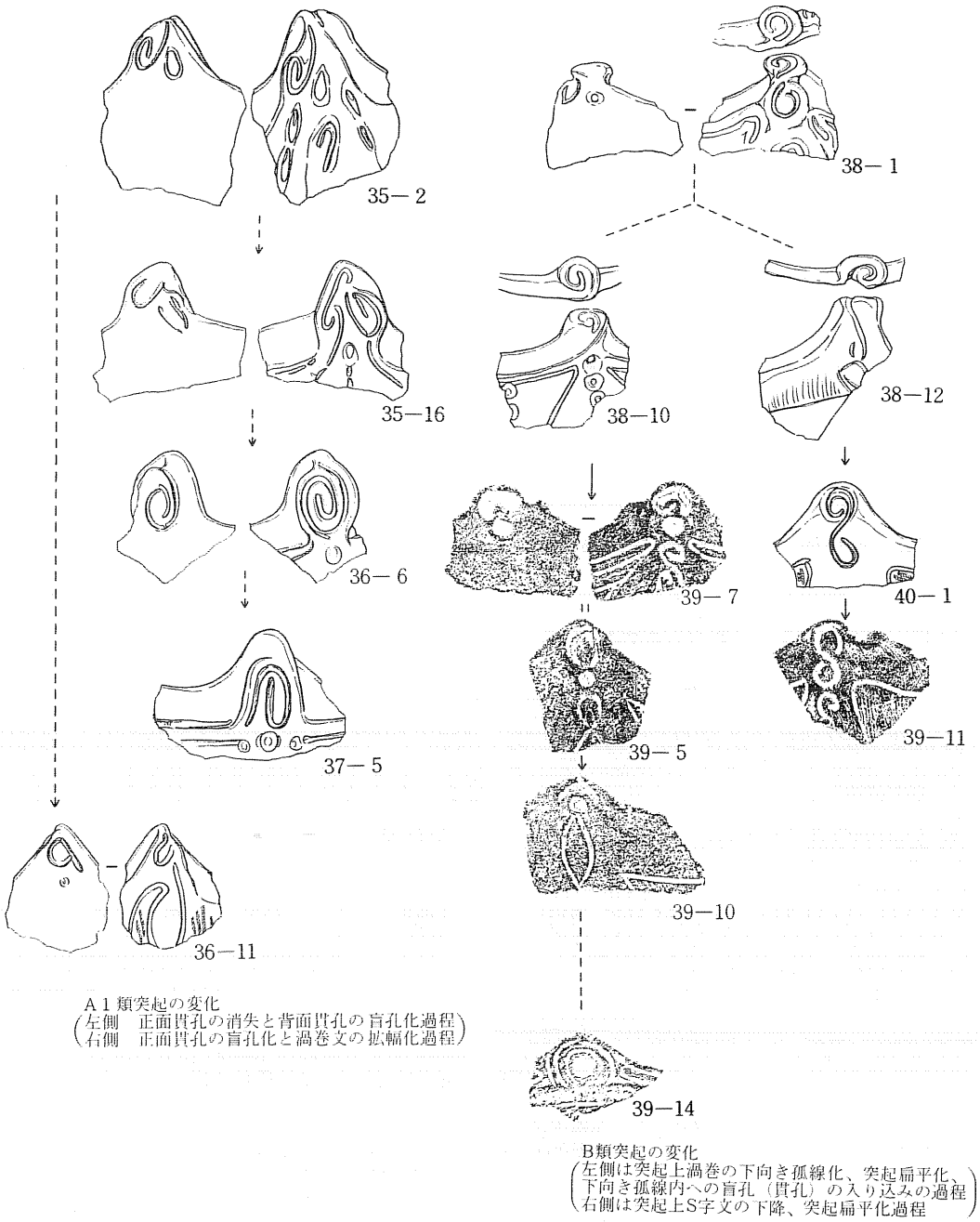
第Ⅵ群土器は現在のところ、東北地方で宝ケ峰式、あるいは漠然と加曾利Ｂ式並行の土器群としてとらえられている土器である。しかし、既に前項でも触れたように本遺跡出土土器群内の関係に限ってみれば、第Ⅲ群土器中のものと類似性の強い文様要素、文様構成法を指摘できる。再度、以下に主な共通する特徴を整理して記す。

第Ⅲ群中の文様要素・文様構成法	第Ⅵ群中の資料
ⅰ小渦巻きをもつ沈線文……	４類(第42図４)
ⅱＢ類突起肩の部分の刻み……	〃　の大突起横の小突起
	３類の突起資料（図版63―１～10）
ⅲＢ類突起上の円文……	３類（第42図１）
ⅳ縦位に連なる小弧線文、蛇行沈線文によって区切られた横位２段の縄文区画……	３類（第42図１）
（浅鉢形土器２類第28図３）	

このほか、巻頭図版６の赤色塗彩土器の中には第Ⅵ群５類に類似する花弁状口縁にＳ字沈線



第47図　突起Ａ１類接合法



※各資料右下の数字は図版との対応番号

第48図　突起変化の模式図

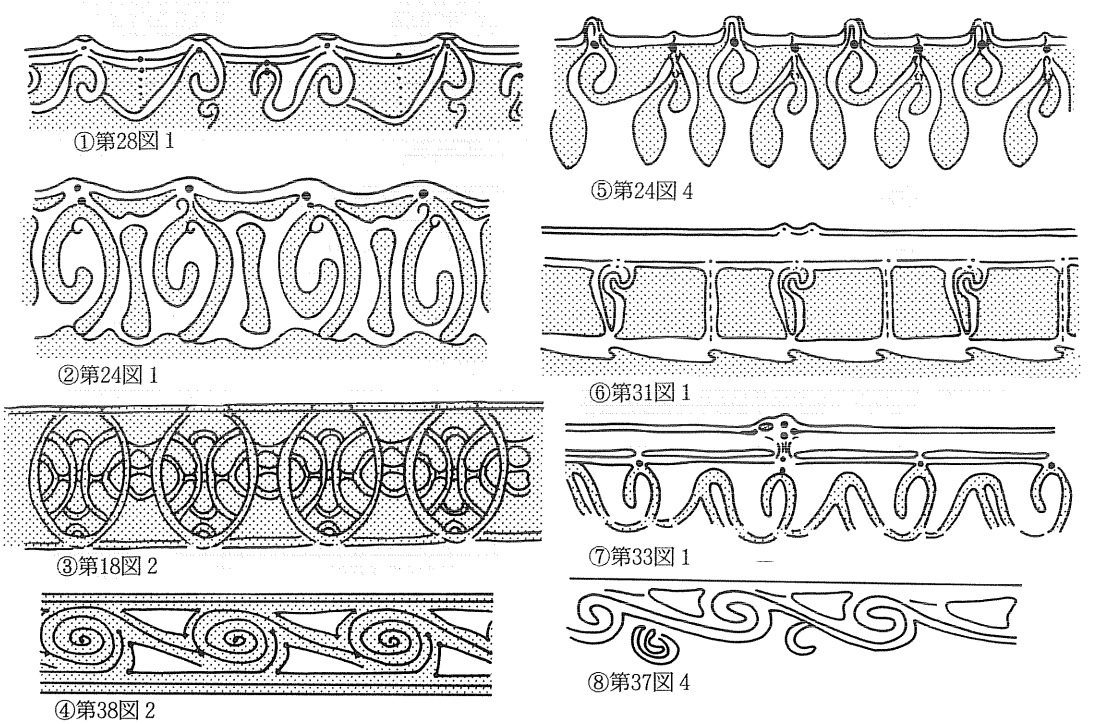
文の施される資料（12）もある。

これらの特徴のうち、第42図１資料のⅳに対応する文様は、関東地方、加曾利Ｂ₁式のメルクマールである『縦連対弧文』とも酷似するが、総じて以上のように第Ⅲ群土器と第Ⅵ群土器のいくつかの文様要素間および、ある種の文様構成には類似性が認められる。それではこのような事実は既存の型式編年の中でどのように理解すべきであろうか。

加曾利Ｂ式土器の成立に関しては、３単位突起の精製深鉢を標識として、堀之内２式土器の最終段階から円滑な変遷がたどれるとされる（安孫子昭二;1981、1988）。そして、この堀之内２式土器から加曾利Ｂ₁式土器への変化に対応する時期、東北一円あるいは関東、北海道を含めた地域で土器様相に強い斉一化が認められるという（林謙作;1965、後藤勝彦;1981）。

こうした編年観の中で、本遺跡第Ⅲ群土器と第Ⅵ群土器との関係を矛盾なく理解するのには、やはり未だ十分な資料的裏付けや理解の視点も揃えられていないと認めざるを得ない。しかし、少なくとも、加曾利Ｂ式土器に並行する東北地方の土器型式が或る独自の母胎をもち、その系統の中での位置付けをはかり得る可能性だけは認めて良いのではないか、と考えられる。

今後、東北地方の当該時期（後期前葉も含めて）の型式編年を推し進めるにあたっても、関東地方の変遷観とは別に、東北地方での系統的な変遷観を明らかにし、それをもって他地域との対比を進めてゆく必要があるであろう。



第49図　文様展開模式図

２．土製品

八木遺跡で出土した土製品は、土偶52点、耳飾28点、腕輪形土製品９点、円盤状土製品2,123点、ミニチュア土器32点、土錘６点、その他（キノコ形、傘形土製品、呼称不明のものなど）の種別を挙げることができる。出土点数の多い円盤状土製品以外については、極力多くの遺物を図示報告できるよう心がけた。

１）土偶（第50図～54図、巻頭図版１、２、図版71～73）

出土した遺物のうち、土偶と認められる土製品は52点ある。うち小破片で磨滅の著しい13点（脚部分９点、腕部分２点、腕あるいは脚部分２点）を除く39点を示す。

①頭部資料（１、４）

１は大型の土偶で、左目、左耳、口、頭蓋部、後頭部に相当する部分を欠いている。法量でみると、残存頭長が72㎜、推定頭幅108㎜（鼻を通る中軸線と右耳先端部を折り返す）を測る。眼の上には幅10㎜の隆帯が認められ、眉を表したものであろう。隆帯上には縄文（LR）が施されている。この眉弓と頭蓋部の間に凹帯が認められられる。細く切れ長な目（長さ16㎜、幅4㎜）の下まぶたはやや盛り上がっている。「狭鼻型」と呼ばれる高い鼻（高さ25㎜）には２つの鼻孔（7㎜×4㎜、深さ4㎜）が表現されている。耳は他の部位と比較しても写実性に富んでいる。耳長は47㎜、耳幅は18㎜で、径５㎜、深さ８㎜の外耳孔も穿たれている。耳たぶには径14㎜のドーナツ状の貼り付けが認められるが、これは耳飾りを表現したものと思われる。胎土は精選されているようであり、焼成も良好である。色調は黒褐色を呈している。類例は岩手県盛岡市萪内遺跡出土の大型土偶に求めることができる。

４は逆三角形様の頭部をもつものである。中央には「Ｖ」字状に隆帯を貼り、眉と鼻を表している。この隆帯下には刺突による目と口が認められる。口の深さは14㎜ある。頭頂部にもねじりを加えた粘土紐が貼り付けられており、頭髪を表しているのであろうか。

②大型の足形土偶（２、３）

ここに紹介する土偶は、胎土が精選され、色調がにぶい赤褐色を呈する焼成良好の一群である。他の土偶に比較すると、胎土、色調さらに形態上からも異質の感がする。

２aは大型の足形で、左足を表している。指５本とも欠損しているが、人間の足を模したものに相違はない。現存する長さ103㎜、最大幅64㎜、高さ93㎜、足首回り170㎜で足の裏には15㎜×10㎜の楕円形の孔が穿たれている。親指の付け根部分には黒色の付着物があり、アスファルトと思われる。

２bは２aと同一の胎土、色調、焼成を有するもので、部位は不明であるが足形の上に位置する一連のものと考え、ここに載せてある。横位の沈線を境に、上位に縄文、下位に格子状の沈線が引かれている。この交差部分には菱形に短沈線が付加されている。

3は径47㎜の円筒状の足形で、獣足と思われる。2aと同じく足の裏に孔（径9㎜）が穿たれている。左右の区別はつかないが、丸みをもった指が5本表現されている。うち一本だけ欠落している。

2と3が同一の土偶の一部となるのか、全く別個のものであるのか、また足形の上はどこまで延びていたのかなど興味のもたれるところである。

③刺突をもつ土偶（5～12、15、16）

これらの土偶は16の刺突がヘラ状工具によるもの以外は、竹管状の工具を用いている。刺突が肩から腕にかけて限定的に認められるもの（5、10など）、ほぼ全面にわたって認められるもの（6、9、10など）の別がある。また腹面には正中線に沿って一条の刺突列を垂下させているものも、5、6、11、15、16に認められる。15、16はこの刺突列のみを刻しているものである。いずれも焼成良好であるが、6、11、12が磨滅著しい。

5は頭部、右足、左乳房、左足先を欠損しているものである。頭部と脚部は差し込み式であることがわかる。胴部にU字状の凹みをもっている。乳房は高く、腹部の状態から妊婦を具象しているものである。 手のひらは、浅い凹みで表している。足の接地面の形状は楕円形を呈するものであろう。現存高は15.2㎝である。

6は頭部、右手、右乳房、へそから下を欠損しているものである。5に比較すると、乳房の盛り上がりも低く、全体に薄く板状に仕上げている。左手は肩から一旦水平に伸ばし、ほぼ垂直に折れる形態になると思われる。7は胸部のみの破片であるが、頭部が差し込み式となっている。剝落しているが乳房も表されている。8は首から右胸までの破片であるが欠損部より製作法が明らかである。胴部には薄い板状の粘土を二枚貼り合わせ、首部分をU字状に凹め、これに頭部を差し込んでいる。12にも頭部の差し込みに伴う凹みが認められる。

9、10はへそを中心とする破片で、刺突が背面でん部にも及んでいるものである。

11はこの類の中では最も大型になるものと思われる。背面中央には隆帯が認められ、背骨を表しているものと考えられる。背筋が伸びず、まえかがみとなっている。

15は小型の土偶で、頭部、両手、右足先、左足を欠損している。両乳首にも竹管による円形の刺突が加わる。5同様腹部の張りから妊婦であることが明らかである。股下にはアスファルトの付着が認められる。現存高は6.1㎝である。この土偶の具象性は他に比較してもより人間味が伝わってくる。

16は胴部のみであるが、粘土粒貼り付けによるへそが表現されている。

④沈線等の文様をもつ土偶（23）

刺突以外の文様が表されている土偶は一点のみである。23は胴下半部のみの資料である。腹面の股上に一条の沈線が認められるが、背面が薄く剝落しており、他の文様構成等は不明であ

る。沈線下には左下がりの縄文が施されているが、磨滅のため詳細は明らかではない。

⑤特異な形態をとる土偶（屈折坐像土偶）（13、14）

13は頭部、両手、両足を欠くものであるが、膝を立て、腕を組むような形態を示すものと思われる。尻の部分を広く平らに作り、安定感は良い。背面中央には背骨が隆帯で表現されている。乳房は認められない。現存する高さ10.8㎝、奥行き9.8㎝、幅9.8㎝を測る。14も小型であるが、13と同様の形態を示すと思われる。11もこの類に入るものかもしれない。

このような土偶は、岩手県大迫町立石遺跡で出土し、「蹲踞（そんきょ）の土偶」として分類されているものに類似している。

⑥文様の認められない土偶（17〜22）

17はへそから下を欠くもので、頭部は当初より表されていない。短く水平に伸びる腕には、斜方向に孔が穿たれており、紐を通して首からぶら下げていたのかもしれない。乳房は低く小さく付されている。

18は小型で板状のもので、頭部、両手、両足、右乳房を欠損している。19は剝落しているが、20と同じように、へそ部分にも粘土粒が貼られていたものと思われる。21はヘラ状工具による刺突でへそを表現している。19、20とも乳房に高さはない。22は細身の胴に「ハ」字に広がるやや太目の脚部が付くものである。粘土粒貼付のへそが表されている。

⑦腕部分（24〜28）

肩から腕までの破片である。この部分に文様の認められないもの（24〜26）、文様の付されているもの（27、28）がある。24、26〜28は手のひらを凹みで表している。24は右手、25、26は左手である。径32㎜程の太さをもつ26は、径22㎜程の芯となる粘土の周りに別の粘土を貼り付けているものである。27は両面に円形の刺突をもつ小型の腕である。28は肩部にこれと平行する浅い沈線が引かれているものである。手の先には指を表すように刻目が４つ入れられている。この腕は内側部分の観察により、棒状の粘土を二本接合することにより一本の腕としている。

⑧脚部分（29〜37）

脚部については、接地面の形態が楕円形を呈するもの（29〜33）、円形のもの（34〜37）がある。右足となるのは29、32、左足は30、33で、他は不明である。

29は股との付け根部分にアスファルトが付着している。32は短足でO脚を呈するものであろうか。31は26の腕同様、芯材となる粘土の周りに別の粘土を貼り付けて完成させている。34は安定感のある円筒状の脚部である。35、36は細い刺突の認められるもので、③で取り上げた刺突をもつものよりずっと小さい径１㎜前後の針状の工具を用いている。37は相対する位置に２孔をもつもので、足の裏が凹状を呈していることからも、土偶とは異なる別の土製品の一部

である可能性もある。

⑨抽象的な土偶（38、39）

2点とも上半分を欠くものである。38は最大幅が28㎜の板状の土偶である。表面にのみ沈線が描画されている。胎土には径1～2㎜の砂粒を多く含んでいるが、焼成は良好で橙色を呈している。

39は中央に左巻きにした粘土を貼り付けへそを表徴したと思われるものである。表面はこのへそを中心に格子状に沈線が切られ、交点には結び目を表すような刻目が認められる。へその上にも沈線とは結びつかない位置で刻目が組み合わされた文様がある。裏面にも縦3本の沈線を引いた後に、横を引き3本まで見いだすことができる。裏面にある刻目は中央部の沈線と沈線の交差部に限られている。この沈線は幅の狭い2側面にも鋭利な工具を用いて引かれている。

2）耳飾（第55図、巻頭図版2）

出土した耳飾は、小片のため図示できなかった3点を含めて30点確認している。形態的にはいわゆる滑車形と中央部に孔をもたない臼形に大別できる。環状を呈する耳飾は検出されていない。また耳飾に沈線、刻目、刺突などの陰刻を施しているものは1例もない。装飾的要素としては30点中20点に認められるベンガラ塗彩、および2点についてはベンガラの上に黒漆状の樹液を塗付しているものである。

①滑車形（40～64）

いわゆる滑車形と呼ばれるものを一覧してみると、法量、断面形態などで細分が可能である。

a. 外径が12㎜～15㎜の小型のもの（40～43）

いずれも胎土は精選されている。43を除いて欠損が認められるが、推定できる重量は1.0ｇ～1.3ｇである。42、43は形態的には臼形の耳飾中央に小孔（径2～3㎜）を穿ったようである。41、43の全面にはベンガラが塗彩されている。

b. 外径が19㎜～26㎜で、内面の断面形が「く」字形に鋭利に屈曲しているもの（44～50）

胎土は概ね精選されている。重量は3.6ｇ～6.7ｇ。外径に対する高さの比（扁平率）は44で95％、45～49で64～79％、50で54％とかなり扁平になる。49を除き全面にベンガラが塗彩され、48はベンガラの上に黒漆が塗られている。

c. 外径が22㎜～26㎜で、断面形が三日月様を呈するもの（51～58）

胎土は52、53、58以外は精選され、焼成も良好である。これらにはいずれも全面、部分的にベンガラ塗彩され、55は48同様黒漆が塗られている。前述の3点は土器などに含まれる小礫などの混和材が多く含まれているもので、表面がブツブツした感じとなっている。3点ともベンガラは認められない。55は薄手な作りとなっているが、58は逆に厚手で雑な作りとなっている。

重量は扁平（52%）な52で、推定３ｇ、他は５ｇ～７ｇ、径26㎜の58は10.6ｇを量る。

d．外径が19㎜～24㎜で、断面形が略台形様を呈するもの（59～64）

形態上中央部の孔径は、全体的に小さめである。胎土は精選されている63、64を除きあまり良好とは言えない。60は外径より高さがあり滑車形というより、管状と称した方が適切かもしれない。重量は59で4.9ｇ、60～63は5.6ｇ～7.0ｇ、64は推定9.0ｇである。62、64の全面、60の外面の一部にベンガラ塗彩が観察される。

②臼形（65、66）

中央部に孔をもたない類で、滑車形a同様小型である。２点とも全面にベンガラが塗彩されている。65は外径12㎜、高さ9㎜、推定重量１g、66は外径14㎜、高さ６㎜、重量0.9ｇである。

３）腕輪形土製品（第56図67～75）

確認できた９点総てを図示している。完形となるものはなく、全体の¼以下の遺存率である。本種は一般的な土器と同じように、胎土に径１～２㎜の砂粒を多く含むという共通点をもち、意識的に胎土を精選するという操作はしていないようである。①表面に文様をもつもの、②無文のものに分けられる。

①文様をもつもの（67～70）

形態的には67、70の立面形が円（ドーナツ状）、68、69が隅丸方形様になるものと思われる。67は円形の刺突列、68は沈線による文様が施され、69、70はコーナーに縦位の粘土紐貼り付けがなされている。70は破片であるが、隆帯の下端に縄文（複節）圧痕がある。地文にも縄文が施されているようであるが、磨滅のため判然としない。高さ（幅）は、67で45㎜、69で75～78㎜を測る。

②無文のもの（71～75）

立面形がいずれも円形を示すもので、横位方向を主とする調整（ナデ）が認められる。71は胎土、焼成、色調が69に酷似し、同時期に製作、焼成された可能性がある。71、72、73の高さ（幅）、長径はそれぞれ、54㎜・82㎜、90㎜・88㎜、93㎜・107㎜を測る。

４）円盤状土製品（第57図76～92、図版73）

円盤状土製品として登録したものは、2,123点に上る。一般には土器片を打ち欠いて製品としているが、１点だけ粘土を円盤状に整形している、いわば専用のものが確認できる（76）。

法量は最小長径21㎜、重量2.7gから、最大長径92㎜、重量123.6gまで、平均値は長径41.8㎜、短径38.2㎜、厚さ8.7㎜、重量18.0gである。長径では33㎜～48㎜の数値を示すものが全体の73.1%（1,494点）を占める。この中でも37㎜～42㎜の範囲に687点（33.6%）が集中している。一方、60㎜以上は47点で2.3%にすぎない。重量では、11g～14gにピークをもち、全体の27.1%（554点）がこの中に収まる。10g台に拡大すると1,116点（54.6%）を占める。逆に10g未満も481

点（23.5%）ある。40g以上のものは29点で、1.4%にすぎなくなる。

土器片のどの部分を利用したのかについては、製品が小さいこともあり、明らかにし得ない面があるが、確実なところからみて次のような結果を報告できる。

最も多く利用されていると考えられる胴（体）部以外では、口縁部（89）～頸部（90）を利用したもの18点（0.8%）、底部（91、92）を利用したもの40点（1.9%）ある。底部のうち10点には網代痕（91）が認められ、92は笹葉様の圧痕であろう。

また表面の文様は、製品が“土器片の転用”であるとすれば、このことに意味をもたない場合が多いと思われるが、磨滅等により文様の不明なものを除く1,453点についてみると、以下のようになる。

①縄文の認められるもの（648点、45%、うち単節456、無節175、複節17）

この中で94点には、沈線、磨消、隆帯などの要素が加わる。単節のうち60%がＬＲ、無節の大部分はＲである。77は両面ほぼ中央に盲孔が存在している。

②撚糸の認められるもの（353点、25%）

全体の88%がＲであり、22点は網目状撚糸である。

③縄文、撚糸の認められないもの（452点、30%）

磨消縄文のもの（182点）、沈線のもの（145点）、条痕のもの（61点）、隆帯をもつもの（９）などがある。

また、打ち欠いた後の周縁部に擦りが加えられているものが存在する（86）。この部分は特に磨滅し易い箇所であり、擦りの有無を確認できない状態である場合が多いが、少なくとも10数点（0.8%）には認めることができる。

５）ミニチュア土器（第58図93～116）

確認、登録している32点のうち、小破片や磨滅しているものを除く24点を図示している。

①文様の付されているもの（93～97、116）

93は、口縁部と胴中央部を横走する２本の隆帯に、縦位の隆帯を貼付け４分割している。隆帯の交点には２個１対の刺突が加わる。１区画内には横位方向に浅い沈線が４～５本入る。沈線は胴中央部隆帯下にも２条巡っている。94は３段の山形沈線とその頂部の刺突の組み合わせから成る。５単位で、口縁部と底部の一部を欠く。95は単位不明の沈線の後、ミガキに近い丁寧な調整を行っているものである。96、97も沈線による文様をもつもので、97は沈線が２段になっている。

116は注口土器のミニチュアで推定口径35㎜である。これ１点のみ、他の資料より時期的には新しいものである。

②器高が50㎜を超すもの（98～101）

以下は総て無文のものである。98～100は最大径が胴中央部にくるもの、101は中央やや上である。98は器形が93に似、100のみ安定感を欠く。98は横位調整（ナデ）で仕上げられているが、他は磨滅のため詳細は不明である。

③孔をもつもの（102、103）

102は最大径を底部に近いところにもつ安定感のあるもので、口縁部の相対する２ケ所に孔をもつ。103は孔＋貼付のもので、図示面左にも剝落しているが貼付があったことが分かる。こちらには孔は伴わない。胎土には細砂粒を多く含んでいるが、比較的薄手で焼成良好である。

④器高が50㎜未満のもの（104～110）

この類は他に比較しても、やや厚手で雑な作りであるものが多い。109は二次火熱を受けている。

⑤台（脚）をもつもの（111～115）

いずれも貼り付けにより台（脚）部を作出しているものである。113あるいは114・115の形態を示すものは、この他にそれぞれ２点、６点検出されている。

６）土錘（第59図117～122、図版73）

出土した土錘は、いずれも溝をもつもので「有溝土錘」と称されている。総て完形である。

①長軸を一周する溝をもつもの（117～120）

渡辺誠氏による分類の第１類Ａ種に相当する。側辺がほぼ直線的なもの（117、118）と丸みをもつもの（119、120）がある。重量はそれぞれ、9.61g、13.26g、12.58g、15.47gである。胎土は117、118は径１㎜前後の砂粒を多く含んでいる。119、120はこれに比較すると砂粒をあまり多くは含んでいないように観察できる。

②長軸を一周する溝をもち、これにほぼ直交する孔をもつもの（121）

同氏分類の第２類Ｆ種に相当する。重量は8.53gである。

③側面を半周する溝をもち、これに直交する２つの孔をもつもの（122）

孔の両端を側面の溝側で結ぶような浅い溝も付加されている。胎土には細砂粒が多く含まれている。重量は23.91gで、渡辺氏の分類には認められない形態のものである。

７）その他の土製品（第59図123～133）

①キノコ形土製品（123～125）

キノコ形をした土製品は図示し得なかった３点を含めて６点出土している。全体の形状の知れるものはなく、傘部と柄部がそれぞれ別個に抽出されている。

123は傘部分で推定外径が56㎜となる。124、125は柄部分でこの部分の長さが40～50㎜になるものである。胎土はいずれも砂粒を多量に含んでいる。色調は６点とも浅黄橙色系である。

②傘形土製品（126）

断面形が山形を呈する小型の土製品である。破片を図上復元すると、推定径66㎜、高さ41㎜となる。周縁部に２条の沈線が巡る。磨滅が著しく、沈線以外の文様の有無等は明らかではない。色調は灰黒色を呈している。

③呼称不明の土製品（127～133、図版73）

127は獣（？）を意匠とする土製品である。後頭部の一部と下端部を欠損しており、下端部には長径10㎜、短径８㎜の棒状のものが接続する。顔面は指等によるつまみ出しにより目と鼻を作出している。２側面には径２～３㎜の小孔を穿ち、耳としているようである。口は表現されていない。胴部には２つの三角状浮彫に刻線を４本入れることによって、腕、指を表しているようである。胎土は精選されており、黒褐色を呈している。石製品の模倣であろうか。

128は「Ｉ」字形を呈する糸巻形の土製品で、完形である。浅い沈線による文様と上下端には径２㎜の小孔が穿たれているが、貫通はしていない。胎土、色調は127に似る。

129は棒状の土製品で、完形である。土偶の腕部分のミニチュア、あるいはスプーン状を示すものであろうか。棒状部分はねじりを加えながら直線的に整形している。胎土はあまり良好とは言えない。

130は形態的には管状土錘に似るものである。下端部を欠損している。長軸方向に図の上から下に向かって穿孔されている。孔はこれと斜方向にも穿たれている。外周には縄文が施され、この上に浅い沈線が２条ほぼ一巡している。胎土は精選され、褐色を呈している。孔の位置から土笛などを想定できるかもしれない。

131は環状をなすものであろうか。上面には力強く沈線が引かれ、内向きの面には竹管による刺突列が確認できる。色調は橙色である。

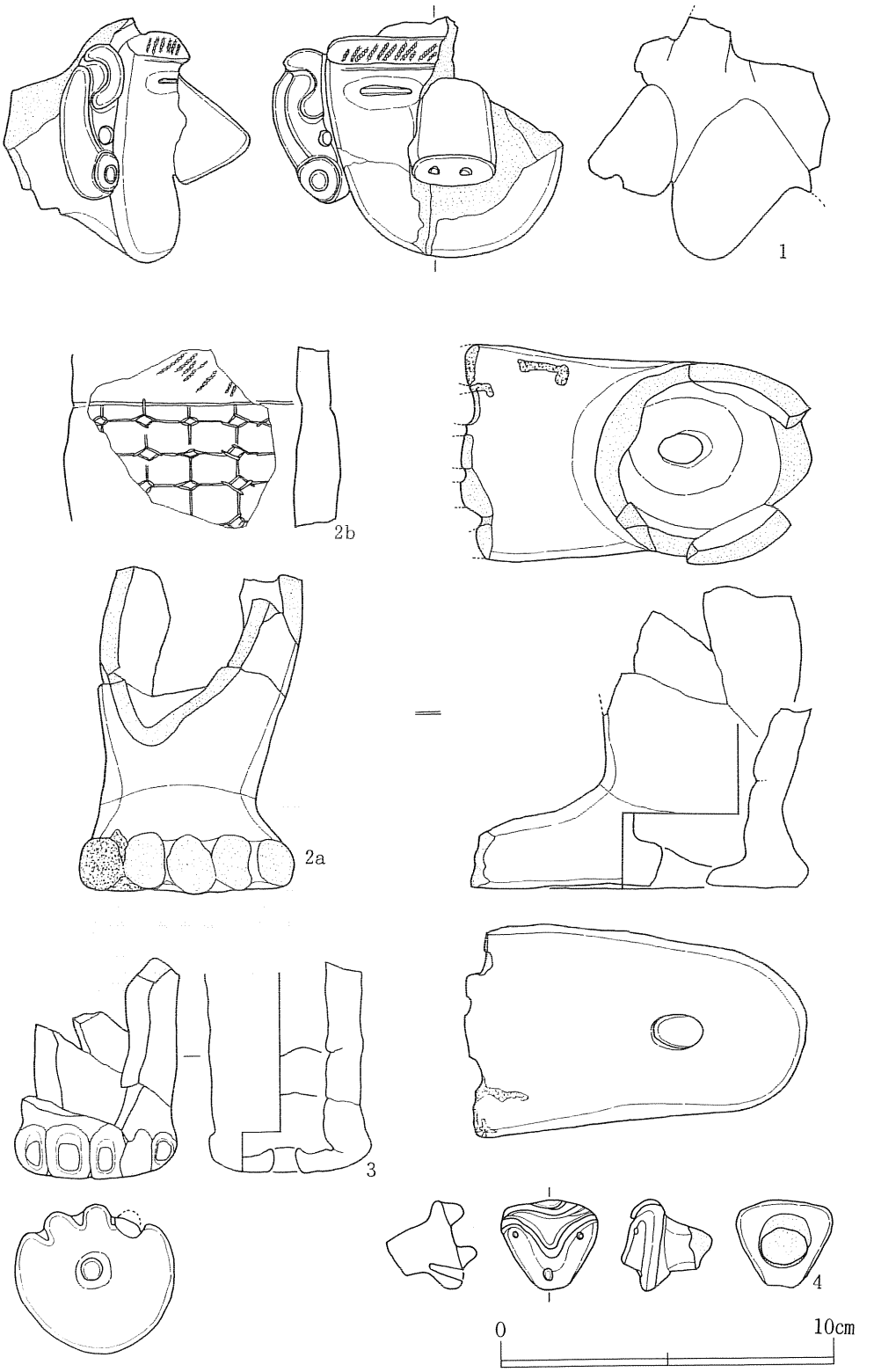
132は径60㎜の土器底部を再利用した有孔円盤状土製品である。焼成後に外面から孔が穿たれている。

133は独立した土製品であるのか、土器の把手等に付くものであるのかは不明であるが、外径21㎜、内径９㎜の管状部分が取り付く。円盤状を呈する底部あるいは頭部のほぼ対称な位置に焼成前に穿たれた孔が４つ配されている。

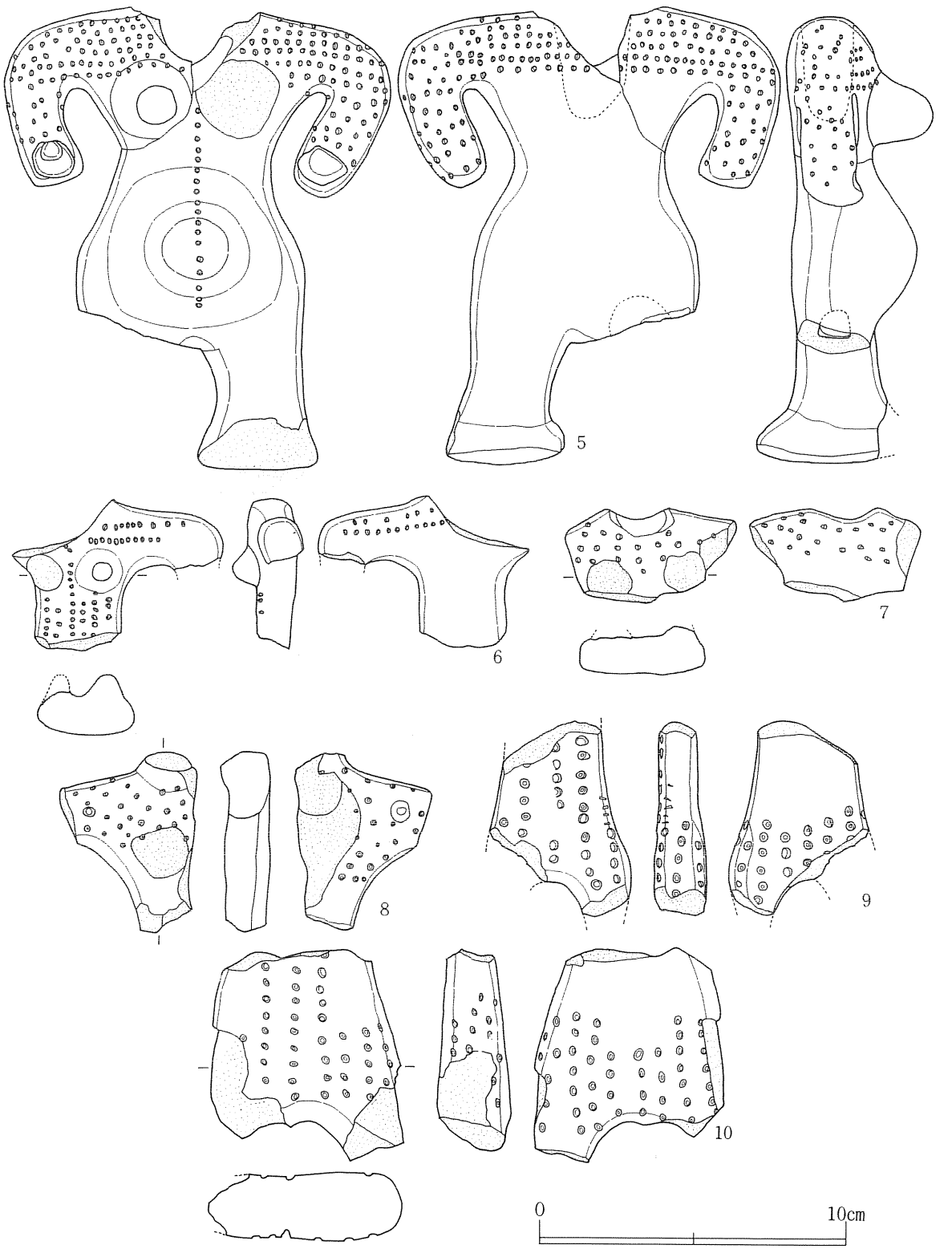
３．骨角器（第59図134、図版73）

骨角器と見られるものは、次の１点を確認している。

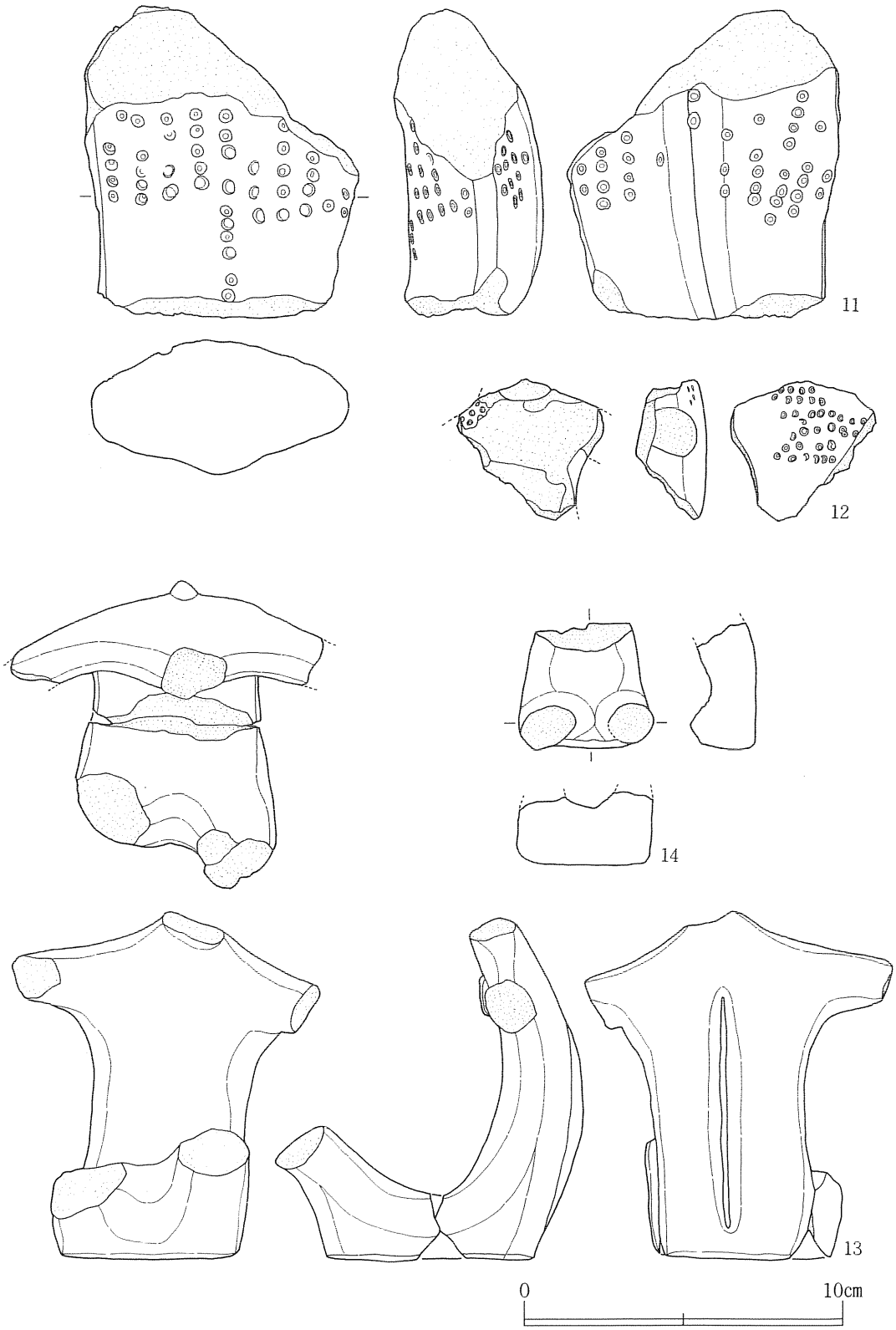
134は骨ヘラあるいは骨刀と称することができるものであろうか。刃と背刃から成る。両端とも欠損しており、形状は明らかではない。



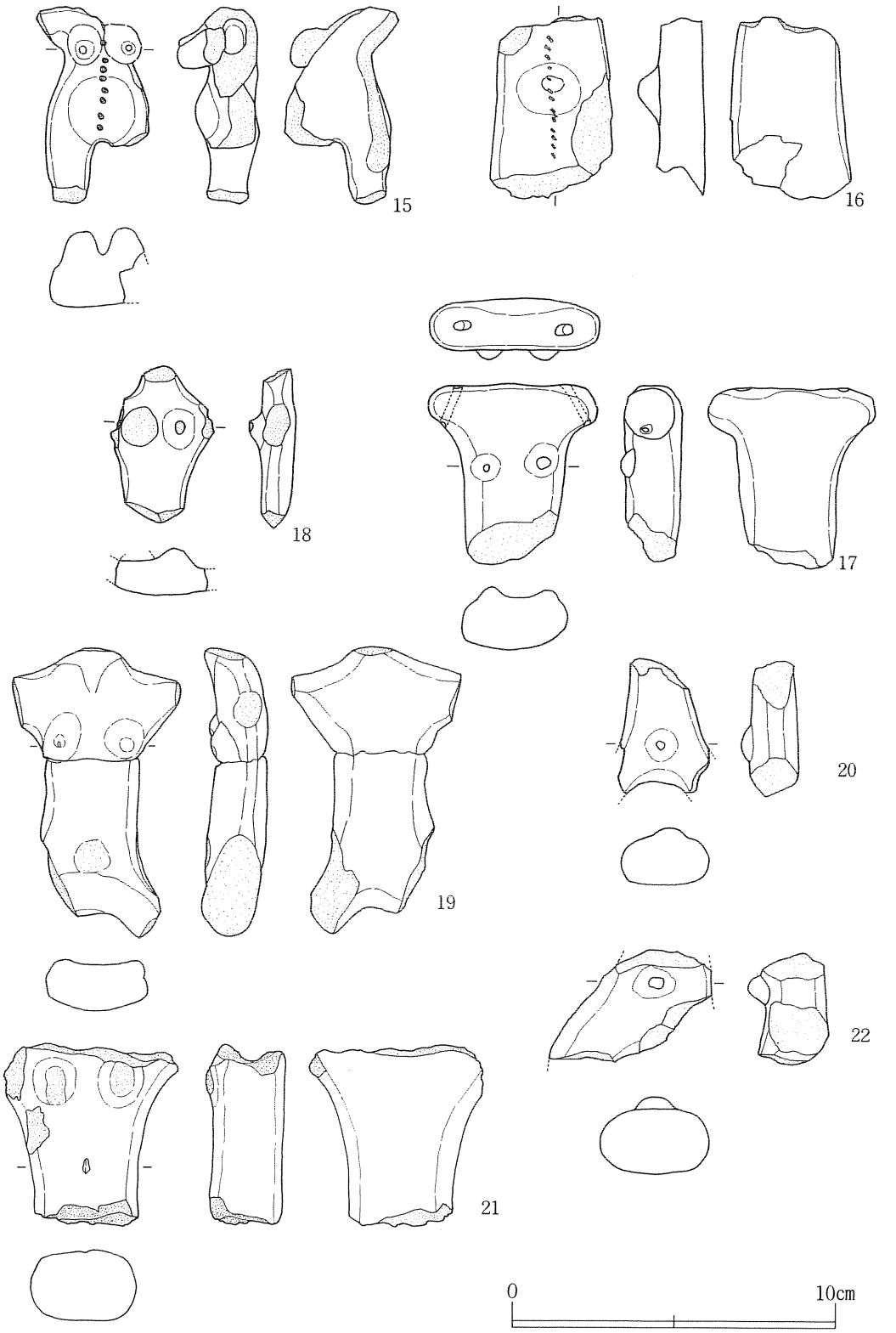
第50図　出土土製品（１）土偶（１）



第51図　出土土製品（２）土偶（２）

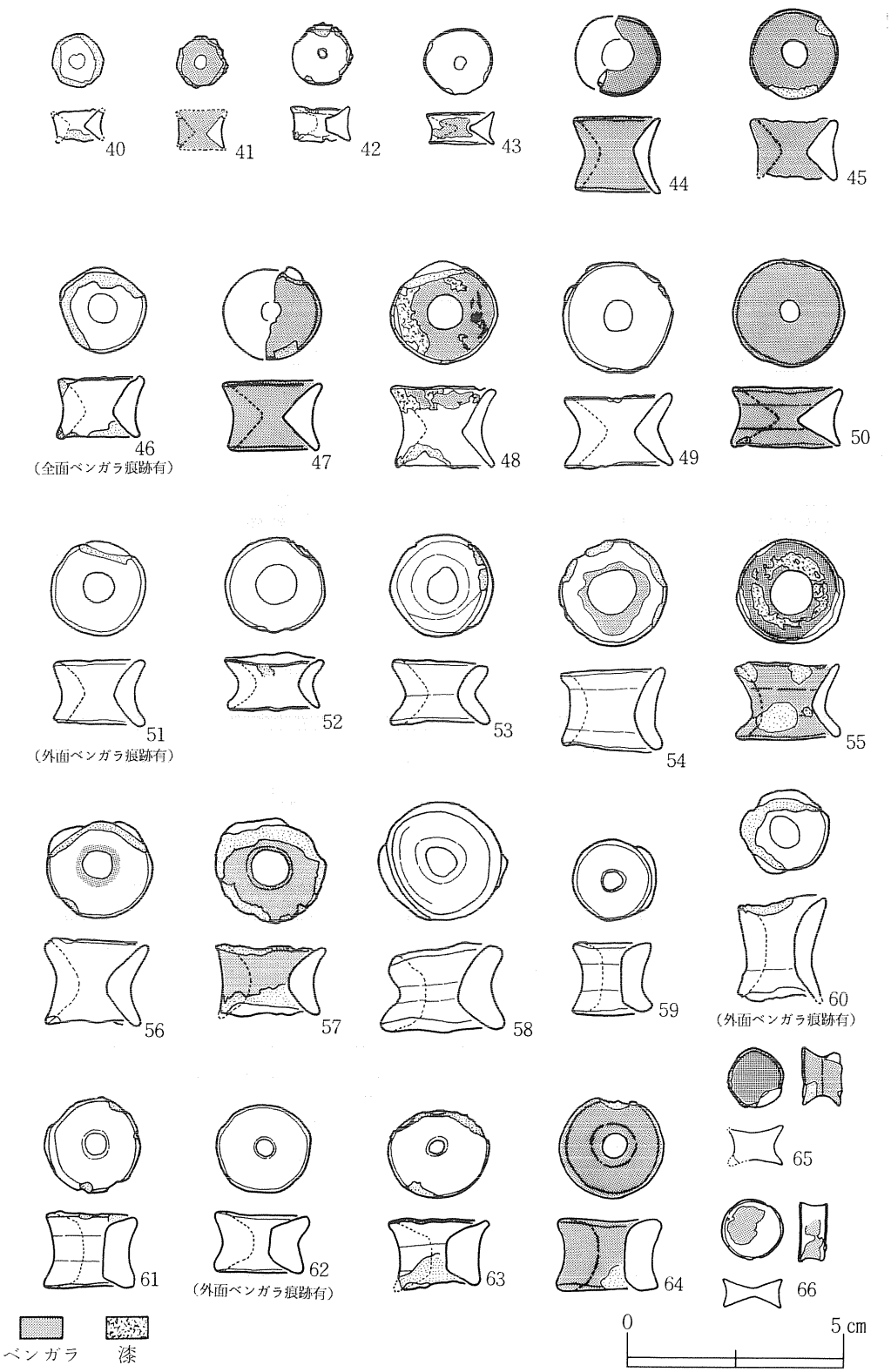


第52図　出土土製品（3）土偶（3）

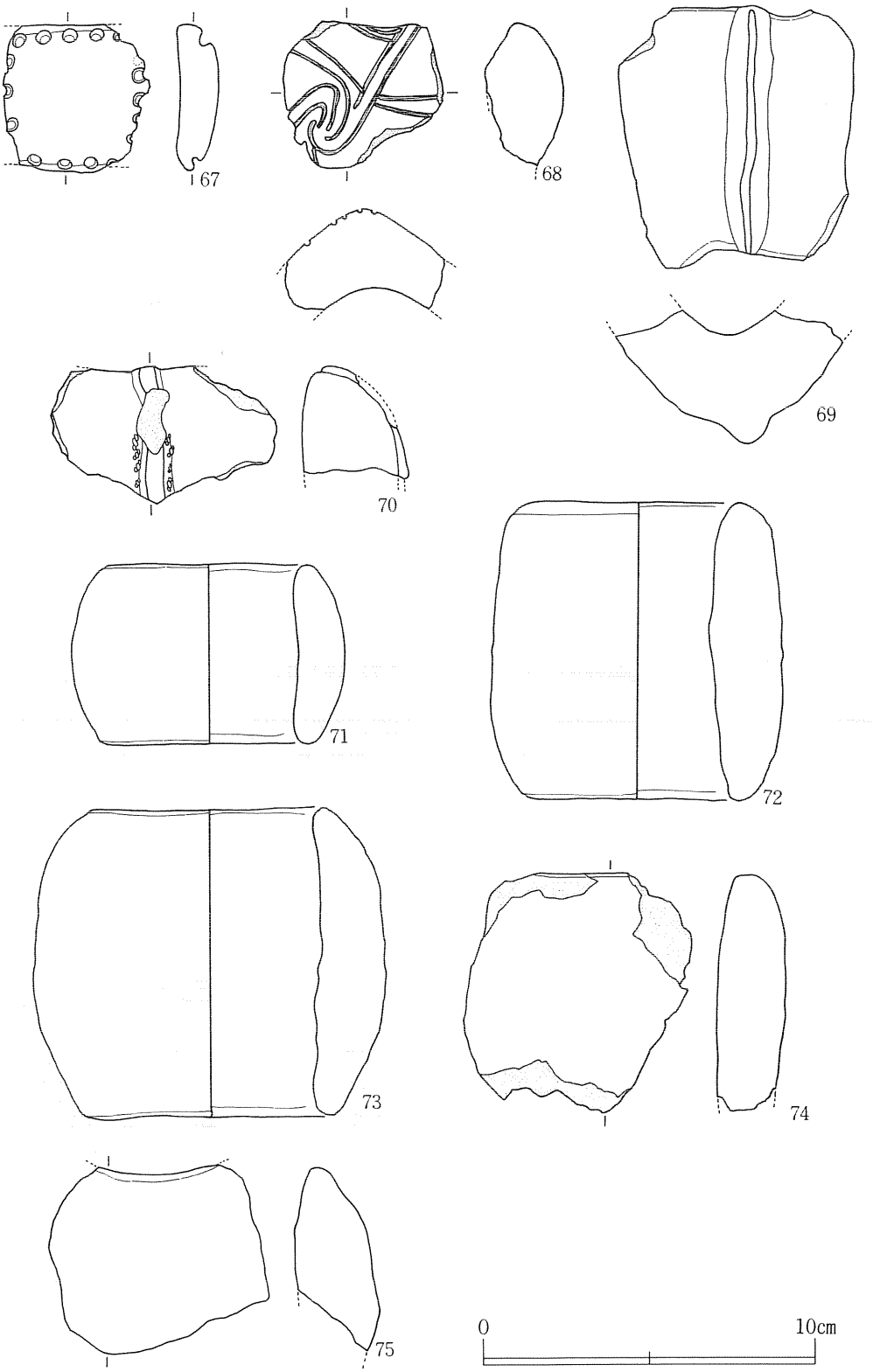


第53図　出土土製品（４）土偶（４）

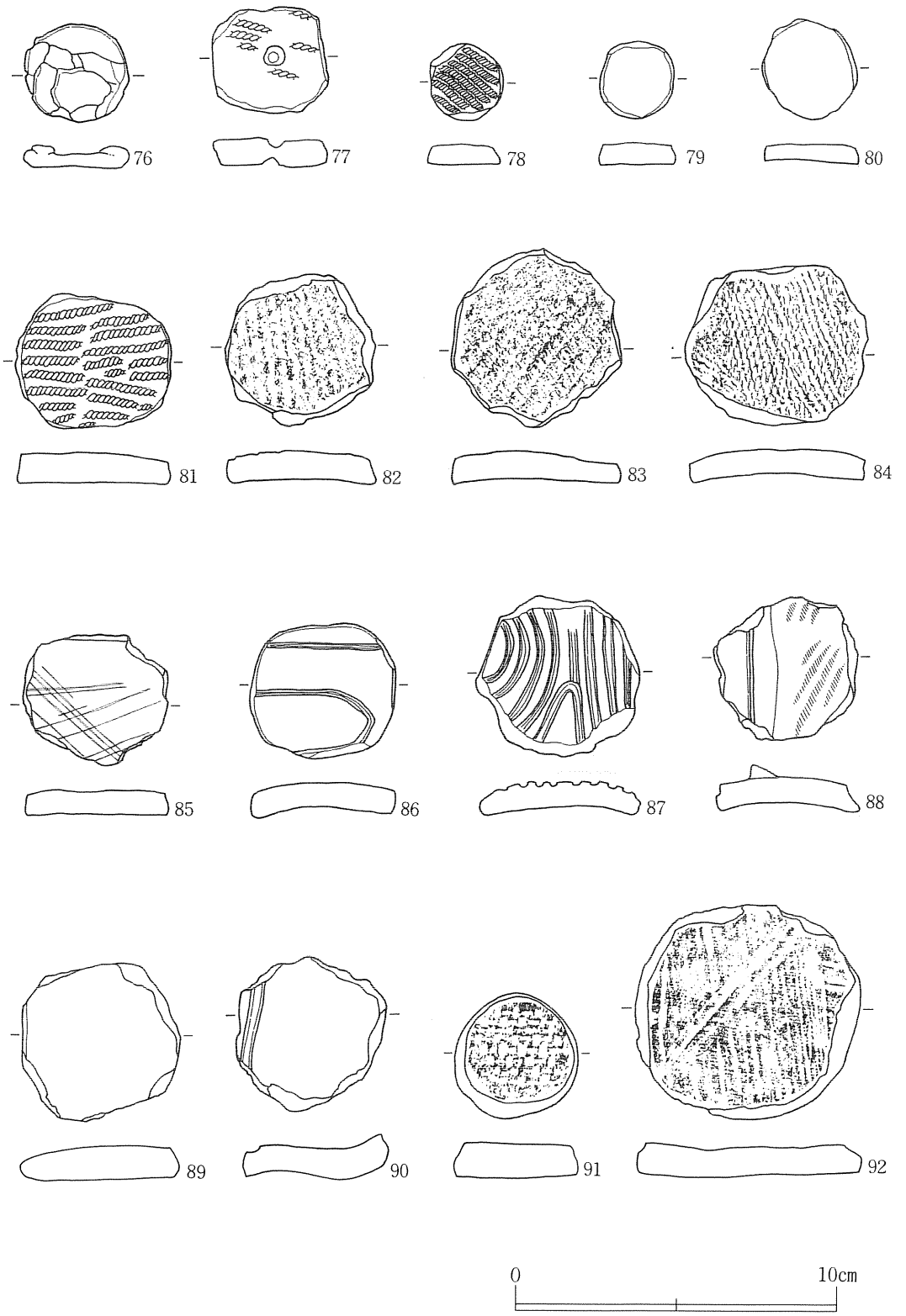
第54図　出土土製品（５）土偶（５）



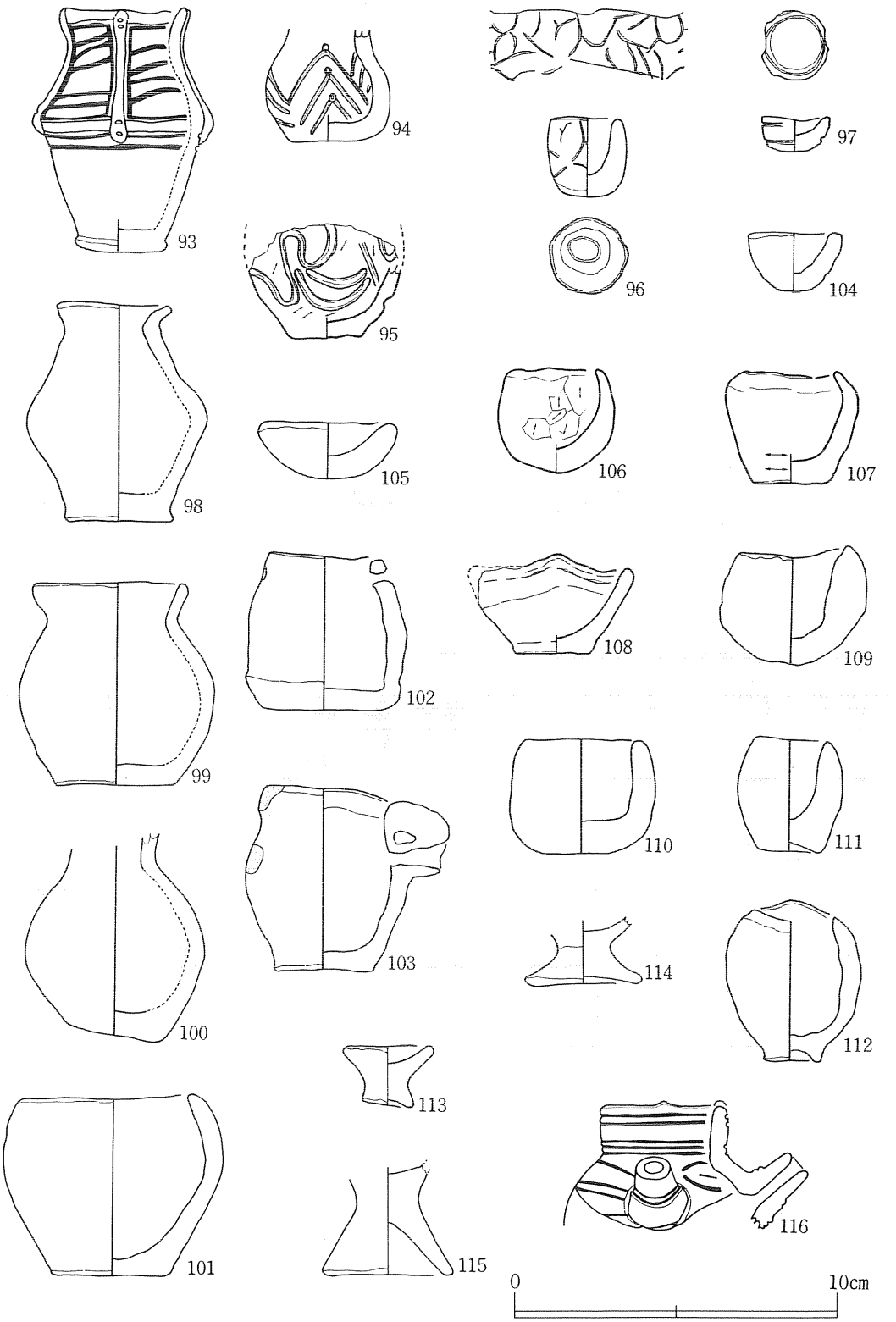
第55図　出土土製品（６）耳飾



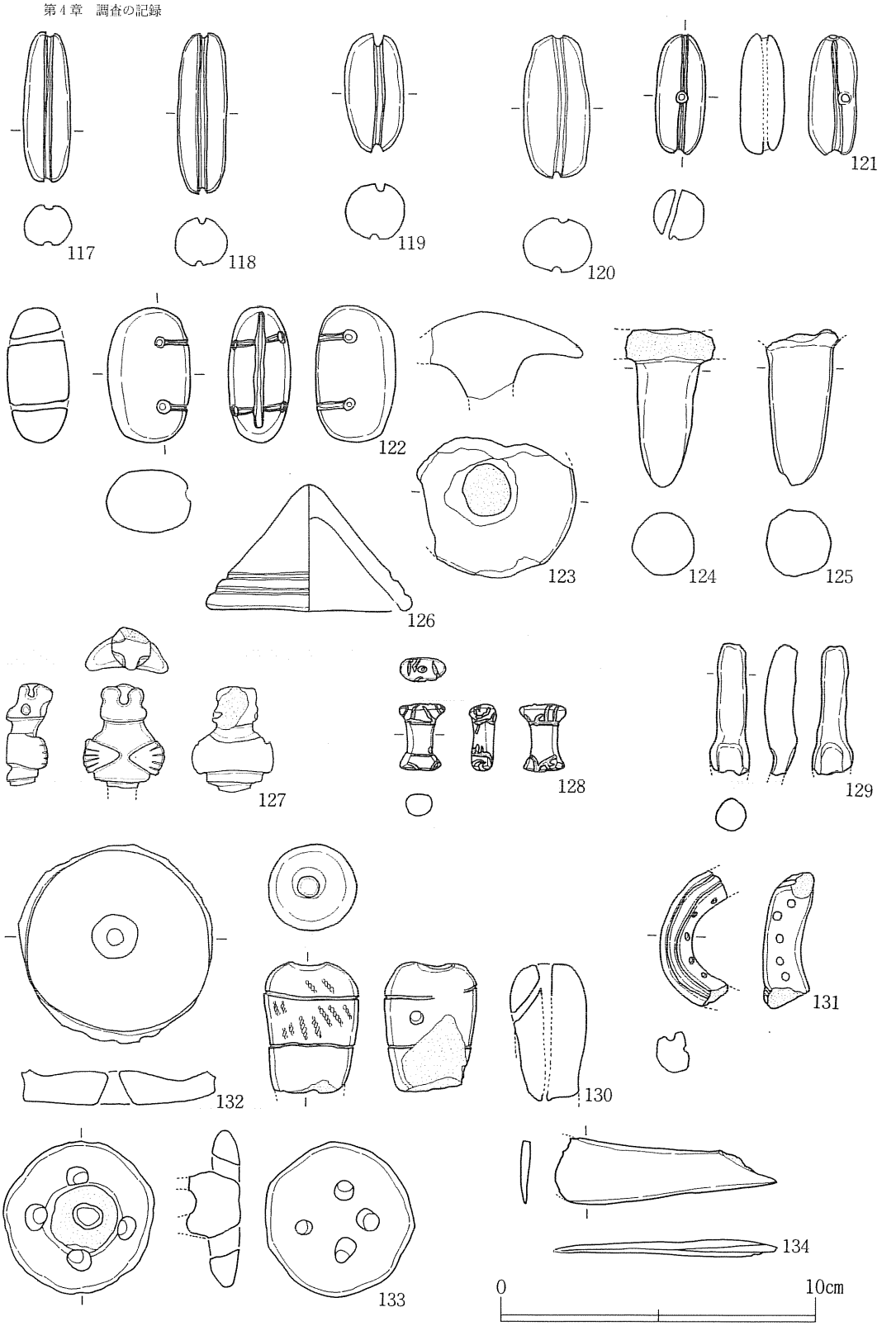
第56図　出土土製品（７）腕輪形土製品



第57図　出土土製品（8）円盤状土製品



第58図　出土土製品（９）ミニチュア土器



第59図　出土土製品(10)　土錘・骨角器

４．石器

出土した石器の数は膨大であり、その器種と点数は以下のとおりである。石鏃（721点）、石錐（188点）、嘴状石器（52点）、石匙（126点）、箆状石器（69点）、掻器（156点）、円形掻器（123点）、削器（1,041点）、ノッチのある石器（150点）、木葉形石器（47点）、三脚石器様石器（21点）、異形石器（９点）、磨製石斧（253点）、打製石斧（31点）、石錘（有孔礫を除いて1,305点）、石皿（約80点）、砥石（約30点）、凹石（約1,000点）、磨石（1,000点）。

これらの石器の大部分は、各調査区の第Ⅲ層～Ⅶ層（第２区での標準層位）から、他の土器・土製品・石製品などと共に出土したものである。第２・４・５区における石鏃・石錘の各グリット毎の出土点数を、付図１・２に示した。石鏃・石錘ともに同じような出土傾向であり、他の器種においても同様である。また、若干の石器は土坑の埋土中からも出土しているが、ここでは遺構の内外を問わず一括して扱っている。

以下、各器種別にその内容を略述するが、実測図を載せることのできたものは少なく、写真もその器種によっては代表的なもののみをとり上げた。石鏃・石錘については、その計測値も載せてあるが、計測表の番号と写真図版の番号とが符合する。

１）石鏃（第60～62図、第４～７表、巻頭図版５、図版74～78）

弓矢の先端に着けたと考えられる石器で、基本的に両面加工であり、原則として中軸線で左右対称形となる。721点が出土しており、基部の形状により大きく５類（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、破損品でいずれに属するかわからないものをＦとしてある）に分けられ、各類中でさらに細分されるものがある。

以下、各類について略述するが、点数などについては第４～７表を参照されたい。

Ａ類：基部がくぼむ、いわゆる凹基式である。くぼみの形状により３つに分けられる。348点（48％）と全石鏃の約半数を占める。

Ａ－ａ：くぼみが弧を描くものである。弧の直径が器最大幅より大きいもの（a'）と、小さいものとがある（a"）。第61・62図からわかるように、規模は長さ11～30㎜、幅10～23㎜、重さ0.2～1.3gに多いが、全体としてバラエティーに富む。

Ａ－ｂ：基部のくぼみが、大きく開く逆Ｖ字形を呈する。非常にていねいな作りで、大きさは長さ14～32㎜、幅11～20㎜、重さも0.2～0.9gの中に全て含まれ、規模・重量ともに規格性の高い類である。Ａ－ａ類と共にＡ類の半数を占め、全石鏃中でも24％と最多である。

Ａ－ｃ：基部のくぼみが逆Ｕ字形に深く入り込むタイプである。７点と僅少であるが、確固たる形態を持っている。

Ｂ類：基部が平らな類である。89点（12％）と比較的少ない。大きさ、重量ともにバラエティー

類		A			B		C	D				E	F	計
模式図														
点数（%）		348（48%）			89（12%）		31(4%)	226（31%）				4(1%)	23(3%)	721
細分類		a	b	c	a	b		a	b	c	d			
模式図														
点数（%）		165（23%）	176（24%）	7（1%）	41（6%）	48（7%）	31（4%）	99（14%）	54（7%）	22（3%）	51（7%）	4（1%）	23（3%）	
石材	頁岩	105（64%）	65（37%）	2（29%）	25（61%）	26（54%）	21（68%）	47（47%）	25（46%）	13（59%）	33（65%）	4（100%）	10（43%）	376（52%）
	黒耀石	20（12%）	24（14%）		1（2%）	2（4%）	1（3%）	4（4%）	2（4%）	0	2（4%）		5（22%）	61（8%）
	鉄石英	19（12%）	46（26%）		3（7%）	4（8%）	2（6%）	10（10%）	7（13%）	3（14%）	2（4%）		4（17%）	100（14%）
	玉髄	9（5%）	11（6%）		5（12%）	5（10%）	2（6%）	10（10%）	8（15%）	4（18%）	5（10%）		2（9%）	61（8%）
	チャート	11（7%）	25（14%）	5（71%）	6（15%）	11（23%）	4（13%）	25（25%）	11（20%）	2（9%）	8（16%）		2（9%）	110（15%）
アスファルト	イ（イ）	12点 13点	42点 23点	1点 1点	2点 2点	0 0	1点 0	5点 3点	1点 4点	0 0	1点 0	0 0		65点 46点
	ロ（ロ）	0 2点	0 3点	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1点	0 2点	0 0	3点 3点	0 0		3点 11点
	ハ（ハ）	3点 7点	2点 6点	0 1点	4点 1点	2点 0	1点 0	5点 0	0 0	0 0	3点 0	0 0		20点 15点

第60図　石鏃一覧（%は原則として小数点以下を四捨五入）

があり大きいものは特に厚みがありぼってりとしている。それらは製作もそれほどていねいではない。また、破損品では嘴状石器との区別の困難なものもある。

Ｂ－ａ：基部が平らなものである。

Ｂ－ｂ：基部がわずかに弧を描いて外に張り出すもので、一部はスクレーパー類かもしれない。

Ｃ類：Ｄ類と共にいわゆる凸基式であるが、基部両側からの抉りがほとんどなく、平面形がダイヤ形に近い。31点（４％）と少ない。八木遺跡中の石鏃の中では、大きく重いものが多い。

Ｄ類：茎を有する類である。226点（32%）と、Ａ類に次いで多い。基部の形状により４つに分けられる。

Ｄ－ａ：整った二等辺三角形の底辺中央に茎が付く形のものである。ていねいな作りで、形の整ったものが多い。このため、大きさは多少バラエティーがあるものの、重量の方は0.25〜1.35gの中にほとんどが含まれる。規格性の高い石鏃といえる。茎の折れているものが多い。

Ｄ－ｂ：茎の取付部が抉られているもので、Ａ－ａ類の基部中央にやや長い茎が付く形である。大きさ、重量ともに小〜中くらいにまとまりがある。

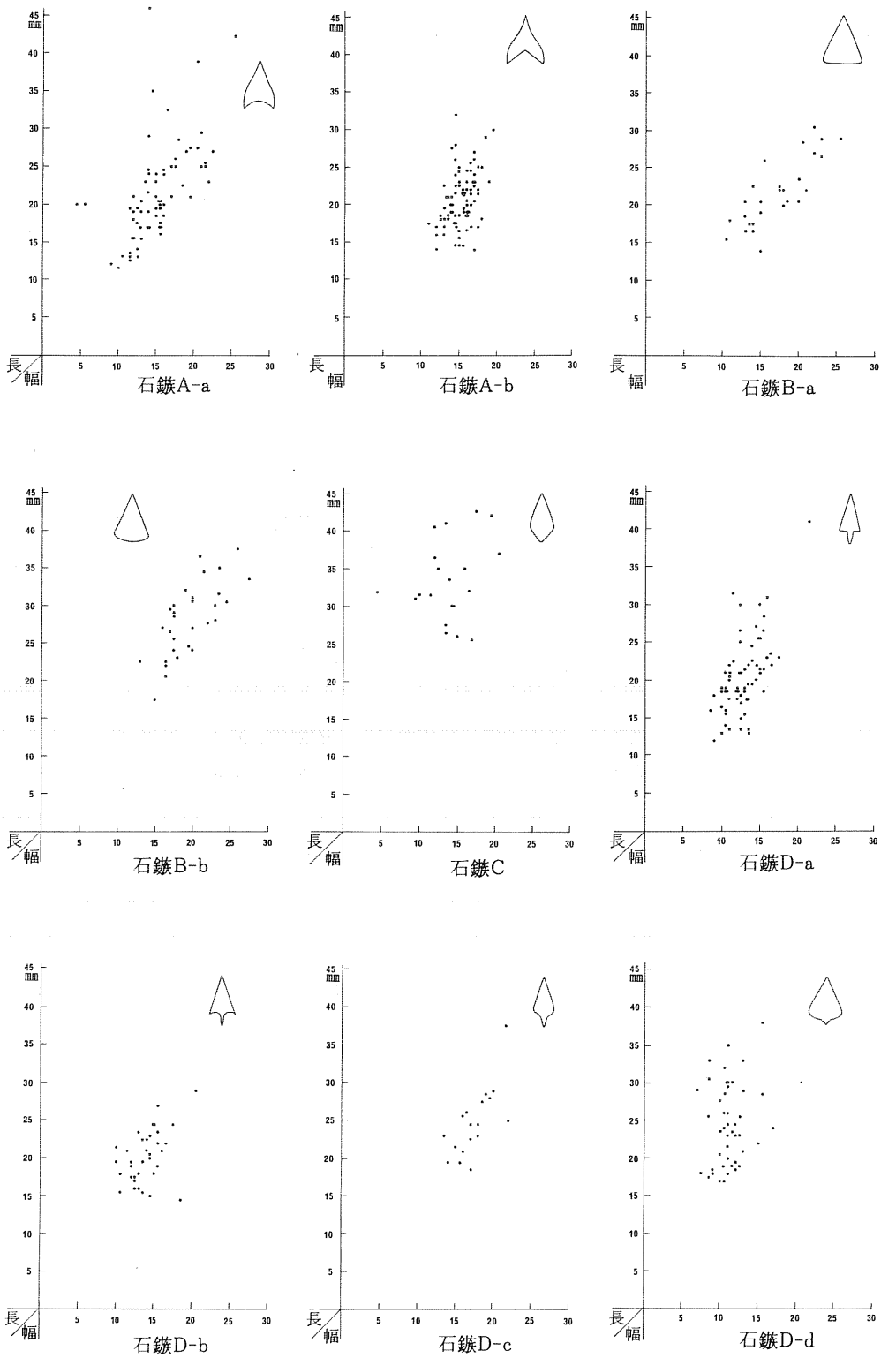
D－c：非常に短い茎の付くものである。他の類に比べて、長さの割に幅のあるものが多く、べったりとした感じの石鏃である。

D－d：茎付け根の抉りがそれほど明確ではないが、比較的長い茎を有する。大きさ、重量ともにバラエティーがある。

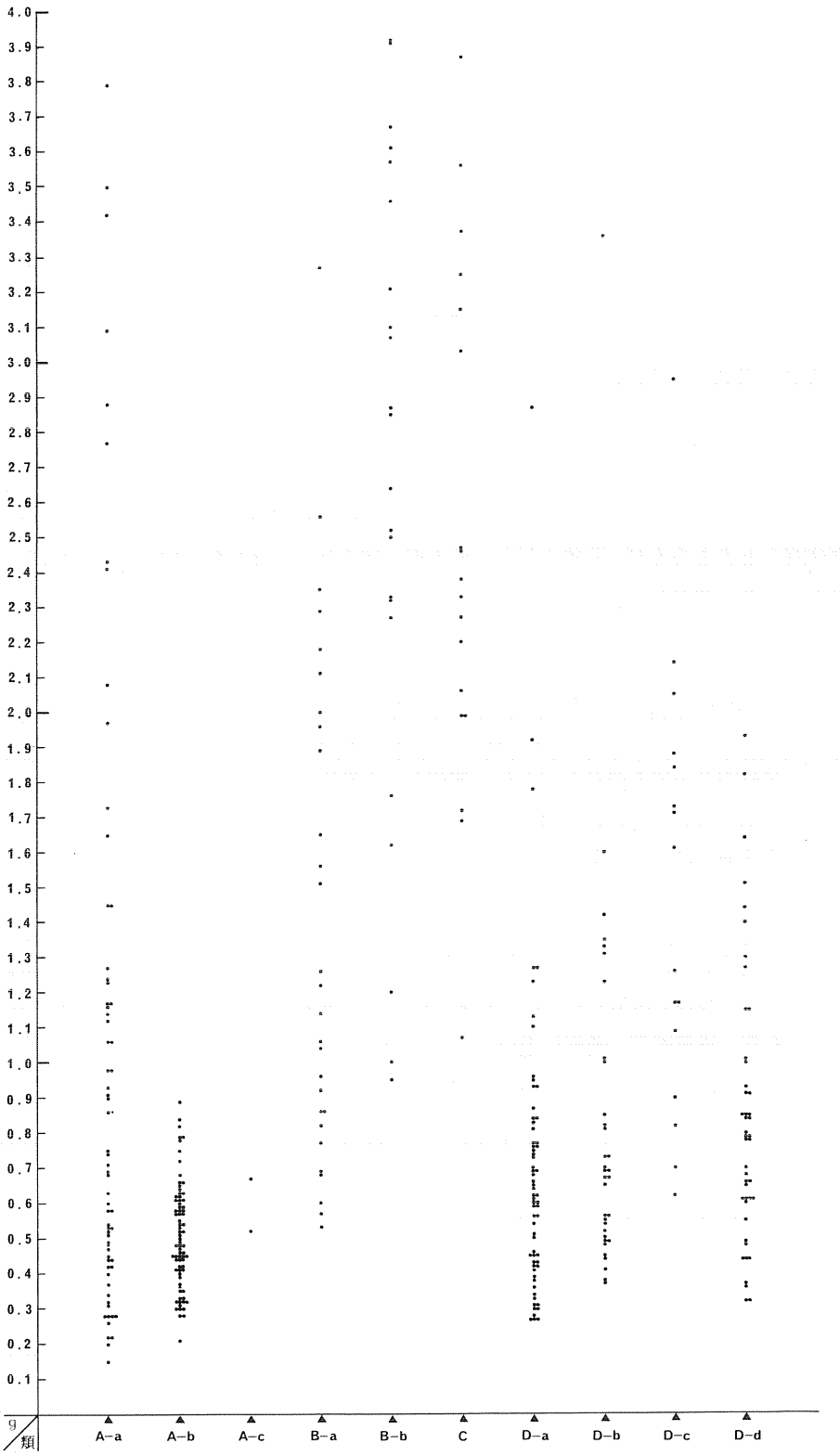
E類：棒状を呈するものであるが、破損品ばかりで、正確な形状は不明である。4点と最も少ない。石錐のA類と判別に苦しむものもあるが、本類が断面扁平なのに対し、石錐はそれが、菱形あるいは厚い凸レンズ状を呈している。

石鏃に用いられている石材は、頁岩、黒耀石、鉄石英、玉髄、チャートの5種類であり、各類との関係は第60表中段に示したとおりである（点数についてはこの他に、5種類の石材のどれかであることは確実であるが、焼けているために判別できなかったものが13点ある）。頁岩（52%）と他の4種類の石材（合計48%）が、ほぼ半分ずつ使用されている。石鏃と嘴状石器を除く他の剥片石器では、頁岩が90%以上を占めるのに対し、黒耀石、鉄石英、玉髄、チャートが非常に多く用いられている。従って、巻頭図版にもあるように、ていねいな作りのものが多いこととも相まって、非常にカラフルで流麗な石鏃が多い。また、それら4種類の原石の大きさにも依るかと思われるが、4種類の石材の製品は小さなものが多い。

器面に、着柄の際の接着材として用いられたアスファルトの付着しているものが、160点（全体の22%）ある。この数字は、県内の縄文時代後期前～中葉の石鏃としては、決して多いとは言えないが、着柄の様子の復原できるものも少なくない。それを各種別に示したのが、第60表の下段である（アスファルトの付着のあり方は、大きくイ．ロ．ハであり、カッコ付きのものは、判然としないものを示している）。イは、確実に根ばさみ（骨角器と考えられる）に納められたものであり、ロは、その可能性のうすいもの、ハは、いずれとも判断できないものである。この図表からも明らかなように、根ばさみに納められて用いたと考えられる石鏃が圧倒的に多い。しかもそれは、A類が多く、D類にも見られる。ロは、明確なものとしてはD－d類に3点見られるのみである。イの好例は、11・23・218・223・552・702など、ロの好例は、674・685などである。なお、上記のような傾向は、アスファルトの見えないものについても変わるものではないと考えられるが、このような傾向はアスファルトが付着している160点についての結果であり、洗浄などで落ちてしまいやすい黒耀石などの石材のものには、付着例が少ない。なお、頁岩以外の美麗な石鏃にはほとんどアスファルトが付着していないことは、それらが果して実用に供されたか否かという疑問も出て来る。出土状態などで明確にはできなかったものの、出土地が墓域と重なっていることを考えれば、それらのいくらかは副葬品的な性格を有していたものかもしれない。

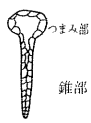


第61図　石鏃各類長幅分布



第62図　石鏃各類重量分布

類	A	B						計
		a	b	c	d	e	f	
模式図（細分類）								
点数（%）	26点（14）	37点（20）	27点（14）	23点（12）	55点（29）	6点（3）	14点（7）	188点



各部の名称

第63図　石錐一覧　（%は原則として小数点以下を四捨五入）

２）**石錐**（第63図、図版79）

穿孔するための石器で、188点出土している。石材のほとんどは頁岩で、他にはチャート９点、黒耀石、水晶が各１点である。支持するためのつまみ部を有するか否かで、２大別される。

Ａ類：（図版79上１～７）　明確なつまみ部を有しない棒状の石錐である。石鏃のＥ類との判別が困難なものもあるが、石錐の場合、断面形が菱形あるいは四角、円に近く、器幅と厚さが近似している。器長が1.8～6.7cmのものまでがある。また、錐部先端が使用の結果半球状になり、トロトロしているものもある（図版115下）。

Ｂ類：何らかの形でつまみ部を有する類である。

Ｂ－ａ：（図版79上８～14）つまみ部がていねいな剥離でつくられている類である。錐部の全長が２cm以上の長さがあり、基部から先端近くまでの太さがほとんど変わらない。錐部の断面形は整った菱形をなすものが多い。

Ｂ－ｂ：（図版79上15～19）　Ｂ－ａ類の小型品である。錐部の長さは１cm前後が多い。錐部先端がトロトロになっているものがある。

Ｂ－ｃ：（図版79上20，21）これより以下の類は、つまみ部への二次加工がほとんど見られない。本類は、錐部が比較的長いものの、その基部と先端の太さが大きく異なるものである。錐部断面は菱形に近い。

Ｂ－ｄ：（図版79上22～28）　一端が尖るような比較的厚手の剥片に錐部を付したものである。錐部とつまみ部に明瞭な境がない。錐部断面形は、菱形、平行四辺形等いろいろである。

Ｂ－ｅ：（図版79上29,30）　大型で部厚い剥片の一端に、短い錐部を片面加工により作出したものである。錐部の断面は三角形が多い。

Ｂ－ｆ：（図版79上31～33）　比較的大きな剥片の一部に、片面加工による小さな錐部を作出したものである。断面形は三角形を呈する。

３）嘴状石器（第64～67図、第８表、巻頭図版５、図版79）

比較的小型・両面加工の石器で、先端部に、鳥の嘴（くちばし）に似て鋭く尖る部分を持つ石器がある。これまでほとんど知られていなかった（あるいは１つの定型的な石器として捉えられていなかった）石器であるが、八木遺跡からはこれが約50点ほど出土している。このため、嘴状石器（くちばしじょうせっき）と命名し、ここに定型的な石器の１つとして扱う。基部の形状によって、２大別される。なお、本石器については実測図も付してあるが、その番号は一連番号であり、(　　)内の番号が図版及び計測表の番号と対応する。

Ａ類：（第65図１～第66図13、図版79下１～14，46）

着柄のための明瞭な基部を有するものである。先端のいわゆる嘴状になる部分は、本来第65図１，２，５のような鋭く尖るものであったと考えられるが、この部分が欠けたりしためか、基部を除く縁辺の再調整を施した石器が多い。基部には、16点中７点にアスファルトの付着が認められる。

Ｂ類：（第67図14～20、図版79下15～44）

全体の形状が、Ａ類の基部を除去した形で、視る角度によっては、鷲など猛禽類の爪にも似ている。やはり、先端が尖って鋭い。基部は幅広で、若干外側に弧状になるものが多いが、この部分にアスファルトの付着しているものが多い。

その他：（第67図21、図版79下45，47～49）

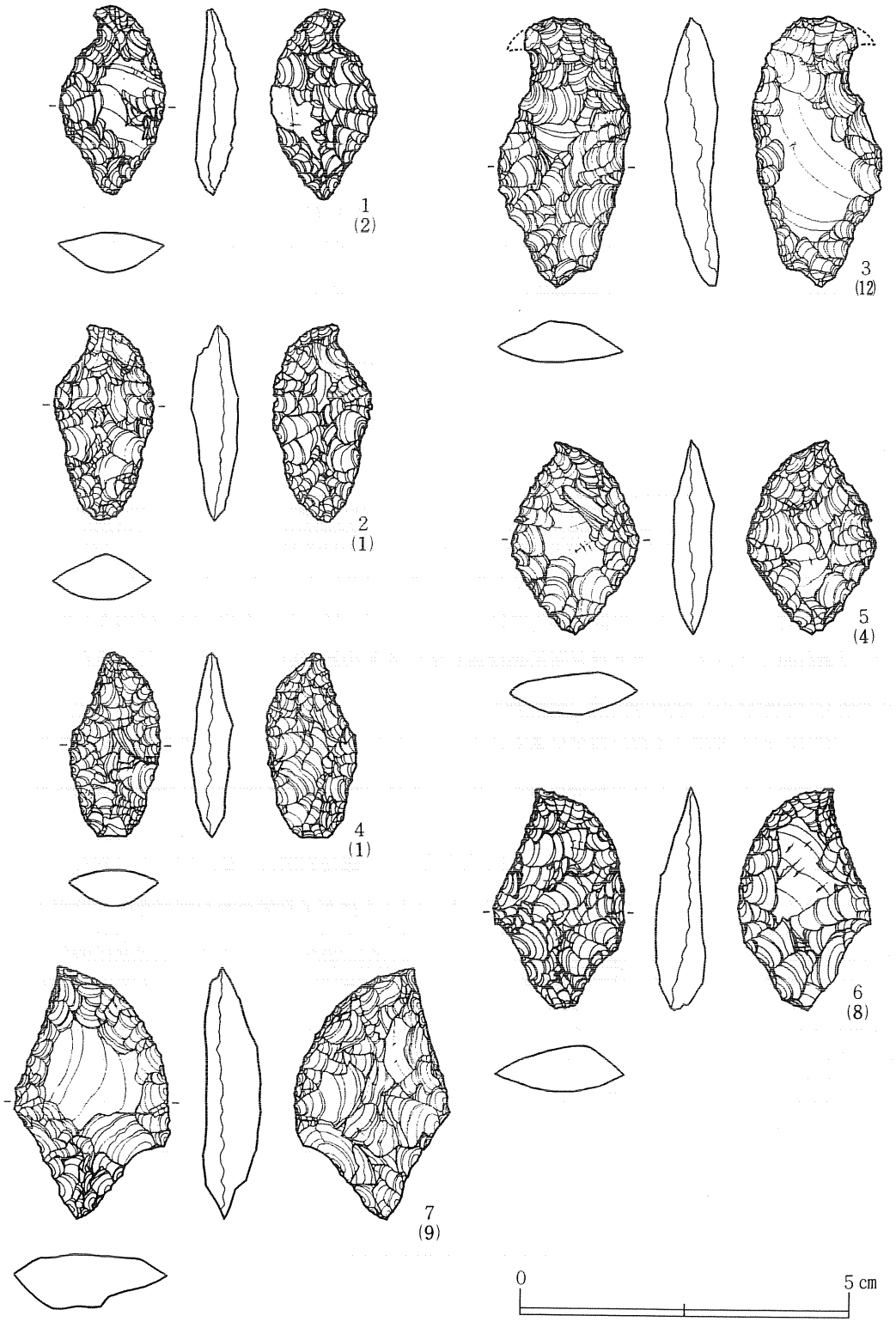
形状及び先端部はＡ類に似ているものの、45を除いては片面あるいは半両面調整の石器であるため、ここではその他とした。後述するように、嘴状石器に似た機能を有した類と考えられる。

類		A		B		その他	計
模式図							
点数（アスファルト）		16	（7）	30	（14）	6	52
石材（（　）内はアスファルト付）	頁岩	3	（2）	6	（4）	6	15（6）
	黒耀石	1	（0）	5	（0）		6（0）
	鉄石英	3	（2）	7	（3）		10（5）
	玉髄	7	（2）	9	（6）		16（8）
	チャート	2	（1）	3	（1）		5（2）

第64図　嘴状石器一覧

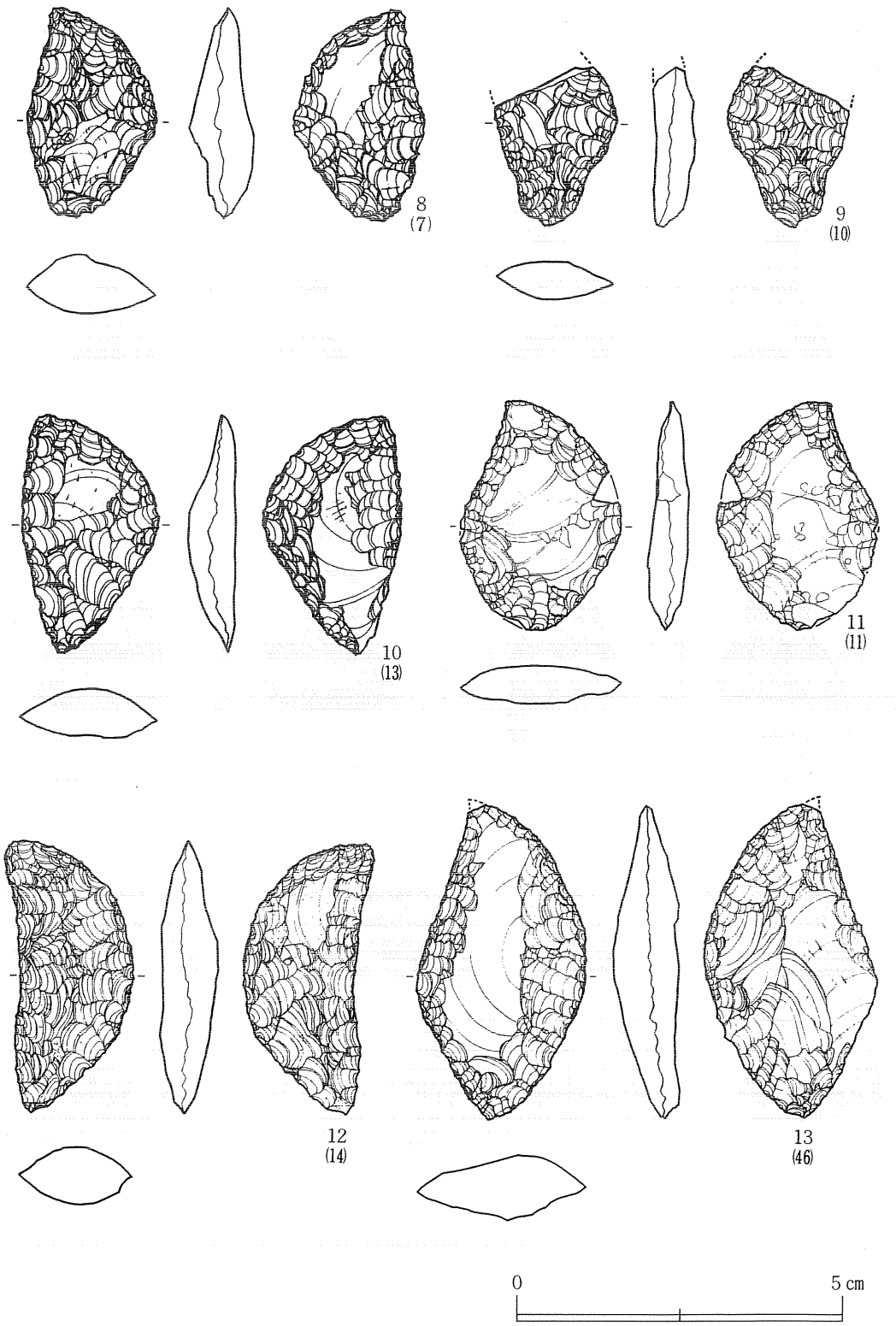
嘴状石器は、第64図からもわかるようにＡ・Ｂ類合わせて46点中、21点と約半数にアスファルトの付着が認められる。また、アスファルトの付着の見えないものについても、アスファルトが付着したままで残りにくい石材の多いことも合わせて考えると、大部分の石器が着柄されて使用されたものと想定して良いかもしれない（アスファルトの残り易い頁岩の場合は、９点中６点に認められる）。

嘴状石器（ここではＡ・Ｂ類のみを



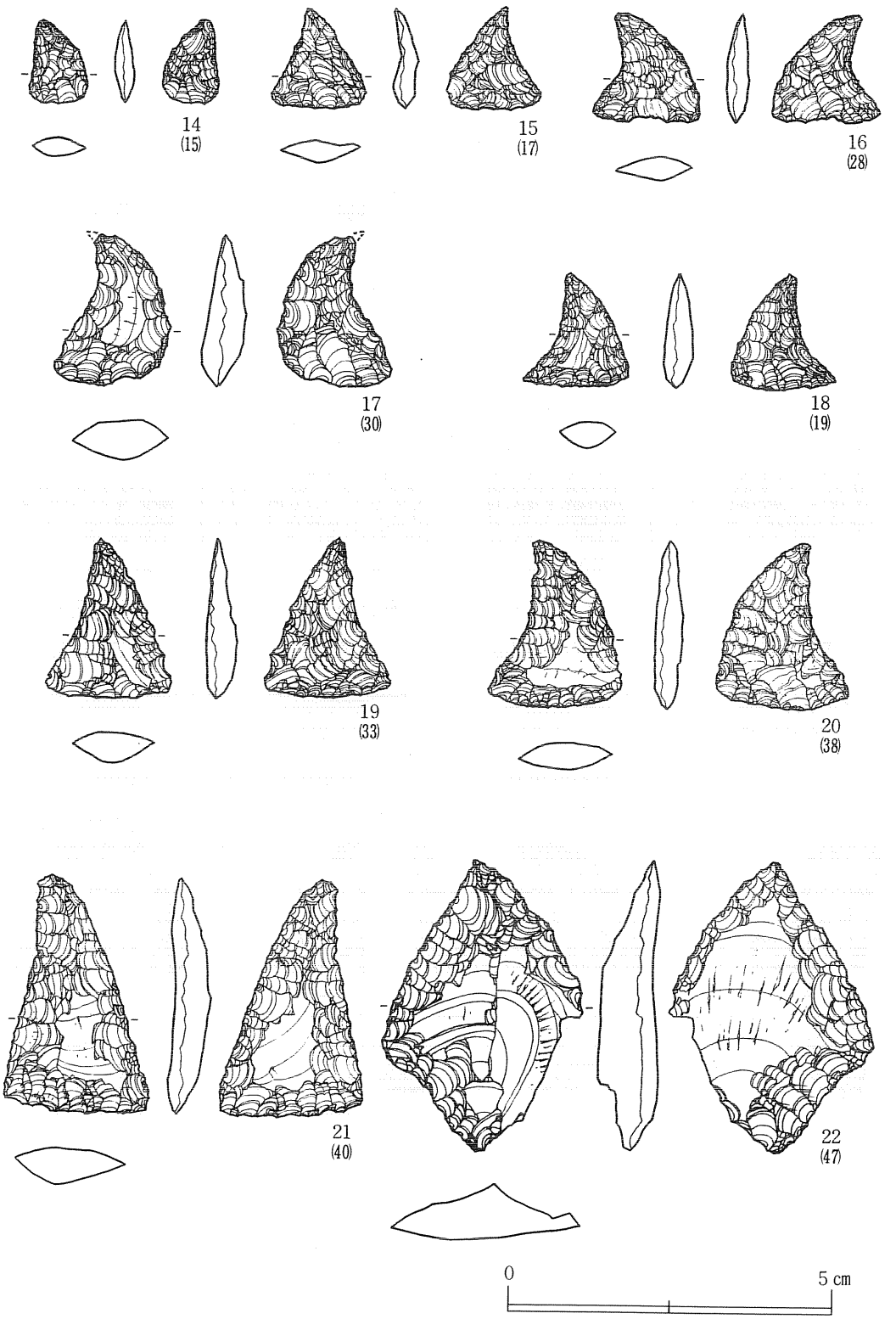
（　）内は写真の番号

第65図　嘴状石器（１）



第66図　嘴状石器（2）

（　）内は写真の番号



第67図　嘴状石器（３）　　（　）内は写真の番号

第4表　石鏃計測一覧

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
1	4・5	13.5	11.5	3	0.22	頁	
2	〃	12.5	11.5	2.5	0.26	黒	
3	6	13	10.5	2	0.22	鉄	
4	4・5	13	11.5	2	0.32	貞	(イ)
5	〃	11.5	1	2	0.20	黒	
6	〃	14	12.5	2.5	0.28	〃	
7	2	13	12.5	2.5	0.28	頁	
8	〃	15.5	12	2.5	0.42	鉄	
9	〃	15.5	13	2	0.28	黒	
10	4・5	17	14	3	0.48	チャ	
11	〃	17	15.5	3	0.52	?	イ
12	〃	16	15.5	3	0.58	頁	ハ
13	〃	17	14	3	0.63	〃	
14	〃	17	13	3.5	0.58	〃	
15	〃	8.5	15	4	0.74	チャ	
16	〃	20.5	15	4	0.92	頁	ハ
17	2	20.5	15.5	4	0.89	〃	
18	4・5	17.5	15.5	3.5	0.69	〃	
19	〃	20	45	3	0.54	〃	イ
20	〃	19	14	4	0.60	〃	
21	〃	19.5	12.5	3	0.45	玉	
22	2	15.5	12	2	0.28	頁	
23	4・5	17	15.5	2.5	0.42	〃	
24	7	20	4.5	3	0.54	〃	
25	2	18.5	16	4.5	1.06	〃	
26	〃	20.5	15.5	4	0.68	〃	イ
27	4・5	20.5	15.5	3.5	0.71	〃	(ハ)
28	2	21	16	2.5	0.34	〃	イ
29	〃	22	15	2.5	0.44	黒	
30	4・5	22	19.5	4	1.14	頁	
31	〃	22	17	7.5	1.97	〃	
32	2	24.5	14	3	1.27	〃	(イ)
33	4・5	25	21	4	1.16	〃	〃
34	〃	27	19	3.5	1.24	〃	
35	〃	27.5	19.5	4.5	1.65	〃	
36	2	25.5	21.5	8	3.79	〃	
37	4・5	25	21.5	6	2.43	〃	
38	〃	27	22.5	5	2.77	〃	
39	2	27.5	20.5	8.5	3.50	〃	
40	6	29.5	21	5.5	2.88	〃	
41	4・5	28.5	18	4.5	2.41	チャ	
42	〃	23	22	4	1.73	頁	(ハ)
43	2	24.5	16	4	1.45	チャ	
44	〃	(22.5)	(16)	3	(0.61)	頁	
45	〃	(24)	(10.5)	4	(0.83)	鉄	
46	〃	(16)	(14)	2.5	(0.41)	頁	
47	〃	(12)	(14)	2.5	(0.38)	黒	
48	4・5	(16.5)	(12)	2.5	(0.39)	頁	
49	2	(12.5)	(19)	2.5	(0.47)	鉄	
50	4・5	(14.5)	(14)	2.5	(0.63)	〃	
51	2	(19.5)	(10.5)	3	(0.40)	頁	
52	〃	(24)	(16.5)	4.5	(1.60)	〃	(ハ)
53	〃	(29.5)	(18)	3	(0.89)	〃	(イ)
54	4・5	(20)	(12.5)	2.5	(0.38)	〃	
55	2	(19)	(15)	3.5	(0.64)	〃	
56	〃	(17.5)	(20)	2.5	(0.72)	〃	(イ)
57	4・5	(19)	(14)	2.5	(0.44)	〃	
58	2	(23)	16.5	3.5	(0.67)	〃	
59	〃	(17)	(14)	2.5	(0.39)	〃	
60	4・5	(13.5)	(12)	2.5	(0.24)	〃	
61	〃	(19.5)	(14.5)	3	(0.63)	鉄	
62	〃	(23)	(16.5)	3.5	(0.67)	チャ	
63	〃	(16)	(15)	3	(0.54)	頁	
64	2	(20)	(12)	5.5	(1.09)	〃	
65	〃	(24)	(16.5)	4	(1.34)	〃	(ハ)
66	〃	(13)	(14)	4	(0.83)	玉	
67	4・5	(16)	(16)	3.5	(0.59)	頁	
68	〃	(14)	(11.5)	3	(0.32)	〃	
69	2	(10)	(13.5)	2.5	(0.31)	鉄	(イ)
70	4・5	(20.5)	(15)	2.5	(0.58)	頁	
71	4・5	(16)	(11.5)	2.5	(0.29)	黒	
72	〃	(12.5)	(12.5)	2.5	(0.51)	頁	
73	2	(23.5)	(18)	5	(1.33)	玉	
74	〃	(21)	(20)	6.5	(2.25)	頁	(ハ)
75	〃	(14.5)	(14.5)	3	(0.57)	鉄	
76	〃	(17)	(13)	3.5	(0.48)	頁	
77	4・5	(15)	(12)	2	(0.33)	〃	(ハ)
78	〃	(15)	(13)	2	(0.35)	〃	
79	10	(14.5)	(12)	3	(0.40)	黒	
80	4・5	(9)	(13)	2	(0.27)	鉄	
81	2	(19)	(10)	3	(0.46)	〃	
82	7	(11)	(14)	3.5	(0.53)	頁	
83	2	(21.5)	(13.5)	2.5	(0.63)	〃	
84	4・5	(23)	(14)	2.5	(0.59)	〃	イ
85	〃	(16)	(13.5)	2	(0.51)	〃	
86	〃	(26.5)	(17.5)	6.5	(2.17)	〃	
87	〃	(16)	(16.5)	3.5	(0.77)	黒	
88	2	(24)	(11.5)	3	(0.57)	〃	
89	〃	(21.5)	(13)	2.5	(0.48)	頁	
90	〃	(15)	(15.5)	2.5	(0.51)	黒	
91	〃	(8.5)	(16)	2.5	(0.31)	〃	
92	〃	(13.5)	(13)	2.5	(0.36)	鉄	
93	〃	(19)	(17.5)	3.5	(0.96)	頁	
94	4・5	(13.5)	(13)	3	(0.42)	黒	
95	2	(21)	(13)	2.5	(0.47)	頁	イ
96	4・5	(12)	(12)	2	(0.27)	黒	
97	〃	(23)	(15.5)	3.5	(0.94)	頁	
98	2	(20.5)	(14.5)	4	(0.98)	黒	
99	4・5	(18)	(16)	3	(0.68)	頁	
100	2	(16.5)	(14.5)	2.5	(0.39)	〃	
101	〃	12	9	1.5	0.15	黒	
102	〃	17.5	12.5	3	0.51	鉄	
103	4・5	18	12	2.5	0.37	黒	
104	2	19.5	11.5	2.5	0.49	頁	(ロ)
105	〃	19	12	2	0.31	〃	イ
106	〃	19	13	2.5	0.40	〃	(イ)
107	4・5	20.5	13	2	0.53	チャ	
108	2	20	5.5	3	0.53	頁	イ
109	4・5	21.5	14	2.5	0.44	〃	
110	〃	21	12	2.5	0.47	〃	
111	7	24	16	2.5	0.98	〃	(ロ)
112	4・5	23	13.5	4	0.75	〃	
113	〃	23	15	3	0.86	〃	
114	2	24	14	4	1.17	〃	
115	4・5	24	15	4.5	1.17	〃	
116	〃	22.5	18.5	4	1.12	〃	
117	〃	25	17	4	0.93	玉	(イ)
118	2	25	17.5	4	0.90	頁	イ
119	4・5	29	14	3.5	1.06	〃	イ
120	〃	26	17.5	5	1.23	〃	
121	〃	32.5	16.5	4.5	2.08	〃	
122	2	35	14.5	5	1.45	〃	
123	〃	39	20.5	6	3.42	〃	
124	10	46	14	5.5	3.09	〃	
125	4・5	(14)	(12)	2.5	(0.31)	鉄	
126	2	(18.5)	(13.5)	2.5	(0.43)	〃	
127	〃	(15)	(11.5)	2.5	(0.47)	頁	
128	〃	(20)	(9.5)	3	(0.40)	玉	
129	4・5	(15.5)	(12)	3	(0.43)	頁	イ
130	2	(23)	(12)	3	(0.68)	〃	(イ)
131	4・5	(13.5)	(14)	2.5	(0.48)	玉	
132	〃	(20.5)	(14.5)	3.5	(0.74)	頁	
133	〃	(11)	(14.5)	4	(0.50)	玉	
134	〃	(19)	(16.5)	4.5	(1.09)	チャ	
135	2	(14.5)	(13.5)	2	(0.38)	黒	
136	4・5	(13.5)	(12)	3.5	(0.50)	〃	
137	〃	(17.5)	(11.5)	2	(0.35)	頁	(イ)
138	2	(19.5)	(12)	2.5	(0.47)	チャ	
139	〃	(13.5)	(11)	3	(0.40)	鉄	(イ)
140	4・5	(10.5)	(11)	2.5	(0.34)	〃	(ハ)
141	10	(14)	(12.5)	2.5	(0.34)	頁	
142	4・5	(17.5)	(13.5)	2.5	(0.58)	玉	
143	〃	(21)	(13)	3	(0.62)	頁	
144	〃	(14.5)	(14)	3	(0.57)	〃	イ
145	〃	(11)	(16)	3	(0.36)	鉄	
146	〃	(11)	(13.5)	2.5	(0.36)	黒	
147	〃	(19.5)	(12.5)	3	(0.71)	頁	
148	〃	(19)	(10.5)	3	(0.42)	鉄	
149	〃	(18)	(14.5)	2.5	(0.50)	頁	イ
150	2	(23)	(17)	4	(1.19)	チャ	
151	〃	(17.5)	(16.5)	3	(0.72)	頁	
152	4・5	(20)	(16)	5	(1.45)	〃	
153	2	(26)	(14)	2.5	(0.87)	〃	(イ)
154	4・5	(24)	(20.5)	5.5	(2.44)	〃	ハ
155	—	25.5	12.5	6	1.40	チャ	
156	4・5	(20.5)	(15.5)	4	(1.05)	頁	
157	2	(26.5)	(18.5)	4.5	(1.46)	〃	(イ)
158	4・5	23.5	14.5	3	(0.93)	〃	
159	〃	(20.5)	(17)	(3.5)	(0.79)	玉	
160	〃	(23.5)	(15.5)	2.5	(0.61)	鉄	(イ)
161	2	(26.5)	(18.5)	4	(1.30)	チャ	
162	4・5	(27.5)	(17.5)	6.5	(1.94)	頁	
163	2	(20)	(20.5)	3	(1.27)	〃	
164	4・5	(24.5)	(19.5)	4.5	(1.66)	〃	
165	2	(29)	(21)	5.5	(2.35)	〃	
166	4・5	14	12	2	0.21	黒	
167	〃	14.5	14.5	2.5	0.54	チャ	イ
168	〃	14.5	15	2.5	0.48	〃	
169	〃	17	12	2	0.30	頁	イ
170	〃	14.5	15.5	3	0.57	鉄	
171	2	16	13	2.5	0.45	?	
172	4・5	14	17	2.5	0.33	玉	
173	〃	19	14	2.5	0.30	黒	
174	〃	17.5	11	2	0.28	頁	(イ)
175	〃	16.5	16	2.5	0.32	〃	〃
176	2	17	13	2	0.28	鉄	〃
177	4・5	15.5	15	2.5	0.48	黒	
178	2	18	13.5	2	0.32	チャ	
179	4・5	17	16.5	3	0.39	頁	イ
180	〃	18	13	2	0.32	〃	
181	—	17.5	14.5	2.5	0.41	〃	
182	2	18.5	15	2.5	0.37	黒	(ハ)
183	〃	17	14.5	3	0.41	玉	イ
184	〃	17	17.5	5	0.75	黒	
185	〃	17.5	14.5	2	0.36	チャ	
186	4・5	18.5	12.5	2	0.33	鉄	
187	〃	18	12.5	2.5	0.30	貞	
188	〃	19.5	13	2.5	0.32	〃	イ
189	〃	18.5	16	2.5	0.35	〃	〃
190	〃	19	16	3	0.65	〃	(イ)
191	〃	21	14	2	0.31	黒	
192	〃	20	14	2.5	0.35	頁	イ
193	〃	18.5	13.5	3	0.46	黒	
194	2	22.5	13	2.5	0.49	〃	
195	4・5	21	13.5	2.5	0.42	頁	
196	〃	19	15.5	2.5	0.59	鉄	
197	〃	20.5	16	2.5	0.63	黒	
198	2	19	14	2.5	0.40	鉄	
199	4・5	18.5	14.5	2.5	0.41	黒	
200	〃	18	18	2.5	0.57	?	
201	〃	18.5	16	2.5	0.53	?	イ
202	〃	21.5	14.5	2.5	0.51	頁	〃
203	〃	19.5	15.5	3	0.55	〃	〃
204	〃	20	14	3	0.45	〃	〃
205	2	20	16	2	0.45	〃	〃
206	4・5	21.5	17.5	3.5	0.68	黒	
207	2	21	14.5	2.5	0.45	頁	(ロ)
208	4・5	21.5	15.5	2	0.44	〃	(イ)
209	〃	20	16.5	2.5	0.44	〃	イ
210	〃	22.5	14.5	3	0.54	〃	

1～165＝A－a類　166～210＝A－b類　（　）は破損　※＝アスファルト付着　頁＝頁岩　黒＝黒耀石　鉄＝鉄石英　玉＝玉髄　チャ＝チャート

第5表　石鏃計測一覧

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
211	4・5	22.5	17	2.5	0.52	鉄	
212	2	22.5	15	3	0.58	玉	イ
213	4・5	22	16	2.5	0.44	チャ	
214	〃	22.5	16.5	3	0.61	鉄	イ
215	〃	24.5	16.5	3	0.47	〃	
216	2	22	17.5	3	0.58	〃	
217	〃	22	16.5	3	0.60	玉	
218	4・5	23	15	3	0.48	頁	イ
219	2	23	16	3	0.66	チャ	(ロ)
220	〃	21.5	15.5	3	0.52	頁	
221	4・5	22	15.5	2.5	0.57	チャ	
222	2	28	14.5	2.5	0.66	〃	
223	4・5	25.5	16.5	3	0.84	頁	イ
224	2	25	17.5	2.5	0.79	〃	(イ)
225	〃	24.5	16	3	0.61	鉄	イ
226	4・5	27.5	14	3	0.62	チャ	〃
227	〃	24.5	15	2.5	0.46	頁	(イ)
228	2	23	17	3	0.62	〃	(ハ)
229	4・5	21.5	15.5	2	0.45	チャ	
230	〃	24	17	2.5	0.58	黒	
231	2	23	17	2.5	0.61	頁	(イ)
232	4・5	20.5	17	3.5	0.64	鉄	
233	〃	26	14.5	3	0.50	チャ	イ
234	〃	23	19	3	0.79	黒	
235	2	25	18	2	0.63	頁	
236	4・5	26	17	3	0.59	〃	
237	〃	27	17	2.5	0.72	鉄	
238	〃	29	18.5	3.5	0.82	頁	イ
239	2	30	19.5	3	0.78	〃	〃
240	4・5	32	14.5	3	0.89	鉄	(イ)
241	〃	(20.5)	(16)	2.5	(0.52)	頁	イ
242	〃	(23)	(14.5)	4	(0.70)	〃	〃
243	2	(14.5)	(17.5)	3	(0.50)	〃	〃
244	4・5	(24)	(15)	6	(1.49)	鉄	(イ)
245	〃	(19)	(15)	2.5	(0.49)	頁	イ
246	6	(17)	(18)	3	(0.68)	〃	
247	4・5	(22.5)	(18.5)	2.5	(0.65)	〃	イ
248	2	(16)	(10)	3	(0.52)	〃	(イ)
249	4・5	(13)	(14.5)	3	(0.46)	鉄	
250	2	(14)	(12.5)	2.5	(0.34)	〃	イ
251	4・5	(22)	(10.5)	2	(0.30)	玉	
252	〃	(27.5)	(12)	3	(0.90)	頁	
253	2	(22)	(13)	2.5	(0.52)	鉄	(イ)
254	〃	(19)	(14)	2.5	(0.40)	チャ	ハ
255	〃	(20)	(15)	2	(0.49)	頁	〃
256	4・5	(11.5)	(12)	2.5	(0.28)	?	
257	〃	(16.5)	(13)	2.5	(0.40)	鉄	
258	2	(12.5)	(14.5)	2.5	(0.37)	頁	
259	4・5	(18.5)	(15)	3	(0.51)	〃	イ
260	〃	(14.5)	(16)	2.5	(0.44)	〃	〃
261	2	(18.5)	(17)	3.5	(0.77)	〃	(イ)
262	〃	(15.5)	(13)	3	(0.47)	黒	
264	〃	(29.5)	(15.5)	2	(0.52)	頁	イ
265	〃	(23.5)	(13.5)	2.5	(0.53)	鉄	
266	4・5	(13)	(10.5)	2.5	(0.36)	黒	(ハ)
267	〃	(15.5)	(14.5)	3	(0.42)	頁	(イ)
268	〃	(21.5)	(14.5)	3	(0.46)	〃	
269	2	(17)	(17.5)	3.5	(0.69)	〃	
270	4・5	(20.5)	(17.5)	3	(0.66)	鉄	(イ)
271	2	(19.5)	(10)	2.5	(0.47)	玉	イ
272	4・5	(18)	(14.5)	2.5	(0.53)	鉄	
273	〃	(17.5)	(14.5)	3	(0.49)	〃	イ
274	〃	(11)	(15.5)	4	(0.37)	?	
275	2	(15)	(17)	2.5	(0.53)	頁	(ハ)
276	4・5	(19.5)	(18.5)	3	(0.64)	〃	イ
277	2	(22.5)	(16)	3	(0.49)	鉄	
278	〃	(19)	(17.5)	2	(0.42)	黒	
279	4・5	(16)	(14)	2	(0.34)	チャ	
280	〃	(24)	(14)	2.5	(0.44)	鉄	
281	2	(22)	(16.5)	2.5	(0.43)	〃	
282	2	(18.5)	(16.5)	2.5	(0.39)	鉄	
283	〃	(22)	(11.5)	2	(0.32)	チャ	
284	4・5	16.5	15	2.5	0.42	〃	
285	〃	(20)	(12.5)	3	(0.63)	鉄	
286	2	(17.5)	(15)	2.5	(0.46)	チャ	
287	〃	(20.5)	(16)	3.5	(0.71)	〃	(イ)
288	4・5	(15)	(13.5)	2.5	(0.41)	鉄	〃
289	〃	(18)	(16)	2.5	(0.72)	チャ	
290	〃	(19)	(14.5)	2	(0.35)	鉄	
291	〃	(17)	(15.5)	2	(0.39)	頁	(イ)
292	2	(21.5)	(17.5)	3	(0.71)	鉄	
293	4・5	16	12	2	0.29	玉	(イ)
295	〃	(18.5)	(16.5)	3	(0.59)	鉄	
296	〃	(22)	(14.5)	3	(0.51)	チャ	
297	2	(15.5)	(14.5)	2.5	(0.49)	鉄	
298	4・5	(17.5)	(18.5)	3	(0.57)	頁	
299	〃	(19.5)	(15.5)	2.5	(0.52)	鉄	
300	2	(13)	(11)	2	(0.19)	頁	
301	〃	(18.5)	(13)	2.5	(0.47)	鉄	
302	4・5	(14)	(12)	2.5	(0.41)	黒	
303	2	(15)	(14.5)	2.5	(0.45)	頁	
304	7	(12.5)	(13.5)	2.5	(0.33)	チャ	
305	4・5	(15)	(11)	3	(0.52)	頁	
306	2	(19.5)	(13)	3	(0.42)	黒	
307	4・5	(15.5)	(14.5)	2	(0.40)	頁	イ
308	2	(20)	18.5	3	(0.75)	〃	(イ)
309	4・5	(15)	(19.5)	2.5	(0.54)	チャ	
310	〃	(17)	(15)	4	(0.72)	鉄	
311	2	(12.5)	(15)	2.5	(0.35)	黒	
312	4・5	(14)	(18)	2	(0.43)	鉄	
313	2	(14.5)	(14.5)	4	(0.61)	頁	
314	〃	(16.5)	(16)	2.5	(0.40)	黒	
315	4・5	(17)	(16)	3	(0.64)	チャ	(ハ)
316	2	(16)	(14)	2.5	(0.40)	玉	
317	4・5	(14.5)	(15.5)	2.5	(0.50)	頁	イ
318	〃	(12.5)	(11)	2.5	(0.44)	チャ	
319	2	(20)	(16)	2.5	(0.47)	頁	イ
320	〃	(20)	(12)	2.5	(0.38)	鉄	
321	4・5	(14)	(15.5)	2	(0.36)	頁	(イ)
322	2	(10.5)	(8.5)	3	(0.33)	黒	
323	—	(14.5)	(13)	2	(0.27)	鉄	
324	4・5	(23.5)	(16)	2.5	(0.63)	チャ	イ
325	〃	(11)	(16.5)	2	(0.40)	黒	
326	〃	(15)	(14.5)	3	(0.47)	玉	
327	〃	(16.5)	(12.5)	3	(0.48)	鉄	イ
328	〃	(12.5)	(13.5)	2.5	(0.28)	鉄	
329	2	(14)	(14.5)	2	(0.31)	頁	
330	〃	(23.5)	(17)	3	(0.76)	玉	
331	4・5	(10.5)	(14)	3	(0.36)	黒	
332	〃	(15.5)	(14.5)	3	(0.47)	鉄	(ハ)
333	2	(17)	(13)	3	(0.43)	チャ	
334	〃	(19)	(12.5)	2.5	(0.46)	鉄	
335	4・5	(17.5)	(14)	2.5	(0.49)	〃	
336	〃	(16)	(15.5)	3	(0.52)	頁	(イ)
337	〃	(16)	(10.5)	2.5	(0.38)	チャ	
338	〃	(17)	(13)	3.5	(0.53)	鉄	
339	〃	(15)	(11)	2.5	(0.26)	〃	
340	〃	(14.5)	(15)	2.5	(0.37)	頁	イ
341	〃	(19.5)	(12)	3	(0.66)	玉	
342	〃	(14.5)	(13)	3	(0.41)	黒	
343	〃	25	15	2.5	0.67	チャ	
344	〃	24	14.5	2.5	0.52	〃	
345	〃	(13)	(11)	2	(0.24)	〃	
346	7	(15.5)	(12)	2.5	(0.51)	〃	(イ)
347	4・5	(16)	(14.5)	2.5	(0.48)	頁	
348	2	(21.5)	(16)	3	(0.81)	チャ	イ
349	〃	(21.5)	(11.5)	3	(0.63)	頁	(ハ)
350	4・5	15.5	10.5	4	0.60	〃	
351	10	14	15	3	0.68	鉄	
352	4・5	16.5	13	4.5	0.82	〃	
353	4・5	18	11	2.5	0.57	玉	
354	〃	16.5	14	5.5	1.51	チャ	
355	2	17.5	13.5	3.5	0.86	玉	ハ
356	4・5	17.5	14	3.5	0.77	チャ	
357	2	19	15	2.5	0.86	玉	
358	〃	20.5	13	3.5	0.69	頁	
359	〃	20	18	7	1.96	鉄	
360	〃	20.5	15	3	0.96	頁	ハ
361	4・5	22.5	14	3	0.92	チャ	(イ)
362	2	20.5	18.5	3.5	1.04	頁	
363	〃	22	18	4	1.22	〃	(イ)
364	4・5	20.5	20	3	1.06	〃	(ハ)
365	〃	22	17.5	6.5	2.35	〃	
366	〃	22	21	5.5	1.89	〃	
367	7	22.5	17.5	5	1.56	チャ	
368	2	23.5	20	5.5	2.11	〃	
369	〃	26	15.5	5.5	2.29	玉	イ
370	4・5	28.5	20.5	5.5	2.56	頁	
371	〃	26.5	23	3.5	2.00	〃	
372	〃	27	22	5.5	3.27	〃	ハ
373	2	30.5	22	8	4.08	〃	
374	4・5	29	25.5	8	4.64	〃	イ
375	〃	29	23	9	5.13	〃	
376	2	18.5	13	2.5	0.53	〃	
377	4・5	(17.5)	(13.5)	3.5	(0.78)	〃	
378	〃	22.5	21	4.5	1.65	〃	
379	2	(18)	(18)	3.5	(1.01)	〃	
380	4・5	20.5	22.5	6	2.18	〃	
381	2	(19.5)	(17)	3.5	(1.11)	〃	
382	4・5	(17.5)	(17)	3	(0.78)	〃	
383	〃	22.5	20	4.5	1.14	〃	
384	6	(16)	(7.5)	2	(0.25)	チャ	
385	2	(26)	(22)	7	(3.09)	頁	ハ
386	4・5	16.5	18	4	1.26	〃	
387	〃	(24)	(22)	6.5	(3.28)	〃	
388	〃	(29)	(14)	3.5	(1.16)	玉	
389	2	(25)	(15)	6	(2.06)	黒	
390	〃	(28.5)	(18.5)	(6.5)	(4.12)	?	
391	4・5	17.5	15	3	1.00	頁	
392	〃	(22.5)	(13)	3.5	(0.90)	〃	
393	2	(22)	(13)	3	(0.78)	〃	
394	〃	22	16.5	3	0.95	チャ	ハ
395	〃	20.5	16.5	3	1.20	頁	
396	〃	(21)	(16)	6	(2.07)	〃	
397	4・5	22.5	16.5	4.5	1.62	〃	
398	〃	(20.5)	(16.5)	5.5	(1.50)	〃	
399	〃	23	18	5.5	2.50	〃	
400	〃	24	17.5	5.5	2.52	玉	
401	〃	25.5	17.5	6.5	2.64	頁	
402	2	24	20	7.5	3.07	〃	
403	〃	(27.5)	(16.5)	8	(2.97)	〃	
404	4・5	(24)	(22.5)	4	(2.60)	チャ	
405	6	24.5	19.5	4.5	(2.33)	〃	
406	4・5	26.5	17	5.5	2.27	玉	
407	2	27	16	10	2.85	チャ	
408	4・5	(27)	(20.5)	4.5	(2.29)	頁	
409	〃	30	17.5	4	1.76	〃	
410	〃	27.5	22	7.5	3.91	〃	
411	2	27	20	7	3.61	チャ	
412	4・5	30.5	20	6	3.05	〃	
413	2	32	19	5.5	2.87	〃	
414	4・5	28.5	17.5	6	2.32	〃	
415	2	29.5	17	9.5	3.21	鉄	
416	〃	28	23	7.5	3.92	頁	
417	4・5	30.5	24.5	5.5	4.03	チャ	
418	2	31	20	7.5	3.57	頁	(ハ)
419	〃	29	17.5	6	3.46	〃	
420	4・5	34.5	21.5	6	3.67	チャ	
421	2	31.5	23.5	9	5.81	頁	
422	4・5	30	23	10	7.24	〃	

211～342＝A－b類　343～349＝A－c類　350～390＝B－a類　391～422＝B－b類　（　）は破損　※＝アスファルト付着　頁＝頁岩　黒＝黒曜石　鉄＝鉄石英　玉＝玉髄　チャ＝チャート

第6表　石鏃計測一覧

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
423	4・5	36.5	21	6	4.51	頁	
424	2	35	23.5	8.5	6.00	〃	
425	〃	33.5	27.5	8	6.17	鉄	
426	4・5	37.5	26	7	6.37	頁	
427	2	(18)	(22)	5	(2.44)	〃	
428	4・5	(22)	(21)	7.5	(3.10)	黒	
429	〃	(19.5)	(21.5)	3	(1.11)	頁	
430	〃	(18)	(12)	3.5	(0.74)	黒	
431	2	(19)	(10.5)	3	(0.52)	頁	
432	4・5	(23.5)	(9.5)	5.5	(2.71)	鉄	
433	6	(28)	(22.5)	7	(2.77)	頁	
434	4・5	(27.5)	(22.5)	5.5	(2.71)	玉	
435	2	(29)	(21.5)	6.5	(3.60)	〃	
436	4・5	(22)	(18)	4.5	(1.28)	〃	
437	〃	(17)	(7.5)	3.5	(0.43)	チャ	
438	〃	(25.5)	(21.5)	3.5	(1.85)	鉄	
439	〃	(14.5)	(15.5)	3	(0.77)	〃	
440	〃	(15)	(11)	3.5	(0.69)	頁	
441	〃	(14)	(12.5)	5	(0.86)	〃	
442	2	(16)	(13)	3.5	(0.72)	〃	
443	6	(20)	(10.5)	5.5	(0.98)	〃	
444	4・5	(14.5)	(11.5)	3	(0.48)	黒	
445	〃	(14.5)	(10.5)	3	(0.60)	頁	
446	〃	(10.5)	(8)	3	(0.35)	鉄	
447	〃	(12.5)	(8.5)	2.5	(0.32)	黒	
448	2	(14)	(7.5)	2	(0.21)	〃	
449	〃	(12)	(5.5)	2	(0.12)	チャ	
450	4・5	(8)	(4.5)	2	(0.07)	頁	
451	2	24.5	10.5	5	1.21	鉄	
452	4・5	(24.5)	(17.5)	4.5	(2.37)	チャ	
453	2	(24)	(24)	3.5	(1.72)	頁	
454	4・5	(23.5)	(18.5)	6	(2.01)	黒	
455	2	18.5	18	5	1.76	頁	
456	〃	(17)	(18.5)	3.5	(0.88)	鉄	
457	4・5	(18)	(19)	3	(0.99)	玉	
458	〃	(11)	(12)	2.5	(0.33)	頁	
459	7	(9.5)	(5)	3	(0.23)	〃	
460	2	8	5	2.5	0.10	黒	
461	〃	8.5	10.5	2	0.14	玉	
462	4・5	(17.5)	(11)	3	(0.56)	頁	
463	2	(20)	(13)	4	(0.63)	玉	
464	4・5	(24)	(14.5)	4	(1.53)	頁	
465	〃	(26.5)	(14.5)	4	(1.50)	玉	
466	2	26.5	13.5	5.5	2.06	頁	
467	4・5	26	15	5.5	2.20	鉄	
468	〃	25.5	17	11	3.56	〃	
469	〃	27.5	13.5	5.5	1.99	頁	
470	〃	30	14.5	7	2.38	チャ	
471	2	31.5	11.5	5	1.72	〃	
472	4・5	31	9.5	4	1.07	頁	
473	〃	31.5	10	6.5	1.69	〃	
474	2	32	4.5	6	2.27	〃	
475	4・5	32	16.5	5	2.46	〃	
476	〃	35	12.5	3.5	1.99	〃	
477	2	35	16	8	3.87	チャ	
478	〃	33.5	14	6	2.33	頁	
479	〃	36.5	12	6	2.47	〃	
480	〃	40.5	12	6.5	3.15	〃	ハ
481	〃	37	20.5	5	3.03	?	
482	〃	41	13.5	9	4.38	頁	
483	〃	42	19.5	4.5	3.25	〃	イ
484	4・5	42.5	17.5	8	6.10	〃	
485	〃	30	14.5	8	3.37	〃	
486	2	(17)	(12)	3.5	(0.52)	黒	
487	〃	(25)	(15.5)	4.5	(1.44)	チャ	
488	〃	(30)	(17.5)	2.5	(1.36)	頁	
489	4・5	(27.5)	(18)	3.5	(1.58)	〃	
490	〃	(33)	(14)	7.5	(2.20)	〃	
491	2	(26)	(13)	4	(1.46)	〃	
492	4・5	(42.5)	(12.5)	7	(3.67)	〃	

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
493	2	16.5	10	3	0.27	頁	
494	4・5	15.5	13	2.5	0.39	チャ	
495	〃	18	9	2.5	0.30	〃	
496	2	18.5	10.5	3	0.38	頁	
497	4・5	18.5	12	3	0.38	〃	
498	〃	19	10	2.5	0.03	チャ	
499	〃	19	10.5	3.5	0.45	頁	ハ
500	10	18.5	12	3	0.46	鉄	
501	4・5	18.5	10.5	4.5	0.51	黒	
502	〃	19	13	3.5	0.62	玉	
503	—	17.5	12	5	0.70	〃	
504	4・5	17.5	11	5	0.66	黒	
505	10	20.5	11	4.5	0.77	チャ	
506	6	21	11	3	0.54	頁	
507	4・5	19.5	13.5	4.5	0.75	鉄	
508	2	20	11	4	0.64	〃	
509	—	22.5	11.5	3	0.56	頁	
510	2	21.5	15.5	3.5	0.60	黒	
511	4・5	22	13.5	3	0.60	チャ	
512	—	21	12.5	5	0.84	頁	イ
513	2	21.5	15	2.5	0.50	〃	
514	—	(21)	(10)	4	(0.68)	鉄	
515	4・5	18	12.5	3.5	0.56	〃	
516	〃	21.5	13	4.5	0.83	玉	
517	〃	21	12.5	3.5	0.69	頁	
518	2	25	12.5	3	0.59	〃	
519	—	24.5	14	6	1.27	〃	
520	4・5	22	16.5	3.5	0.81	鉄	
521	〃	21	10.5	2.5	0.45	チャ	
522	2	(23)	(15.5)	3.5	(0.87)	〃	
523	—	25.5	15	5	1.27	頁	
524	—	27	14.5	3.5	0.95	〃	
525	4・5	26.5	12.5	4.5	0.89	鉄	
526	〃	25.5	15	3.5	1.13	チャ	
527	〃	28.5	15.5	3	0.87	頁	
528	〃	30	12.5	5	1.10	〃	ハ
529	〃	(29.5)	(15)	5.5	(1.87)	チャ	
530	2	31.5	11.5	3	0.73	玉	
531	6	(18)	(11.5)	5.5	(1.04)	頁	
532	4・5	13	10	2.5	0.27	〃	
533	2	23	16	25	0.65	チャ	
534	—	21	15	4	0.93	鉄	
535	2	18.5	13	2	0.41	チャ	
536	4・5	22	14.5	3.5	0.76	頁	
537	〃	22.5	14	2.5	0.96	〃	
538	6	23.5	16.5	7.5	1.78	〃	
539	4・5	17.5	13.5	3.5	0.68	玉	
540	〃	22	11	4	0.69	頁	
541	—	(25)	(18.5)	4	(1.59)	チャ	
542	4・5	20	14.5	3	0.77	頁	
543	—	(19)	12	3	(0.63)	鉄	
544	7	(18)	(11.5)	3.5	(0.58)	頁	
545	〃	(29)	(17)	3.5	(1.01)	?	
546	4・5	31	16	5.5	1.92	頁	
547	2	(25)	(15.5)	4.5	(1.23)	〃	
548	4・5	26.5	15.5	2.5	0.76	チャ	
549	〃	41	21.5	4	2.87	頁	
550	—	(29.5)	(13)	5	(1.28)	〃	(イ)
551	4・5	(18.5)	(18.5)	2	(0.81)	〃	(イ)
552	〃	(21)	(15.5)	2.5	(0.63)	〃	イ
553	—	17	12.5	3.5	0.61	玉	
554	7	(13.5)	(10.5)	2.5	(0.36)	頁	
555	—	(17.5)	(10.5)	3	(0.46)	〃	イ
556	4・5	(19)	(13)	2.5	(0.55)	〃	
557	6	(18.5)	(13)	(2.5)	(0.51)	チャ	
558	4・5	(14.5)	(15)	3	(0.48)	頁	
559	—	18.5	15.5	3	0.59	チャ	
560	4・5	(17)	(12.5)	2.5	(0.52)	〃	
561	〃	23	17.5	3	0.83	〃	
562	〃	(15)	(14)	3.5	(0.57)	頁	

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
563	4・5	(11.5)	(13)	3	(0.41)	頁	
564	〃	(14.5)	(12)	2.5	(0.40)	黒	
565	2	(19)	(11.5)	3.5	(0.69)	頁	
566	4・5	(21.5)	(10.5)	3.5	(0.55)	〃	
567	2	(15)	(16)	3.5	(0.65)	チャ	
568	4・5	15	12.5	2.5	0.31	〃	
569	2	(19.5)	(15.5)	3.5	(0.89)	〃	
570	—	17.5	13.5	6	0.93	頁	ハ
571	2	15.5	10.5	3.5	0.43	〃	
572	〃	(18.5)	(15)	3	(0.80)	玉	
573	6	13.5	11	3	0.36	頁	(ロ)
574	2	(17.5)	(11)	2.5	(0.35)	?	
575	—	19.5	14	3.5	0.74	頁	
576	—	(13)	(10.5)	2.5	(0.36)	〃	ハ
577	—	(17.5)	(13.5)	4	(0.72)	チャ	
578	—	12	9	3	0.27	玉	
579	4・5	(12)	(16)	3	(0.64)	チャ	
580	〃	16	8.5	2.5	0.31	鉄	
581	2	18.5	10	3.5	0.62	頁	
582	〃	14	10.5	3	0.43	チャ	ハ
583	4・5	(16.5)	(10.5)	4	(0.44)	頁	(イ)
584	〃	13.5	12.5	2	0.33	玉	
585	〃	13	13.5	2.5	0.42	頁	(イ)
586	—	30	15	3.5	1.24	〃	
587	2	13.5	13.5	2	0.28	玉	
588	4・5	19	12	2.5	0.45	チャ	イ
589	2	16	10.5	3	0.42	?	
590	—	(12.5)	(14)	1.5	(0.27)	チャ	
591	—	(14.5)	(12.5)	3.5	(0.60)	頁	イ
592	4・5	15	14.5	4	0.50	〃	(ロ)
593	〃	15.5	10.5	2.5	0.38	玉	
594	〃	19.5	10	4	0.52	鉄	
595	〃	19	12	3.5	0.49	〃	(イ)
596	2	21	11.5	3	0.70	玉	
597	4・5	20	14.5	2.5	0.54	頁	(ロ)
598	2	21	14	3.5	0.81	玉	
599	〃	21	16	3.5	0.67	鉄	
600	4・5	23	14.5	3	0.73	チャ	
601	〃	22	15.5	3.5	1.00	頁	
602	〃	22.5	14	4.5	1.01	〃	
603	〃	22	16.5	6	1.60	〃	
604	〃	23.5	15.5	4	0.82	〃	(イ)
605	〃	24.5	15	5	1.42	〃	
606	〃	24.5	15	5.5	1.31	〃	
607	—	24.5	17.5	4.5	1.23	〃	
608	4・5	27	15.5	5.5	1.35	チャ	
609	7	29	20.5	6.5	3.36	頁	
610	4・5	(37)	(12.5)	3.5	(1.30)	チャ	
611	2	14.5	18.5	5	1.11	玉	
612	10	(21)	(12.5)	3	(0.57)	頁	
613	4・5	(26)	(11.5)	3.5	(0.62)	チャ	
614	〃	19.5	12	2.5	0.55	頁	
615	〃	19.5	13.5	5	0.85	〃	
616	〃	(21)	(10.5)	4	(0.63)	鉄	
617	2	16	13	2.5	0.41	チャ	
618	4・5	17.5	12.5	3.5	0.66	鉄	
619	〃	22.5	13.5	2.5	0.66	〃	
620	〃	(19.5)	(10.5)	3	(0.57)	頁	
621	2	(18.5)	(10.5)	3	(0.32)	〃	
622	—	(20)	(12)	3.5	(0.70)	〃	(イ)
623	—	(16.5)	(12)	3.5	(0.56)	玉	
624	4・5	(17.5)	(13.5)	3	(0.54)	頁	
625	2	(13.5)	(13)	3	(0.63)	チャ	
626	〃	(21.5)	(11.5)	5	(1.27)	?	
627	〃	(14)	(11.5)	2.5	(0.39)	頁	
628	—	(29.5)	(12)	2.5	(0.82)	〃	
629	4・5	20.5	14.5	3	0.73	玉	
630	〃	(24)	(16.5)	4	(1.06)	頁	(イ)
631	2	23.5	13	5	1.33	〃	
632	—	18	10.5	2.5	0.37	チャ	

423〜438＝B－b類　439〜461＝どの類か不明　462〜492＝C類　493〜591＝D－a類　592〜632＝D－b類　（　）は破損　※＝アスファルト付着
頁＝頁岩　黒＝黒耀石　鉄＝鉄石英　玉＝玉髄　チャ＝チャート

第７表　石鏃計測一覧

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※	番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※	番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
633	4•5	15.5	13.5	3	0.45	黒		663	4•5	18.5	17	6	1.17	頁		693	4•5	(17.5)	(9.5)	2.5	(0.37)	黒	
634	2	18	15	3	0.65	頁	イ	664	〃	(14.5)	13.5	3	(0.55)	〃		694	2	19	11.5	3.5	0.78	チャ	
635	4•5	18	13	3	0.48	チャ		665	2	24.5	18	4.5	1.88	玉		695	4•5	19	12.5	3.5	0.72	〃	
636	〃	19	15.5	3	0.67	玉		666	4•5	25.5	16	5.5	1.61	頁		696	6	24	10.5	3.5	0.93	玉	
637	〃	17.5	12	2.5	0.44	頁		667	2	(25.5)	(24)	6.5	(3.45)	鉄		697	2	(37.5)	(17)	4	(2.56)	頁	
638	〃	16	12.5	4.5	0.69	玉		668	〃	18	7.5	2.5	0.32	頁		698	—	23	12.5	3.5	0.79	〃	ハ
639	2	(14.5)	(13)	3.5	(0.52)	黒		669	〃	18.5	12	3	0.55	〃		699	2	23	12	4.5	0.80	?	
640	4•5	(27)	(15.5)	3	(0.81)	頁		670	4•5	19	10.5	4	0.60	チャ		700	4•5	28.5	15.5	3.5	1.40	頁	
641	2	(10.5)	(3.5)	2	(0.23)	チャ		671	〃	20.5	10	3.5	0.44	頁		701	2	24	17	4	1.44	〃	ハ
642	〃	17	12.5	3	0.49	〃		672	2	21.5	11	3	0.66	〃	ハ	702	4•5	19.5	12	3	0.61	〃	イ
643	10	(21)	(12.5)	4	(0.76)	頁		673	—	23.5	10	2.5	0.61	〃		703	2	28.5	10.5	2.5	0.70	〃	
644	7	21.5	10	3.5	0.69	〃		674	4•5	23.5	11.5	3	0.66	〃	ロ	704	〃	20	11	3.5	0.79	〃	
645	4•5	(12)	(13.5)	2.5	(0.40)	チャ		675	〃	25.5	12.5	4.5	0.91	〃		705	〃	17.5	8.5	2.5	0.36	鉄	
646	6	19.5	14	2	0.62	頁		676	2	26	10.5	4	1.00	〃		706	4•5	18.5	9	3.5	0.44	頁	
647	2	21	16	3	0.90	〃		677	〃	27.5	10	3	0.68	〃	(ロ)	707	2	24.5	11	3.5	0.91	鉄	
648	〃	19.5	15.5	3	0.82	〃		678	4•5	29.5	11	2.5	0.78	〃		708	4•5	24.5	12	4	0.85	頁	
649	4•5	21.5	15	5	1.17	鉄		679	〃	30	11	3	0.84	〃	(ロ)	709	〃	35	11	3	1.15	〃	
650	〃	22.5	17	4.5	1.71	頁		680	2	12.5	30	3.5	1.15	チャ		710	〃	22	15	3.5	0.85	〃	
651	〃	23	13.5	2.5	0.70	鉄		681	〃	30	11	3.5	0.85	頁	(ロ)	711	〃	21	13	3	0.77	〃	
652	—	24.5	17	3.5	1.09	頁		682	4•5	29	13	4	1.30	チャ		712	〃	(27)	(17)	5.5	(2.64)	チャ	
653	4•5	23	18	3	1.26	〃		683	〃	30	11.5	5.5	1.64	頁	(ロ)	713	7	26	11	3	0.84	玉	
654	〃	(25)	(17.5)	3.5	(1.32)	チャ		684	〃	(30)	(13)	4	(1.21)	〃		714	2	23	11	4.5	1.27	〃	
655	2	25	22	4.5	2.14	頁		685	2	30.5	8.5	2	0.44	〃		715	4•5	18	9	3	0.32	頁	
656	4•5	26	16.5	4	1.84	チャ		686	〃	32	10.5	5.5	1.51	〃		716	—	18	11	3.5	0.65	チャ	
657	〃	27.5	18.5	4	2.05	頁		687	7	38	15.5	3.5	1.82	〃		717	4•5	17	10	3	0.48	〃	
658	〃	29	20	3	1.73	〃		688	2	25.5	8.5	3	0.61	〃		718	〃	(14)	(12)	3	(0.51)	頁	
659	〃	28	19.5	6.5	2.95	玉		689	〃	29	7	3	0.61	玉		719	2	(15)	(9.5)	2.5	(0.57)	〃	
660	2	28.5	19	7.5	4.45	〃		690	〃	33	8.5	3.5	1.01	〃		720	4•5	(22.5)	(8.5)	3.5	(0.81)	〃	
661	4•5	37.5	21.5	10	6.66	頁		691	〃	33	13	7	1.93	頁		721	2	23.5	8	4	0.80	〃	
662	2	(22)	(14.5)	3	(0.73)	玉		692	4•5	17	10.5	3	0.49	黒		722	4•5	22.5	8.5	4	0.79	〃	

633～645＝D－ｂ類　646～667＝D－ｃ類　668～718＝D－ｄ類　719～722＝E類　（　）は破損　※＝アスファルト付着
頁＝頁岩　黒＝黒耀石　鉄＝鉄石英　玉＝玉髄　チャ＝チャート

第８表　嘴状石器計測一覧

番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※	番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※	番号	出土区	大きさ mm 長	幅	厚	重量g	石材	※
1	2	28	14	6	2.1	チャ	A	19	4•5	18	16	4	0.9	玉	B⊜	37	2	24	18	6	2.7	チャ	B
2	4•5	29	16	6	2.3	玉	〃	20	〃	17	16	3	0.7	鉄	B⊜	38	〃	26	20	4	1.8	〃	B⊜
3	〃	30	15	7	2.7	鉄	A⊜	21	〃	16	14	4	0.7	〃	B	39	〃	30	20	5	2.6	頁	〃
4	〃	30	19	6	3.2	玉	A	22	2	18	13	4	0.8	玉	B⊜	40	10	36	22	5	3.7	玉	〃
5	2	29	20	6	3.3	〃	A⊜	23	4•5	18	15	4	0.9	頁	B⊜	41	4•5	(17)	14	3	(0.8)	〃	〃
6	4•5	30	17	6	2.7	黒	A	24	〃	15	15	3	0.7	黒	B	42	2	(13)	16	3	(0.7)	〃	〃
7	〃	32	20	9	5.1	玉	〃	25	〃	18	17	4	1.4	玉	〃	43	4•5	(10)	(10)	(3)	(0.2)	〃	B
8	〃	34	20	7	4.2	チャ	A⊜	26	2	17	13	4	0.7	頁	B⊜	44	2	(22)	10	5	(1.1)	〃	B⊜
9	2	38	23	8	6.6	玉	A⊜	27	4•5	20	16	4	1.0	黒	B	45	〃	33	17	6	2.8	頁	
10	〃	(26)	18	9	(2.6)	〃	A	28	〃	16	16	3	0.8	玉	〃	46	10	48	26	10	10.9	〃	A⊜
11	6	35	25	5	4.5	玉	〃	29	〃	21	14	4	1.1	鉄	〃	47	4•5	45	28	8	8.4	〃	
12	4•5	41	19	11	5.5	頁	A⊜	30	〃	23	20	10	2.2	〃	〃	48	2	59	27	12	16.1	〃	
13	2	32	21	11	4.8	鉄	A	31	2	25	16	4	1.6	頁	〃	49	〃	38	29	7	7.3	〃	
14	10	41	13	9	6.4	〃	A⊜	32	4•5	22	16	4	1.3	鉄	B⊜	50	—	35	14	6	3.7	〃	A
15	4•5	13	9	3	0.3	黒	B	33	〃	25	19	5	1.5	チャ	B	51	4•5	40	23	6	5.3	〃	
16	2	14	14	3	0.4	〃	〃	34	2	22	20	5	1.8	頁	B⊜	52	—	38	26	9	9.0	〃	
17	—	16	15	3	0.6	〃	〃	35	4•5	23	17	6	2.6	〃	B⊜								
18	2	18	12	4	0.9	鉄	〃	36	2	21	18	5	1.7	鉄	B⊜								

A＝A類　B＝B類　（　）は破損　⊜アスファルト付着　頁＝頁岩　黒＝黒耀石　鉄＝鉄石英　玉＝玉髄　チャ＝チャート

対象とする）に用いられている石材は、玉髄16点（35%）、鉄石英10点（22%）、頁岩９点（20%）、黒耀石６点（13%）、チャート５点（11%）である。全石材中、頁岩が20%しか用いられていない状況は、本遺跡の剥片石器にもあっても特異中の異である。

４）石匙（第68図、図版80上）

比較的うす手の大小の剥片の一端につまみを、他辺のいずれかに刃部を作出した石器である。つまみの作出に際しては両面からノッチを入れるようにしているのに、原則として刃部は片面からの加工である。縄文時代中期頃までの石匙にくらべて、形が整わず調整の粗いものが多い。つまみの軸線と刃部とのなす角度によって、３大別される。

類	A	B	C	計
模　式　図				
点　数　(%)	42(33%)	48　(38%)	36　(29%)	126点
つまみ部アスファルト	6 (14%)	17　(35%)	11　(31%)	34点 (27%)

（%は原則として小数点以下を四捨五入）

第68図　石匙一覧

Ａ類：（図版80上１～９）

つまみの軸線と刃部がほぼ平行する、いわゆる縦型石匙である。

Ｂ類：（図版80上10～18）

つまみの軸線と刃部とがほぼ直交する、いわゆる横型石匙である。

Ｃ類：（図版80上19～24）

つまみの軸線と刃部とが約45°の角度で交わる、斜型石匙である。

石匙に使用されている石材は、Ａ類で鉄石英２点、チャート１点、Ｂ類でチャート４点、玉髄２点、Ｃ類で玉髄・チャート各１点の他は全て頁岩で、頁岩以外の石材は全体の９%にすぎない。

つまみの付け根にアスファルトの付着が認められるものが、3類合わせて34点(27%)ある。

５）箆状石器（第69図、図版80下）

大小の厚手の剥片に粗い二次加工を施して、全体の形状がいわゆるヘラを呈するように作出された石器である。二次加工は両面、半両面、片面加工の３種類が拮抗している。側面から見た刃部は、片刃が圧倒的に多く、両刃は少ない。また、刃縁は直線的なものが多いが、弧状を呈するものもある。形状によって３つに大別されるが、それぞれに大型（長さが６cm前後の中型のものも含める）、小型がある。

Ａ類：（図版80下１～５，13～15）

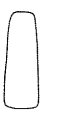
基端に明瞭な辺を持ち、刃部がそれより幅広のいわゆる撥形を呈するものである。１～５が大型、13～15が小型のものである。

Ｂ類：（図版80下６～10，16～18）

基端が尖り、全体の平面形が二等辺三角形を呈する。6～10が大型、16～18が小型のものである。

C類：（図版80下11，12，19）

基端と刃部の幅がほぼ等しい短冊形のものである。11，12大型、19が小型であるが、11を除いては完形品がない。

類	A		B		C		不明	計
模式図								
点数（%）	29	(42)	22	(32)	11	(16)	7	69
細分類	大	小	大	小	大	小		
点数（%）	22 (76)	7 (24)	16 (73)	6 (27)	7 (64)	4 (36)		

（%は原則として小数点以下を四捨五入）

第69図　篦状石器一覧

A・B・Cの各類には、それぞれ大型のものをそっくり小さくしたような石器がある。各々の類において小型のものは、A：24%、B：27%、C：36%を占める。全体の形状・刃部の側面観・大型と小型の比率などから、本篦状石器のあり方は、磨製石斧のあり方に似ている。このような篦状石器の機能は、あるいは磨製石斧の機能に似た機能、例えば木工における粗削の段階に使用するものなどの想定も可能かと思われる。

石材は、69点中玉髄、チャートが各1点ずつ含まれるのみで、他は頁岩である。

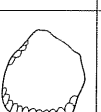
6）掻器（第70図、図版81上）

比較的厚手の大小の剥片の一部に、裏面からの二次加工によって急斜度をなす部厚い刃部を作出した石器である。刃部は弧を描くのが一般的で、側面から見た場合、裏面が表面側に反っている。つまみ部（あるいは突出部）を有するか否かで、2大別される。

A類：部厚い剥片の一端に刃部を作出したものである。形状により2つに分けられる。

A－a：（図版81上1～4）

縦長剥片の一端に刃部を作出した、いわゆるエンド・スクレーパーである。基部（大部分は打面側に当る）を除き両側辺にも二次調整が加えられている。刃部の剥離はていねいな押圧剥離であることが多い。両側辺への二次加工は、着柄（あるいはソケットへの挿入）のための調整かもしれない。

類	A		B	計
点数（%）	118 (76)		38 (24)	156
細分類	a	b		
模式図				
点数（%）	17 (14)	101 (86)		

（%は原則として小数点以下を四捨五入）

第70図　掻器一覧

A－b：（図版81上5～10）

不定形の部厚い剥片の一部に、弧状の刃部を作出したものが主体を占め、小型品も若干含まれる。掻器の大部分が本類である。

B類：（図版81上11～19）

小型で円形をなす刃部に、つまみの付いた形を呈するものである。つまみ部は、両面加工による抉りのあるものと、片面加工のため

抉りのないものとがある。

Ｂ類38点のうち、つまみ部からやや刃部側にかけてアスファルトの付着しているものが９点存在する。それらの石器のつまみの中には、つまみ付け根よりも末端側の細くなるものもあることから、このアスファルトは紐などを緊縛した痕跡と考えるよりも、何らかの形の柄（あるいはソケット）を取り付けるためのものと考えられる。

石材は、Ａ－b類にチャート２点、玉髄１点、鉄石英１点（これらは全て小型品である）、Ｂ類にチャート２点、玉髄２点、黒耀石１点がある他は全て頁岩である。

７）円形掻器（図版81下）

厚手の剥片に片面あるいは両面からの二次加工によって、平面形が円形になるように仕上げられた石器である。前述の掻器の一器種として含ませるべきかとも思われるが、二次加工のあり方に異質な面があることから独立させた。小型品が多く、最小のものは径1.3㎝、最大のものでも径６㎝である。全部で123点出土している。

石材からみると、123点中チャート17点、黒耀石•玉髄各５点、鉄石英１点の他は全て頁岩である。頁岩以外の石材が全体の23%を占めるのは、本石器が本来小～中型品のものに限られることに起因するものと考えられる。

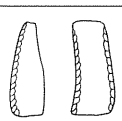
また、図版81下の38の注記の上方に黒く写っているのは、アスファルトである。この石器はソケットに挿入されて使用された可能性が強い。

８）削器（第71図、図版82上下）

剥片の比較的長い１辺あるいは２辺に、片面からの二次加工によって長い刃部を作出した石器である。刃部以外への二次調整はない。刃部は緩斜度のものもある。

Ａ類：（図版82上１～16）

様々な形状、厚さの不定形剥片の１～２辺に、直線的あるいはゆるい弧状の刃部が作出されたものである。図版82上の12・13を除いては１辺のみに刃部が作出されており、12・13は相対する２側辺にそれがある例である。

類	A	B		計
点数(%)	928 (89)	113 (11)		1,041
細分類		a	b	
模式図				
点数(%)		37(33)	76(67)	

（%は原則として小数点以下を四捨五入）

第71図　削器一覧

Ｂ類：素材となる剥片が二等辺三角形に近い形状を呈した場合に、底辺を除く他の２辺に刃部が作出されて、それが連続したものである。

Ｂ－ａ：（図版82下１～９）

２つの刃部の交わる角度が鋭角で、その先端(交わる部分)が鋭く尖るものである。破片であった場合、石匙

との判別がむずかしいものもある。

Ｂ－ｂ：（図版82下10～22）

２つの刃部の交わり方がゆるやかで、その先端が弧を描くものである。掻器Ａ類との判別困難なものも含まれている。

削器に使用されている石材は頁岩がほとんどで、他にはＡ類でチャート13点、玉髄・鉄石英が各々６点、Ｂ－ａ・ｂ類でチャート各１点にすぎない。また、頁岩以外の石材も原石の表皮付のものが多い。

また、Ａ類・Ｂ類に分けたが、特にＢ－ａ類は刃部のあり方からしてもＡ類とはかなり機能を異にする可能性が強い。

９）ノッチのある石器（図版83上）

大小の部厚い剥片の一部に片面からの加撃で、抉り（ノッチ）を入れた石器である。150点出土しており、大型のものが多い。ノッチは図版83上の12～14、17のように１つしか入らないものと、１～９などのように数個入れるものとがある。ノッチの径は５㎜～30㎜程度のものまであるが、深さは７～８㎜のものを最大とする。また、17のように反対側辺は削器として使用されているものなどもある。

石材は150点中、玉髄・鉄石英が各１点ずつあるのみである。また、このような抉りのある石器の機能については推測がむずかしいが、矢柄を整えるためのもの、あるいは切目石錐の切目を入れる道具ということも、可能性として挙げることができよう。

10）木葉形石器（図版86上）

小型で、石鏃、円形掻器などに近似する点もあるが、基本的には広葉樹の葉に似た形状の石器である。47点出土している。両面加工を基本とするが、片面のものもある。石材は、チャート４点、鉄石英２点、黒耀石・玉髄各１点と頁岩以外のものも含まれている。機能その他についての推測等については現在のところ全くできていない。

11）三脚石器様石器（図版83下）

厚手で平面形が正三角形に近い剥片（あるいは残核か）の２～３辺に粗い抉りを入れた石器で、主に縄文時代中・後期に見られる三脚石器に似た形状を呈する。21点出土している。しかしながら、三脚石器との比較でいえば、三脚石器は三辺からの粗い剥離によって一方の面の中央部がくぼみ、三つの頂部が脚状になるのに対し、本遺跡のものは中央部がほとんどくぼまない。石材は全て頁岩である。

12）異形石器（図版86中）

ていねいな二次加工で様々な形に仕上げられた石器で、これまで述べて来た定形的な剥片石器には入らないものが９点出土している。この中で図版86中の９は、協和町上ノ山Ⅱ遺跡で有

撮石器としたものに近似しているが、１点のみの出土である。

13）磨製石斧（第72図、図版84上下）

全面が研磨された石斧である。総計253点と１遺跡の出土点数としては非常に多い。石材は緑色凝灰岩や粘版岩などは少なく、安山岩・流紋岩・蛇紋岩などが多い。このためか擦切によって製作されたとわかるものは少ない。全体の形状及び断面形などにより３大別されるが、Ａ類の乳棒状石斧は１点しかなく、Ｂ・Ｃ類は、おおよその目安としてその大きさから大・中・小に分けることができる。また、形状はＢ類に含まれるが、実用の具とは考えられないほどの大きさ（超大型）のものもある。

Ａ類：身の下半を欠くため明確ではないが、基端及び両側ともに明瞭な面を持たず、断面形が円形に近いいわゆる乳棒状石斧がある。１点のみ出土している。

Ｂ類：（図版84上１～７、９～22、25～32）

平面観が撥形あるいは二等辺三角形に近い、いわゆる定角式石斧である。

大型：（図版84上２～７）

器の長さが８㎝以上のものを大型とする。181点出土しており、その内訳は略完形品15点（このうちほとんど完形のままで出土したもの８点、割れて出土したが接合したもの３点、刃部の半分以上を欠くが全体形が推定できるもの４点である）、刃部の形状のわかるもの35点、基端部の形状のわかるもの83点、器中央部を含むその他が47点である。略完形品15点の法量は長さ9.3～12.9㎝、重量124～321g（平均182g）である。刃部は、佐原分類の両凸刃が圧倒的に多く、他に識別できるものとしては弱凸強凸片刃が１点あるのみで円刃が多く直刃・偏刃は少量である。また、基端の形状は模式図で示したように、５細分が可能であるが、これは原材の形状に左右されたためと思われる。

中型：（図版84下25～32）

器長が６～７㎝前後で、重さも60～70gのもので大型と中型の中間形態のものである。完形品が２点、破損品

類	A	B				C			計
点数	1	222				30			253
模式図									
細分類		超大	大	中	小	大	中	小	
点数（%）		7（3）	181（82）	12（5）	22（10）	19（63）	3（10）	8（27）	

B類基部分類	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	計
模式図						
点数（%）	52（63）	2（2）	15（18）	6（7）	8（10）	83

（%は原則として小数点以下を四捨五入）

第72図　磨製石斧一覧

が10点ある。

小型：（図版84下9〜22）

形状は、大型の定角式石斧をそのまま小さくしたようなもので、最小のもの（図版８下９）は長さ25㎜、最大幅11㎜、最大厚６㎜、重さ2.9ｇであり、器長がおおよそ５㎝以下のものをこの類としておく。完形品14点、破片８点である。刃部は両凸刃が約半数を占め、弱凸強凸片刃、弱平強凸片刃が約四分の１ずつである。

超大型：（図版84上１）

器長が20㎝を超えるようなもの７点（完形は１点のみ）をこの類とした。軟質の岩石を原材としており実用の具とは考えにくいが、６点は破損品であり詳細についてはわからない。図版84上１は完形品で、全長23㎝、重量823ｇであるが大きさの割には軽い感じである。

Ｃ類：（図版84上８・９、84下１〜８・23・24）

Ａ・Ｂ類ともに刃部に最大幅があるのに対し、器中央部に最大幅があるか、基端から刃部までほとんど幅が同じである短冊形の磨製石斧である。

大型：（図版84上８・９）

19点出土しているが完形品がない。長さがおおよそ10〜15㎝のものと思われ、細身の感じがし、厚さも定角式のものにくらべてない。刃部は両刃のものが主体を占めるようである。

中型：（図版84下23・24）

破片３点しかなく、全体の規模などは不明であるが、やはり大型と小型の中間であり、器長７㎝前後と思われる。

小型：（図版84下１〜８）

完形品５点、破片３点が出土している。完形品の長さは3.1〜4.6㎝、重量3.5〜5.7ｇ（平均4.4ｇ）である。

八木遺跡出土の磨製石斧で、全くあるいはほとんど破損していないものは、小型品と超大型を除くと10点しか存在しない。その破損率は95％である。使用不能になったために捨てられたものであることがわかる。刃部の形状は、大部分が両刃に近いものであり、片刃のものは極く少量であるが、使用痕は刃縁に直交するものもある。

Ｂ・Ｃ類合わせて30点の小型磨製石斧が出土している。これらのほとんどは、破損の状態や使用痕などからすれば実用の具であり、主に木工用などに供せられたものと考えられる。

その他、図版85上に示したような石器（石製品の方が適当かもしれない）が出土している。軟質の泥岩などを素材とし、全面を擦ることによって平面的には磨製石斧様に仕上げられてい

るものの、刃縁も基端面のように擦られて平坦な面をなしている。中～小型のものがほとんどであるが、厚さも前述の磨製石斧の中・小型のものよりもうす手である。その用途等については不明である（図版85上　類磨製石斧）。

類	A		B		計
点　数	22		9		31
細分類	a	b	a	b	
模式図					
点　数	11	11	5	4	

第73図　打製石斧一覧

14）打製石斧（第73図、図版85下）

長方形に近い円礫や亜角礫、あるいは頁岩の大型剥片などに二次加工を加えて作出した打製の石斧である。形状によって２大別される。

A類：着柄のための抉りを有しない類である。全周から剥離を加えているものと、部分的にしか剥離を加えていないものとがある。使用によるためと見られるが、刃縁で原形を留めているものはほとんどない。また、器の一部に研磨の加えられたものがａ・ｂ類に各２点ずつ見られる。

Ａ－ａ：（図版85下１，２，４）

両側辺が平行する短冊形のものである。完形品11点の規模は、長さ9.4～13.3㎝、重さ126～308ｇである。刃は円刃か直刃と考えられるが、刃縁の破損あるいは潰れが著しい。側面観は片刃のもの２点、両刃のもの１点が推定できるに留る。

Ａ－ｂ：（図版85下３）

磨製石斧の定角式に近いが、基端と刃部との幅の差は小さい。完形に近い９点の規模は、長さ8.4～20㎝、重さ78～702ｇとバラエティーに富み、Ａ－ａ類よりも大きめのものが多いが、長さ13㎝前後、重さ300ｇ前後が多い。刃の側面観は片刃が主と思われるが、やはり刃縁が面をなしている。

B類：着柄あるいは握るための二次加工が明瞭なものである。全て頁岩の大きな剥片を素材とする。

Ｂ－ａ：（図版85下５，６）

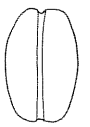
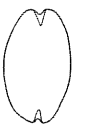
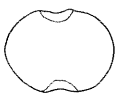
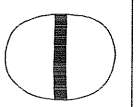
両面加工による抉りが左右両側から入っている分銅形のものである。５点の規模は、長さが７～11㎝、重さ35～207ｇであるが、５は長さ10.6㎝、重さ151gである。

Ｂ－ｂ：（図版85下７）

基部が基端側にすぼまるように両面加工されたもので、挨形あるいは洋ナシ形を呈する。４点の規模は、長さ8.5～15.7㎝、重さ94～437ｇであり、７は長さ14.4㎝、重さ310ｇである。刃は円刃か直刃で、全て片刃である。

15）石錘（第74～82図、第９～17表、図版87～113）

おもり（錘）として用いられたと考えられる石器である。紐で緊縛するために、円礫に二次的

種　類	有溝石錘	切目石錘	打欠石錘	アスファルト石錘	有孔礫(石錘)	計
模式図						
点　数 (%)	7 (0.5%)	559 (43%)	490 (38%)	249 (19%)	(287)	1,305
アスファルト付		32	79	249		360

（%は原則として小数点以下を四捨五入）

第74図　石錘一覧

な加工を加えたものと、ほとんど手を加えずに用いたものとがある。本遺跡の場合、前者には有溝石錘、切目石錘、打欠石錘があり、後者にはアスファルト付石錘、有孔礫（石錘）がある。有溝石錘の他は、いずれも200点以上出土しており、そのほとんどは漁網錘と考えられるものである。総計1,592点出土しており、有孔礫以外には計測表と写真を付してある（計測表の番号と写真の番号が対応する）。なお、切目石錘・打欠石錘の中にはアスファルトの付着しているものもあるが、それらは各々切目石錘・打欠石錘に含めて扱う。

有溝石錘（第75図、第12表、図版86下）

浅い１条の溝が、小円石の中心を通って１周する石錘である。７点の出土であり、他の石錘にくらべて少ない。全て渡辺誠氏による分類の中のＡ種に属するが、形態や溝の切られる位置によって４つに細分される。いずれも全面あるいは一部が擦られ平滑になっている。

ａ類：（第75図１・２、図版86下５～７）

扁平で平面形が楕円形（あるいは円形）を呈する円石の、短軸に溝を巡らせたものである。擦りは、原礫の形を全く変えるまでには至っていない（図中の１点破線は、礫面が擦られることによって形成されたわずかな稜線を示している。以下、石錘の図については同じ）。次のｂ類も含め溝はごく浅く、処々で少し曲がっている。

ｂ類：（第75図３、図版86下４）

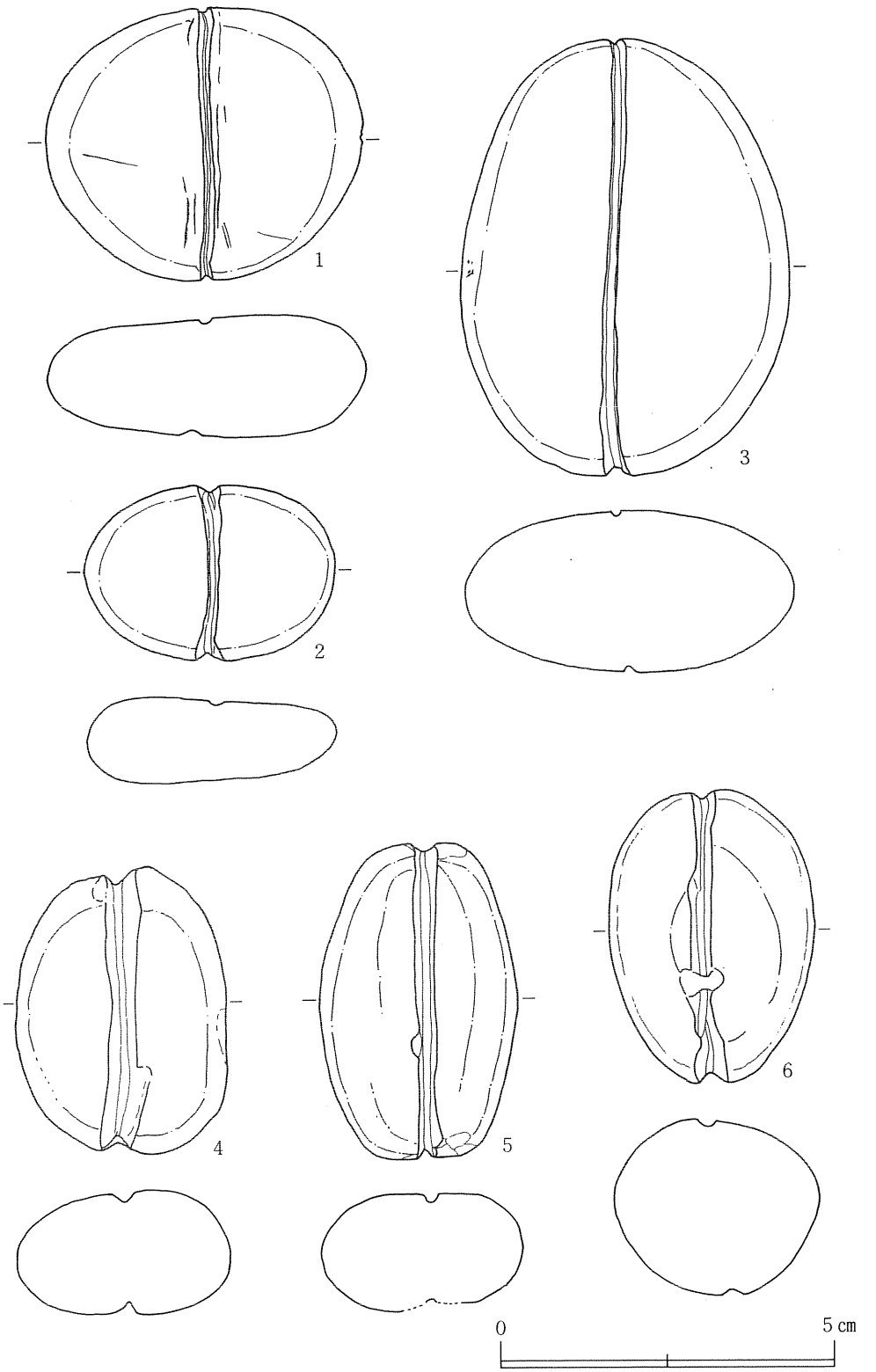
ａ類とは逆に、楕円形の長軸に溝を巡らしたものである。１点だけである。

ｃ類：（第75図４，５、図版86下１，２）

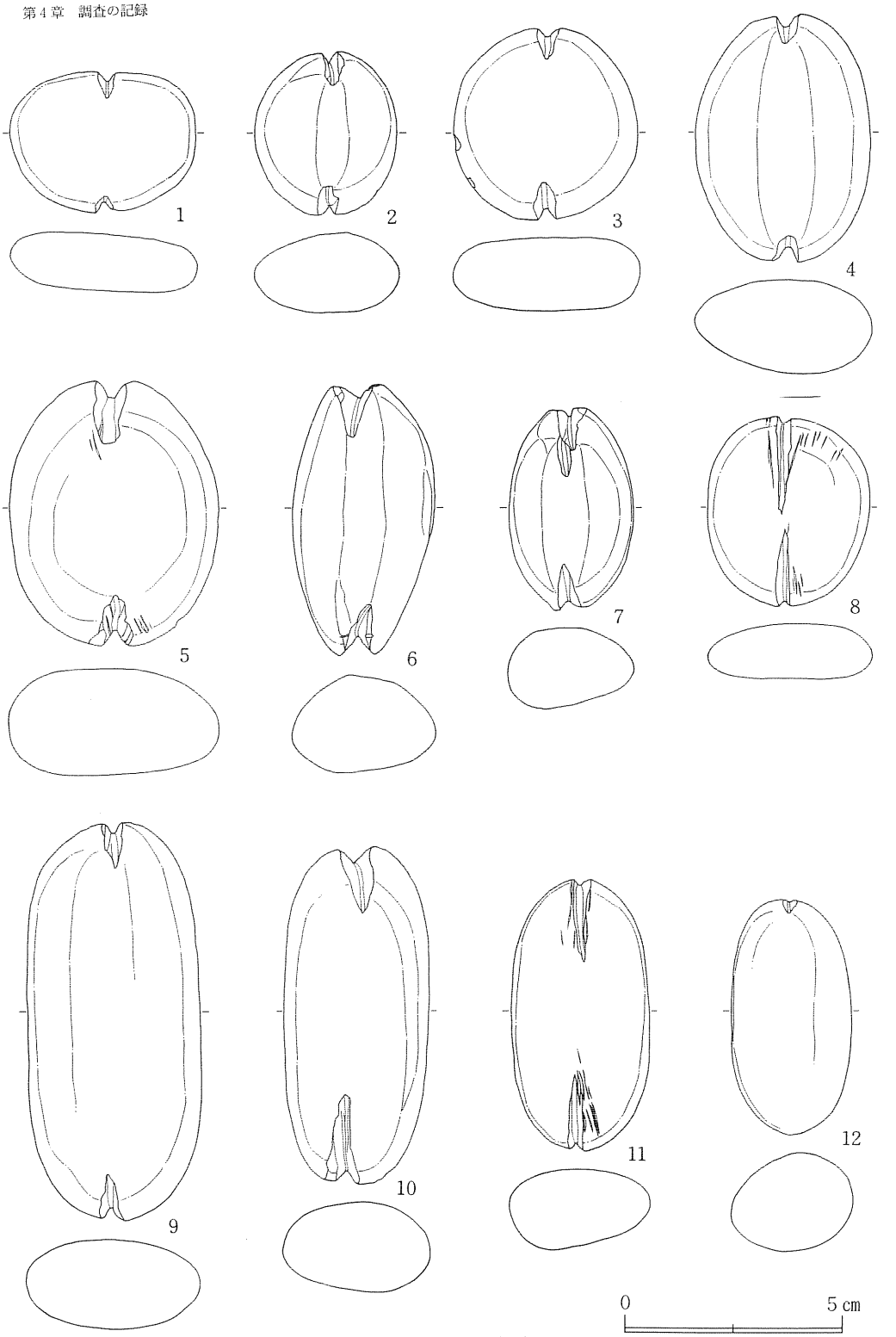
円礫の全面を擦ることによって、平面形が小判形になるように整形した後、長軸に溝を巡らしたものである。表裏面とも平坦な面となっており、ｄ類も含めａ・ｂ類よりは溝が深くなっており２点出土している。

ｄ類：（第75図６、図版86下３）

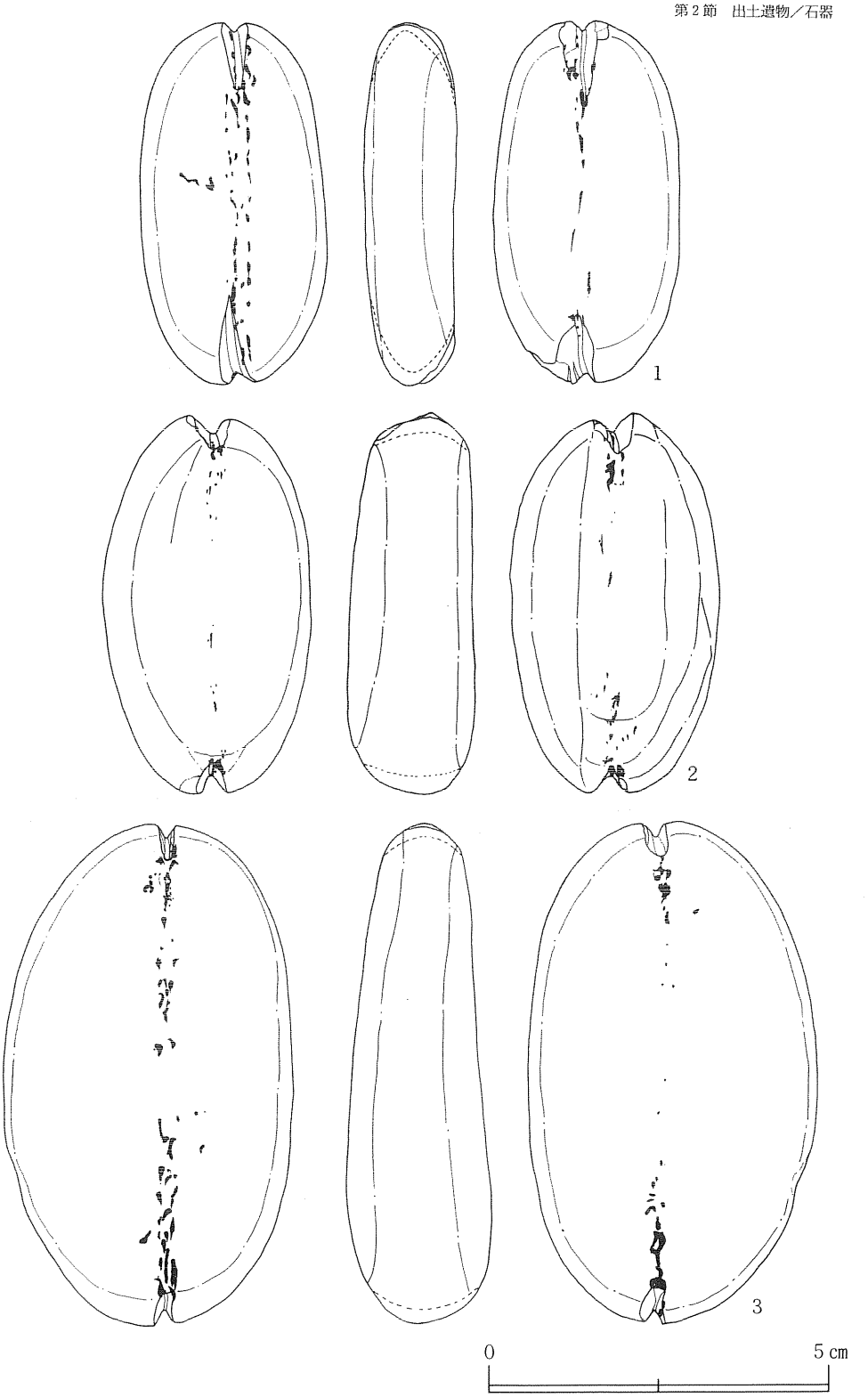
ｃ類に似るが、ｃ類の断面形が小判形を呈するのに対し、これは円形に近い断面形をしている。全体に卵のような形をしているが上下両端を結ぶ線上が、幅をもって平坦に



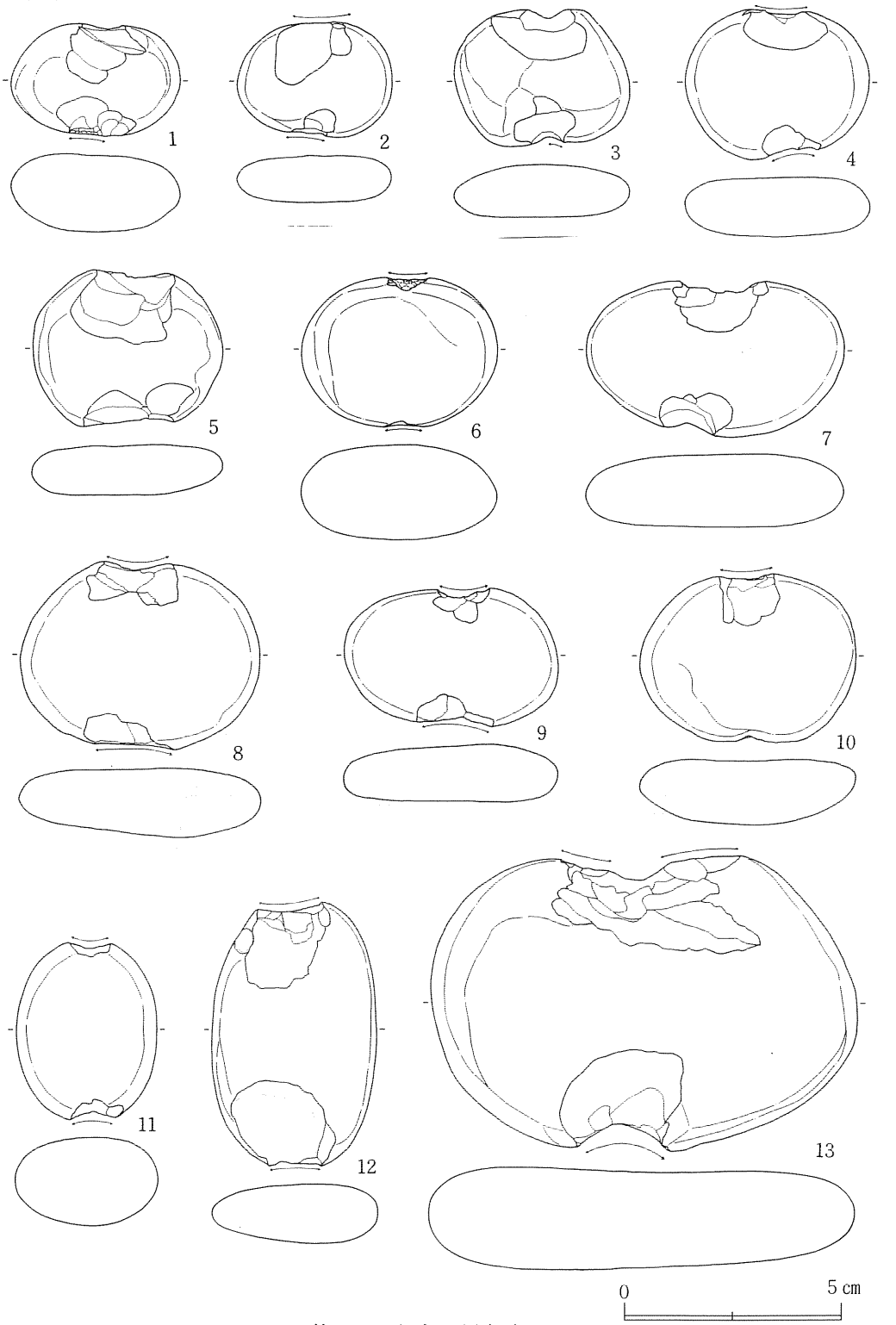
第75図　有溝石錘



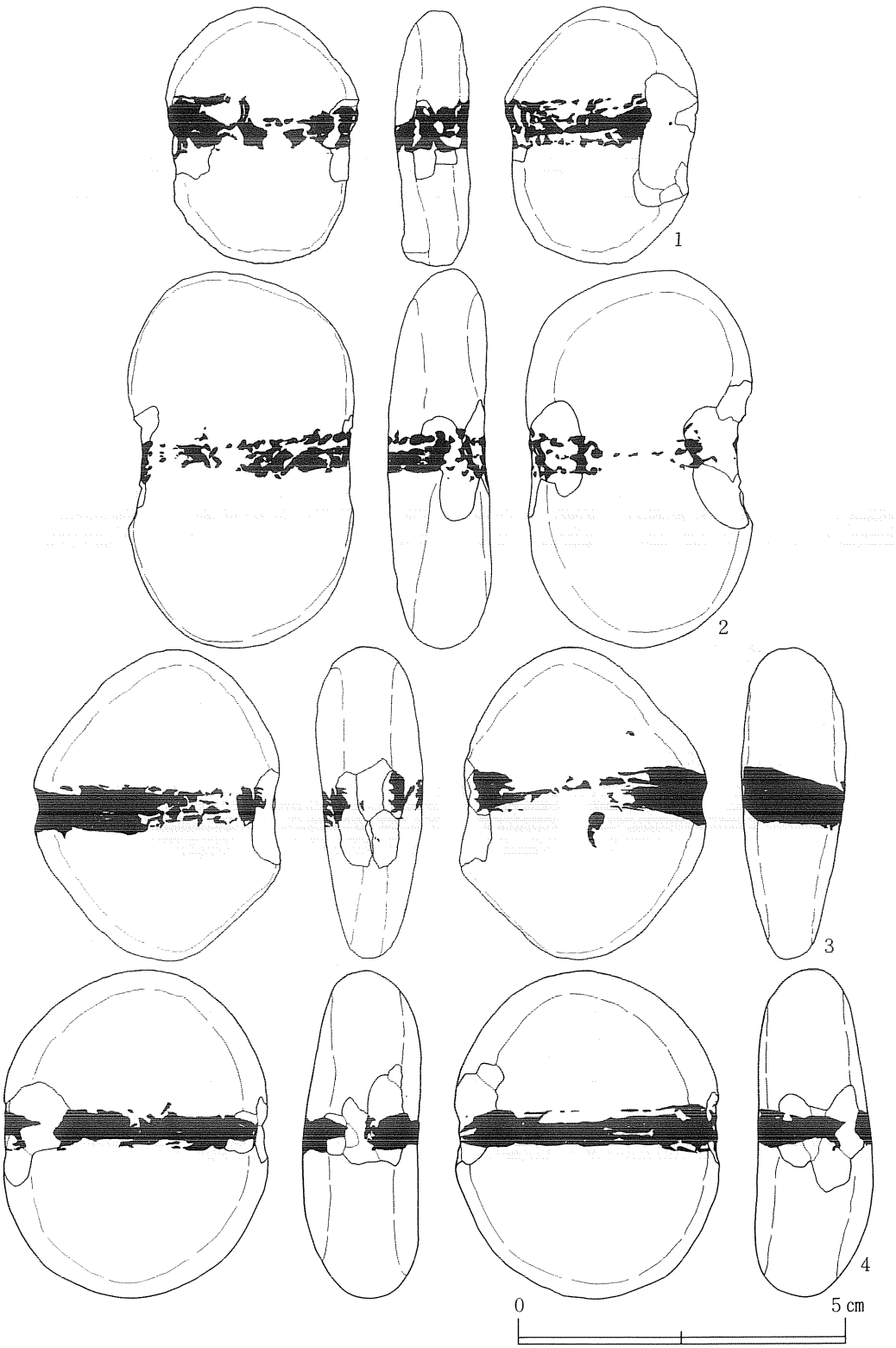
第76図　切目石錘（１）



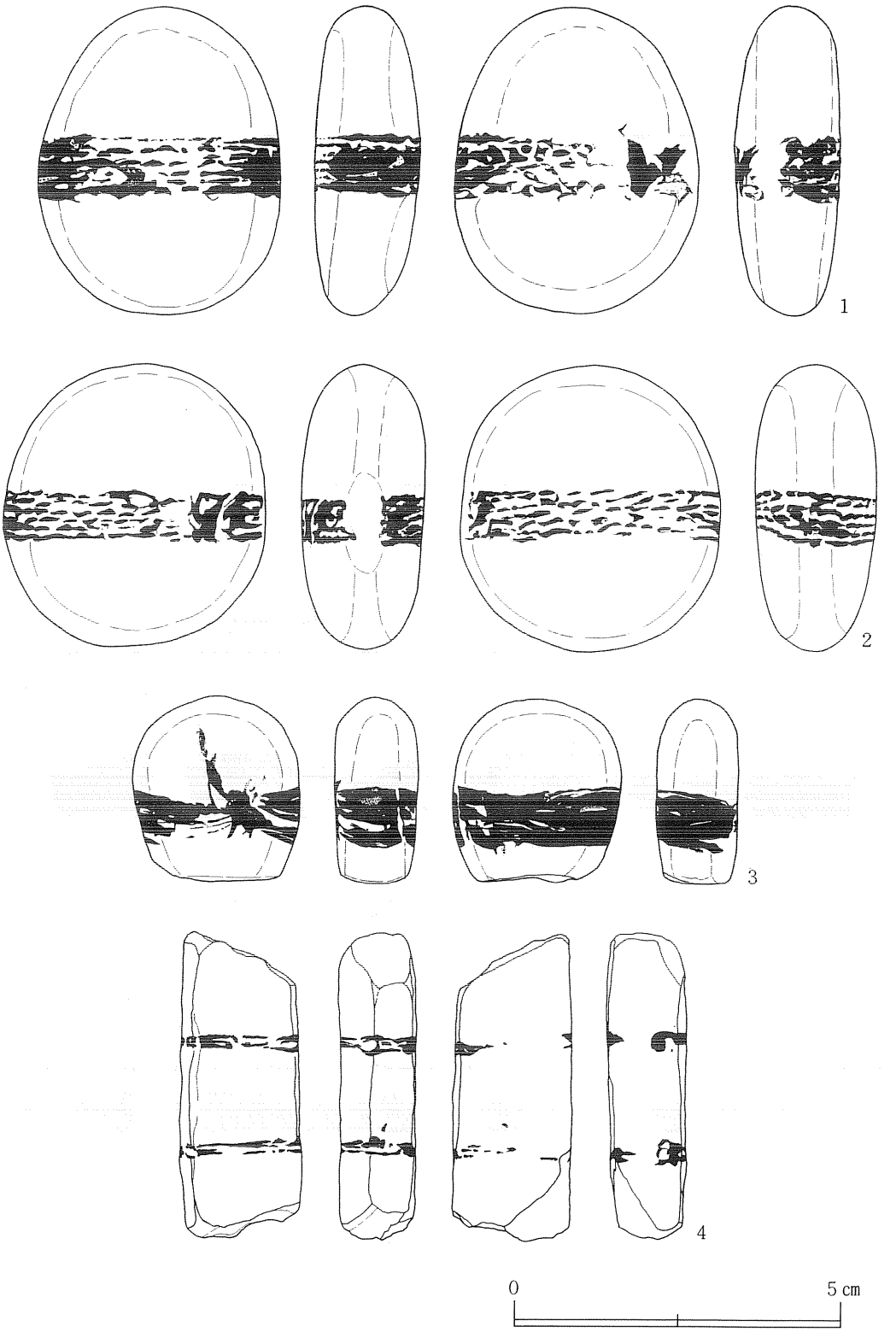
第77図　切目石錘（２）アスファルト付



第78図　打欠石錘（１）



第79図　打欠石錘（２）アスファルト付



第80図　アスファルト付石錘

されているところなど、切目石錘の大部分のものに似る。

切目石錘（第76・77図、第９～11表、巻頭図版４、図版87～98）

全面あるいは一部が擦られた小円石の両端に、断面U字形の切込みをいれた石錘である。切込みは、平面形状が楕円形（第76図４～７）・長楕円形（９～12）を呈する小円石の長軸端に施されるのが一般的であるが、短軸端（１）や円形へのもの（２，３）などもある。また、12のように一端にしか切込みのないもの（16点）、３ケ所にあるもの（２点）や、８のようにあと数㎜で切込みが溝になりそうなもの（２点）もこの中に含めている。

器全体が何らかの形で擦られていることは前述したが、その中で、両端の切目を結ぶ線上が５～10㎜の幅をもってていねいに擦られ、平坦になっている例が80％前後を占める。この平坦面は一方の面に見られるのが多いが、両面にあるものも少なくない。

また、第77図のように、両端の切目を結ぶ線上及び切目の中に、アスファルト痕を観察できるものが32点存在する。次の打欠石錘やアスファルト付石錘のアスファルトにくらべ痕跡程度のものが多いが、これは緊縛した紐に付いていたアスファルトが石器にも付着して残ったものである。紐の痕跡は２条が主であり、３条以上のものは見ていない。

切込みの端縁(図の上では上・下端面)に、コツコツと敲いたような痕跡の見えるものがある。

打欠石錘（第78・79図、第13～15表、巻頭図版４、図版99～108上）

小円礫の両端を欠き、これを紐で緊縛したと考えられる石錘である。両端の打欠部は、ほんの僅かな例を除いて敲き潰されて小範囲ながらも平坦な面が作出されており(図中の矢印部分)、他の表面を観察するとほとんどのものが擦られている。この表面を擦る作業は打欠きの後に行なわれたものと見え、打欠きの剝離による稜線が擦られてつぶれてしまっているものもある。

打欠きは小円礫の短軸端に施されるのを一般的とするが、第78図11，12のように長軸端のものもあり、１ケ所にしか打欠きのないもの（10）も56点ある。

また、両端の打欠き部を結ぶようにアスファルトが付着しているもの（第79図）が79点について見られる。やはり、錘を緊縛した紐に付いていたアスファルトが残ったものである。そして、このアスファルトの付着は、打欠き部側面のどちらか一方には見えないものが多く、アスファルトの付着していない幅は数㎜前後である。緊縛のための紐の痕跡は、アスファルト痕のあるものでは１条が少例で、２～４条が主、５条以上のものは見られない。

アスファルト付石錘（第80図、第16・17表、巻頭図版３・４、図版109～113）

扁平で円形あるいは楕円形を呈する小円石の中軸線（楕円形のものにあっては短軸）を結ぶように全周してアスファルトの付着している石錘である。錘となる小円石は、わずかに擦られているものもあるが、ほとんどは二次的な擦りなどを受けていない。アスファルト付着の紐による緊縛痕は１ケ所にしか付いていないが、２例のみ２ケ所にあるものがある（第80図４）。

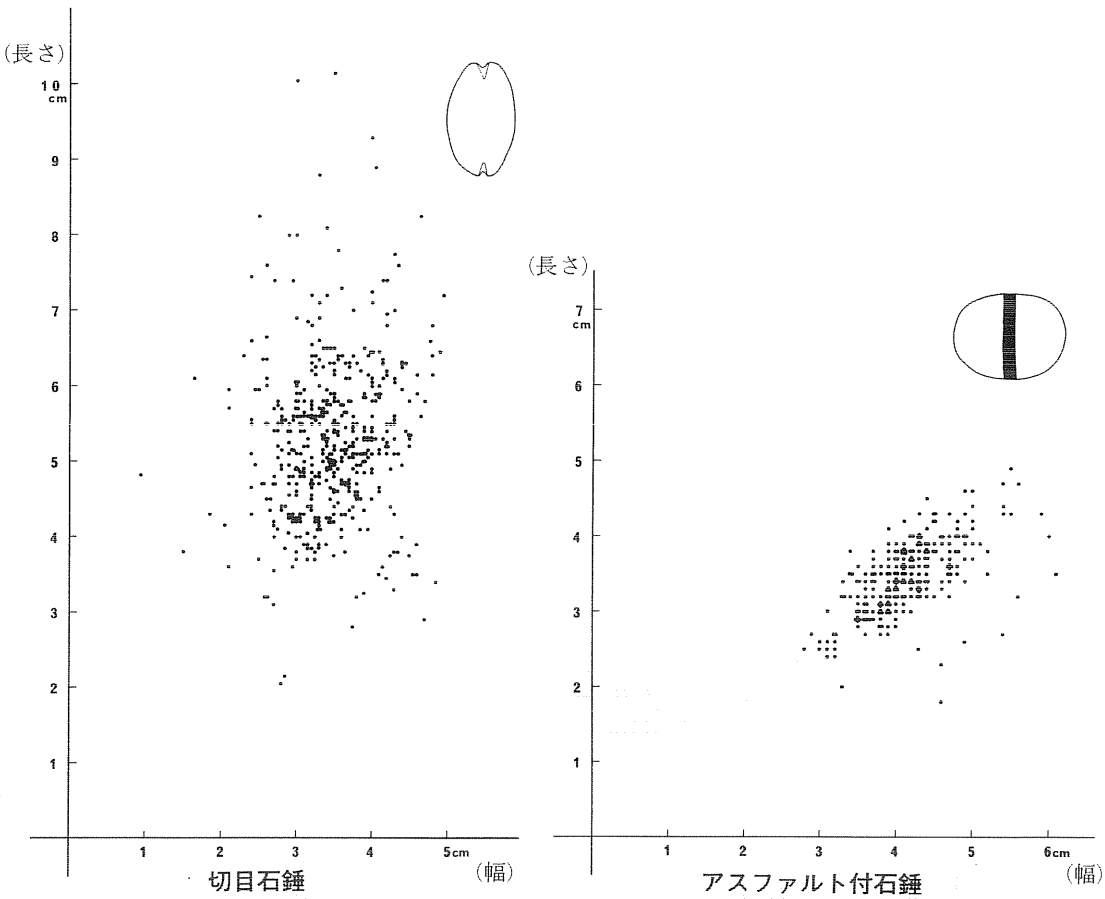
アスファルト痕は平行する数条（3～6条）からなっており、やはり錘を緊縛した紐に付いていたものが残ったものである。アスファルト痕の各条間の間隔は、密接しているものから1㎜前後離れるものまでがある。紐には撚りのあるもの（1，2）と、撚りが全くなく、非常にほそい繊維が束状になっているもの（3）とがある。撚り（1段と思われる）の明確なものは、全249点中21点（8）である。このように、撚りが明確に見えるものは、あたかも縄文土器に施文された縄文の側面圧痕の感がある。ということは、小円石をアスファルトの付かない撚紐で縛った後に、アスファルトが塗布されたものではなく、アスファルトの付いた撚紐で縛った結果、アスファルトがネガティブ状に付いたものであることを示している。また、アスファルトが緊縛部の全周に同じ状態で付着しているものも少数例あるが、大部分は小円石のどちらか一方の側面には付着していないものが多い（1，2，4）。このことは、打欠石錘の場合と同様、この部分にはアスファルトが付かない紐がおかれ、その上からアスファルト付の紐で縛った結果であることを示している。そして、アスファルト痕のどこか1ケ所には、条が乱れ、その左右にわずかにアスファルトのうすい（あるいはほそい）部分がある。これは、アスファルト付の紐を結んだ部分のようである。そのような箇所は、石錘の中央部よりもわずかに側面に近い側に多い（1，2）。

なお、アスファルト付石錘に用いられているような小円石は、調査区内から少なくとも1,000点以上は出土している。これらは切込・打欠やアスファルトの痕跡がないために、石器とは認定できなかったものである。あるいは、アスファルトを付けない紐で緊縛して、石錘として用いられた可能性も否定できないが、その大部分は、石錘とするための原材として集められたものであろう。

有孔礫（石錘）（図版108下）

自然に孔のあいた中・小の河原石が約300点ほど出土している。直径あるいは長径が3～7㎝、厚さ1～3㎝の円礫の一端あるいは中央（中央は少ない）に、径0.5～2.5㎝の自然の孔があるものが主体を占め、重さは10～100ｇのものが多い。これらは遺跡や遺物とは全く係りのない小石との見方もできようが、礫面及び孔の周囲を観察すると、明らかに人為的に擦ったと認められるものや、孔とは反対側の一端を打ち欠いたものも少なからずあり、また孔中及びその周囲にアスファルトの付着しているものが数点存在する。これらのことからここでは、このような有孔礫を石錘として使用された可能性が高いものとして捉えておく。なお、孔中の状況を見ると、ギザギザがあったりして、とても紐を通して使用したとは考えられないようなものも含まれているので、約300点全てを石錘の可能性のあるものとすることもできないが、その点数を特定することもできないので、第74図中の石錘の点数には含めていない。

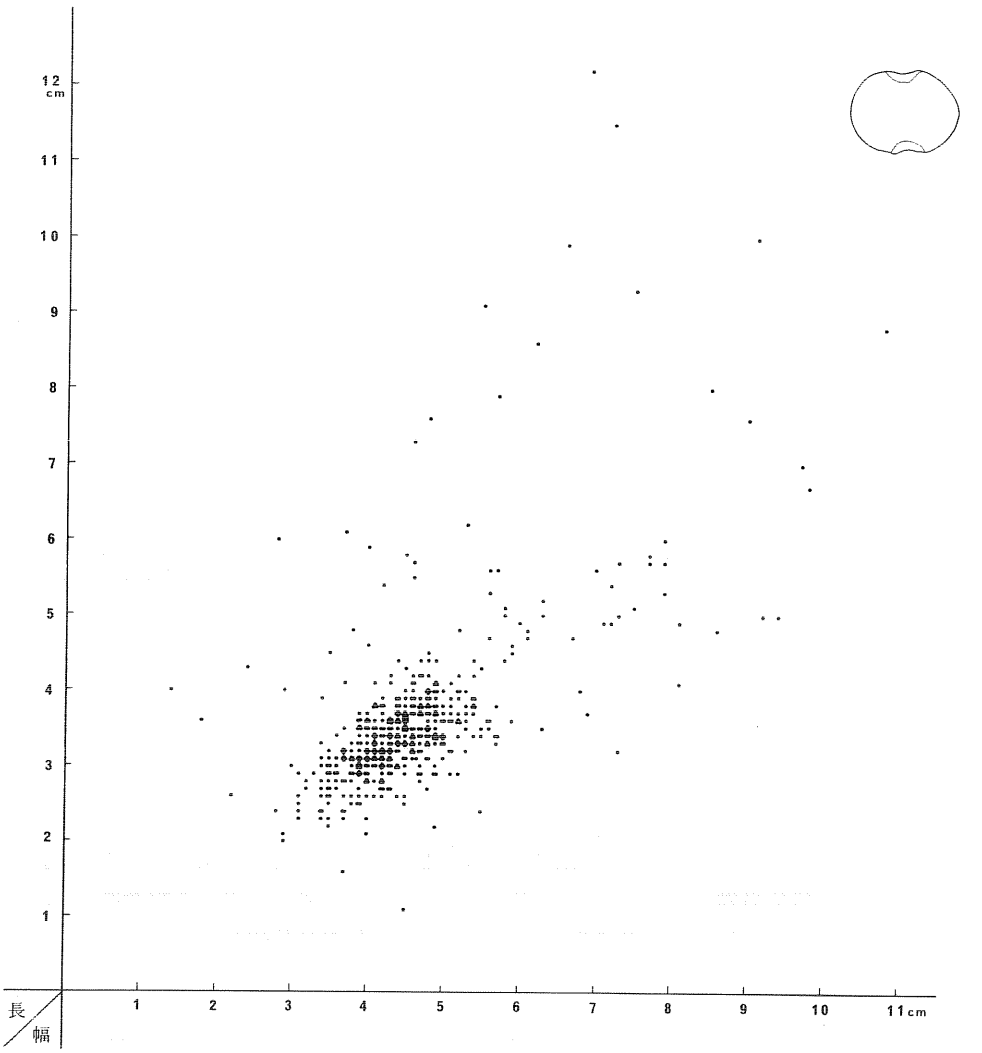
以上、八木遺跡出土の石錘について述べたが、ここでこれらについて若干触れておく。



第81図　切目石錘・アスファルト付石錘長幅分布

出土した石錘のうち、有溝石錘・切目石錘については漁網錘と推定されている。しかし、打欠石錘（うちかきせきすい）はこれまで、縄文時代の遺物として捉えた場合、ほとんどのものについては織布などを織るための錘であろうとの見方もされて来た。ところが今回、八木遺跡から出土した『小円石両端に打欠きのある石錘』（打欠石錘）は、その大きさ（第82図）、重量（第87図）、石器への二次加工のあり方との比較において、その大半のものは、漁網錘と考えられている有溝石錘・切目石錘と同様の機能が推定されてしかるべきであると思われる。このことはまた、切目石錘・打欠石錘にアスファルト痕を有するものが少なからずあることなどからアスファルト付石錘についても同様である。

有溝石錘・切目石錘・打欠石錘の器表面には、『溝切り』・『擦り』・『打欠き（剥離）』・『切込み』・『潰し』などで表現される何らかの二次加工が施されている。これらの二次加工のうち『溝切り』・『切込み』・『打欠き』は、それが石錘の名称にもなっているように最重要の二次加工であるが、ここではこれ以外の『擦り』・『潰し』について触れる。



第82図　打欠石錘長幅分布

『擦り』は、全面・部分、顕著・目立たない、の別はあるものの、上記の石錘の器表面にはほとんど見られるものである。これは使用される石錘にどのような意味（効果）を期待して施されたものであろうか。この『擦り』が特に顕著なのは、切目石錘の楕円形や長楕円形を呈するものにおいてであるが、この場合、原材となった小円石は卵形あるいはラグビーボール様の形状を呈していたものと考えられる。このような形状の小円石を用いた場合、ほとんど例外がなく、切目と切目を結ぶ面の一方あるいは両方が著しく擦られ幅を持つ平坦な面となっている。そして、この面は切目を通して結ぶ緊縛用の紐の通る位置である。従って、これから最も普通に考えられるのは、緊縛した紐がズレを生じないようにするためと、緊縛した紐と石器表面との間に隙間が生じないようにするためである、とすることができる。後者は特に、切目石錘も

第9表　切目石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	※
1	2	55	30.5	15.5	30		72	4・5	54	40	27	73		142	4・5	50.5	37.5	22	50	
2	〃	69	30	20.5	40		73	〃	55	38	13	35		143	〃	38.5	(34)	20	(28)	
3	〃	61	26	11	32		74	〃	68.5	31.5	17	49		144	〃	46.5	24	14	19	
4	〃	51	30	12.5	34		75	〃	(70)	37	18	(43)		145	〃	44	32	16	26	
5	〃	112.5	33.5	15	40		76	〃	38.5	28.5	12.5	18		146	〃	(60)	(34)	(27)	(69)	
6	〃	100.5	30	24	99		77	〃	43.5	26.5	22.5	27	⊜	147	〃	49	42.5	22	55	
7	〃	49	22.5	19	30		78	〃	(48)	(19)	(14)	(15)		148	〃	59	41	17	60	
8	〃	56.5	34	10.5	40		79	〃	35.5	27	20	26		149	〃	57.5	27.5	16	33	
9	〃	82.5	25	17.5	47		80	〃	(48)	32	23	(35)		150	〃	72	34	14	47	
11	〃	42.5	37.5	22	43		81	〃	59	35	21	48		151	〃	72	32	20	59	
12	〃	65	33.5	13.5	42		82	6	51	43	24.5	66		152	〃	56	37.5	25	63	
13	〃	60	41	22	61		83	〃	49.5	28	11.5	23		153	〃	51	43.5	(14)	(37)	
14	〃	61.5	46	23	90		84	4・5	60.5	30	14	33	⊜	154	〃	39	31	17	23	
15	〃	81	34	18.5	68		85	〃	(27)	(32)	19	(16)		155	〃	62	42	17	58	
16	〃	43.5	32	15.5	28		86	〃	63	35	17	57		156	〃	60	33	15.5	41	
17	〃	63.5	33	20	55		87	〃	37	30	12	17		157	〃	76	(17)	(14.5)	(28)	
18	〃	55	35	21	44		88	〃	47	56	(14)	(44)	B	158	〃	56.5	36.5	21	50	
19	〃	64.5	40	18.5	71		89	〃	50.5	36	17.5	37		159	〃	49.5	34.5	24.5	49	
20	〃	46	35.5	25	45		90	〃	58	33.5	17.5	41		160	〃	49	28	20	34	
21	〃	59	30.5	17	44		91	〃	53	39	17	41		161	〃	72.5	40	20	83	
22	〃	37	32.5	13.5	23		92	〃	56	30	15	35	●	162	〃	(39)	(36)	(20)	(33)	
23	〃	71	(18)	(17)	(25)		93	〃	37.5	42.5	21.5	46	B△	163	〃	34.5	42	19.5	34	B
24	〃	40	30.5	22.5	29		94	〃	51	39	21.5	49		164	〃	53	40.5	25.5	61	
25	〃	50.5	32	18	38		95	〃	45.5	29	16.5	24		165	〃	47.5	36.5	(25)	(52)	
26	〃	40	36	13.5	27		96	〃	65	(36.5)	21	(57)		166	〃	48	33	18	32	
27	〃	55.5	32.5	15	33		97	〃	56	30.5	25	47		167	〃	(62)	(37)	21.5	(60)	
28	〃	54	35	18	44		98	〃	60	(35)	(14)	(39)		168	〃	61	36.5	17	44	
29	〃	41	38.5	21.5	33		99	〃	58	45	24	75		169	〃	(61)	37	20	(43)	
30	〃	65	34.5	13.5	39		100	〃	42	33	22	37		170	〃	38	36.5	12	27	
31	〃	55	30.5	16	33		101	〃	53.5	35.5	31.5	82		171	〃	48	29	17.5	29	
32	〃	55.5	43	16	43		102	〃	49	34.5	18	35		172	〃	50	34	17	33	
33	〃	58	40	21.5	60		103	〃	44	42.5	16.5	39		173	〃	44	28	16	25	
34	〃	32	26	8	8		104	〃	59	39	18	52		174	〃	58	37	19	44	
35	〃	48.5	31	15	28		105	〃	59	34.5	20	46		175	〃	(66)	35	16	(44)	
36	〃	47.5	34	20	40		106	〃	53	40	18	49		176	〃	56	46.5	18.5	57	
37	〃	54	42	17	41		107	〃	51	30.5	16	32		177	〃	38	43	19	39	B
38	〃	59	41	26	73	⊜	108	〃	46	35	22.5	41		178	〃	39	46	18	42	B
39	〃	46	38	17	39		109	〃	49	35.5	18	40		179	〃	57	28	13	27	
40	〃	70	37.5	16.5	53		110	〃	66	32	18.5	51		180	〃	(51)	(32)	(20)	(39)	
41	〃	61.5	42	21.5	64		111	〃	(49)	37	18.5	(29)		181	〃	51.5	41	20.5	46	
42	〃	43	31	17	24		112	〃	42.5	30.5	13	23		182	〃	54	39	14	39	
43	〃	56	43	26	71		113	〃	42	30	21	29		183	〃	(62)	36.5	17.5	(50)	
44	〃	42	32.5	25	38		114	〃	55	42.5	22	59		184	〃	37.5	35	15	23	
45	〃	43	36	26	30		115	〃	54.5	36.5	21	44		185	〃	40.5	29	15	22	
46	〃	66.5	32.5	20.5	62		116	〃	45.5	38	18	31		186	〃	46	35	21	39	
47	〃	47	34	(14)	(29)		117	〃	54	35.5	20	44		187	〃	40	(29)	16.5	(21)	
48	〃	(34)	35	23	(26)		118	〃	56	36	18	45		188	〃	(38)	(22)	20.5	(18)	
49	〃	65.5	32	18	51		119	〃	49	29	20.5	32		189	〃	47	25.5	14	21	
50	〃	55	28	22.5	44	△	120	〃	42	27	16	22		190	〃	43.5	(39)	21.5	(38)	
51	〃	52	27.5	15	30		121	〃	88	33	14.5	58		191	〃	50	35	13	27	
52	〃	63	32	19	53		122	〃	46	35	17	30		192	〃	55	26	12.5	23	
53	〃	(47)	28	13	(19)	△	123	〃	58	34	22	56		193	2	48	32.5	17.5	34	
54	〃	51	24	18	27	⊜	124	〃	60	40	21.5	66	⊜	194	〃	37	31.5	15	21	
55	4・5	48.5	39	22	44		125	〃	(34)	(41)	(16)	(22)		195	〃	50	39	17.5	41	
56	〃	62	32	18	44		126	〃	45	34.5	14	28		196	〃	58.5	39	20	54	
57	〃	54	50	28	81		127	〃	39	33	18	24		197	〃	53	39.5	15	39	
58	〃	47	(34)	(14)	(24)		128	〃	64	32	12	50		198	〃	52.5	36.5	20	45	
59	〃	(55)	29	13	(34)		129	〃	66.5	26	15	41		199	〃	32.5	39	13	21	B
60	〃	(30)	24	14	(12)		130	〃	51.5	(38)	19.5	(40)		200	〃	46.5	37	21.5	43	
61	〃	53	38	14.5	33		131	〃	44	28.5	16	30		201	〃	53	34	18.5	43	
62	〃	92.5	(23)	(23)	(45)		132	〃	37	25	18.5	21		202	〃	51	29	18	32	
63	〃	62	36.5	22	60		133	〃	42.5	34	18	29		203	〃	52.5	37.5	16	35	
64	〃	51	42	22	64		134	〃	64	23	18	40		204	〃	58	30	17	39	
65	〃	(53)	31	17.5	(42)		135	〃	45	32	17	28	⊜	205	〃	44	37	17	32	
66	〃	58.5	41	18.5	58		136	〃	52	34	18	37		207	〃	50	36	23	60	
67	〃	62.5	37	18	41		137	〃	51	38	19	52		208	〃	54	44.5	19	47	●
68	〃	64	39.5	22	73		138	〃	58	47	20	63		209	〃	47	32	26.5	48	
69	〃	68	48	22	85		139	〃	41	32	16.5	26		210	〃	49.5	38	20	44	
70	〃	46.5	41	16	33		140	〃	(60)	(30)	(16)	(33)		211	〃	45.5	30	18	29	
71	〃	(50.5)	30	13	(22)		141	〃	60.5	40	19.5	56		212	〃	32	38	22	26	B●

( )は破損　※内のB＝横長　△＝切目一方　●アスファルト付着　大きさの単位はmm　重量の単位はg

第10表　切目石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	※
213	2	52.5	29	17	34	
215	〃	(65)	34	20.5	(66)	
216	〃	48	35	22	43	
217	〃	47	32	16	29	
218	〃	54.5	40	19.5	51	
219	〃	57	32	16	43	
220	〃	(27)	(35.5)	17	(20)	
221	〃	50.5	27.5	14	27	●
222	〃	(53)	36	17.5	(40)	
223	〃	58	40.5	19	48	△
224	〃	49	30	21.5	41	
225	〃	49	34	21.5	74	
226	〃	54.5	39	15	37	
227	〃	65	39	21	67	
228	〃	55	32	16.5	35	
229	〃	(38.5)	(26)	(25.5)	(21)	
230	〃	56	29.5	16	36	
231	〃	53	34	13	27	
232	〃	56	33	17	41	
233	〃	50	31	22	39	
234	〃	47	33	21	37	
235	〃	56	43	16	47	
236	〃	54	31	25	47	
237	〃	50	34.5	16.5	35	
238	〃	51.5	36.5	21.5	50	
239	〃	55	35.5	20	48	
240	〃	63	37	19.5	37	
241	〃	51	40	21.5	53	
242	〃	50	35	17	35	
243	〃	51.5	33.5	16.5	38	
244	〃	57	33.5	23	51	
245	〃	42	35	19.5	34	
246	〃	36	41.5	15.5	30	B
247	〃	50.5	34	18	37	⊜
248	〃	33	43	13.5	23	B
249	〃	38.5	28	19	22	
250	4・5	42.5	30	15	24	
251	〃	59	30	17	39	
252	〃	48	30.5	(15.5)	(27)	△
253	〃	71	33	20	68	
254	〃	41.5	20.5	18	19	
255	〃	58	32	18.5	30	
256	〃	46	37	20	41	
257	〃	38.5	42	(13)	(25)	B
258	〃	48	(28)	(20)	(26)	
259	〃	(45)	(31)	(15)	(18)	
260	〃	49.5	32	16	29	
261	〃	(56.5)	31	20	(39)	
262	〃	101.5	35	18	87	
263	〃	68	42	24.5	74	
264	〃	82.5	46.5	15	79	
265	〃	49.5	35	19	39	
266	〃	50	35	17	34	
267	〃	39	34	16	25	
268	〃	56	31	14	31	
269	〃	70	43	17	64	
270	〃	41	33	21	35	
271	〃	52	37.5	23	47	
272	〃	(55.5)	38.5	(14.5)	(22)	
273	〃	50.5	39.5	23	54	
274	〃	21.5	28.5	20.5	28	B
275	〃	56	31	18.5	34	●
276	〃	(43)	27.5	20	(21)	
277	〃	54	34	14.5	31	●
278	〃	58	30	10	25	
279	〃	53	39	19	48	
280	〃	69.5	42	13	51	
281	〃	54	29	14	29	
282	〃	50.5	37	27	57	
283	〃	57	(35)	16	(38)	
284	4・5	58.5	35	16.5	44	△
285	〃	47	29	18	28	
286	〃	46	37	23	44	
287	〃	60.5	30	21	47	
288	〃	50	39	17.5	40	
289	〃	45.5	32	22	43	
290	〃	52	42	23	59	
291	〃	45	38	21	31	
292	〃	48.5	33	13.5	28	
293	〃	47	36.5	22	47	
294	〃	(43)	32	18	(35)	
295	〃	(33)	(22)	(18)	(12)	
296	〃	55	37.5	14	34	
297	〃	62.5	32.5	14	38	
298	〃	49	34	22	43	
299	〃	59	40.5	21	59	
300	〃	40.5	31.5	9.5	15	
301	〃	(26.5)	(30)	(13.5)	(11)	
302	〃	52	45	16.5	45	
303	〃	49	37.5	16	35	
304	〃	57	33	17	42	●
305	〃	48	29.5	15	28	
306	〃	40.5	31	18	27	
307	〃	64.5	41	16.5	51	
308	〃	55	26	18	20	
309	〃	61	41.5	21	61	
310	〃	53.5	45	12.5	42	
311	〃	52	31.5	21	42	
312	〃	53	39.5	16.5	50	
313	〃	59.5	24.5	19	38	
314	〃	51	36.5	15	37	⊜
315	〃	49.5	24.5	18	22	
316	〃	45	38.5	18	42	
317	〃	53	41.5	20	59	
318	〃	(54)	32.5	19	(36)	
319	〃	52	35	19.5	47	
320	〃	50	33.5	20.5	44	
321	〃	41	36	24	42	
322	〃	74	42	19	71	⊜
323	〃	56.5	34	19	47	
324	〃	62.5	44	17.5	72	
325	〃	58	31	20	45	
326	〃	(71.5)	48	17.5	(86)	
327	〃	47.5	32	18.5	36	
328	〃	57	30	19	37	
329	〃	68	32	13	37	
330	〃	66	24	20.5	42	
331	6	(47)	(15)	(15.5)	(11)	⊜
333	〃	53	43	20	53	●
334	〃	76	43.5	22.5	95	
335	7	59	46	21	72	
336	4・5	(22.5)	(28)	(13)	(10)	
337	〃	54	27	15.5	29	
338	〃	(33.5)	(34)	(10)	(14)	
339	〃	(69)	(32)	(22)	(61)	
340	〃	43	29	15	25	
341	〃	48.5	30.5	29	47	
342	〃	(43.5)	33.5	22.5	(29)	
344	〃	63	44	21	81	
345	—	44	35	15.5	25	
346	4・5	71	40	17	61	⊜
347	〃	57.5	39	19	55	
348	〃	46	30	16.5	28	
349	〃	51	34.5	15	32	
350	〃	59.5	34	17	41	
351	〃	54	35	14	36	
352	〃	43.5	37	21.5	39	
353	〃	61	16.5	14	17	
354	〃	48.5	32	26	45	
355	〃	56	32.5	22.5	42	
356	4・5	47.5	36	21	47	
357	〃	55	43	16.5	46	
358	〃	47	30	15	25	△
359	〃	76	26	12	39	●
360	〃	46	38	14.5	32	
361	〃	78	35.5	14.5	56	
363	〃	48	27	14	24	
364	〃	43	30.5	23	34	
365	〃	53	33.5	21	53	
366	—	55.5	28	18	35	
367	—	42	29.5	17	25	
368	—	56.5	33.5	19	51	
369	—	49	40	20	45	
370	—	74	27	15	41	⊜
371	—	(35)	32.5	20	(28)	
372	—	55	42	24.5	70	●
373	—	(30)	38.5	19.5	(27)	
374	—	80	30	13	46	
375	—	42.5	33	20	35	
376	—	51.5	36	17.5	41	
377	2	56.5	36.5	21.5	50	
378	〃	47	38	20	35	
379	〃	57	(36)	22.5	(52)	
380	〃	45	40	16	36	
381	〃	43	24	15.5	22	
382	〃	56	33.5	17	45	●
383	〃	45	26.5	14	21	
384	〃	51.5	36.5	23	52	
385	〃	55	33	16.5	37	
387	〃	54	29	20	35	
388	〃	50	34.5	19.5	38	
389	〃	45.5	38	18.5	42	
390	〃	52.5	42	22.5	59	
391	〃	58	35.5	15.5	50	⊜
392	6	63	41.5	22	89	
393	4・5	63	36.5	18.5	56	
394	2	(63.5)	(26)	(10)	(22)	
395	〃	55.5	28.5	15	31	
396	〃	36	29.5	17	21	
397	4・5	42.5	29.5	19	32	
398	2	48.5	40	22.5	55	
399	〃	80	29	24	73	
400	〃	64.5	49	20.5	77	
401	〃	63.5	25.5	19	40	
402	〃	59.5	31	10.5	24	
403	〃	46.5	34.5	18	34	⊜
404	〃	56	31	20.5	41	
405	〃	(42)	(43)	22	(37)	
406	〃	41	39.5	17	36	
407	〃	43	18.5	9.5	9	
408	〃	60	30	19	35	
409	〃	56	40	16	48	
410	〃	57	27	12	24	△
411	〃	42	34.5	19.5	37	
412	〃	61	43	17.5	59	
413	〃	61.5	35	13	35	●
414	〃	(60)	(32.5)	20	(44)	
415	〃	35	41	28	39	B
416	〃	47	36	20	40	
417	〃	40	30	9	17	
418	〃	52	37	20	53	
419	〃	44	31.5	16	30	
420	〃	(48)	30.5	16	(27)	
421	〃	55	24	18	30	
422	〃	40	32.5	15	25	
423	〃	41	33	22	34	
424	〃	53.5	33.5	12.5	37	
425	〃	43	29	19	31	
426	〃	53	45	21	63	
427	〃	58	35	12	34	

（　）は破損　※内のＢ＝横長　△＝切目一方　●アスファルト付着　大きさの単位は㎜　重量の単位はｇ

第11表　切目石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※
428	2	55	(31)	24	(42)		479	2	43.5	32.5	21	36		528	4・5	57.5	32	12	28	
429	〃	93	40	20.5	109		481	4・5	54.5	37.5	21	58		529	〃	48.5	35	18	37	
430	〃	60	36	17	47		482	〃	60	26	21	14		530	〃	31	27	18.5	12	
431	〃	38	30	11.5	16		483	—	49.5	29	15	29		531	〃	53.5	42	18	46	
432	〃	42.5	34.5	12	28		484	2	39	31	19	26		532	〃	38	(15)	(10)	(7)	●
433-1	—	59.5	25	12	23		485	4・5	44	37.5	13	27		533	〃	34	48.5	21	39	B
433-2	—	74	41.5	22	44		486	2	57	30	21	49		534	〃	61.5	48	25	84	
435	4・5	51.5	29.5	16	32		487	4・5	49.5	44	20	65		535	〃	32	85	18	55	B△
437	〃	61.5	32.5	17.5	39		488	7	64	48	19.5	73		536	〃	(59)	(39)	(17)	(49)	
440	〃	38.5	(31.5)	16	(23)		489	4・5	55	29	16.5	33		537	〃	48	31	18	38	
441	2	43	36.5	24	45		490	〃	65	35	23	69		539	〃	(45.5)	(26.5)	(22.5)	(25)	
442	10	53.5	33.5	20.5	44		491	〃	(34)	(26)	(15.5)	(15)		540	〃	51	33.5	19	37	
443	4・5	47	27	12	18		492	〃	43	35	16	31		541	〃	63.5	41.5	21	64	
444	2	57.5	36	(15.5)	(37)		493	〃	86	29	16.5	51		542	〃	42	39.5	(20)	(29)	
445	4・5	(33.5)	(31.5)	(17.5)	(13)		494	2	38	32.5	19	25		543	〃	55	35	20	50	
446	2	35	45.5	17	35	B	496	〃	63.5	35.5	18.5	54		544	〃	38	43.5	18	35	B
447	〃	64	35.5	12.5	35		497	〃	46.5	32	15.5	27		545	〃	38.5	32	14	23	
448	6	77.5	43	14.5	64		498	〃	74	29.5	17.5	54	●	546	〃	63	43.5	19	57	
449	10	62	38.5	26	68		499	—	42.5	30	19.5	27		547	〃	64	(21)	21	(42)	
450	2	64	37.5	21	60		500	4・5	41.5	33	14	26		548	〃	(53.5)	28	20	(32)	
451	4・5	49.5	38.5	21.5	47		501	〃	54	30.5	20.5	38	●	549	〃	57	21	16.5	27	
452	2	58	27.5	11	22		502	〃	51	37.5	16.5	43		550	〃	42	30.5	17.5	26	
453	〃	55	27.5	15.5	31		503	—	63.5	26	19.5	47		551	〃	51.5	39.5	18	40	
454	10	60	44.5	21.5	72		504	2	51	41	20	49		552	〃	52	31	18	42	
455	—	40	44	20	40	B	505	4・5	66	33	18	48		553	6	47.5	37	21	43	
456	—	54	37.5	16	40		506	〃	20.5	28	13	9	B△	554	—	63	38	14	41	△
457	—	(47)	(40.5)	(10)	(20)		507	〃	51.5	29.5	12	22		555	—	59.5	44	21	75	
458	—	53.5	45	21	60		508	〃	42	34.5	18	32		556	—	45	26	15	20	
459	—	49	30	14	28	●	509	〃	53	31.5	14	29		557	—	73	36	23	76	
460	—	72	49.5	24	89		510	〃	62	35	15	42		558	4・5	55.5	29.5	21	31	
461	—	51	38.5	16	41		511	〃	58.5	39	14	46		559	—	61.5	35.5	21.5	65	△
462	—	52.5	34	11.5	31		512	〃	56	28	14	28	△	560	4・5	53	40	19	50	
463	—	64	32.5	22.5	48		513	〃	51.5	28	18	33		561	2	57.5	36	21.5	54	●
464	2	38.5	33	20	31		514	〃	(45)	40	20.5	(51)		562	4・5	74.5	24	17	40	
465	10	52	42	12.5	41		515	〃	41	27.5	15	19		563	〃	59.5	21	7	13	
466	〃	55.5	35	21	48		516	〃	49	31	17.5	32		564	〃	(32.5)	(18.5)	(12)	(6)	
467	—	51.5	35	13	29		517	〃	40	27	12.5	17		565	〃	36	21	12	12	△
468	2	54	27.5	13	27	●	518	〃	56	32	24.5	52		566	〃	51	39	15	34	△
469	10	46	41	18	36		519	—	41.5	27	15.5	24		567	〃	44.5	35.5	21	38	△
470	2	61	40	14	50		520	4・5	89	40.5	17	90		568	〃	49	30	11	21	
471	—	57.5	34.5	13	36		521	〃	69	33	19	56		569	2	28	37.5	11	13	B
472	2	76	(33)	17	(58)		522	〃	(14.5)	(36)	(22.5)	(12)		570	〃	37.5	45	12	22	B
473	〃	47	25.5	15.5	18		523	〃	45.5	36	18	37		571	4・5	29	47	11.5	21	B
474	—	(45.5)	30	(8)	(13)		524	〃	47	36.5	21.5	45		572	〃	35	46	15	32	B
475	—	67	37	11.5	44		525	〃	42.5	29	19	28		573	〃	47	27	16	28	
476	4・5	51	34.5	18	46		526	〃	55.5	24	11.5	19								
478	〃	48.5	38	21	44		527	〃	50	35	17.5	33								

( )は破損　※内のB＝横長　△＝切目一方　●アスファルト付着　大きさの単位は㎜　重量の単位はｇ

第12表　有溝石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※
1	5	47	30	18	33															
2	6	43	32	18	30															
3	2	43	31	27	37															
4	〃	66	49	24	95															
5	5	41	47	17	42															
6	〃	34	41	19	26															
7	〃	26	38	13	13															

大きさの単位は㎜　重量の単位はｇ

第13表　打欠石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	※
1	2	30	44	11	21	
2	〃	35	63	19	59	
3	〃	32	41	20	38	
5	〃	45	35	17	34	
6	〃	37	48	18	45	
7	〃	33	48	15	29	
8	〃	30	49	11	25	
9	〃	40	68	13	53	
10	〃	50	63	16	64	●
11	〃	33	48	20	34	
12	〃	36	45	12	27	
13	〃	39	46	15	38	●
14	〃	37	54	18	51	●△
15	〃	33	49	12	28	
16	〃	35	39	13	27	
17	〃	86	62	16	132	
18	〃	25	39	12	13	
19	〃	38	57	12	40	
20	〃	33	41	13	22	△
21	4・5	23	31	11	10	
22	〃	42	47	14	36	△
23	〃	40	46	15	40	
24	〃	25	39	12	18	
25	〃	30	47	13	28	
27	〃	31	46	22	47	●
28	〃	31	42	17	30	●
29	〃	34	50	17	36	●
30	〃	28	40	18	26	
31	〃	28	40	21	36	
34	〃	73	46	19	89	
35	〃	42	52	20	54	△
36	〃	70	97	17	126	●
37	〃	35	48	18	36	
40	〃	21	40	15	17	
41	〃	29	36	11	16	
42	〃	40	48	14	34	
43	〃	26	37	12	16	
44	〃	30	34	20	26	
45	〃	35	45	11	24	●
46	〃	26	41	8	15	
47	〃	32	40	10	18	
48	〃	29	49	17	31	
49	〃	24	31	13	14	
50	〃	32	41	15	21	
51	〃	37	42	18	36	
52	〃	26	38	12	15	
53	〃	40	48	17	40	
54	〃	34	42	13	21	
55	〃	35	39	12	24	
56	〃	33	43	12	23	
57	〃	29	42	10	18	
58	〃	36	39	7	16	△
59	〃	35	47	16	38	
60	〃	36	45	15	27	
61	〃	40	49	17	50	
62	〃	31	48	12	30	
63	〃	33	46	24	45	
64	〃	30	41	16	27	
65	〃	29	47	8	18	
66	〃	61	37	13	41	●
67	〃	33	43	13	23	
68	〃	54	72	16	83	●
69	〃	23	37	10	11	
70	9	56	70	18	103	
71	10	49	71	21	103	
72	2	23	34	9	9	
73	〃	39	49	14	38	
74	〃	26	35	13	14	
75	〃	38	54	15	41	
76	〃	32	43	14	26	●
77	2	49	60	15	56	△
78	〃	46	40	14	39	●△
79	〃	29	38	17	28	
80	〃	31	39	12	22	△
81	〃	36	45	13	32	
82	〃	30	35	13	23	
83	〃	31	40	13	18	
84	〃	31	42	14	25	
85	〃	31	43	13	27	
86	〃	35	39	16	25	
87	〃	34	44	14	34	△
88	〃	34	40	13	23	
89	〃	36	52	18	53	●
90	〃	37	49	11	29	
91	〃	30	42	15	27	
92	〃	35	53	15	39	△
93	〃	31	40	12	20	
94	〃	28	38	11	19	
95	〃	36	53	12	34	
96	〃	59	40	15	43	
98	〃	37	45	13	27	
99	—	36	40	17	33	
100	2	38	51	13	36	
101	〃	38	47	15	42	
102	〃	36	56	19	45	
103	〃	34	43	12	24	
104	〃	36	45	12	28	
105	〃	30	44	19	32	
106	〃	34	47	23	54	
107	〃	35	46	20	42	
108	〃	27	39	9	13	
109	〃	25	35	15	20	●
110	〃	30	39	7	12	
111	〃	51	75	17	89	
112	〃	34	50	18	48	
113	〃	43	55	14	51	
114	〃	48	61	16	58	
115	〃	50	94	14	105	
116	〃	53	79	15	97	
117	〃	40	45	15	35	△
118	〃	34	43	21	35	
119	〃	33	57	11	25	
120	〃	24	37	13	18	
121	〃	29	39	11	20	
122	〃	27	32	14	19	
123	〃	29	43	10	16	●
124	〃	34	44	21	40	
125	〃	38	48	13	30	●
126	〃	37	52	12	31	
127	〃	38	47	19	48	
128	〃	49	72	24	98	
129	〃	35	45	21	42	
130	〃	32	40	12	18	
131	〃	41	41	22	46	
132	〃	36	56	14	38	
134	〃	31	39	13	20	
135	〃	35	42	13	24	
136	〃	57	46	15	59	
137	〃	32	44	11	23	●
138	〃	31	39	9	18	
139	〃	34	50	13	25	
140	〃	34	49	15	34	
141	〃	37	47	17	38	
142	〃	38	46	18	41	
143	〃	38	42	9	20	
144	〃	26	45	16	28	
146	〃	56	57	16	76	
147	4・5	80	85	14	154	
148	2	36	43	12	25	●
149	4・5	36	45	16	27	
150	2	33	44	14	28	
151	〃	31	50	11	23	
152	〃	33	39	24	37	
153	〃	35	41	11	21	●
154	〃	33	45	15	29	
155	〃	34	46	13	25	
156	〃	51	58	11	44	
157	〃	37	46	7	24	
158	〃	30	39	17	29	
159	〃	47	61	13	48	
160	〃	67	98	23	200	
161	〃	38	49	19	43	
162	4・5	32	47	12	28	
163	〃	30	43	16	33	
164	2	34	39	21	45	
165	4・5	122	69	40	473	
166	〃	36	40	17	34	
167	〃	29	51	11	18	
168	〃	36	48	15	34	
169	2	36	44	15	26	
170	4・5	34	42	16	29	
171	〃	33	50	19	44	
172	〃	30	41	15	25	●
173	2	47	56	17	53	
174	〃	53	56	17	53	
175	4・5	31	45	17	33	
176	2	58	45	15	55	
178	〃	35	48	11	25	
179	10	39	46	10	27	
180	2	41	46	19	54	
181	〃	32	42	14	24	△
182	〃	29	47	12	16	
184	〃	24	34	7	10	
186	〃	34	49	12	24	●△
187	4・5	32	46	13	35	
188	〃	(23)	40	9	(12)	
189	2	38	41	16	31	
190	〃	33	44	20	41	
191	4・5	28	37	16	27	
192	〃	32	43	15	31	
193	〃	40	50	11	32	
194	〃	26	34	11	11	
195	〃	76	48	17	58	
196	〃	20	29	7	5	
197	〃	37	51	17	39	
198	〃	48	86	15	76	●
200	〃	38	54	15	43	
201	〃	29	49	16	18	
202	〃	33	45	13	27	
203	〃	30	40	16	26	
204	〃	29	38	9	11	
205	〃	31	36	13	19	
206	〃	41	37	10	22	
207	2	62	53	11	46	
208	〃	42	54	15	43	●
209	4・5	39	54	16	47	
210	10	100	91	21	256	
211	4・5	23	35	10	11	
212	〃	32	51	10	21	
213	〃	24	34	9	10	△
214	〃	26	39	9	12	
215	—	31	37	11	20	△
216	4・5	35	41	13	25	
217	〃	35	45	11	25	
218	〃	26	31	8	7	
219	2	30	43	9	14	
220	4・5	38	41	14	33	●
221	〃	29	40	13	20	
222	〃	31	38	14	22	
223	〃	26	44	14	18	

( )は破損　△＝打欠一方　●アスファルト付着　大きさの単位は㎜　重量の単位はg

第14表　打欠石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※
224	4・5	35	43	8	9		297	—	33	45	11	24		368	4・5	21	29	9	8	
225	〃	33	41	11	20		298	—	28	32	10	13		392	〃	32	42	14	22	
226	〃	31	43	13	23		299	—	32	38	15	28		369	〃	34	48	17	37	
227	〃	25	31	9	9	△	300	2	32	73	21	63		370	〃	32	44	11	23	△
228	〃	29	35	9	10		301	4・5	38	54	18	56		371	〃	31	38	13	22	
229	〃	27	48	13	25		302	〃	31	38	17	26		372	〃	34	40	16	29	
230	2	32	37	8	13		303	2	34	45	11	25		374	〃	34	49	12	26	
231	4・5	39	42	16	39		304	〃	36	51	17	45		375	〃	41	46	16	34	
232	〃	99	66	21	212		305	〃	28	34	13	18		376	〃	32	46	20	40	
233	2	32	43	12	21		306	6	32	41	16	25		377	〃	(16)	37	14	(10)	
234	〃	33	41	18	35	●△	307	〃	37	44	17	36		378	〃	29	40	15	23	
235	7	58	77	27	136		308	4・5	79	57	17	111	△	379	〃	32	42	10	19	
236	2	35	37	10	18	△	309	〃	31	48	12	26		380	〃	31	35	9	13	
237	4・5	54	42	11	34	△	310	〃	29	52	12	27		381	〃	36	39	13	27	
238	〃	26	42	13	19	●	311	〃	34	49	15	32		382	〃	34	36	9	16	
239	〃	33	35	16	36		312	〃	37	45	12	29		383	〃	34	47	12	24	
240	7	39	54	16	44		313	〃	27	42	20	27		384	〃	28	41	11	22	
241	2	35	47	16	38	△	314	〃	34	54	23	58		385	〃	(11)	45	16	(21)	
243	〃	60	79	33	206		315	〃	49	81	25	98		386	〃	26	35	11	14	
244	〃	76	90	9	95	●	316	〃	35	48	11	27		387	〃	38	50	17	45	
245	〃	31	37	13	21	●	317	〃	31	45	13	27		388	〃	29	43	8	14	
246	〃	33	47	17	33	△	318	〃	40	29	14	24		389	〃	88	108	26	370	
247	〃	32	42	15	26		319	〃	22	49	15	23	△	390	〃	28	47	7	15	
248	〃	39	47	17	39	●△	320	〃	35	49	21	42		391	〃	34	44	14	28	
249	〃	91	55	15	93	●	321	〃	39	52	15	39		393	〃	93	75	32	249	
250	〃	32	41	15	27		322	〃	45	59	19	59		394	〃	31	39	12	19	
251	4・5	29	39	15	22		323	〃	57	77	27	135		395	2	26	35	10	12	
252	〃	39	34	12	20	△	324	〃	60	28	15	27		396	4・5	28	42	13	22	
253	2	28	37	20	30		325	〃	35	44	18	37		397	〃	39	48	19	33	
254	〃	30	42	14	24	●	326	〃	31	41	14	25		398	2	33	39	14	24	
255	4・5	28	42	(9)	(11)		327	〃	36	43	11	23		399	4・5	30	42	15	29	△
256	2	29	35	15	17		328	〃	27	42	22	26		400	2	34	46	18	41	
257	4・5	32	53	17	46		329	〃	30	45	15	31		401	4・5	36	50	20	49	
258	2	35	48	13	28	●	330	〃	36	45	11	26		402	2	34	41	12	27	
259	—	22	35	17	17	●	331	〃	39	51	15	39		406	—	38	53	10	26	
260	4・5	47	67	21	81	△	332	〃	52	63	22	109		407	—	32	43	14	26	
261	—	32	42	13	21		333	〃	36	43	17	40		408	—	56	56	(11)	(52)	
262	—	29	39	21	32		334	〃	36	45	14	28		409	—	43	45	10	32	
263	—	38	49	20	52	△	335	〃	34	52	14	32		410	—	41	51	18	45	
264	—	40	48	16	38		336	〃	(36)	44	11	(29)		411	—	37	46	18	36	
265	—	(38)	45	(24)	(64)		337	〃	37	69	11	29		412	—	37	53	16	40	
266	—	50	92	19	139		338	〃	(36)	(18)	11	(8)		413	—	35	45	13	24	
267	—	39	44	13	32		339	〃	31	37	14	23		414	—	38	46	14	34	
268	—	24	37	9	11		340	〃	36	59	16	42		415	—	33	50	11	27	△
269	—	27	34	12	14	△	341	〃	32	47	13	28		416	—	41	49	15	40	
270	—	27	35	14	16		342	〃	37	48	17	38		417	—	36	49	20	56	
271	—	31	37	16	23		343	〃	57	73	16	82		418	—	37	40	18	30	
272	—	30	39	12	16		344	〃	31	40	11	20		419	—	39	48	12	31	△
273	—	30	39	13	21		345	〃	38	50	17	43		420	—	24	55	20	28	
274	—	29	31	10	14		346	〃	34	55	16	40	△	421	—	32	46	13	26	
275	—	37	44	16	37		347	〃	34	41	18	37		422	—	44	47	17	46	
276	—	28	42	12	18	△	348	〃	33	38	17	34		423	—	34	57	20	51	△
277	—	41	49	13	33		349	〃	57	79	9	66		424	—	32	46	(14)	(26)	
278	—	27	36	10	16		350	〃	45	48	11	30		425	—	37	45	18	33	
279	—	36	52	17	38		351	〃	26	40	10	12		426	—	40	53	15	45	△
280	—	27	43	15	29	●△	352	〃	36	44	14	30		427	—	42	46	11	27	
282	—	32	40	12	22		353	〃	36	43	11	23		428	—	36	43	10	20	△
283	—	38	48	19	52		354	〃	37	50	13	35		429	—	42	48	17	44	
284	—	34	43	17	30	●	356	〃	34	46	11	22		430	—	34	41	18	32	
285	—	40	52	14	54		357	〃	35	39	9	17	△	431	—	38	41	11	22	
286	—	34	48	(10)	(20)		358	〃	33	44	14	30		432	4・5	27	43	18	25	
288	—	30	40	16	24		359	2	28	40	17	27		433	〃	31	43	13	23	
289	—	25	38	17	22	●	360	4・5	115	72	16	188		434	2	44	58	19	50	
290	—	31	41	17	32		361	〃	32	39	16	23		435	4・5	35	40	9	16	
291	—	34	50	22	52	●	362	〃	34	49	17	36		436	〃	30	36	13	19	
292	—	37	44	15	31	●	363	〃	26	22	11	8		437	〃	50	73	17	80	
293	—	33	42	18	27		364	〃	31	41	14	25		438	〃	28	36	7	13	
294	—	35	46	17	34		365	〃	33	46	13	26		439	〃	35	45	14	34	
295	—	25	45	17	25		366	〃	30	39	16	24		440	2	37	49	15	35	
296	—	48	52	18	61		367	〃	32	37	13	11		441	4・5	29	36	15	22	

（　）は破損　△＝打欠一方　●アスファルト付着　大きさの単位はmm　重量の単位はg

第15表　打欠石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※	登録番号	出土区	大きさ 長	幅	厚	重量	※
442	4・5	30	38	13	19		466	2	36	51	18	37	△	490	4・5	(36)	50	16	(42)	⊜
443	2	31	41	16	30	△	467	4・5	33	44	14	31		491	2	38	44	15	28	⊜△
444	〃	35	56	13	28	△	468	〃	46	59	14	43	△	492	—	34	57	15	38	⊜
445	4・5	36	42	9	18		469	〃	44	49	10	27		493	4・5	37	39	10	25	⊜
446	2	33	48	14	28		470	〃	44	48	20	53		494	2	38	47	13	41	⊜
447	〃	44	44	9	24		471	〃	32	37	14	21	⊜△	495	4・5	37	49	13	32	⊜
448	〃	41	43	13	34		472	〃	39	44	13	30	⊜△	496	〃	27	35	12	14	⊜
449	4・5	55	46	14	49		473	〃	36	40	13	29	⊜△	497	〃	37	44	15	31	⊜△
450	〃	35	55	8	22		474	〃	35	43	12	16	●	498	〃	33	34	9	14	⊜
451	〃	38	42	13	26		475	〃	31	46	17	31	⊜	499	—	29	39	11	15	⊜
452	〃	42	43	9	24	△	476	2	33	45	18	35	●	500	—	41	49	17	47	●
453	〃	33	40	13	26		477	4・5	33	41	14	25	●	501	—	30	44	13	22	⊜
454	〃	(40)	(14)	12	(11)		478	〃	40	49	17	52	⊜	502	—	28	35	17	21	●
455	2	40	52	12	34	△	479	〃	38	48	44	34	⊜	503	—	30	35	14	19	●
456	〃	24	28	11	7		480	2	37	47	21	49	●	504	—	31	42	12	23	⊜
457	4・5	(43)	(24)	8	(10)		481	〃	30	30	13	14	●	505	—	33	46	15	34	●△
458	2	36	52	13	34	△	482	〃	32	40	12	23	●	506	2	32	51	12	31	●
459	〃	29	45	7	13	△	483	〃	34	41	10	17	●	507	4・5	35	42	14	26	●
460	〃	36	41	17	38	△	484	〃	31	40	16	28	⊜	508	〃	39	45	12	28	●
461	4・5	50	58	17	59		485	4・5	29	33	11	11	●	509	2	31	34	14	25	⊜
462	2	41	81	19	88	△	486	〃	32	37	12	21	⊜△	510	—	30	42	16	26	⊜
463	〃	34	43	12	23		487	〃	38	44	11	29	⊜△	511	—	48	38	13	34	⊜
464	4・5	44	54	7	28	△	488	〃	42	47	12	37	⊜							
465	〃	35	40	14	27		489	〃	37	47	15	37	⊜							

（　）は破損　△＝打欠一方　⊜＝アスファルト付着　大きさの単位はmm　重量の単位はｇ

含め石錘の表裏面の中央部で、紐の通る部分はほとんどくぼんでいないことからもうなずける。

16）石皿（第83～85図、図版114上）

安山岩・凝灰岩・石英粗面岩・砂岩などの大礫を、中央部が凹む皿形に仕上げた石器である。形態により２大別される。なお、石皿の各部の名称については、一部、硯の部分称を援用して模式図のようにした。なお、石皿の製作は単に研磨だけでなく、最初には敲打を行って大略の形を作り、その後研磨を行ったと見られる例も数例ある。

Ａ類：明瞭な外堤を有するものである。裏面に脚を有するか否かで２つに分けられる。

Ａ－ａ：（第84図１～３）

外堤・陸・海・脚があり、裏面に隆帯を有するもの（イ－１，２）と、隆帯のないもの（ロ－3）がある。

Ａ－ｂ：（第84図４～７）

裏面に脚・隆帯を有しないもので、陸と海が明瞭に分けられるもの（イ－４，５）と、それが明瞭でないもの（ロ－６，７）がある。

Ｂ類：陸あるいは海は持つが、外堤を明瞭に作出していないものである。

Ｂ－ａ：（第84図８、第85図９，10）

比較的うす手のもので、形の整っているもの。

Ｂ－ｂ：（第85図11）

原材そのものが厚手で大きく陸・海も深いが、破片ばかりで全体の形状が不明なも

第16表　アスファルト付石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量
1	4・5	37	47	15	39	84	2	29	35	15	21	165	4・5	37	50	17	47
2	〃	32	42	11	25	85	〃	37	42	18	35	166	〃	30	42	14	20
3	〃	25	30	11	12	86	〃	37	43	14	34	167	〃	34	41	19	39
4	〃	38	42	17	37	87	〃	36	40	17	37	168	〃	30	37	19	26
5	〃	40	49	14	41	90	〃	36	41	16	33	169	〃	37	40	15	36
6	〃	39	46	17	49	91	〃	34	49	15	36	170	〃	36	47	17	34
7	〃	33	40	16	26	92	4・5	30	39	11	17	171	2	46	50	18	54
8	〃	35	39	14	25	93	2	34	37	18	33	173	〃	44	50	19	49
9	〃	38	42	15	37	94	10	34	42	12	27	174	〃	33	40	11	23
11	〃	43	54	17	58	95	4・5	43	47	15	30	175	〃	33	37	19	29
12	〃	31	38	12	22	96	〃	28	38	12	17	176	〃	35	34	14	23
15	〃	31	40	21	38	97	10	40	42	19	39	177	4・5	32	36	15	24
16	〃	34	37	16	33	98	7	43	45	11	34	178	2	34	46	16	33
17	〃	38	48	17	40	99	10	32	56	20	50	179	4・5	36	47	13	32
18	〃	32	37	18	31	101	7	39	44	18	37	180	2	38	44	16	31
19	〃	38	39	21	41	102	2	49	55	17	67	181	4・5	35	34	16	22
20	〃	38	43	15	35	103	4・5	25	28	12	12	182	〃	25	31	11	13
21	〃	34	39	19	37	105	〃	31	36	12	17	183	2	39	45	22	54
22	〃	41	44	14	34	106	〃	29	35	(8)	(9)	184	〃	38	41	13	20
23	〃	42	48	13	27	107	〃	28	40	16	25	185	〃	40	46	15	30
24	〃	30	36	17	24	108	〃	28	35	11	14	187	〃	20	33	9	8
25	〃	40	60	15	55	110	〃	27	29	15	16	188	〃	31	39	12	19
30	〃	34	40	13	25	111	〃	34	40	15	25	189	〃	46	49	21	63
31	〃	38	44	13	28	112	〃	32	33	16	27	190	—	36	42	10	24
32	〃	33	36	14	26	113	〃	34	40	14	29	191	4・5	34	41	15	30
33	〃	35	40	17	31	114	〃	45	44	17	46	192	2	30	35	11	18
34	〃	31	36	17	28	115	〃	34	43	17	29	193	〃	39	40	15	29
35	〃	38	47	14	35	116	〃	26	31	15	12	194	〃	40	43	18	45
37	〃	29	36	11	16	117	〃	30	38	11	22	195	〃	36	38	15	30
38	〃	32	39	17	21	118	〃	31	35	19	24	196	4・5	34	33	18	25
39	〃	30	40	16	23	119	〃	23	46	14	21	197	2	36	43	12	24
40	〃	37	39	14	28	120	〃	35	47	15	32	199	〃	38	45	12	26
41	〃	39	43	13	29	121	〃	36	41	16	28	200	4・5	38	41	12	30
42	〃	24	32	18	20	122	〃	35	38	14	26	201	〃	35	41	15	29
43	〃	44	54	22	74	124	〃	32	39	19	29	202	2	36	47	17	40
44	〃	29	37	14	21	126	〃	40	48	15	32	203	4・5	27	32	10	15
46	〃	31	39	17	30	127	〃	37	44	17	35	204	〃	28	38	15	24
47	〃	39	39	19	37	128	〃	35	42	17	33	205	〃	33	39	11	20
48	〃	33	39	15	27	129	〃	30	29	12	21	206	〃	40	43	17	41
49	2	32	41	10	19	130	〃	38	37	15	30	207	〃	30	35	17	22
50	4・5	27	39	9	12	131	〃	38	34	14	27	209	〃	32	41	16	25
51	2	33	44	19	38	132	〃	41	48	12	29	210	〃	18	46	11	18
52	〃	27	32	17	16	134	〃	40	47	13	40	211	〃	41	39	16	26
53	〃	38	52	18	50	135	〃	27	54	22	57	212	〃	35	47	16	40
54	〃	30	36	16	22	136	〃	41	50	21	58	213	〃	38	41	15	34
55	〃	38	41	14	27	138	〃	35	52	15	46	214	〃	34	40	13	22
56	〃	36	35	18	22	139	〃	36	48	15	39	215	〃	40	49	13	40
57	〃	31	38	16	29	140	〃	35	61	23	69	216	〃	40	48	15	40
58	〃	26	30	11	12	141	〃	33	40	14	27	217	〃	34	43	18	32
59	〃	32	35	11	18	142	〃	29	35	13	17	218	〃	29	38	14	23
60	〃	31	41	9	18	143	〃	32	40	15	25	219	〃	28	39	16	23
61	〃	32	38	14	25	144	〃	39	43	13	31	221	〃	39	51	19	45
62	〃	36	37	15	23	145	〃	43	49	15	45	222	〃	36	39	15	26
63	〃	33	46	12	28	146	〃	34	35	18	25	223	〃	36	42	18	36
64	〃	35	37	20	33	147	〃	33	42	13	27	224	〃	37	42	19	37
65	〃	38	40	15	29	149	〃	34	47	12	27	225	〃	35	40	18	33
67	〃	25	43	18	26	150	〃	30	39	16	26	226	〃	43	43	12	29
69	〃	40	42	17	44	151	〃	34	42	17	33	227	〃	32	40	13	24
70	〃	47	56	21	69	152	〃	39	43	17	35	228	〃	35	37	13	24
71	〃	47	54	13	47	154	〃	34	44	15	25	229	〃	34	35	12	20
72	〃	36	47	19	43	155	〃	29	40	13	21	230	〃	38	48	11	34
73	〃	27	38	12	17	156	〃	34	41	10	20	231	〃	35	36	12	23
74	〃	37	43	17	38	157	〃	30	41	12	22	232	〃	31	39	17	30
75	〃	37	40	14	28	158	〃	36	41	14	24	233	〃	38	45	18	49
77	〃	33	43	14	33	159	〃	33	39	15	25	235	〃	43	45	16	38
79	〃	32	34	15	21	160	〃	24	31	12	13	236	〃	42	45	22	33
80	〃	35	43	15	24	161	〃	43	59	12	44	237	〃	31	38	15	26
81	〃	32	44	14	26	162	〃	35	48	20	46	239	〃	32	33	11	18
82	〃	36	41	19	38	163	〃	38	44	14	29	240	〃	34	36	16	27
83	〃	35	44	16	36	164	〃	40	46	20	50	242	—	43	55	24	72

（　）は破損　　大きさの単位は㎜　重量の単位はｇ

第17表　アスファルト付石錘計測一覧

登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量	登録番号	出土区	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	重量
243	—	29	36	13	18	263	—	30	31	11	15	277	4・5	35	39	14	24
246	—	27	36	13	20	264	—	37	46	11	31	279	〃	32	43	16	29
247	—	42	41	17	40	265	—	34	42	19	38	282	〃	37	44	15	35
250	—	35	41	17	36	266	—	37	42	10	19	283	〃	30	38	(10)	(9)
251	—	29	35	13	20	267	6	40	43	16	37	285	〃	37	41	11	25
252	—	37	49	18	43	268	2	42	50	25	65	286	〃	32	45	12	27
253	—	38	42	15	33	270	—	36	44	16	29	287	〃	25	32	11	14
255	—	26	49	13	26	271	—	39	47	13	36	288	2	34	44	15	27
256	—	39	44	14	30	272	4・5	32	47	17	36	290	4・5	36	44	16	36
257	—	33	43	14	26	273	〃	39	49	13	39	293	2	42	45	14	35
260	—	26	32	12	13	274	〃	39	50	19	43	294	〃	39	41	20	47
261	—	30	38	14	20	275	〃	38	40	13	27	295	4・5	37	37	12	24
262	—	33	43	12	25	276	2	31	38	14	21	296	〃	33	43	25	22

( )は破損　大きさの単位はmm　重量の単位はg

の。裏面も同様に使用されて、両側からの海の部分の断面がうすくなり割れたり、砥石に転用されたりしている。ほとんどが砂岩であり、あるいはこの類は次に述べる砥石の一部に含まれるものもあるかもしれない。

17）砥石（第85図12，13、図版114下）

大きな砂岩や石皿の破片などに、数条～数十条の溝状のくぼみを持つ石器である。溝の長さは6～20cm、幅1～2.5cm、深さ1cm前後のものが多く、溝の横断面形は開口部がより広いU字形をなす。なお、石皿の一部か否か不明であるが、長さ20～30cm、幅10cm前後で、中央部がゆるやかにくぼむ砂岩製の石器も、砥石の一部のものかもしれない。総計で数十点は出土しているが、大きな1個の砥石が割れていくつもに分かれているものもあり、詳細な点数は不明である。

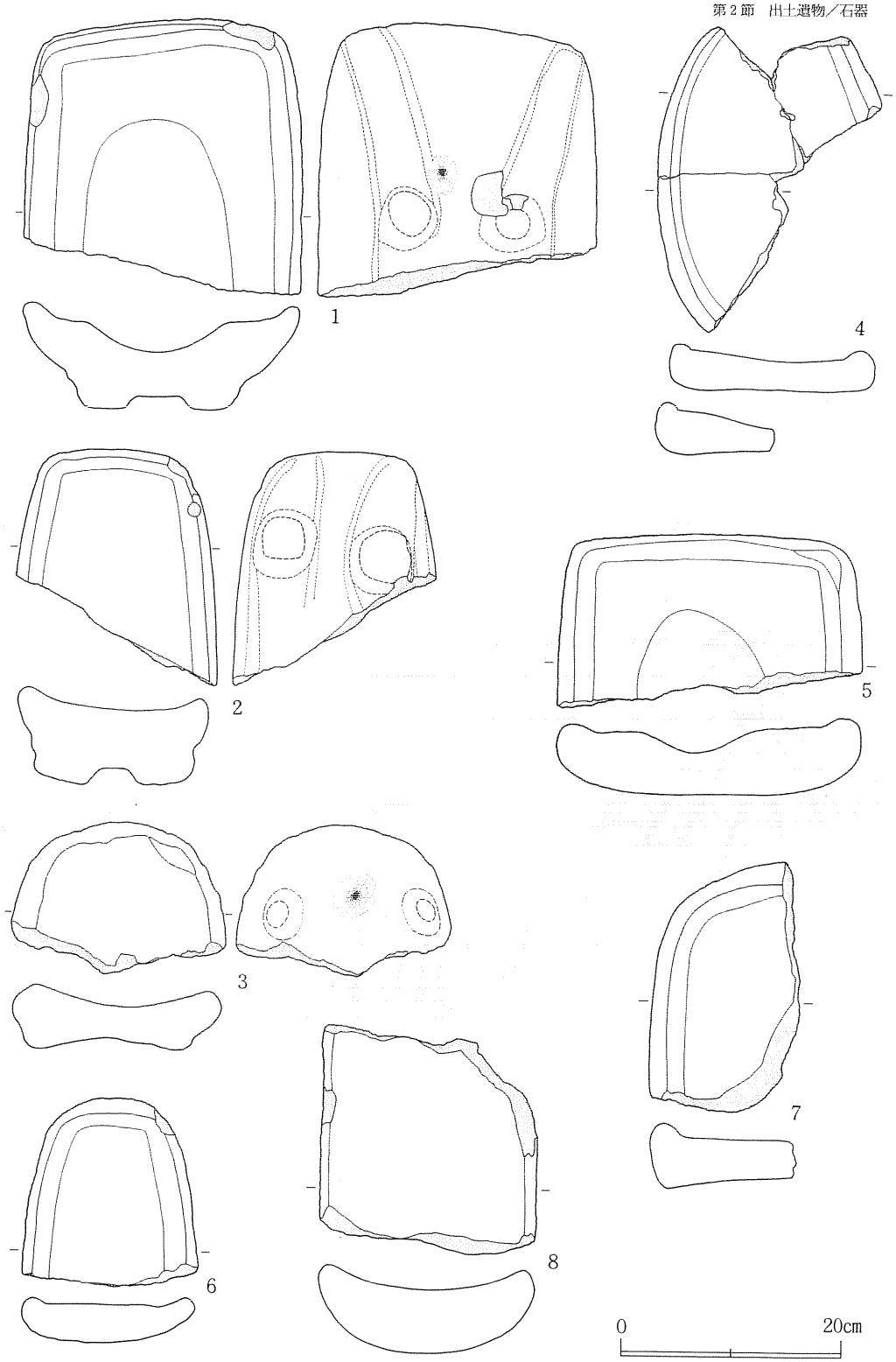
18）凹石（図版115上）

拳大～⅓頭大くらいの自然礫（扁平なものが多い）の表裏面（一方の面のみのものもあり）などに、小さなくぼみを1～2個有する石器である。1,600点以上出土しているが、詳細な点数は不明である。凹石の中には、表裏面及び、側縁も磨られているものも含まれる。

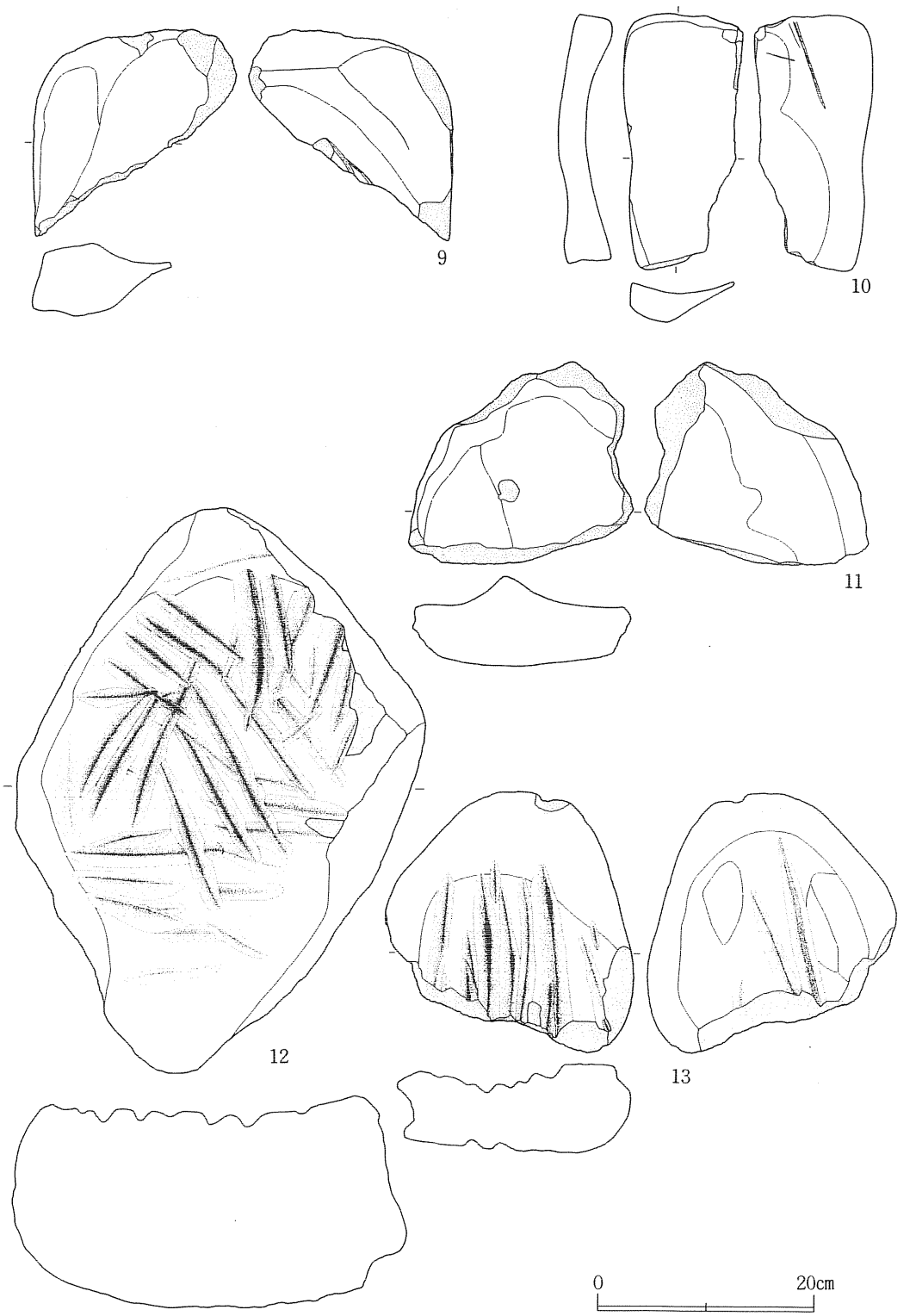
19）磨石

凹石と同規模の自然礫で、一部の面あるいは全面が磨られている石器である。1,000点以上

第83図　石皿一覧



第84図　石皿



第85図　石皿・砥石

出土しているが、詳細な点数については不明である。

小結

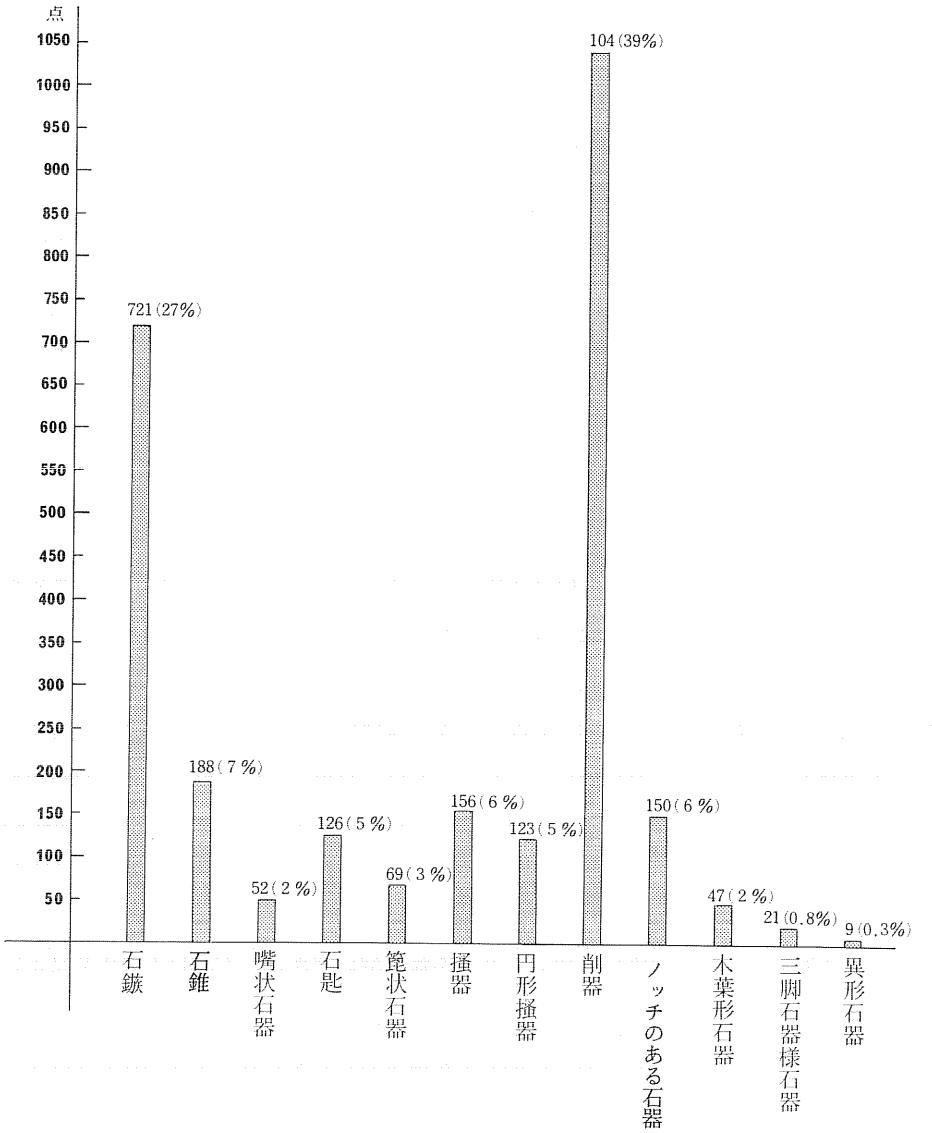
今回の八木遺跡の発掘調査で出土した石器は、調査面積が1,950㎡とせまいのに、剥片石器、それ以外の石器を合わせて約5,700点という膨大な数に上る。しかもそれらの石器の大多数は第２区、第４・５区1,200㎡からの出土であり、大変な密集ぶりである。それらの石器についてはこれまで記述したとおりであるが、ここで少しそれらをまとめておくことにする。

剥片石器組成

頁岩などの原石があり、これを打ち割って得た剥片を素材にして二次加工を施した石器で、八木遺跡から出土している器種は、石鏃、石錐、嘴状石器、石匙、箆状石器、掻器、円形掻器、削器、ノッチのある石器、木葉形石器、三脚石器様石器、異形石器の12器種約2,700点である。第86図は剥片石器の出土点数とその出土比率を示したものである。これを見てみるとまず、石槍（あるいは石鏃を含めない尖頭器）のないことに気付く。誤認によって他器種に含めてしまった可能性もないわけではないが、明確に槍先に着けて使用したと考えられる石器の出土は見ていない。石槍は、一般的には槍先形の石器として主に狩猟用の石器と考えられているものである。八木遺跡から出土している狩猟用の石器としては、石鏃が上げられるが、これについては後述するように、本遺跡においては獣を対象とした石器に限定できるものでもない。とすると、八木遺跡出土の剥片石器の中に占める狩猟用の石器の割合は、非常に低いと見ることができるかもしれない。

次に、他の器種との比較で突出して多いのは石鏃と削器である。石鏃はその重量において、0.2～１ｇの軽量・小型ものが過半数を占め、その代表的なものにＡ－ｂ・Ｄ－ａ類が上げられる。石鏃についてはその石材・製作において美麗なものが多いことを理由に、土壙墓との関連で、副葬遺物の可能性のあるものも含むことを前にも述べたが、それが全てとは考えられない。使用の結果によると考えられる折損品も多い。また、アスファルトの付着による矢柄への装着の仕方からすれば根バサミを介しての装着が大部分である。根バサミが出土しておらず、根バサミを含めての具体的な重量やその有効性についてはわからないが、例えばＡ－ｂ・Ｄ－ａ類としたような非常に小型・軽量の石鏃は、魚をその対象動物とした可能性もあるものとして考えられよう。

削器の大部分のものは『切る』、あるいは『削る』ことを主目的とした石器と考えられる。東北地方北半の縄文時代遺跡においては、剥片石器組成の上でその割合の高いことは一般的であるにしても、石匙・箆状石器に比べて非常に多い。刃部の形状などからすれば、石匙の一部の機能を持っている石器と見ることもできる。石匙の多くを、つまみ部に紐を付けて携帯して

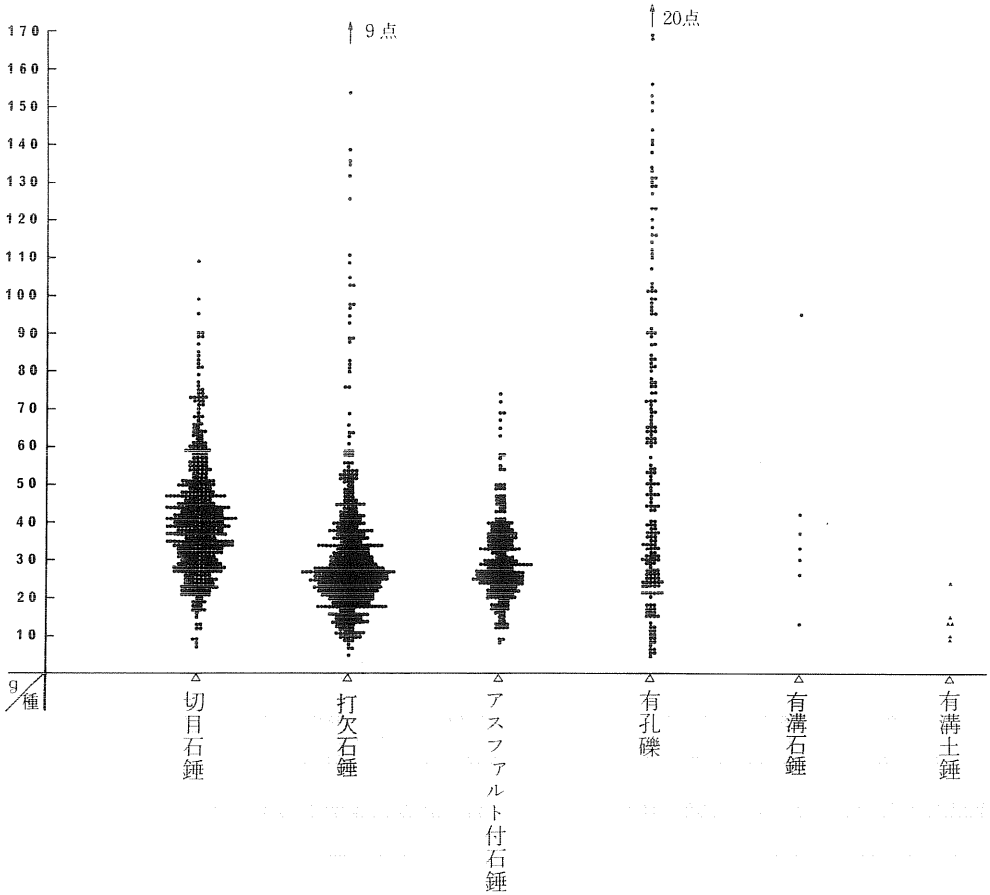


第86図　剥片石器各器種の数　（％は原則として小数点以下を四捨五入）

いた石器と見れば、削器は一定の場所でほとんど決まった作業をする際に使用された石匙の代用品とも考えられる。削器Ｂ－ａ類などは、石匙の刃部両端が尖った部分の形状に酷似している。

嘴状石器

小型両面加工で、先端部（刃部）が猛禽類の嘴か爪に似た形状を呈し、基部に柄が付けられるかソケットに挿入されるかしたと考えられる石器が52点と、まとまった数で出土しており、新しい器種として認定して十分であると考えた。この石器あるいはこれに類似する石器は、縄



第87図　石錘・土錘重量分布

文時代後・晩期や北海道続縄文時代遺跡の出土石器中にも散見されるようであるが、多くて数点のものであり、既存の定形的石器に含められて取り扱われて来ているようである。ここでこの石器の地域的広がりや時期的な問題、機能等について詳しく言及できるものではないが、その機能についてのみ触れておきたい。刃部（特に先端部）の状況や、基部に付着したアスファルトについては前述のとおりである。このことと、大量に出土した漁網錘と考えられる石錘の存在など他器種と本遺跡の主な生業との関連を考えれば、ここでは、捕れた魚の腹をひらくためのような石器（道具）と推定しておくことも可能であろう。

石錘

八木遺跡出土の石錘について、その項で、そのほとんど（ここでは有孔礫を除いて考える）が漁網錘であろうとの見解をもって述べて来たが、今その点に立ちもどって考えてみたい。有溝石錘と切目石錘については、これまでの先学の研究からも漁網錘とすることに異論はあるまい。打欠石錘については前述した理由により、少なくとも切目石錘の最高重量である109ｇ以

下のものについては漁網錘とすべきであろうし、それ以上のものについても109ｇ以下のものと同様の使われ方であったか否かは別にして、その可能性は十分にあるものと見ることができる。アスファルト付石錘についても、漁網錘とすることで問題はあるまい。また、これらが八木遺跡で使われた漁網錘の全ての種類と、石錘各種類のバラエティー（大きさ・重さなどの変異）であることはできないにしても、その実態をほぼ反映しているものと見てよいと思われる。

第87図は、八木遺跡から出土した石錘（有孔礫を除く）と、６点出土している土錘について、その重量分布を示したものである。これによれば、有溝石錘と切目石錘については、有溝石錘の点数が少数ながらもほぼ同様な分布傾向を示しているが、切目石錘と打欠・アスファルト付石錘のピークが若干ながら異なっている。このことは、何か理由を持つのであろうか、それとも、略許容できる変異差なのであろうか。両者間のピークの差は、せいぜい10〜15ｇである。このことからすれば、ほとんど同様のものと見ることもできようが、両者の間では、錘としての石器の緊縛用紐のかけられ方に差異があるように思われる。つまり、漁網錘としての網本体との位置関係に差があるように思われるのである。切目石錘は切目の位置からしても、網本体下端と切目両端を結ぶ線が平行になるように拘り付けられたのに対し、打欠石錘とアスファルト付石錘は網下端と打欠両端（アスファルト石錘にあっては紐の痕跡）を結ぶ線とが直交するように括り付けられたと考えられる。この漁網と錘の括り付けられ方の差異が、果して網の種類の差なのか、ひいては網の種類の差による漁法の違いまでを反映しているのか、等については今後の資料の増加などを待たねばならない。ともあれ、縄文時代人の主生業の１つである漁業、とりわけ内水面漁業についての資料がこれだけのボリュームで発掘された例は、秋田県内はもちろん、東北地方に限ってみてもほとんどないものであろう。その意味から言っても、今回の石錘の出土は重要であり、八木遺跡が縄文時代の単なる１遺跡に止どまらず、該期におけるこの地域の内水面漁業の中心的役割を担った遺跡、との見方もできるかもしれない。

５．石製品

出土している石製品には、線刻礫14点、有溝礫８点、研磨痕の認められる石製品20点、軽石製品３点、有孔石製品２点、盲孔石製品４点、石刀・石剣・石棒類15点、円盤状石製品1,555点、軟質凝灰岩質石製品1,305点、その他の石製品など、3,000点近く出土している。点数の多い円盤状石製品と軟質凝灰岩質石製品以外は、できるだけ多く図示している。

１）線刻礫（第88図、図版116）

これら礫を素材とする石製品は、４，５，13を除きその線刻が細く弱いもので、非常に見づらいものが多い。14点出土しており、このうち13点を図示している。

１は丸みをもつ自然礫をそのまま利用している。先の細い方の端部に打ち欠きが認められるが、これが意図的なものかどうかは不明である。両面には直線を主とする線刻が施され、図示面の裏面には規則的に横２本、縦３本刻されている。この交点と、これらの間の縦線上の計12ケ所に結び目状の短沈線が多数引かれている。このうち、少なくとも５ケ所では交点を円（あるいは方）で囲むような意図で刻しているようである。表面は、裏面に比べると規則性は薄いようである。側面には線刻は認められない。

２～９は打ち欠きあるいは研磨によって、断面形が半月状を呈するような素材を用いている。２は楕円形の表面に線刻の施されているもので、裏面は打ち欠いたままの凸凹な面となっている。図示面左に弧状の刻線を６本、右は左ほど丁寧ではないが、６ないし７本の弧状の線が引かれている。この後に十字状の線刻が加えられる。３は裏面を打ち欠いた後に、僅かではあるが研磨しているが、凸凹が残る。線刻は中央の沈線を縦に見て、右に２のような弧状の刻線、左には部分的にしか認められないが、右とは対称とならない沈線が刻されている。線刻は浅く明瞭ではないので１本の幅広の線なのか、２本一組のものかは不明である。４も中央に縦２本の線刻、図示面左に弧線を刻しているものである。５は３，４と同じようなモチーフを比較的深く線刻しているもので、½程欠損している。砂岩系のザラザラした素材を用いている。裏面は平坦であるが、顕著な研磨はなされていないようである。

６は両面と側面を丁寧に研磨した後に、線刻しているものである。側面は２段に研磨されており、稜がついている。左右に弧状の沈線を刻し、これに斜方向に線刻を加えている。

２～６のようなモチーフをもつ石製品は、近くでは横手市大鳥井山遺跡で出土している。

７～９は裏面を研磨した後に、線刻しているもので、いままで見てきたものに比すと、線刻というより擦痕に近いものである。８は一応格子状を意図しているようであり、縦方向の線の後に、横方向の線を刻している。

10は棒状の素材の側面に３本の線刻が施されているものである。この他の部分には、弱い擦痕が不規則に認められる。

11，12は球体に線刻のあるものである。11は目玉様に円錐状の凹みをもつもので、裏面に十字状の弱い線刻が入る。裏面はこの後、敲打による潰れが認められ、線刻の交差部分が失われている。12は短軸に沿って部分的に途切れながら一周する線刻をもつものである。

13は全面を研磨した板状の素材に格子状の線刻を施しているものである。線刻は残存している２側面にも入れられている。

２）有溝礫（第89図14～21、図版116）

この類は素材の短軸あるいは側面を一周する溝を１～３条もつものである。溝は線刻礫より明瞭に刻されている。確認できた８点総てを載せてある。

14～18，20は棒状もしくは楕円状の素材の短軸を一周するように溝が切られているものである。14は砂岩系の石材を棒状多面体に研磨仕上げした後に、３条の溝を巡らしている。15～18は得られた素材に研磨等の手を加えることなく、溝を刻している。16は２条の溝を刻する前に、表裏面には部分的に線刻、擦痕が認められる。17，18は素材の頂部近くに、はちまき状に１条の溝を巡らしているものである。20はやや長い球体を研磨整形した後に、溝を刻しているものである。

19，21は研磨した素材の側面を一周するような溝をもつものである。21は表面と４側面に研磨に伴う擦痕が認められるが、裏面は自然面を保っている。

これらの石製品のうちには、先に述べた有溝石錘として機能していたものが含まれている可能性がある。

３）研磨痕の認められる石製品（第89図22～27、第90図、第91図38～41）

ここで扱う石製品は、素材の１～数面を研磨しているもので、線刻等の要素を含まないものを一括する。20点を図示している。

22～29は円形ないし楕円形の素材の１、２面を研磨しているもので、線刻礫３～９も同じ手法に拠っている。22，23は裏面、24は表面１面のみの研磨、他は２面を研磨している。28，29は研磨の結果、板状をなしているが、他は断面形が半月状あるいは截頭形を呈している。

30～32は表裏面と側面を研磨しており、多面体様に仕上げられている。32は短軸に沿う方向に研磨され、33，34は各面にやや丸みをもつ立方体様で、35は板状、36，37は棒状を呈している。34の研磨は顕著ではない。37は先端部両面を鋭角になるように研磨している。

38，39は全面を丁寧に研磨しているもので、磨製石斧等の石器の未製品のようにも看取できるものである。

40，41は砂岩系の素材を用いているためか、研磨面上の無数の擦痕が目につく。

４）軽石製品（第91図42～44、図版116）

42は長径75㎜、短径42㎜の小判形に整形した製品である。完形で重さは31.2ｇある。43は不

定形の素材をそのまま利用して、径10㎜の孔を穿っているものである。重さは15.2ｇ、42とともに水に浮くことから、“浮き”などの用途が考えられる。44も軽石であるが重さが39.4ｇあり、これは沈む。両面から穿孔している。出土しているのは、以上３点である。

５）有孔石製品（第91図45，46、図版116）

２点確認できている。45は軟質の凝灰岩を楕円状に整形した後、先端に近い部分に孔を穿っているものである。重さは24.9ｇある。46は周縁の一部に調整剥離が施されている。これが有孔石製品として製作する段階のものであるのか、あるいは転用であるのかは不明である。重さは54.8ｇを量る。

６）盲孔石製品（第91図47、第92図48～50、図版116）

両面から穿孔が行なわれているが、貫通しておらず有孔石製品の未製品と思われるものである。４点出土している。50は三日月状（バナナ状）の素材を用いているもので、内反り部（側面）に軽い擦りが加えられる。孔は厚さ20㎜の材のちょうど半分で止まっている。長さは17㎝である。48は表面に研磨痕の認められるものである。49は形状が勾玉様を呈している。内側面には研磨に伴う擦痕が残っている。

７）石刀、石剣、石棒（第92図51～56、第93図、図版117）

この類は確認できた15点総てを載せているが、いずれも欠損しているものである。

①石刀（51～54）

４点確認している。いずれも刃部が内側に付く、内反りとなるものであろう。柄頭の遺存している51～53のうち、53は他の２点に比すと、この部分の作り出しが明瞭でなく、全体的に見ても研磨による仕上げもやや雑である。52の背刃部分には陰刻が認められる。54の背刀には黒色の付着物が認められ、アスファルトか漆と思われる。51で現存長22㎝を測る。

②石剣（55，56）

55は薄い剥片となっているが、断面形が凸レンズ状になるものと思われる。

56は逆台形様の柄頭と、その下の節帯（凸帯）からなるもので、長径19㎜、短径17㎜の断面楕円形の身が接続する。柄頭には浮彫による装飾が施され、綾杉様の短刻線が認められる。文様構成は対称的にしかも両面ともほぼ同じであるが、両側頭部の耳状の削り出しの位置から表裏（前後）が区別される。幅７㎜の節帯にも、中央の沈線を介しての綾杉様の刻線が加えられている。製作時に無意識的に付加された無数の擦痕は、硬質の石材と格闘した跡を物語るものである。同様の意匠をもつものには、近県では 伝青森県五所川原市内出土、伝岩手県雫石町出土（いずれも兵庫県辰馬考古資料館蔵）、山形県飽海郡成興野遺跡出土、宮城県宝ケ峰貝塚出土の石剣あるいは石棒が知られている。

③石棒（57～65）

確認した10点のうち、頭部をもつ有頭のもの（57～59）と、頭部をもたない無頭のもの（60～65）に分けられる。前者はくびれ部を敲打することによって、頭部を表現しており、装飾的な加工は認められない。

57，58は敲打による整形により断面円形の製品に仕上げているもので、57は軟質の凝灰岩を素材としている。59は断面が三角状の素材を用いており、くびれ部分を敲打することによって頭部を表現している。その他の部分は自然面がそのまま残っている。

60～65は無頭と思われるもので、小型で細身のもの（60～63，65）、やや大型のもの（64）がある。いずれも最終的には磨製による作りである。60，61は断面が円形を呈し、その径が36～40㎜である。61は欠損面に弱い線核が１本引かれている。62，63は断面が楕円形のものである。64は径が68～78㎜の略円形を呈するやや大型のもので、先細りの先端部を欠く。65は他に比較すると、磨きの度合がやや低く、やや雑な仕上げとなっている。

８）円盤状石製品（第94図66～79）

扁平な礫材の周縁を打ち欠いて作られている、いわゆる円盤状石製品は1,555点を抽出している。その名が示すとおり、平面形は円を基調としたものが大部分を占めるが、隅丸方形を示すもの（69）、楕円形を意図したもの（77，78）も存在する。

大きさはばらつきがあり、最小、最大、平均値は次のとおりである。

最　小　長径25㎜、短径25㎜、厚さ4㎜、重量6.6ｇ

最　大　長径116㎜、短径104㎜、厚さ37㎜、重量491.6ｇ

平均値　長径49.3㎜、短径45.6㎜、厚さ13.1㎜、重量43.7g

長径でみると、平均値を中心とする40～59㎜に全体の79％（1,146点）が集中している。40㎜未満は195点で13.4％、70㎜以上は47点（3.2％）、100㎜以上になるとわずか６点（0.4％）でしかない。重量では、20ｇ台に333点（22.9％）、30ｇ台に342点（23.6％）、40ｇ台に219点（15.1％）と平均値を下回るところにピークがくるようである。一方、100ｇ以上は57点（3.9％）、200ｇ以上になると16点（1.1％）にすぎない。

周縁部を観察すると、いくつかの共通項でまとめることができる。

①上下面いずれかの一面を打面として打ち欠きを行っているもの

この方法で打ち欠きを行っている例は圧倒的に多く、全体の90％を占めている。打面と打ち欠きの方向から見ると、

ａ．打面に対して、ほぼ垂直方向に打ち欠かれているもの（66，68）

断面形が箱形を示す。ａの内で36％を占める。

ｂ．打面に対して斜位方向に打ち欠かれているもの(69，73，75，77，79)

断面形が台形を示す。20%を占めている。

c．a・b両者の要素が認められるもの（67，72）

この例が最も多く、44%を占めている。

②両面から打ち欠きを行っているもの

a．両面からほぼ垂直方向に打ち欠きを行っているもの（70，76）

断面形が緩い弧状を示している。

b．両面からそれぞれ斜位方向に打ち欠きをおこなっているもの（71・75の左側面）

断面形が「く」字状を示している。この方法によるものが最も少なく、全体でみても37例しかない。しかも全周縁をこのタイプで打ち欠いているものはなく、その一部分を打ち欠いているものである。

周縁部を打ち欠いた後に、この面を擦っている事例が38点にある。顕著な擦りではないが、図示したなかでは70，76が該当する。①a、②aタイプのものに多い。70は上下面にも擦りが加えられている。

打ち欠きは全周縁部に及ぶ場合が多いのではあるが、全体の19.2%、298点には自然面が一部そのまま残されている（70，78）。

なお、73，77の上面には弱い線刻が認められる。

9）軟質凝灰岩製石製品（第95図）

軟質の凝灰岩を素材とする石製品のうち、定型的な名称の与えられているもの（有孔石製品45石棒57など）を除くものの総称として上記のように仮称しておきたい。

この種の石製品は、以下のようにいろいろな形態を示すが、共通して言えることは素材のほぼ全面を何等かの方法で整形加工している、ということである。抽出できたものは、1,307点に及ぶ。

①球形（長さ／幅＝1.0〜1.29で、厚さ／幅≧0.6のもの）（80〜86）

大小さまざまな球形を呈するものがあり、全体の42%（548点）を占めている。法量でみると、最小径18㎜、重量3ｇから最大径111㎜、重量569ｇ、平均は長径43.9㎜、重量48.8ｇである。長径では40㎜前後にピークをもち、38㎜〜43㎜に22%、28㎜〜53㎜に52%が集中する。また80㎜以上のものは14点で3%の割合でしかない。重量では特にピークをもつものではなく、10ｇ〜49ｇまでまんべんなく分布し、この間には全体の64%を占めている。

また球の一面を研磨することによって、断面形が半月状を呈するもの（84〜86）も27点存在している。形態的には第89図22〜27の研磨痕の認められる石製品と同一である。

②円形、楕円形（長さ／幅＝1.00〜2.99で、厚さ／幅＜0.6のもの）（94〜96）

ここに分類されるものの特徴は、96のように①の球体に近いものは少なく、94，95のような

扁平、板状のものが多い。

③その他――不定形のもの（97～99）

多面体状、棒状（97）、三角状（98）、などさまざまあり、①②の欠損品であるもの、石棒の一部であったものなどの含まれている可能性は高い。

①～③のうち、石材の一ないし二面に“凹み”をもつものが96点確認できる。この凹みの要素をもつものは、①の球体を呈するものに多く、全体の85％を占めている。凹みの断面形態から４つに細分できる。

ａ．円錐状（断面Ｖ字）の深い凹みをもつもの（87，88）

ｂ．断面形がＵ字状の凹みをもつもの（89）

ｃ．皿状の浅い凹みをもつもの

ｄ．深くえぐるように凹みを作り出しているもの（90～93）

ｄは断面形が碗状を呈している。なおａ、ｂの一部は凹石として機能していたものもあるかもしれない。

10）その他の石製品（第96・97図、巻頭図版1、図版117）

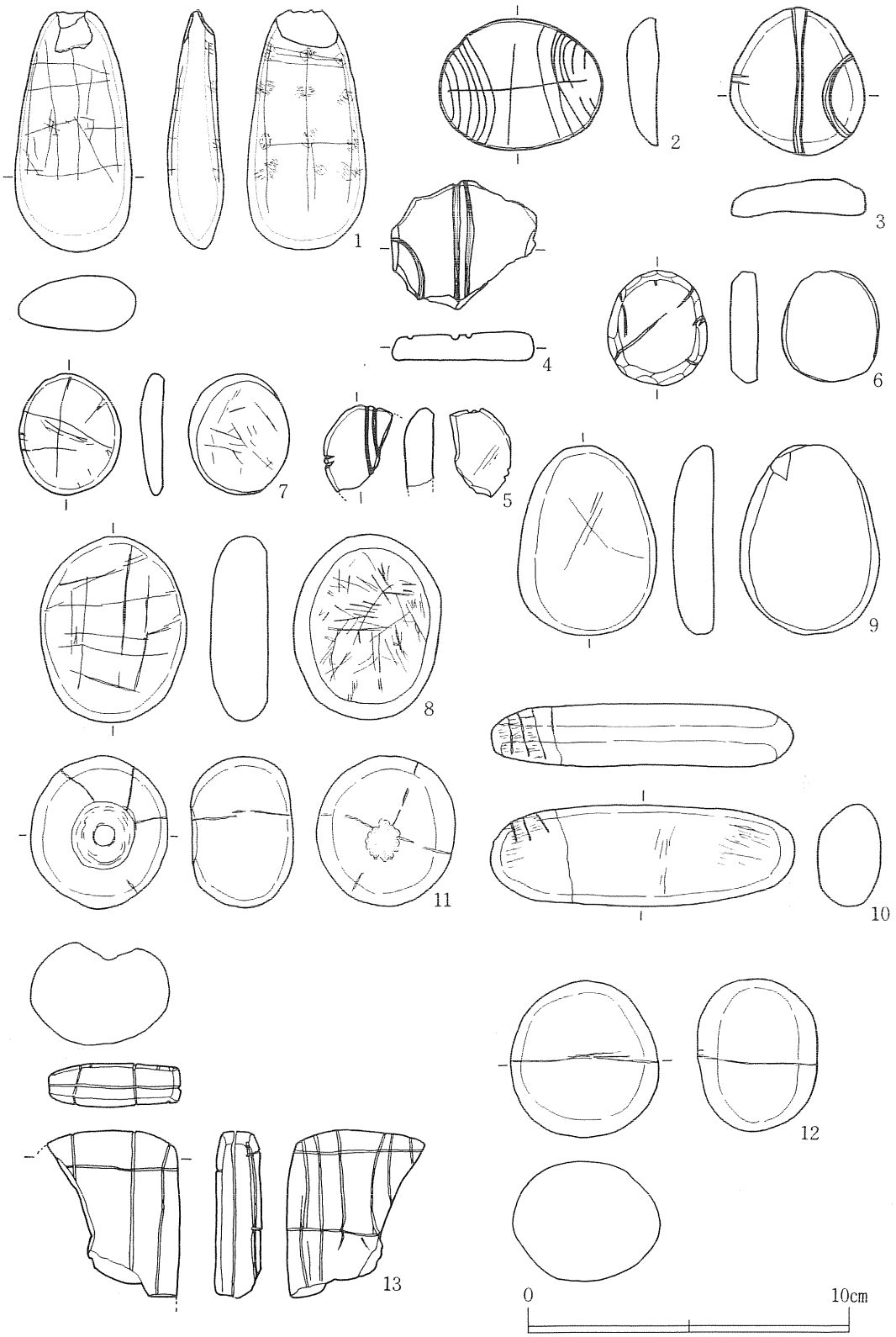
100は彫刻の施された石製品で、魚を意匠したものであろうか。図示面の下端と右側面の一部が欠損している。径14㎜のドーナツ状の浮彫２つを中心に据えてみると、この線上下には長径19㎜、短径15㎜の孔が穿たれている。前者を“眼”、後者を“口”とみることができるのではないか。この回りには、直線、孤線状の刻線が配されている。素材は、浅黄色を呈するやや軟質の凝灰岩を用いている。

101は“浮袋の口”形の石製品であろう。完形で、砂岩系の軟質の素材を用い、重さは6.12ｇである。

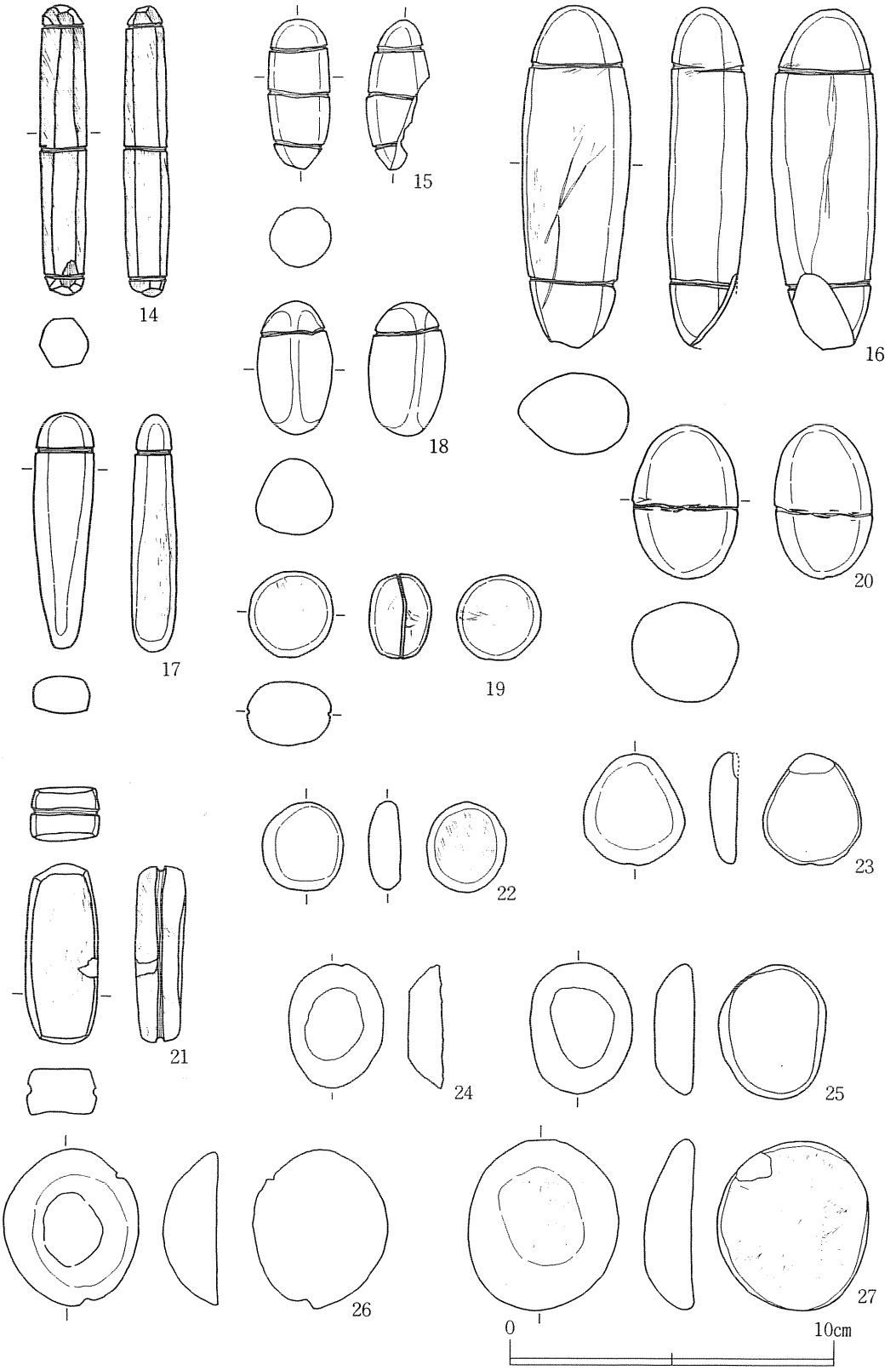
102は断面半月状に加工した石材の中央を凹め、石碗状に形作っているものである。凹部内周縁には幅2㎜の沈線を巡らしている。103は薄い円盤状石製品の半欠品である。104は腕輪形の石製品である。外径60～62㎜、内径37～40㎜、重さは42.5ｇである。

105は鋭利な刃をあてたような痕跡をもつ石製品である。図示面（表面）には上から下に向かってほぼ同位置で作業を行っているようで、断面Ｖ字状の痕跡が残る。裏面は大きく３方向から同様の作業が行なわれている。この面には研磨痕も認められる。

106は欠損している有孔礫に“顔”を彫刻しているものである。割れた礫を利用したのか、有孔礫を割ってから浮彫しているのかについては、不明である。“顔”は、その長さ21.5㎜、最大幅14㎜で、眼、鼻、口（？）が具象的に表現されている。口については、鼻のすぐ下の浅いくぼみが該当するもしれないが、位置的には眼、鼻とのバランスから考えると疑問も残る。眼は顔長のほぼ½のところに配されている。

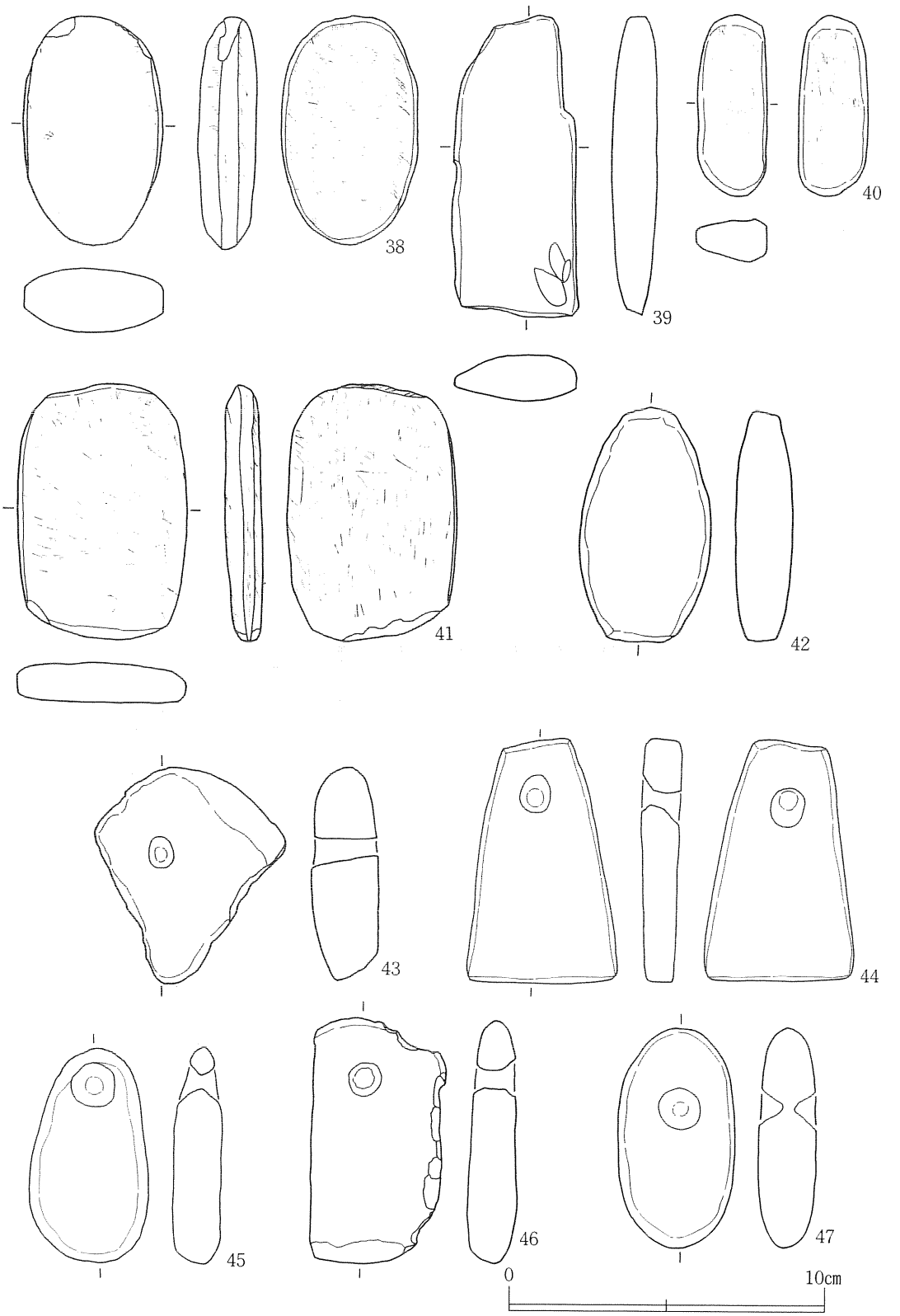


第88図　出土石製品（１）線刻礫

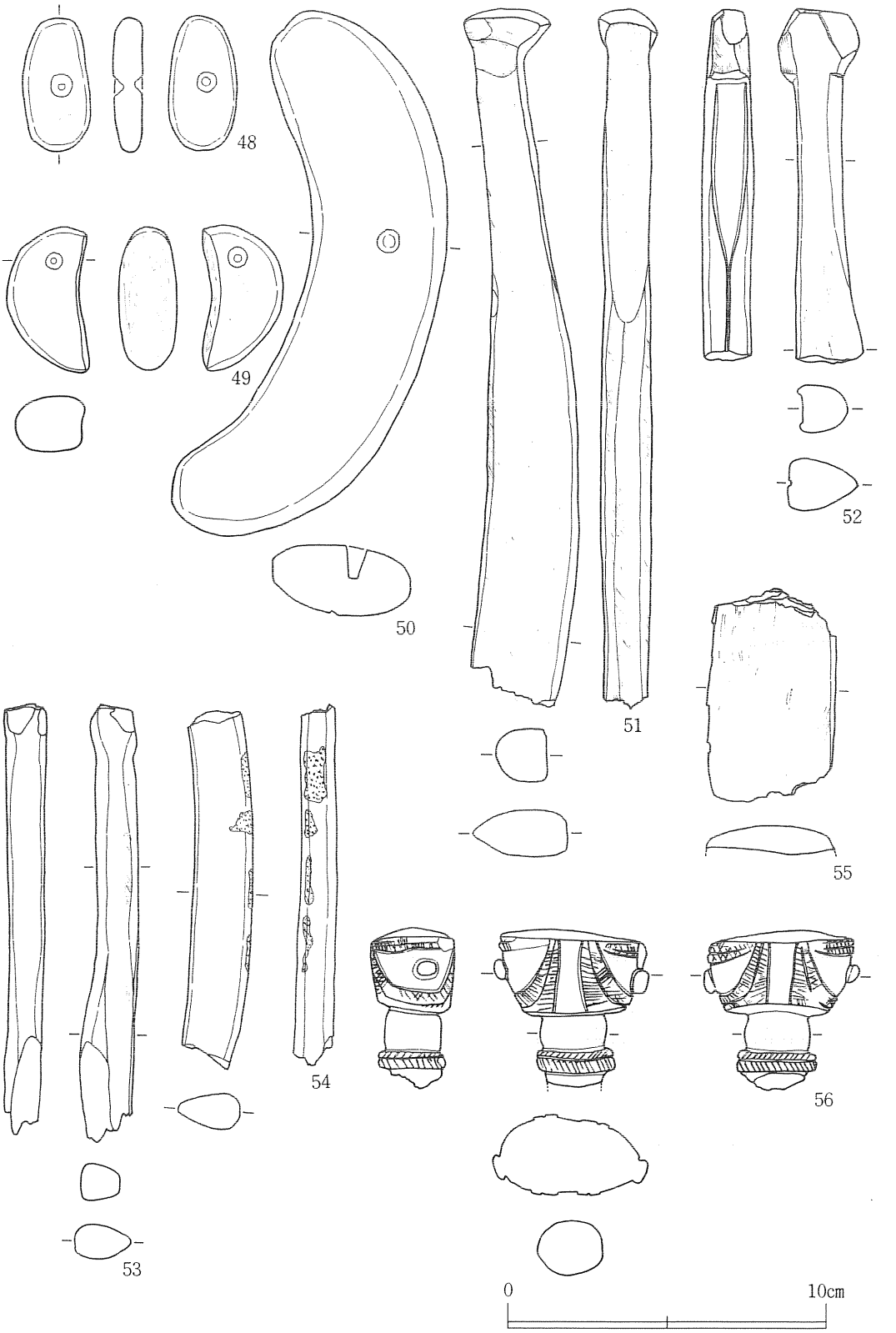


第89図　出土石製品（２）有溝礫・研磨痕の認められる石製品（１）

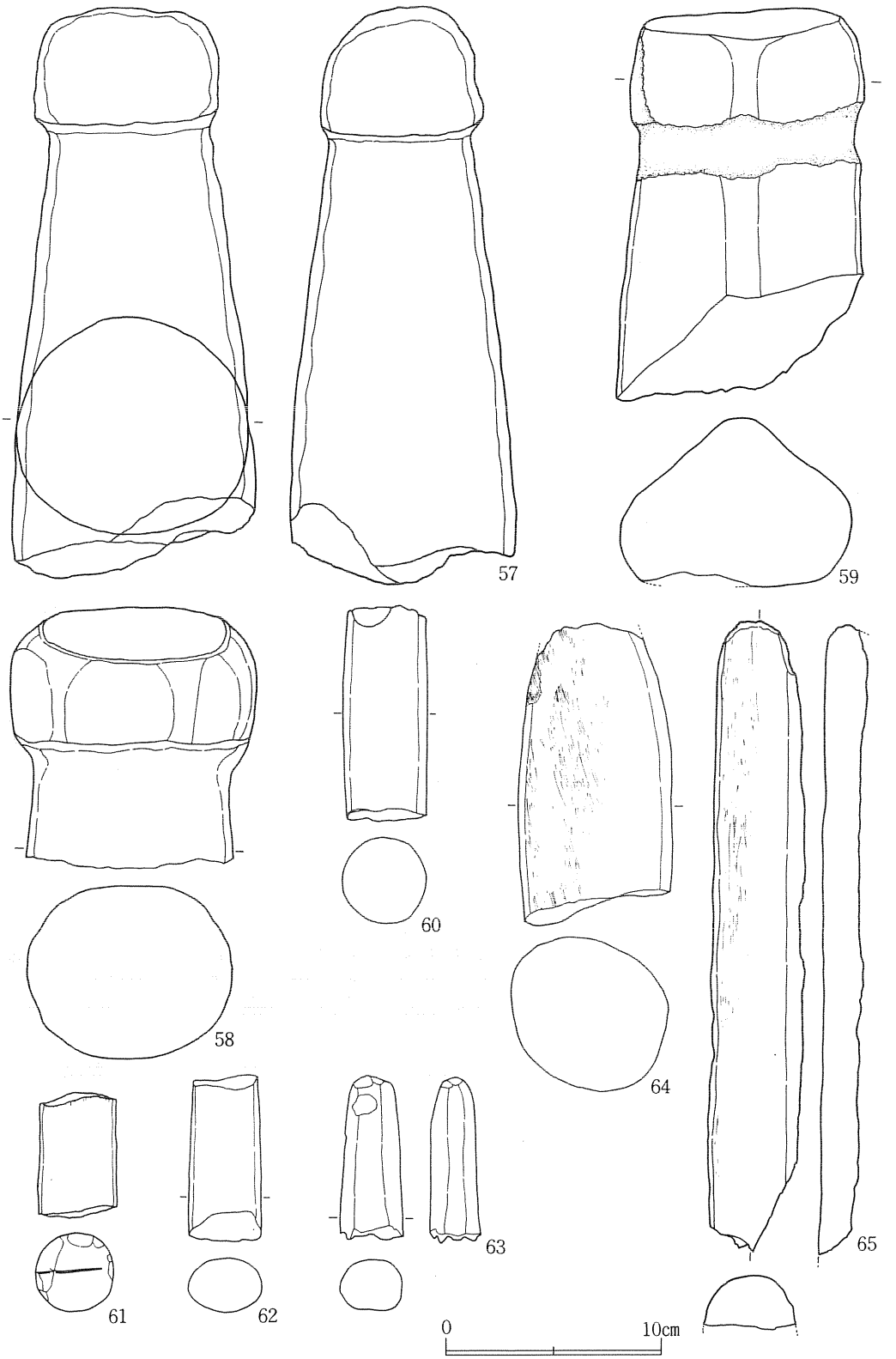
第90図　出土石製品（3）研磨痕の認められる石製品（2）



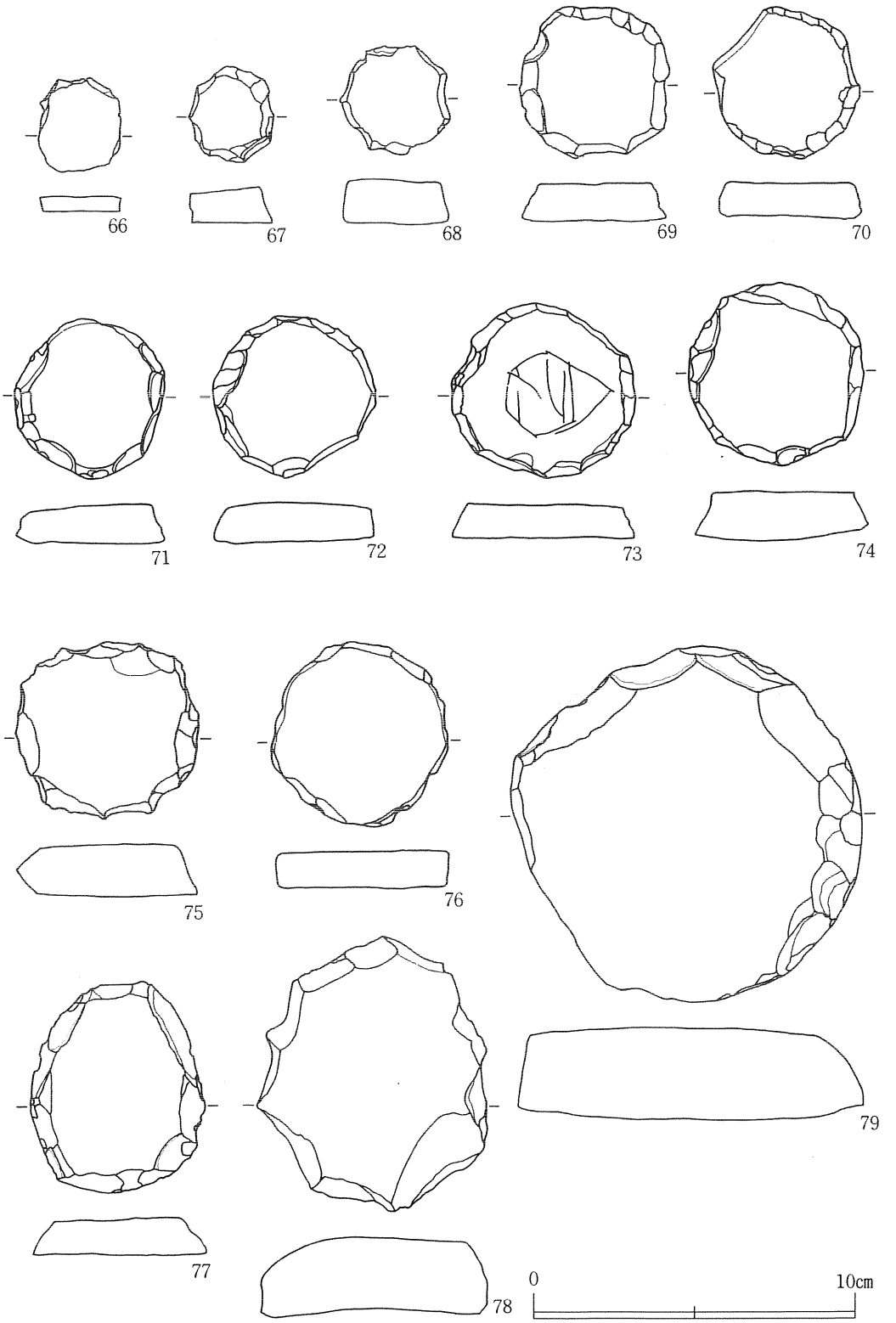
第91図　出土石製品（4）研磨痕の認められる石製品（3）・軽石製品・有孔石製品・盲孔石製品（1）



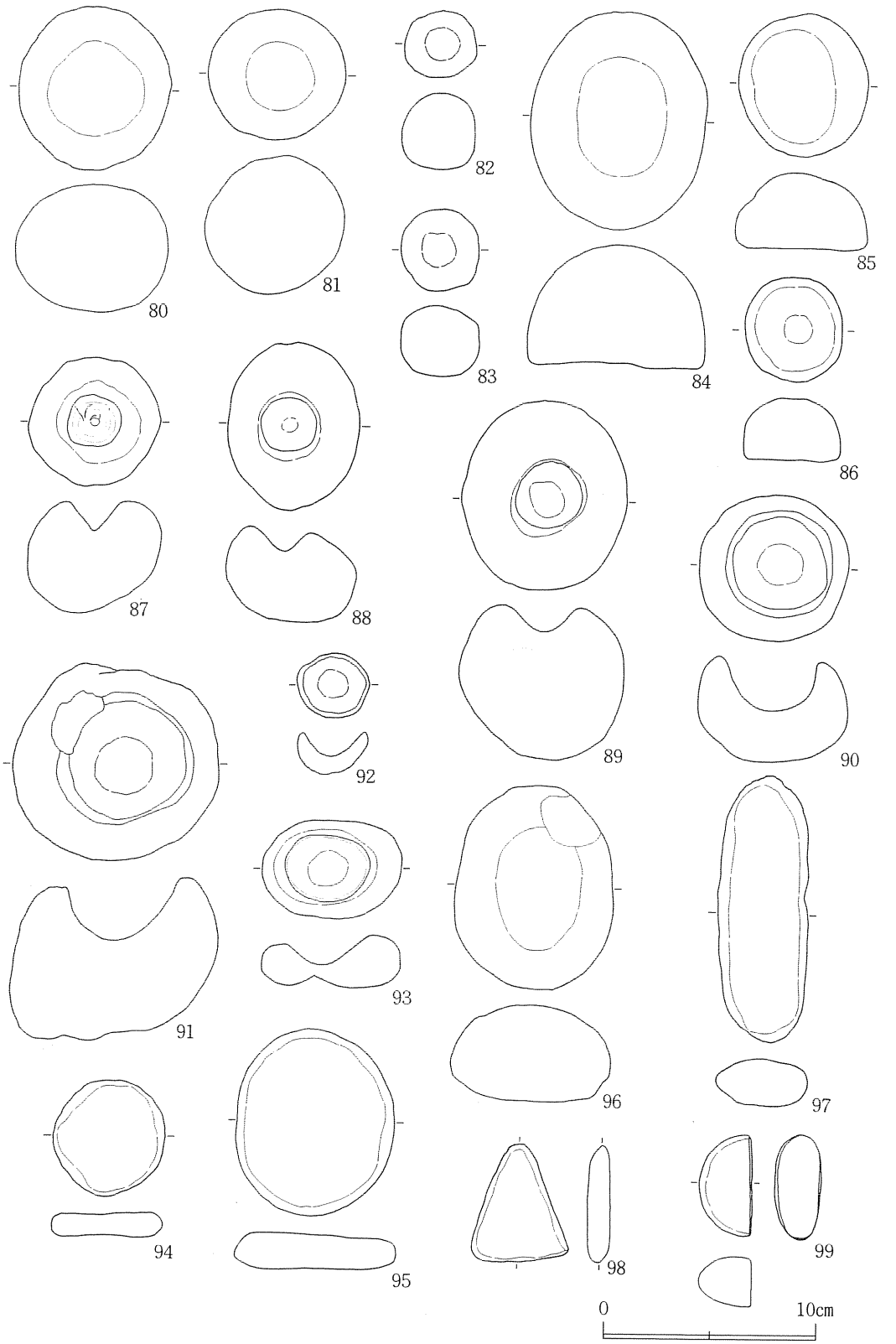
第92図　出土石製品（５）盲孔石製品（２）・石刀・石剣



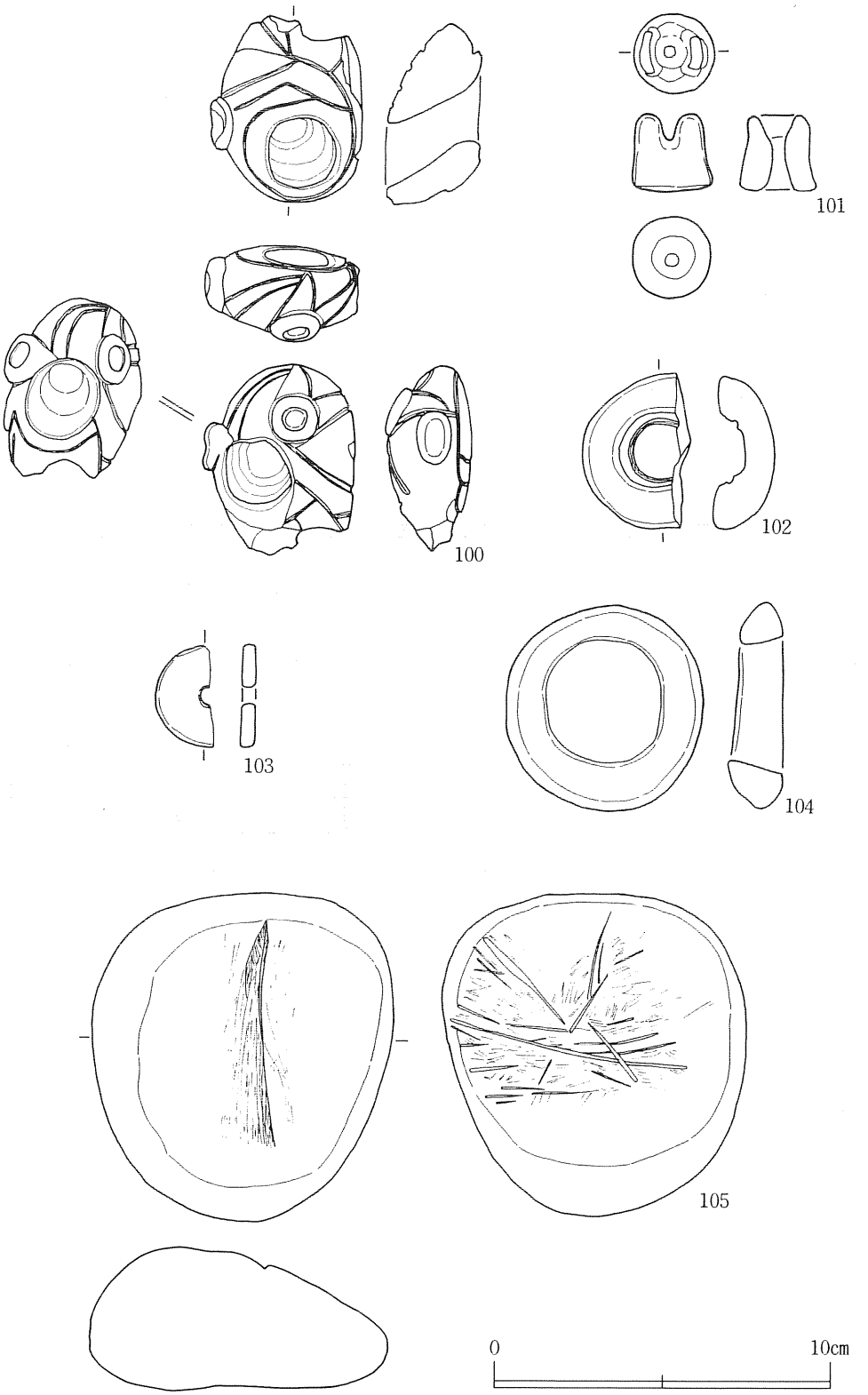
第93図　出土石製品（６）石棒



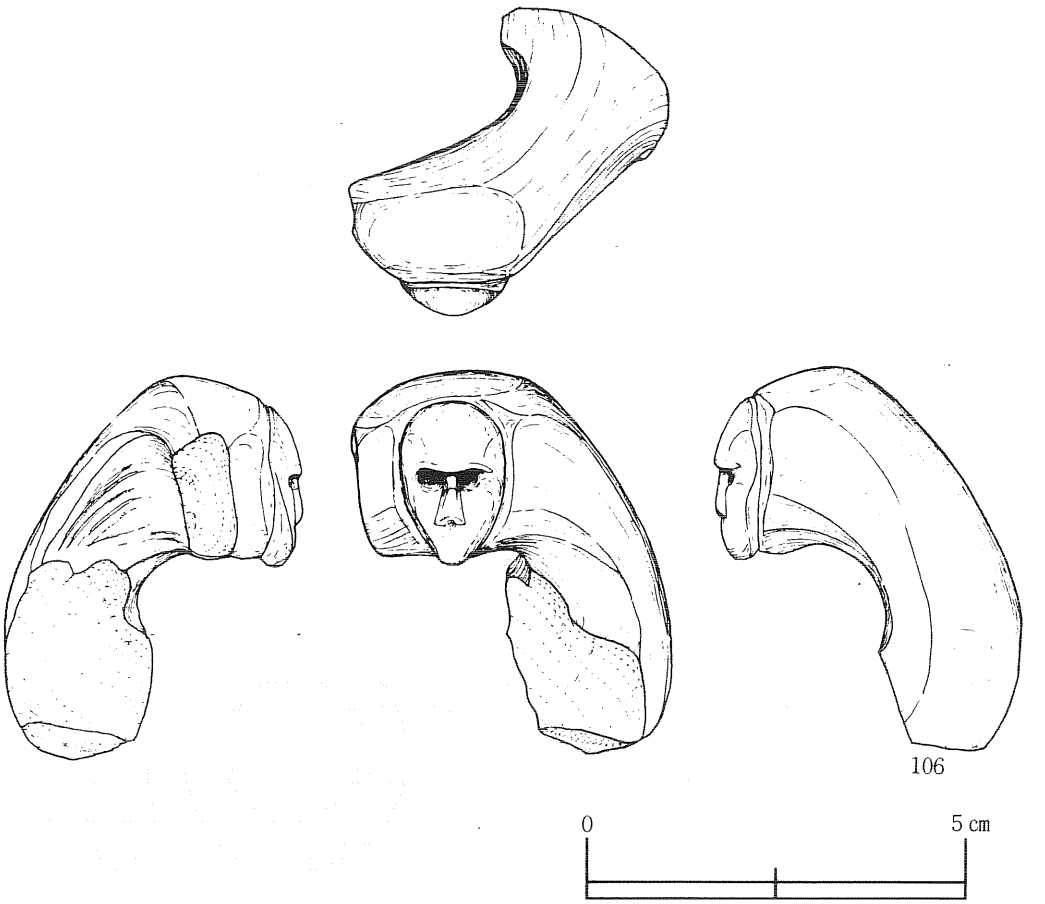
第94図　出土石製品（７）円盤状石製品



第95図　出土石製品（８）軟質凝灰岩製石製品



第96図　出土石製品（９）



第97図　出土石製品(10)　顔面付石製品

第５章　自然科学的分析

第１節　^{14}Ｃ年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1988年１月18日

秋田県埋蔵文化財センター殿

1987年12月20日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Ｃの半減期としてＬＩＢＢＹの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差δに基づいて算出した年数で、標準偏差（ＯＮＥＳＩＧＭＡ)に相当する年代です。また、試料のβ線計数率と自然計数率との差が２δ以下の時は、３δに相当する年代を下限の年代値（Ｂ．Ｐ．）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（ＭＯＤＥＲＮ　ＳＴＡＮＤＡＲＤ　ＣＡＲＢＯＮ）についての計数率との差が２δ以下の時には、ＭＯＤＥＲＮと表示し、δ^{14}Ｃ％を付記してあります。

Code No	試料	年代（1950年よりの年数）
GaK－14161	Charcoal from 増田町仁井田 ８ＹＧ６　ＳＫ13　八木遺跡	3490±80 1540　Ｂ．Ｃ．
GaK－14162	Charcoal from 増田町仁井田 ８ＹＧ２　ＫＩ85Ⅱ　八木遺跡	4770±120 2820　Ｂ．Ｃ．

以上

木越邦彦

第２節　花粉分析

八木遺跡は、秋田県平鹿郡増田町字仁井田堰向94に所在する。遺跡内からは、縄文時代後期の遺物・遺構が検出されている。今回の分析調査目的は、遺跡が営まれていた縄文時代後期頃の植生を復元することと、その植生に人為的な営力が及んでいたかどうかを確認することにある。ここでは、その手段として花粉分析を行った。

１．試　　料

試料は、縄文時代後期の遺物包含層から採取した４点と、同時期の土抗覆土から採取した１点である（表１）。

表１　八木遺跡花粉分析試料表

試料番号	試料採取地点	土質
No. 1	八木遺跡遺物包含層（8YG-JJ62 h6st5）	黒褐色砂質シルト
No. 2	八木遺跡遺物包含層（8YG-JJ62 a3st4）	黒褐色砂質シルト
No. 3	八木遺跡遺物包含層（8YG-JJ62 f6st5）	黒褐色シルト質砂
No. 4	八木遺跡遺物包含層（8YG-JJ62 h5st6）	黒褐色砂質シルト
No. 5	八木遺跡第６区第13号土坑覆土(8YG-6 SK13)	黒色砂質シルト

２．分析方法

試料から花粉・胞子化石を分離・濃集する方法は次の通りである。試料の秤量（湿重12ｇ）→フッ化水素処理（48%ＨＦ）→重液分離（ＺｎＢｒ２:比重2.2）→篩別（250μ）→アセトリシス処理→ＫＯＨ処理の順に物理・化学処理を行った。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作成した。光学顕微鏡下で全面を観察し、種類（Ｔaxa）の同定・計数を行った。結果は、一覧表で表示した。

３．結　　果

花粉・胞子化石の産状は、表２に示した通りである。No.１・３試料からは、比較的多くの花粉・胞子化石が検出されたが、他の試料からはほとんど検出されなかった。また、検出された花粉・胞子化石の大部分は、外膜が壊れているものであった。

表2　八木遺跡花粉分析結果

種　類（Taxa）　試料番号	1	2	3	4	5
樹　木　花　粉					
マツ属複雑管束亜属	2	1	—	1	—
マツ属（不明）	—	—	—	1	—
スギ属	12	1	8	3	—
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	1	—	—	—	—
クルミ属	1	—	—	—	—
クマシデ属—アサダ属	1	—	—	—	—
カバノキ属	1	—	—	—	—
ハンノキ属	1	—	1	1	—
コナラ亜属	11	—	2	1	—
クリ属近似種	1	—	—	—	—
ウルシ属近似種	1	—	—	—	—
モチノキ属	1	—	—	—	—
カエデ属	—	1	—	—	—
トチノキ属	1	—	—	—	—
草　本　花　粉					
イネ科	71	2	17	5	2
カヤツリグサ科	3	—	—	—	—
ホシクサ属近似種	1	—	—	—	—
ユリ科近似種	14	—	—	—	—
アカザ科	1	—	1	—	—
ナデシコ科	2	1	2	2	—
カラマツソウ属	1	—	—	—	—
アブラナ科	1	1	—	—	—
マメ科	1	—	—	—	—
アリノトウグサ属	1	—	4	—	—
セリ科	1	—	1	—	—
ネナシカズラ属近似種	1	—	1	—	—
オミナエシ属	1	—	—	—	—
ヨモギ属	64	1	13	1	1
他のキク亜科	1	1	1	—	—
タンポポ亜科	13	—	4	—	—
不明花粉	10	1	1	1	—
シ　ダ　類　胞　子					
ゼンマイ属	1	—	1	—	—
他のシダ類胞子	14	1	17	1	1
合　計					
樹　木　花　粉	34	3	11	7	0
草　本　花　粉	177	6	43	8	3
不　明　花　粉	10	1	10	1	0
シ　ダ　類　胞　子	15	1	18	1	1
総　花　粉・胞　子	236	11	82	17	4

４．考　　察

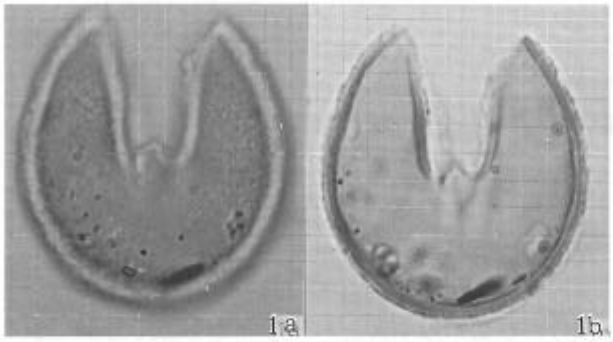
今回の試料は、いずれも検出される花粉・胞子化石の保存状態が良くなかった。一般に、花粉・胞子は外膜が頑丈なので推積物中に化石として残り得るのだが、酸化状態の基では化学的に酸化分解し、また、土壌微生物などによっても分解消失する。したがって、今回のような結果は、推積時あるいはその後に分解作用を受けていることを意味していると考える。ここではその直接の原因について推定することは、地形・推積環境及び試料採取地の推積物の層相など不明な点が多いので困難である。また、花粉・胞子の外膜は、種類によって頑丈なものと、そうでないものがある。例えば暖温帯性常緑広葉樹のクスノキの花粉は、外膜が壊れ易く、化石として残存し難く、花粉分析ではほとんど検出されない種類である。このことと、今回の花粉化石群集が何らかの原因によって分解を受けている可能性が高いことを考慮すると、推積当時の花粉化石群集がそのまま保存されているとは考え難く、むしろ分解・消失しているものも多いと推定され、淘汰された花粉化石群集になっている可能性が高い。すなわち、推積当時の植生を反映した花粉化石群集が歪められていることを意味する。

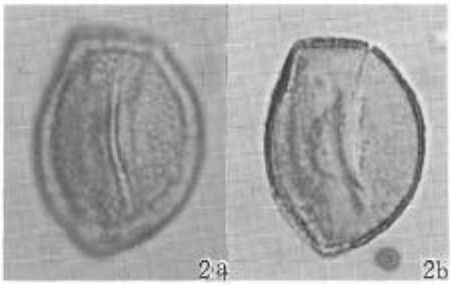
このような状況が推定されることから、今回の結果から古植生を推定するには問題が多く、困難であり、人為的な影響に関する考察も行えない。ただし、№１で検出された種類などは、推積域周辺あるいは後背の山地に生育していた植物に由来することは間違いないであろう。辻（1981）は、秋田県の日本海沿岸の低地の花粉分析結果と山地の結果との比較から次のことを指摘している。低地およびその周辺地域では、コナラ属・ブナ属の優占する林から、約2,700ないし2,000年前項にスギ林を含む落葉広葉樹林に変遷し、さらに人間の植生破壊によるマツ属二次林へと変遷したが、山地ではブナ林が現在まで安定して分布したとし、スギ林やマツ属二次林の拡大が主に低地一帯で起こったとしている。今回の№１試料では、少ないながらもスギ属・コナラ亜属花粉が高率を占めており、辻（1981）の約2,700ないし2,000年前以降の低地の結果と類似した傾向を示す。上記したように今回の花粉化石群集が歪曲されている可能性が高いため植生を推定するには至らないが、歪曲されていないとすれば本地域でも低地と同様な植生が広がっていたことになる。このことについては、今後の検討課題として残される。

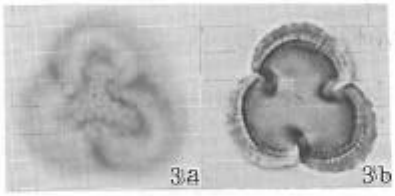
引用文献

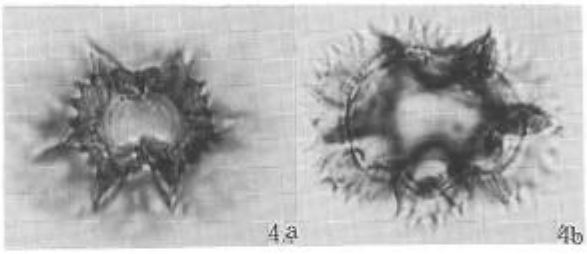
辻　誠一郎（1981）秋田県の低地における完新世後半の花粉群集．東北地理，第33巻，第２号，Ｐ．81―87.

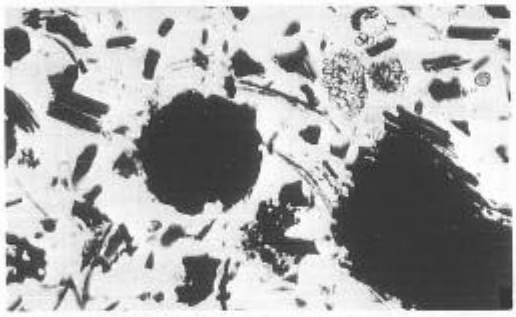
図版1

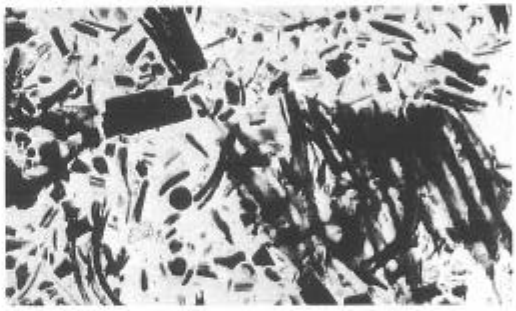


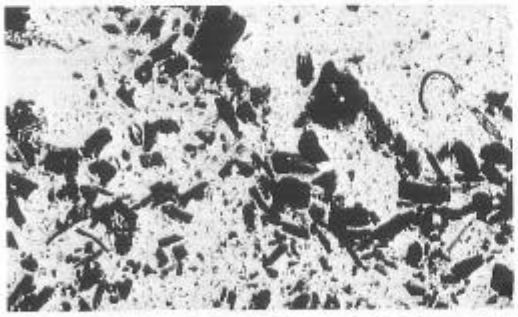


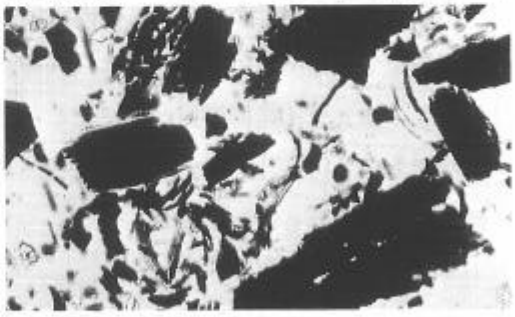


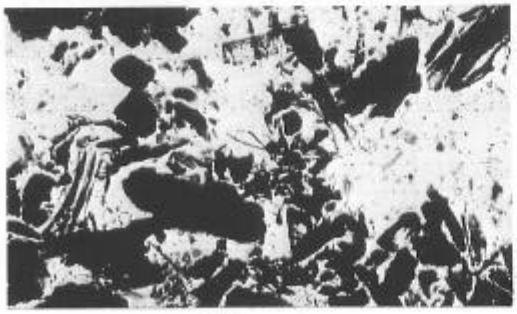


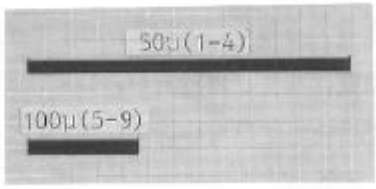












1a,b　スギ属(No.1).　2a,b　コナラ亜属(No.1).　3a,b　ヨモギ属(No.1).
4a,b　タンポポ亜科(No.1).　5　状況写真(No.1).　6　状況写真(No.2).
7　状況写真(No.3).　8　状況写真(No.4).　9　状況写真(No.5)

第３節　出土人骨鑑定

秋田県平鹿郡平鹿町八木遺跡第２区ＬＨ81出土の縄文火葬骨について

札幌医科大学解剖学教室
百　々　幸　雄
木　田　雅　彦

八木遺跡第２区ＬＨ81地点において、焼骨片の集積が検出された。これらの骨片はすべて人骨と考えて良さそうで、水洗・乾燥後の総重量は945ｇである（写真1）。人骨はかなりの高温で焼かれたと思われ、手及び足指の一部を除いてすべて小骨片と化し、収縮、変形が著しく、しかも骨表面に無数の亀裂が認められる。色調は部位によって多少異なり、黒灰色、灰色および白色のものが認められる。おそらく、本人骨は偶然に火を受けたというようなものではなく、意図的に焼かれた、すなわち火葬されたものと考えてさしつかえないであろう。

人骨の部位の同定さえ困難な骨片が大部分であったが、幸いなことに、全体の約15％位の骨片がある程度復原できたので、まずそれらの骨についての簡単な記載を行い、次いで、それを基にして、個体識別及び性別・年齢に関して若干の考察をしてみたい。

記載

１）頭骨（写真２）

下顎体正中部と右の下顎枝の破片が同定される。残存する歯槽は左右切歯と左犬歯及び左第１小臼の歯槽のみであるが、その大きさと形態から判断する限り、少なくともこの部位では永久歯が完全に萌出していたと考えられる。オトガイ三角の形態は正中部のオトガイ隆起よりも外側部のオトガイ結節の方がやや強く発達するので、この下顎の持ち主は、どちらかと言えば男性であった可能性が高い。右の下顎枝では、下顎角の外反の傾向が認められるが、これも男性に良く見られる特徴である。

２）上腕骨（写真３）

右（？）の上腕骨頭、右上腕骨体及び右上腕骨下端が同定される。おそらく、これらは同一個体と考えられる。上腕骨体は長さ約15㎝にわたって残存するが、歪んで弯曲が著しい。中央部の骨壁は厚く、どちらかといえば男性的である。上腕骨頭および内側上顆の骨端の軟骨結合はまだ骨化していない。

３）右鎖骨

長さ約８㎝の骨体中央部を含む破片である。

４）右尺骨（写真4）

上端から骨体上部三分の一にかけての長さ約９㎝の破片である。肘頭後面の骨端軟骨に一部

未癒合部が残っている。滑車切痕を横走する骨隆起は認められない。平均値に近い縄文人男性の右尺骨と比較すると、15〜20％の火葬による収縮があったと判断される。

５）寛骨

高さ７㎝、幅５㎝ほどの腸骨翼の破片である。腸骨窩に相当する部分は青灰色を呈している。

６）大腿骨（写真５）

骨体中央部の粗線を含む長さ約４㎝の小破片と、骨体下部後面の長さ約12㎝の破片である。ともに左大腿骨のものと思われる。これとは別に遊離した骨頭が２点認められる。ともに骨端軟骨に骨化はみられない。粗線は中等度以上に発達していたと思われ、中央部の骨壁はかなり厚い。

７）右脛骨（写真６）

骨体上部から中央部にかけての長さ約10㎝の破片と骨体下端の小破片からなる。骨端軟骨の骨化は認められない。後面に栄養孔とヒラメ筋線が観察される。ヒラメ筋線は小児の大腿骨に普通にみられるように、骨表面から陥凹している。後面の垂直稜は認められない。平均的な縄文人男性脛骨と比較すると火葬による収縮率は40〜50％と推測される。

８）右距骨と右踵骨

右距骨の下関節面と右踵骨の上関節面はぴったりと関節する。同一個体のものとみなしてさしつかえない。

９）手・足の骨（写真７）

中手骨と思われるものが４点、中足骨と思われる破片が１点残存する。その他、手または足の指骨が７点認められる。指骨の中の１点は近位骨端が未癒合である。

考察

１）個体識別

総重量が945ｇであることは、この骨片が１個体分からなるという仮定と矛盾はしない。火葬骨１個体分の重量は焼成度により大きく異なると思われるが、筆者のこれまでの経験によれば、この人骨程度に焼かれている場合、１個体分の重量は1,000から1,300ｇと考えて大過ないと思われる。また、多数の骨片の中で、少なくとも部位を同定することが可能であった骨片に、部位の重複が認められなかったことも、この人骨を１個体分と仮定することに矛盾しない。

しかし、右脛骨の破片（写真６）は他の骨片と比較すると、火葬によって縮小したとしてもあまりに小さ過ぎる観がある。成人縄文人男性を基準にとると、右尺骨の収縮率が15〜20％であるのに対して、右脛骨のそれは40〜50％という値になってしまう。通常の火葬で骨が収縮するのは多くても30％程度までといわれているから、右脛骨は他の骨片よりも年の若い別個体という可能性も否定はできない。

２）年齢

上腕骨の骨頭、上腕骨内側上顆の骨端、大腿骨の骨頭、脛骨の下端に骨癒合がみられないことは、本人骨が未成熟者であることを物語っている。しかし、尺骨の肘頭は一部を残して骨癒合が進んでいること、下顎歯槽の残存部から判断するとすでに永久歯が完全に萌出していたこと、さらに上腕骨体や大腿骨体の骨壁がかなりの厚さに発育していることを考えると、この人骨の年齢は16歳位に達していると考えて大過ないと思われる。

３）性別

下顎骨のオトガイ三角の形態、下顎角の外反傾向、それに上腕骨や大腿骨の骨体中央部の骨壁の厚さから判断すると、性別はどちらかといえば男性である可能性が高い。

まとめ

八木遺跡第２区ＬＨ81で発見された焼骨片は、16歳位の年齢に達した、おそらく男性１個体分の火葬骨であろう。

写真1．焼骨全体像

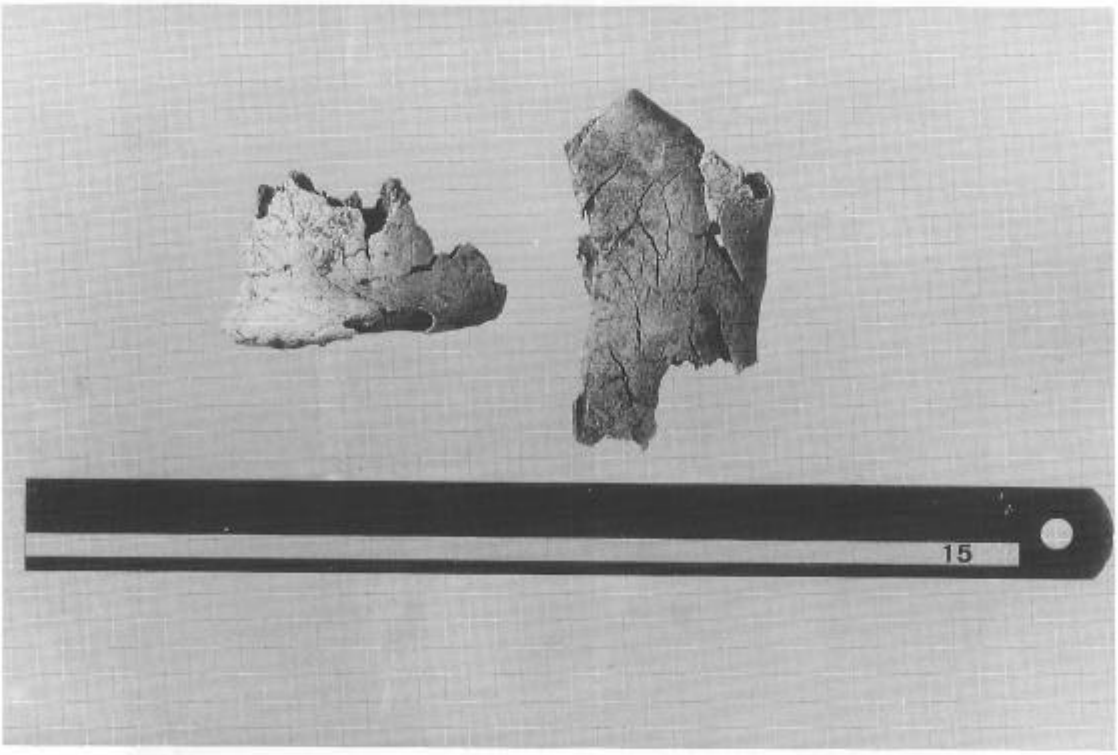


写真2．下顎骨（左:オトガイ部を含む下顎骨体の破片．右:左下顎枝の破片）

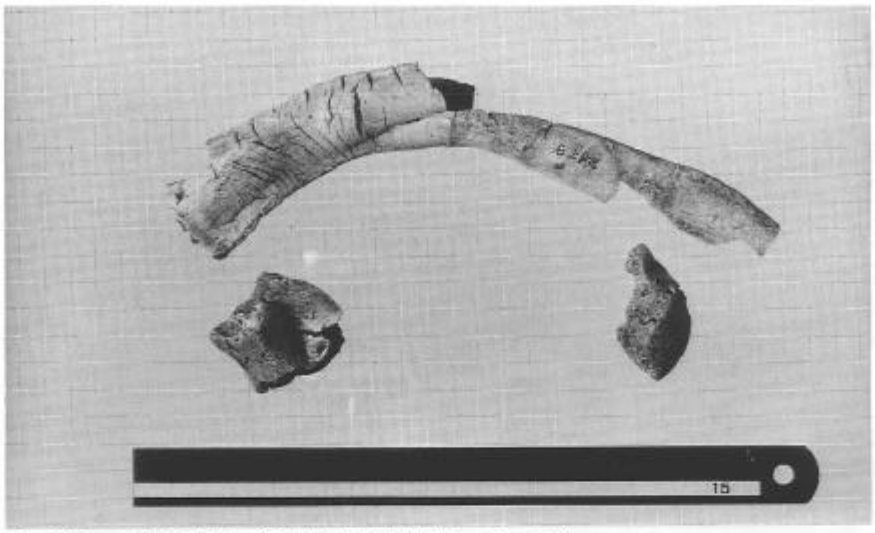


写真3．右上腕骨（近位骨体は遊離している）

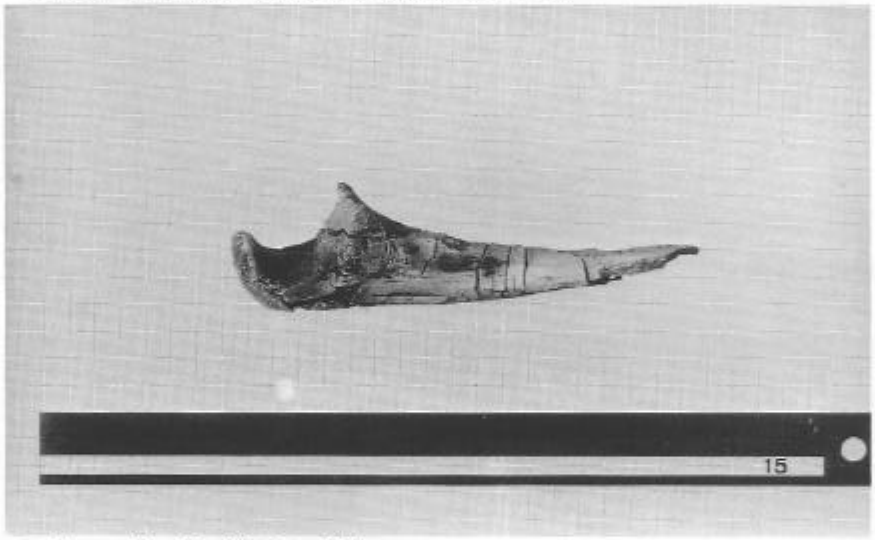


写真4．右尺骨近位部の破片

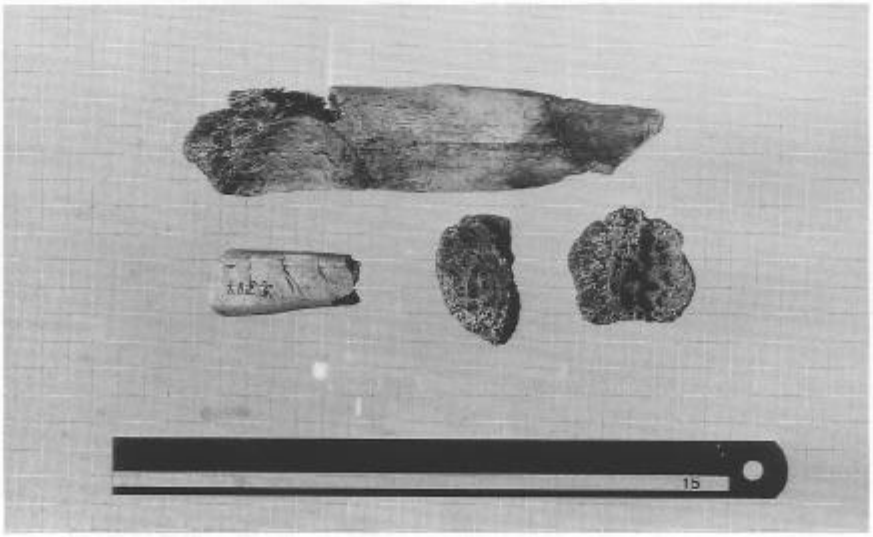


写真5．大腿骨の破片（近位骨端は遊離している）

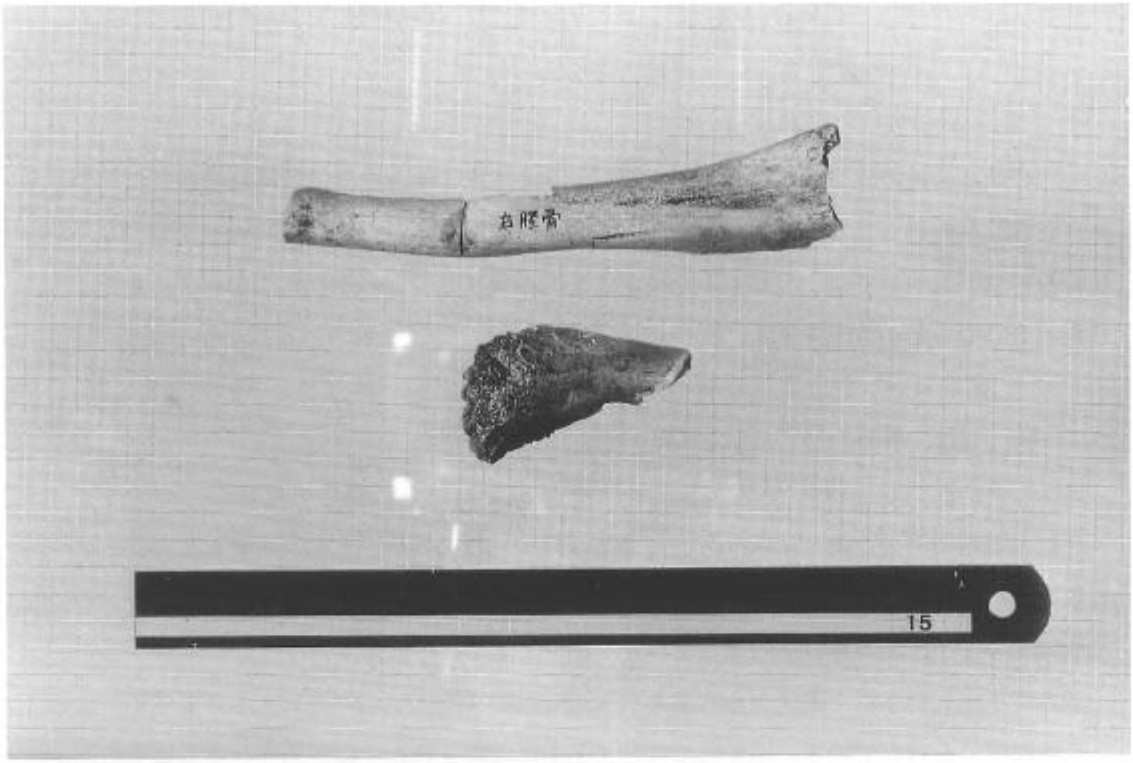


写真6．右脛骨の破片（遠位骨端は未癒合）

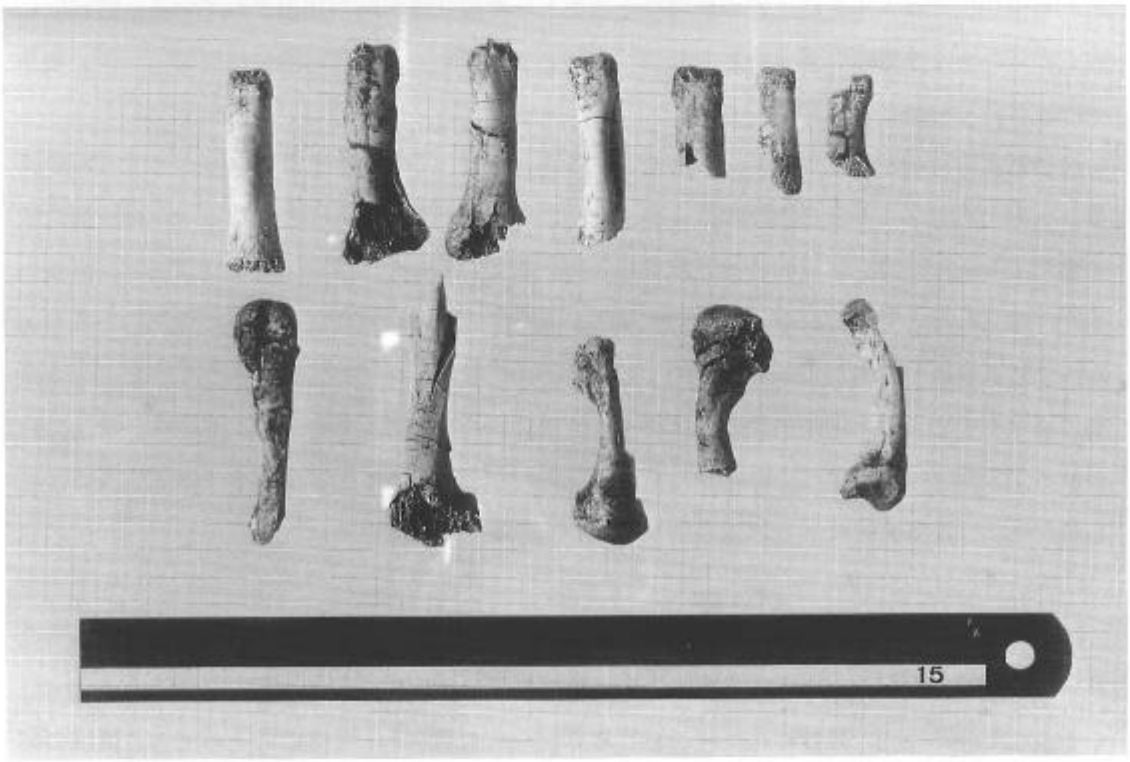


写真7．手の骨

第6章　ま　と　め

今回の八木遺跡の調査は遺跡内での土壌入れ替え工事に伴う緊急発掘調査であったため、大きな時間的制約のもとで調査、整理を行わざるを得なかった。本書に盛り込むことのできなかった調査の成果については、今後も折りにふれて明らかにして行かなければならないものと考えるが、ここで一応の成果をまとめたい。

第1節　遺跡の変遷について

今回の調査で検出された遺構はおもに縄文時代後期の土壙墓であり、これをもって八木遺跡を該期の墓域跡として大過ないと判断される。しかし、遺跡をやや広くとらえた場合、時間的な変遷をみることができる。以下にそれをたどって見る。

調査で出土した土器と遺構からすると八木遺跡は縄文時代中期中葉の大木８ｂ式期には確実に生活の痕跡を残している。第６区にはＳＫ05中に埋設された土器があり、さらにその西側にあたる第７区からも大木８ｂ式に比定される土器が出土している。また、遺跡範囲内の北側にあたる第10区では大木９式比定の炉埋設土器をもった竪穴住居跡が検出されている。第10区にはこのほかもう１箇所に焼土をもった遺構が確認されており、この時期には遺跡の北側に集落が形成されていたことも想定できる。

次の縄文時代後期初頭から前葉になると第２区、第４・５区を中心に土壙墓がつくられ始める。土器の内容からみると、第Ⅲ群土器の階程以降、他地域の土器型式に比定すれば、仙台湾の宮戸Ｉｂ式期以降、すなわち後期前葉の段階におかれるものが多く、この時期に墓域形成の基礎が確立したと考えられる。墓域形成は次の後期中葉段階にまで続くが、この段階のうちおそらくはより新しくおかれる階程に第４・５区では２軒の竪穴住居跡がつくられている。この段階で墓域を中心とした遺跡の営みはほぼ終息期をむかえると考えられるが、その後、後葉におかれる第Ⅶ群土器の段階（これは少なくとも２階程に分けられる）にも、ＳＩ35を切ってつくられた埋設土器ＳＲ01に示されるような生活の痕跡は残されている。

以上がおよそ今回の調査区内で確かめられる遺跡変遷の概略であるが、第１区調査区外南側からは縄文時代晩期大洞ＢＣ式土器が表面採集されている。出土地点は範囲確認調査によってくくられた遺跡範囲の外側にあたり、おそらく現在八木遺跡として囲むことのできる区域の南側に後続時期の遺跡が存在すると判断される。

第２節　墓域としての遺跡の性格

今回の調査で、八木遺跡の大部分が大規模な墓域であることをおよそ把握し得た。

縄文時代の葬制については様々な葬法があり、時期的にも地域的にも変化があることがいわれているが、そうした中にあって、八木遺跡の葬法について簡単に検討し墓域としての遺跡の輪郭を見てみたい。

今回の調査で検出された土壙墓には内部に河原石をつめこんだり、掘り込みが浅くかつ構築面上に組み石を設ける例が多く認められる。このような例では土壙内部の空間がきわめて狭いものとなり、遺骸をそのまま埋葬するのは困難と言わざるを得ない。したがって、埋葬にあたっては遺骸はすでに処理されて骨片と化している状況を考えなければならないが、これは東北北半の縄文時代晩期の楕円形基調の土壙墓が、遺骨の残存や赤色顔料（ベンガラ）の残存状況から遺骸を直接葬ったと推定されるのとは対照的である。

縄文時代・弥生時代の焼人骨例の集成とそのそれぞれの評価が石川日出志氏によって行われている。氏によると縄文・弥生時代の焼人骨の出土状態には墓壙内火葬と再葬の一種と認められる墓壙外火葬の二者があるという。前者例には北方ユーラシア大陸の文化に関連する可能性も指摘しながら、縄文時代後～晩期の秋田・藤株、北海道・美々４、朱円栗沢の３遺跡例を、また後者例としては縄文時代中期の幅田遺跡を最古として、東海、中部高地、北陸を中心とした地域で弥生時代後期まで続く23例をあげられている（石川；1988）。

本遺跡で検出された土壙墓のうち内部に火熱の跡が認められる第６区ＳＫ13を除く大半の土壙墓は、石川氏に従って墓壙外火葬の再葬と認められ得るものである。本遺跡で比較的良好な集積状態で検出されたＫＨ81グリッドの火葬人骨は、一応16才程度の少年男子１個体分と鑑定を得たが、さらに若い別個体の脛骨が混じっている可能性もその結果には含まれている（本書第６章第２節）。したがって、他の骨片を出土した土壙墓についても他所で火葬され遺骨のみを埋葬した二次葬（再葬）墓であるとして大きな誤りはないであろう。それでは底面が著しく焼け、覆土中に厚い炭の層をもった第６区ＳＫ13についてはどうであろうか。この土壙底部には焼け残ったと思われる骨の一部が確認された（鑑定では人骨かどうかの判断は得られていない）。もし、この焼骨が人骨であったと仮定した上で考えるならば、藤株例などとともに墓壙内で火葬が執り行われた１例としてとらえられるところである。しかし、この土壙はほかの土壙墓と比較し規模が大きく、その焼け方には繰り返し火の焚かれた状態が観察された。また、下部に堆積する炭化物層は遺構の頻繁な焼成によってできたと判断されたが、その使用ののちには明らかに人為的に黄褐色土によって封土されるという、他の土壙墓には見られない特徴も備えている。したがって、石川氏が北日本縄文時代後・晩期の葬制として摘出した墓壙内火葬

例とは異なるように思われる。本遺跡に限って考え得ることとして言えば、第6区ＳＫ13については、遺骨を他の大半の土壙（二次葬）墓に埋葬する以前に、遺骸を処理するための火葬の執り行われた場所であろうかと考えられる。すなわち、遺跡全体では遺骸の火葬が第6区ＳＫ13のような土壙で執り行われ、遺骨のみが第4・5区、第2区などの土壙に埋葬されたことを想定できる。

ところで、本遺跡のような焼骨片が出土する縄文時代後期の土壙墓例は、岩手県北上市八天遺跡や同県雫石町萪内遺跡でもすでに確認されている。したがって、縄文時代後期には東北北半にあっても、中部日本と同様に墓壙外火葬の存在を認めて良いのではないかと思われる。

本遺跡のもう一つの特徴は、土壙墓確認面の上部層から生産用具を含む多量の遺物を出土したことである。土壙墓内出土土器を子細にみるとそれらには時期的な違いが認められるが、土壙墓確認面上部の遺物包含層中と土壙墓出土土器を総体として比較した場合、それらに顕著な時期差は認められない。したがって、遺跡からの出土遺物には土壙墓内に人骨と共に副葬されたもののほか、同時に土壙墓外に捨て置かれた、あるいは安置されたものがあったと考えるべきである。しかし、遺跡の性格を墓域と規定した場合、こうした出土遺物における生産用のものを含む日常生活用具の多さはどのように理解すべきであろうか。

縄文時代遺跡での『捨て場』の在り方を瞥見すると、例えば、秋田県内では協和町上ノ山Ⅱ遺跡、小坂町はりま館遺跡、男鹿市大畑台遺跡など前期から中期の遺跡では、集落跡と『捨て場』とがセットになる場合が多く、秋田市地方遺跡、増田町平鹿遺跡、東由利町湯出野遺跡など晩期の遺跡では墓域と対になる場合が多いようである。このような事実は、縄文時代における『物』に対する意識の変化があったと読み取ることができるように思われるが、そうした理解に立った場合、その顕著な変革期に後期を挙げ得るのではないかと考える。すなわち、生産用具を含む日常生活用具も人と同様、同じ場所に葬り置かれるような意識のもとに扱われるようになった時期として縄文時代後期をとらえることができるのではないかと思われる。

民俗例ではあるが、宇田川洋氏によればアイヌの人々には有名な熊送りの儀式であるイオマンテ(飼育した熊に宿る神の送りの儀式)のほかに、狩猟・漁労の獲物を送るオプニレ、日常生活用具を送るイワッテの儀式が、それぞれの送り場であるヌサ場において執り行われるという。そして、このようなアイヌ民族の習俗の祖源は擦文ないしオホーツク文化期までさかのぼってとらえられるという（宇田川；1980）。

また、近年縄文時代墓域跡で顕著に認められだした遺構に、本遺跡でも検出された大型の柱穴列があり、「殯の場」としての性格が与えられている（岩手県教育委員会；1980)。古代に執り行われた「殯」そのものには東南アジアの諸例と比較して類似した複雑な構造が認められることがいわれているが、少なくとも現在の段階での縄文時代研究で「殯」をいう場合には、単

に墓域内においての霊魂の送りとしての性格でとらえておいて良いように思われる。このようなアイヌ民族の事例や、古代から確実に認められその概念の一部は既に縄文時代の墓域内遺構にもみることのできる「殯」の性格を併せて考えると、人の霊魂の送りの儀式と物に宿る霊あるいは神の送りの儀式とが同一の場所で執り行われていたこと、すなわち葬礼と祭礼の不可分な関係を想定することは、縄文時代後期以降晩期に関しては可能であろうと思われる。さらに本遺跡についていえば、出土遺物の中に漁労に関連する遺物（各種の石錘、嘴状石器など）が多く認められ、祭礼が強く漁労に結び付いたものであったことも考えられる。遺跡の立地からすれば本遺跡は生業の場である皆瀬川に近接してつくられた遺跡であるが、このような生業の場ならびに墓域と生業に関連した祭礼のセットの関係は、先に述べた雫石川ほとりの萪内遺跡で出土したトーテムポール様木製品等にも象徴的に認められる。また、八天遺跡調査報告者が焼人骨出土土壙からのイノシシ下顎骨の共伴をもって、埋葬よりもムラにおいて行われた「まつり」の性格を遺跡に付与したのも、狩猟に関連した祭礼をより強調した結果であろうと推測される（北上市教育委員会；1978・1979）。

以上個々の事例の検討を加えず、非常に粗雑ながら遺跡性格の輪郭を映しだすことを試みたが、今回の調査からいえば、八木遺跡は皆瀬川河岸に営まれた縄文時代後期の墓域としての性格をもち、かつ、そこでは、生業に関連した祭礼が埋葬にともなう葬礼とともに執り行われていたものと考えたい。

参　考　文　献

青森県教育委員会『中の平遺跡発掘調査報告書』1981(昭和56年)

秋田県教育委員会『梨ノ木塚』1979(昭和54年)

秋田県教育委員会『平鹿遺跡発掘調査報告書』1983(昭和58年)

安孫子昭二「縄文後期の土器―関東・中部地方―」『縄文土器大成3後期』講談社 1981(昭和56年)

安孫子昭二「加曾利Ｂ様式土器の変遷と年代(上)」『東京考古』6 1988(昭和63年)

石川日出志「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』第74号 1988(昭和63年)

今村啓爾「称名寺式土器の研究(上)(下)」『考古学雑誌』第63巻1・2号 1977(昭和52年))

岩手県教育委員会『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書盛岡市萪内遺跡(Ⅰ)』1982(昭和57年)

岩手県教育委員会『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』1980(昭和55年)

岩手県立博物館『岩手の土器』1982(昭和57年)

宇田川洋『アイヌ考古学』教育社 1980(昭和55年)

大迫町教育委員会『立石遺跡』1979(昭和54年)

鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（２）』1986(昭和61年)

北上市教育委員会『八天遺跡』1978・1979(昭和53・54年)

熊谷常正「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』4　1986(昭和56年)

後藤勝彦「縄文後期宮戸Ｉｂ式周辺の吟味」『東北の考古歴史論集』1974(昭和49年)

後藤勝彦「縄文後期の土器―東北地方―」『縄文土器大成３後期』講談社 1981(昭和56年)

佐原　真「石斧論」『考古論集』1977（昭和52年)

十文字町教育委員会 「解説篇　二、八萩山新山宮縁起」『十文字町郷土史』1958(昭和33年)

鈴木正博・今橋浩一『太田区史(資料編)考古Ⅱ』1980(昭和55年)

鈴木道之助『図録石器の基礎知識Ⅲ縄文』柏書房 1981(昭和56年)

野村崇『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房 1985(昭和60年)

林　謙作「縄文文化の発展と地域性　―東北―」『日本の考古学Ⅱ』河出書房 1965(昭和40年)

増田町教育委員会「第一編　先史時代（石器時代）」『増田町郷土史』1972(昭和47年)

柳沢清一「称名寺式土器論（結編）」『古代』第68号 1980(昭和55年)

山下晋司「葬制と他界観」『日本の古代13』中央公論社 1987(昭和62年)

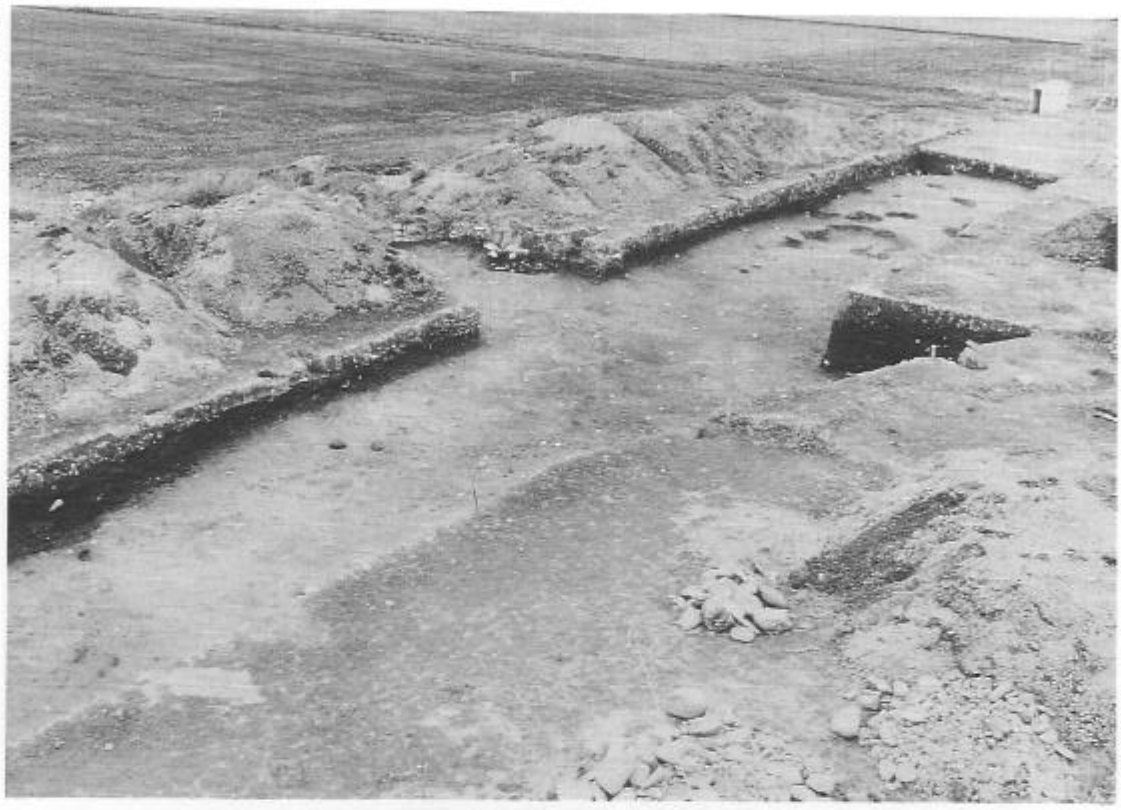
渡辺誠『縄文時代の漁業』雄山閣 1973(昭和48年)

※第92図56の石剣については、整理期間中に来秋された京都大学西脇対名夫氏よりご教示をいただき、本文中に記述した類例は、その内容によるものである。記して謝意を表します。

1．遺跡遠景（真人山より）

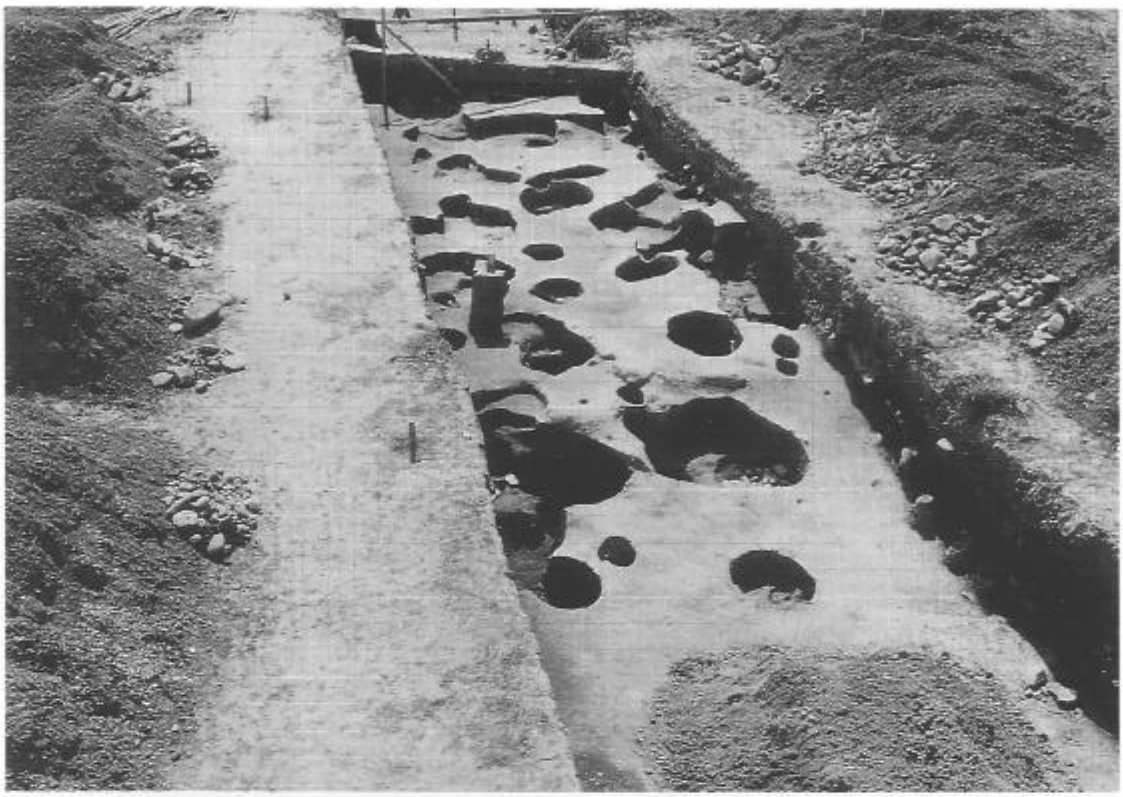
2．遺跡遠景（岩崎山より）（白抜き数字は調査区）

図版2

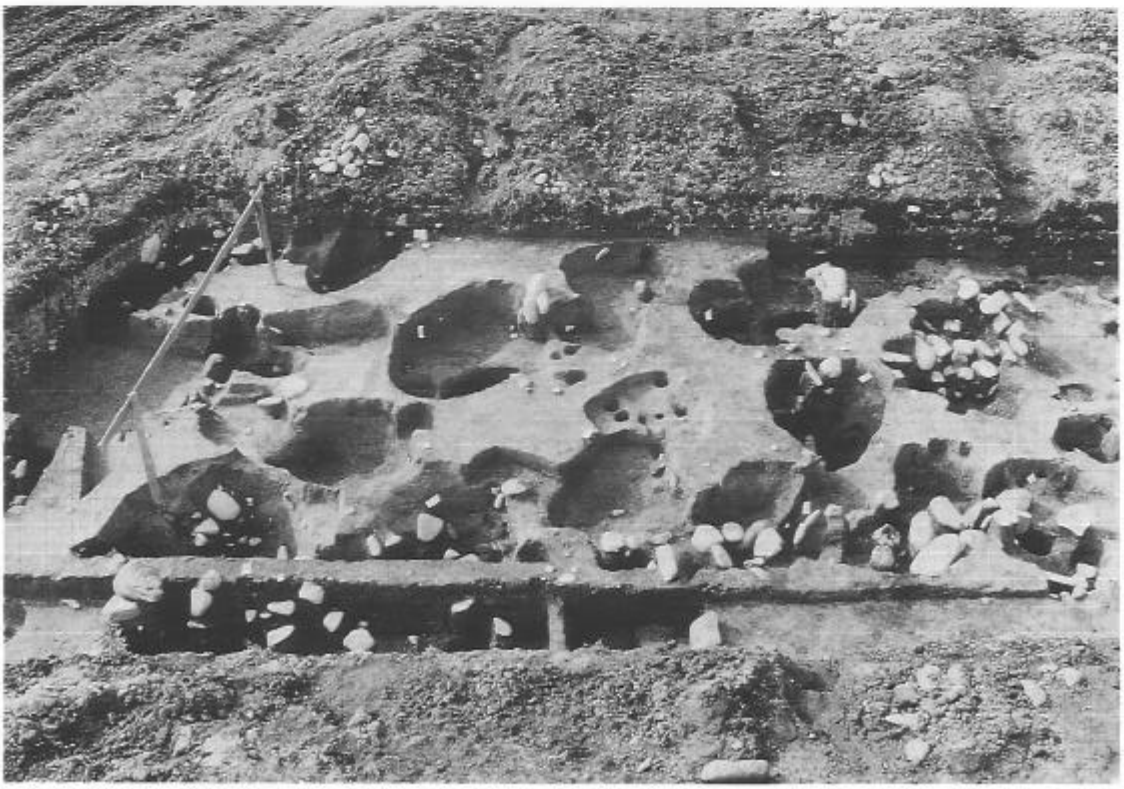


1．第2区近景①

2．第2区近景②



1．第2区近景③



2．第2区近景④

図版4

1．第4・5区全景

2．第4・5区近景①

1．第4・5区近景②

2．第4・5区近景③

図版6

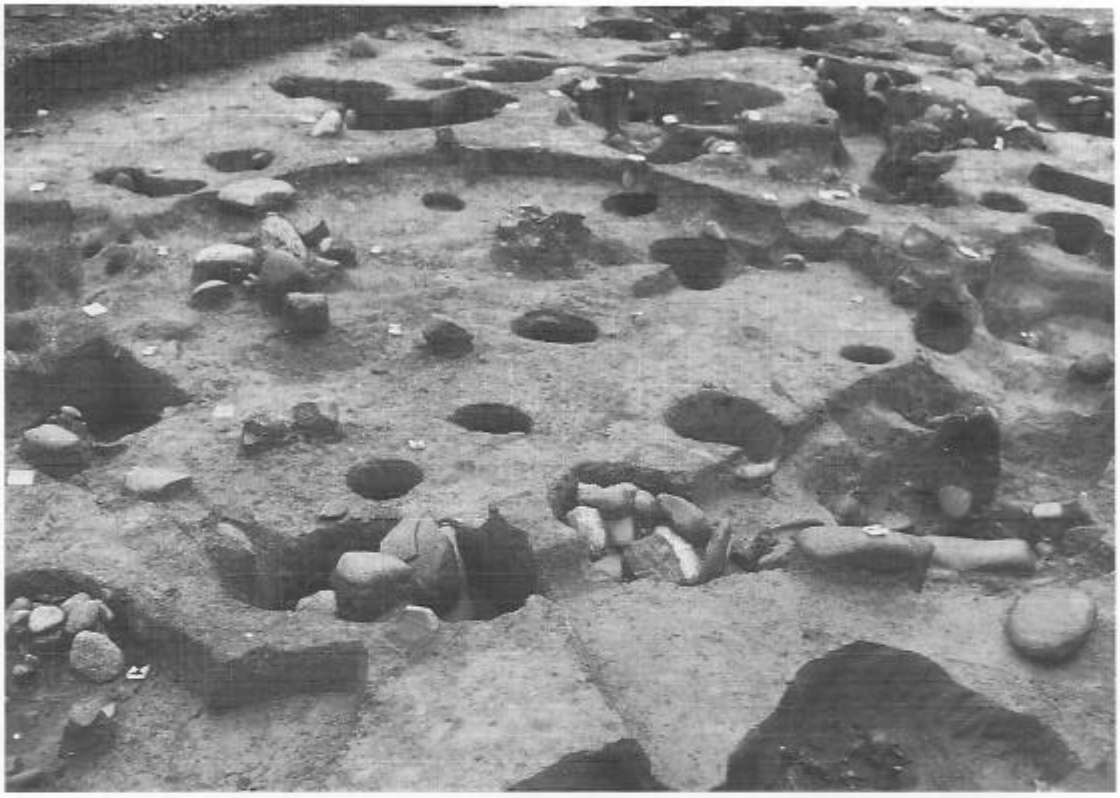
1．第1区全景

2．第3区全景

図版7

1．第6区全景

2．第10区近景



1．第4・5区SI35竪穴住居跡

2．第4・5区SI45竪穴住居跡

図版9

1．
第2区
SKP286柱穴

2．
第2区
SKP282柱穴

3．
第4・5区
SKP207柱穴

1．第4・5区SK09～17土壙

2．第4・5区SK80土壙

1．
第4・5区
SK06・08土壙
（右 SK06）

2．
第4・5区
SK33・34土壙
SQ40組石
（右奥 SK34）

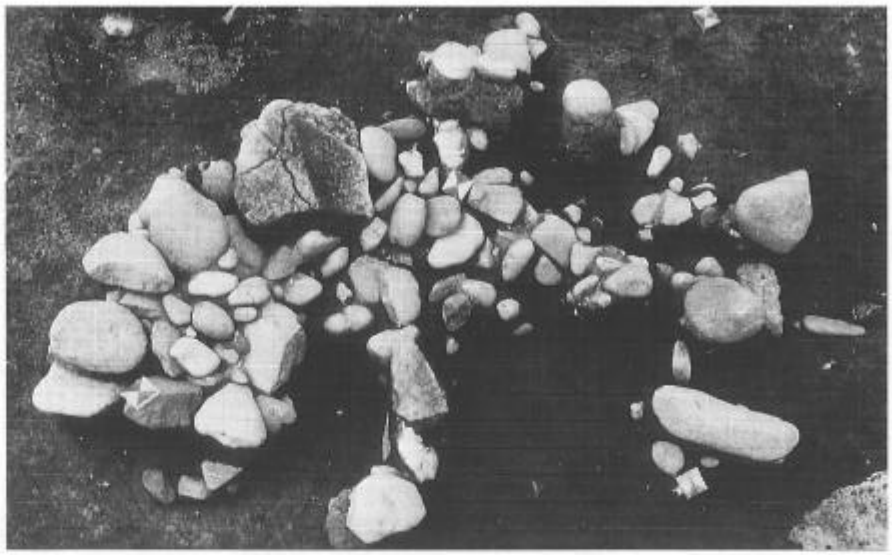
3．
第4・5区
SK33・34土壙
（右 SK34）

図版12

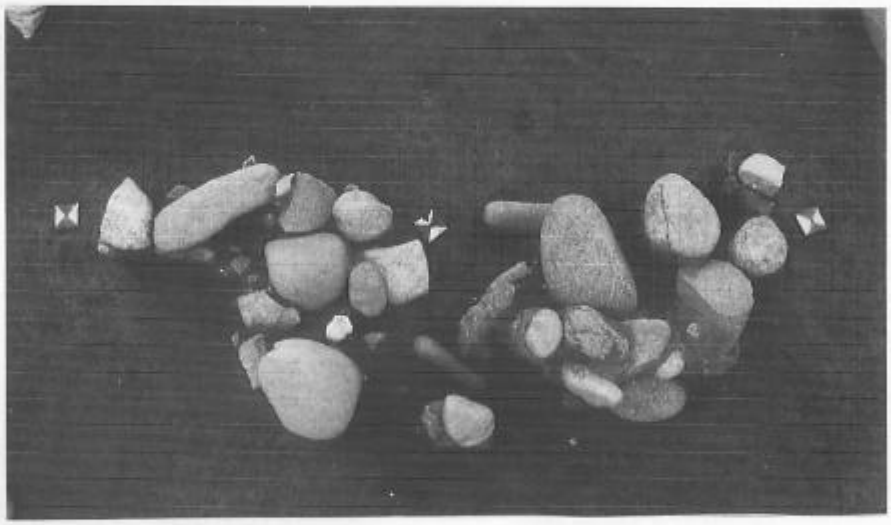
1.
第4・5区
SK36・37土壙
(右 SK36)

2.
第4・5区
SK81・335土壙
(右 SK81)

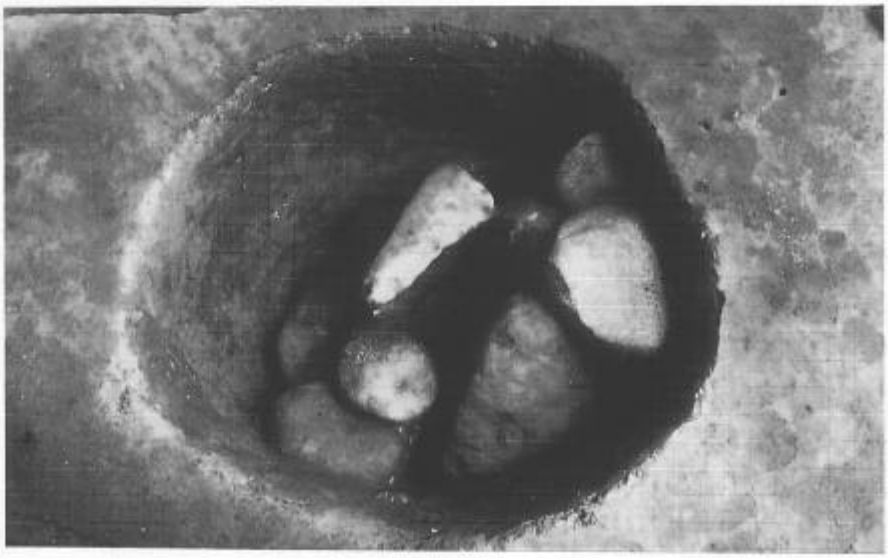
3.
第4・5区
SK114土壙



1.
第4・5区
SK263土壙



2.
第4・5区
SK128・SK129
土壙
（右 SK128）



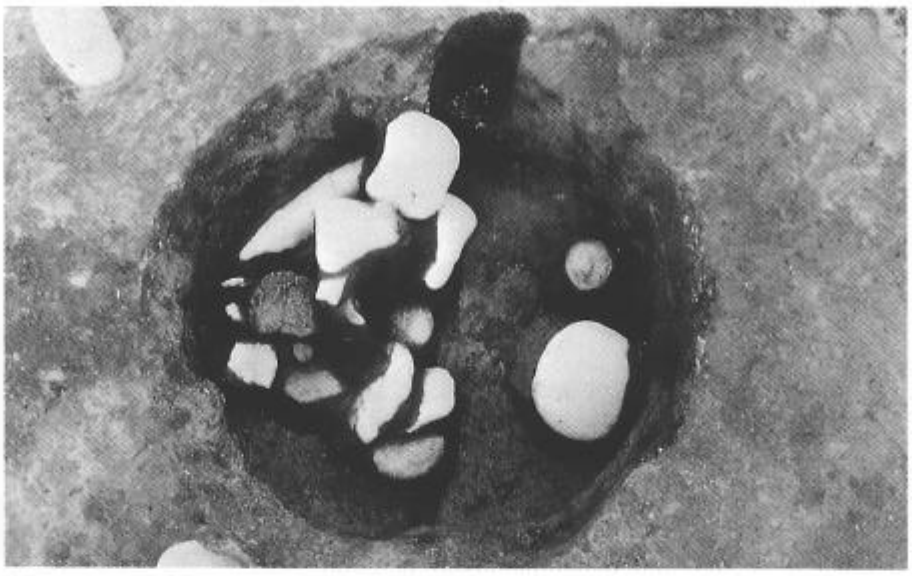
3.
第4・5区
SK129土壙

図版14

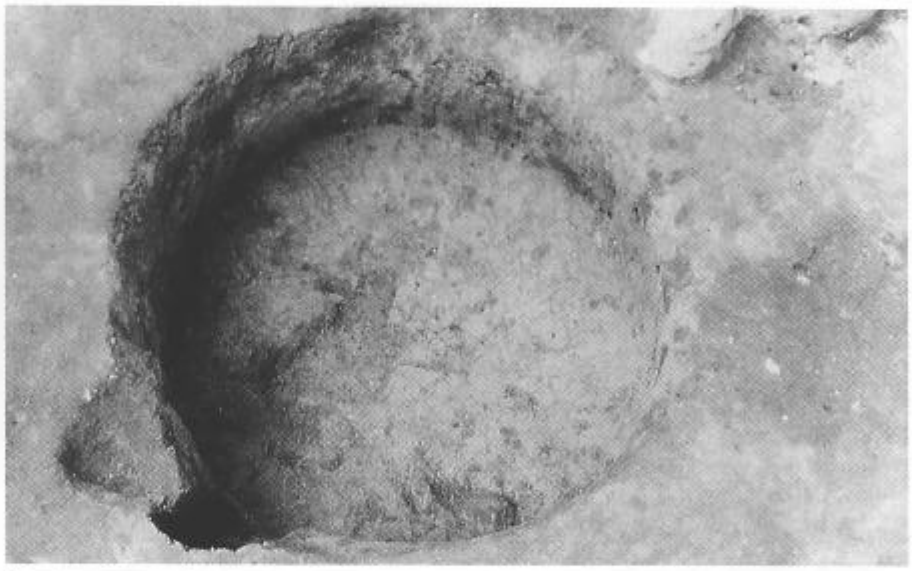
1．
第2区
SK67土壙

2．
第2区
SK38土壙

3．
第4・5区
SK03土壙



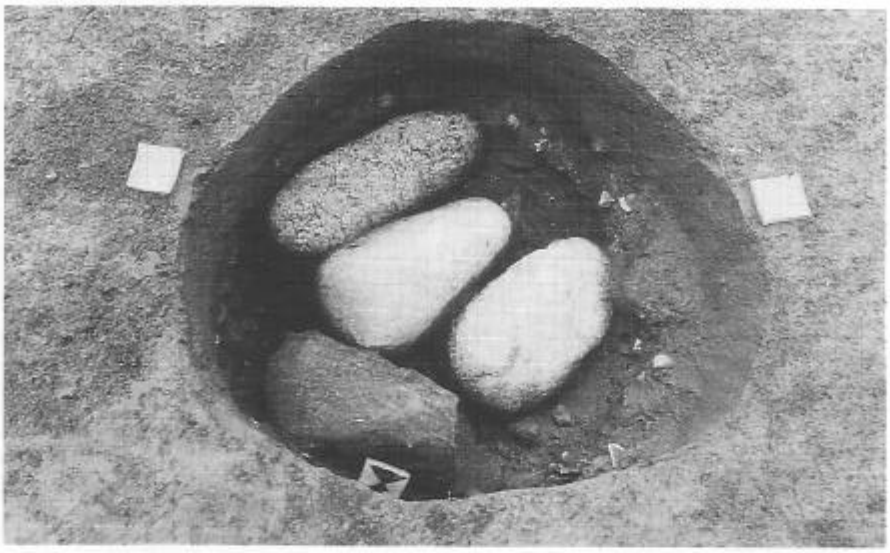
1．
第4・5区
SK 125土壙



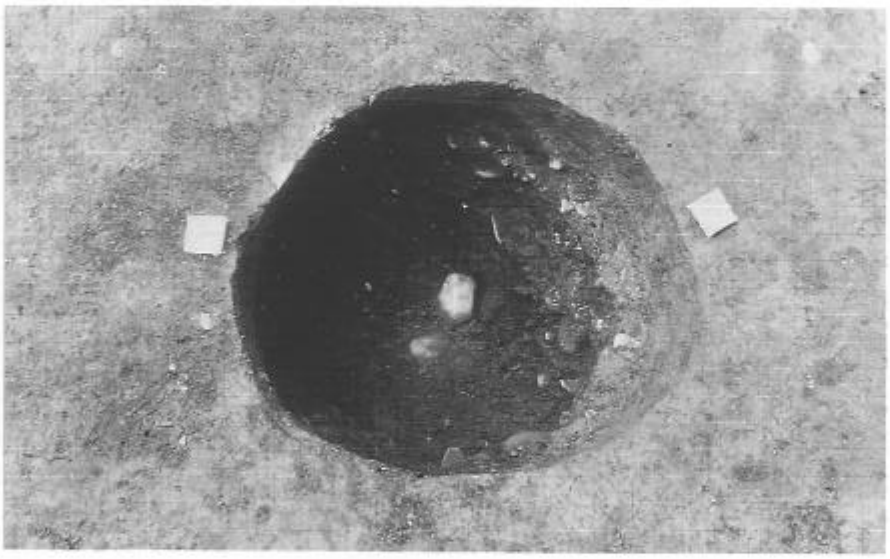
2．
第4・5区
SK 125土壙

3．
第4・5区
SK 08土壙

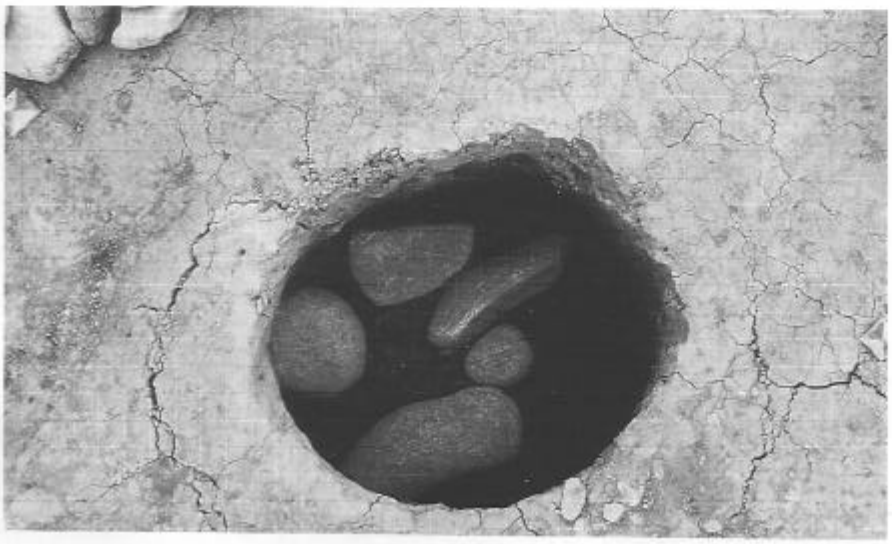
図版16



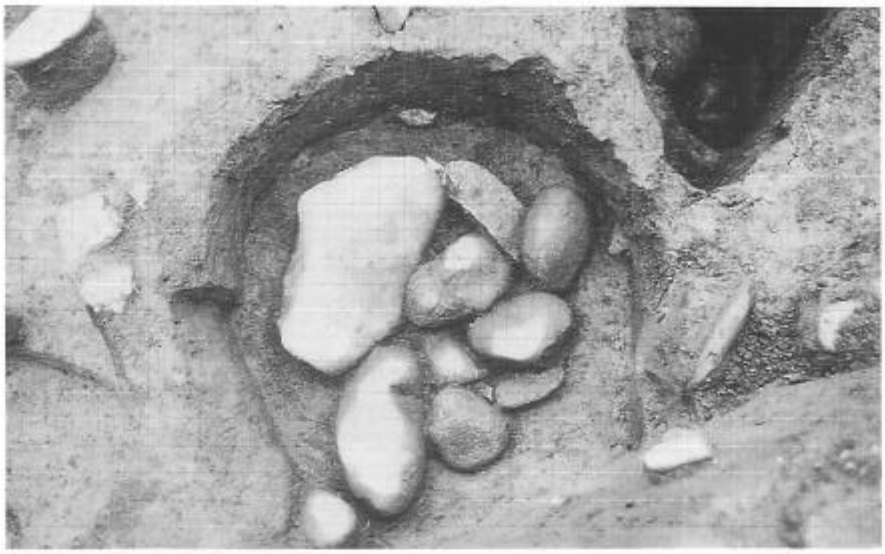
1.
第2区
SK 30土壙



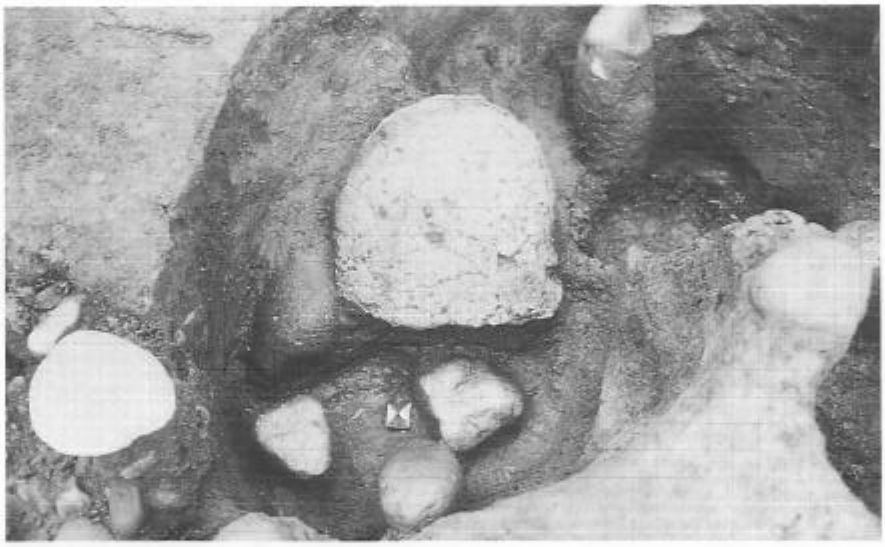
2.
第2区
SK 30土壙



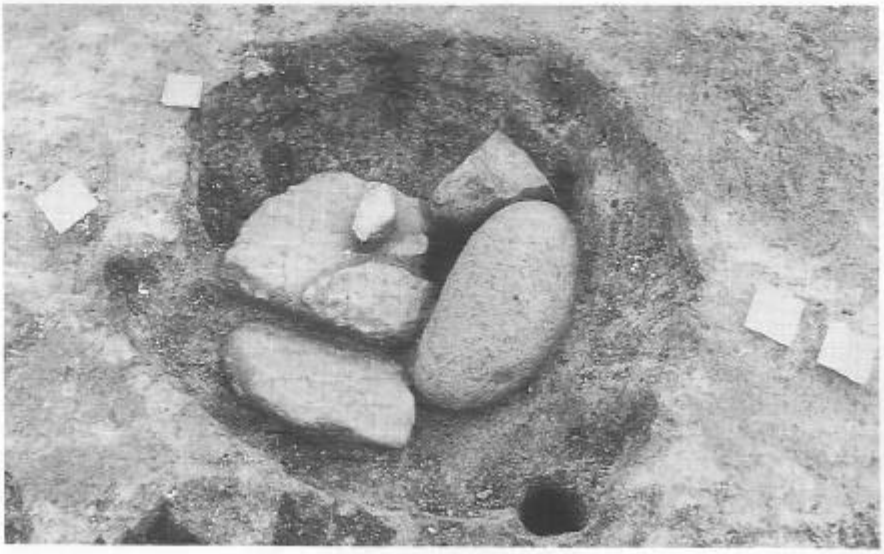
3.
第4・5区
SK 336土壙



1．
第4・5区
SK190土壙

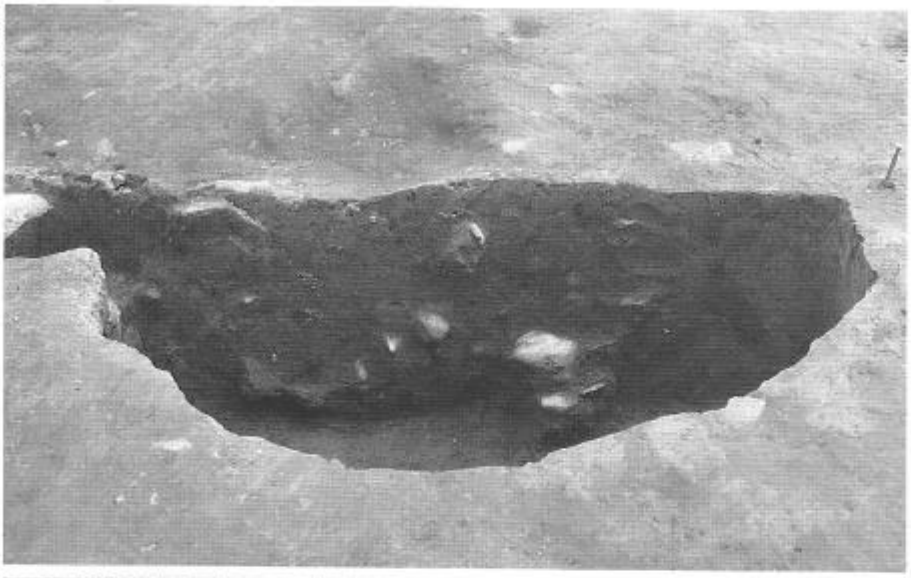


2．
第4・5区
SK60土壙

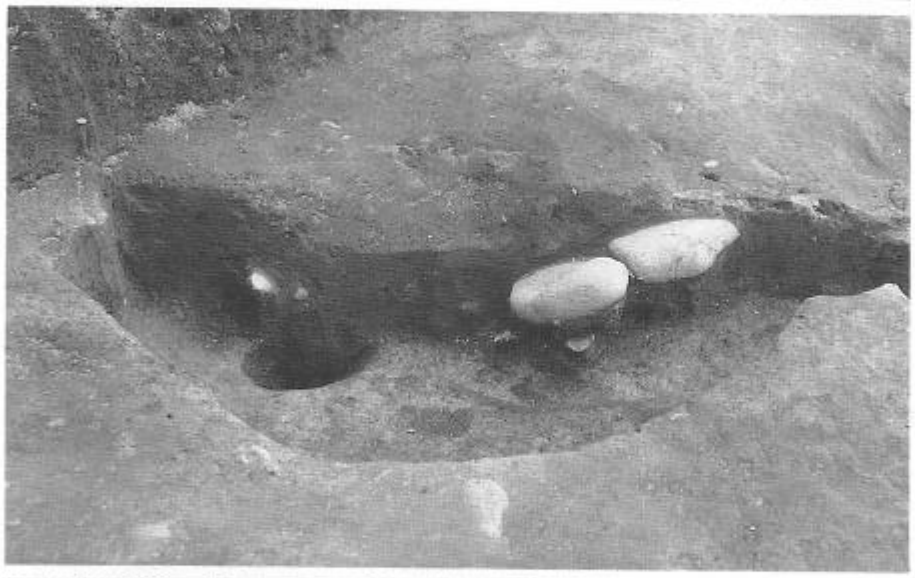


3．
第2区
SK96土壙

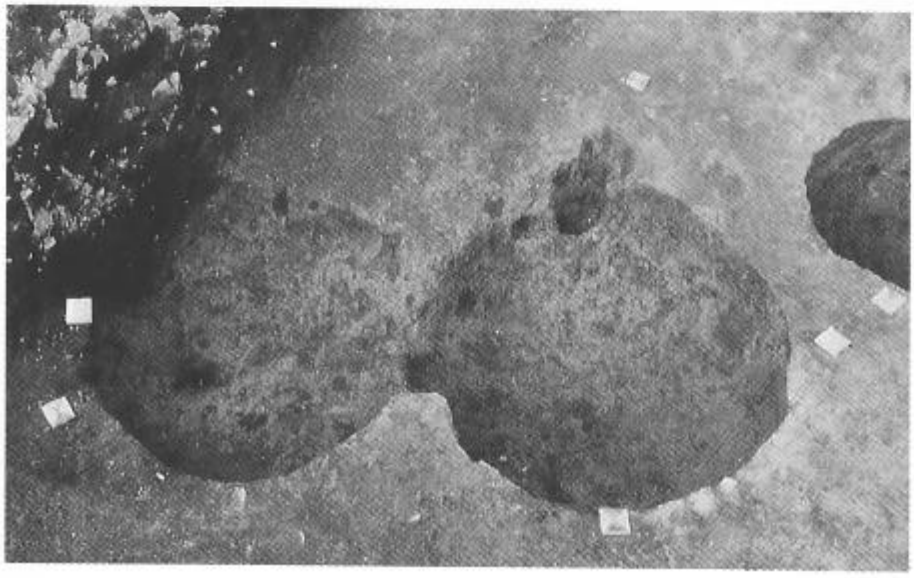
図版18



1．
第2区
SK 25土壙



2．
第2区
SK 26土壙

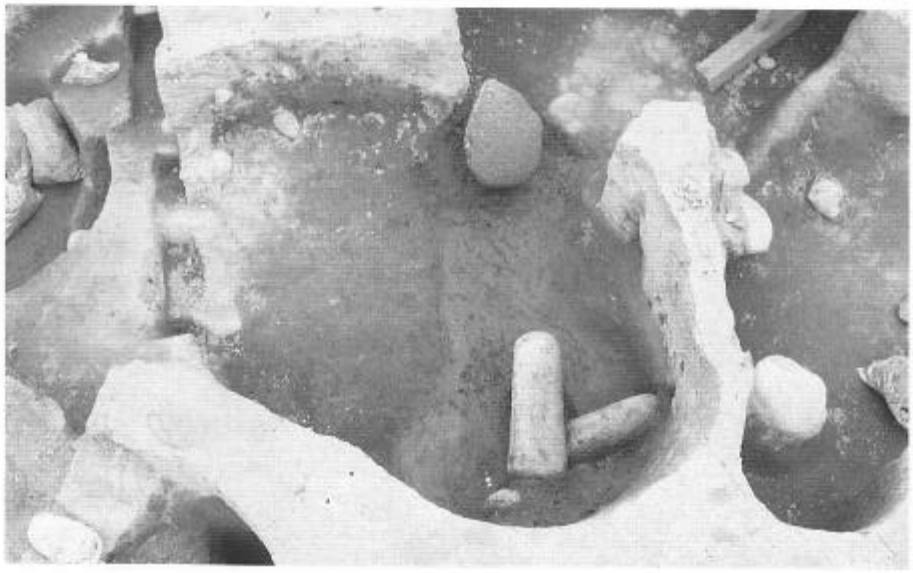


3．
第2区
SK 25・26土壙
（右 SK 25）

図版19

1．
第4・5区
SK133土壙

2．
第4・5区
SK91土壙

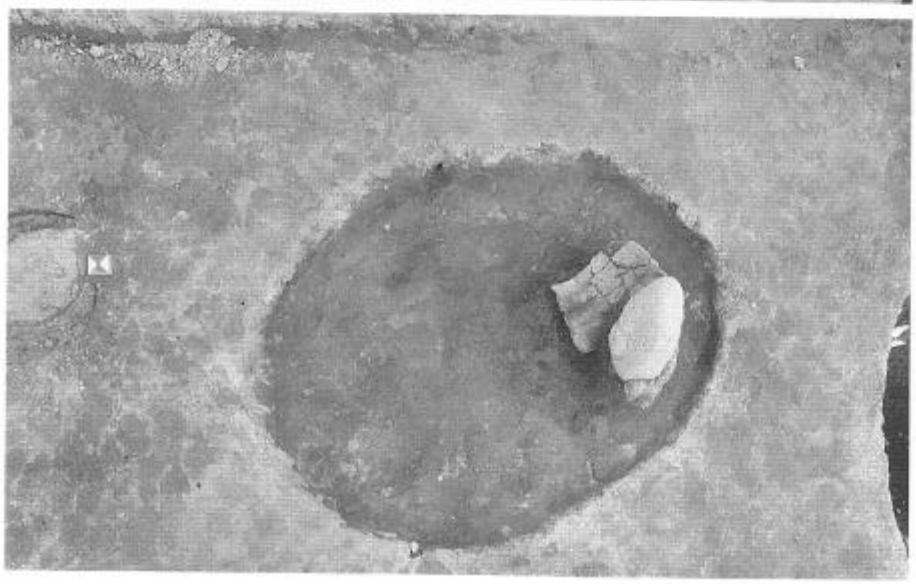


3．
第4・5区
SK90土壙

図版20

1．
第6区
SK05土壙

2．
第4・5区
SK12土壙



3．
第4・5区
SK74土壙

1．
第4・5区
SK02土壙

2．
第4・5区
SK237土壙

3．
第4・5区
SK237土壙

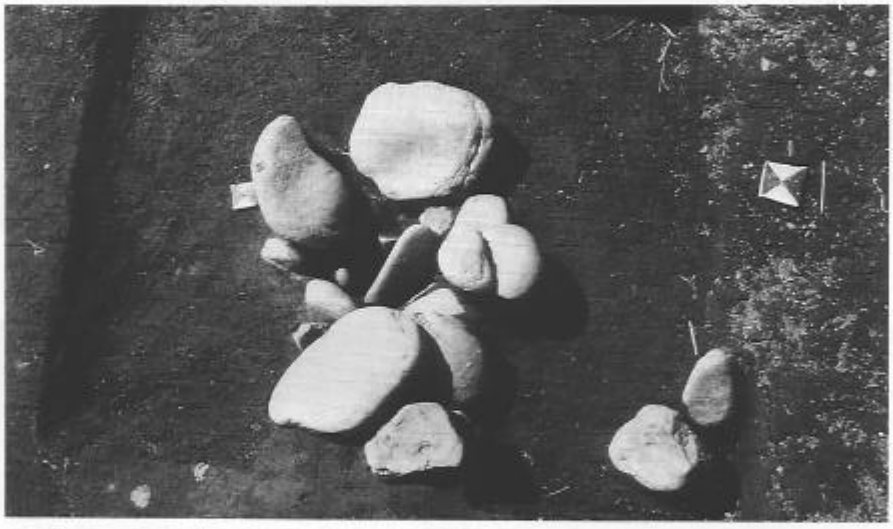
図版22

1．
第6区
SK 13土壙

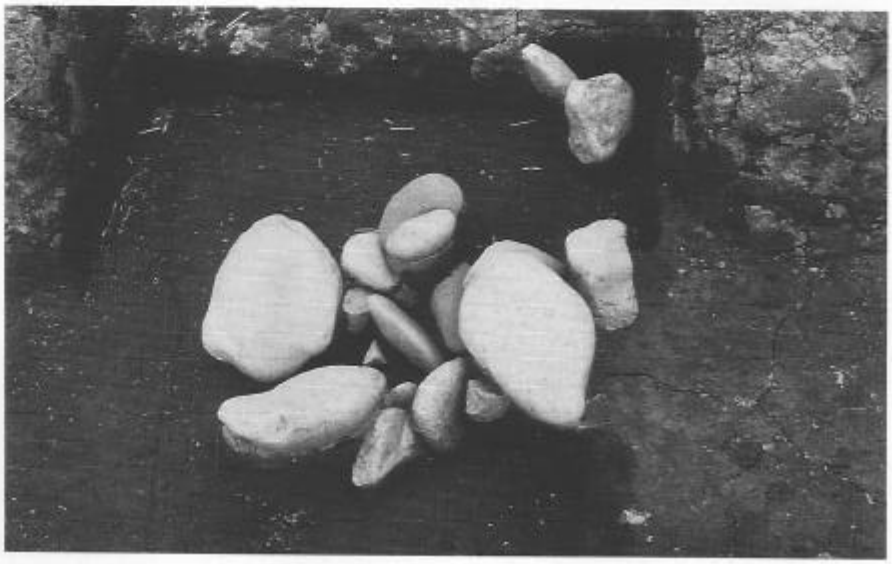
2．
第6区
SK 13土壙

3．
第4・5区
SR 01埋設土器

1.
第2区
SQ53組石



2.
第10区
SQ30組石

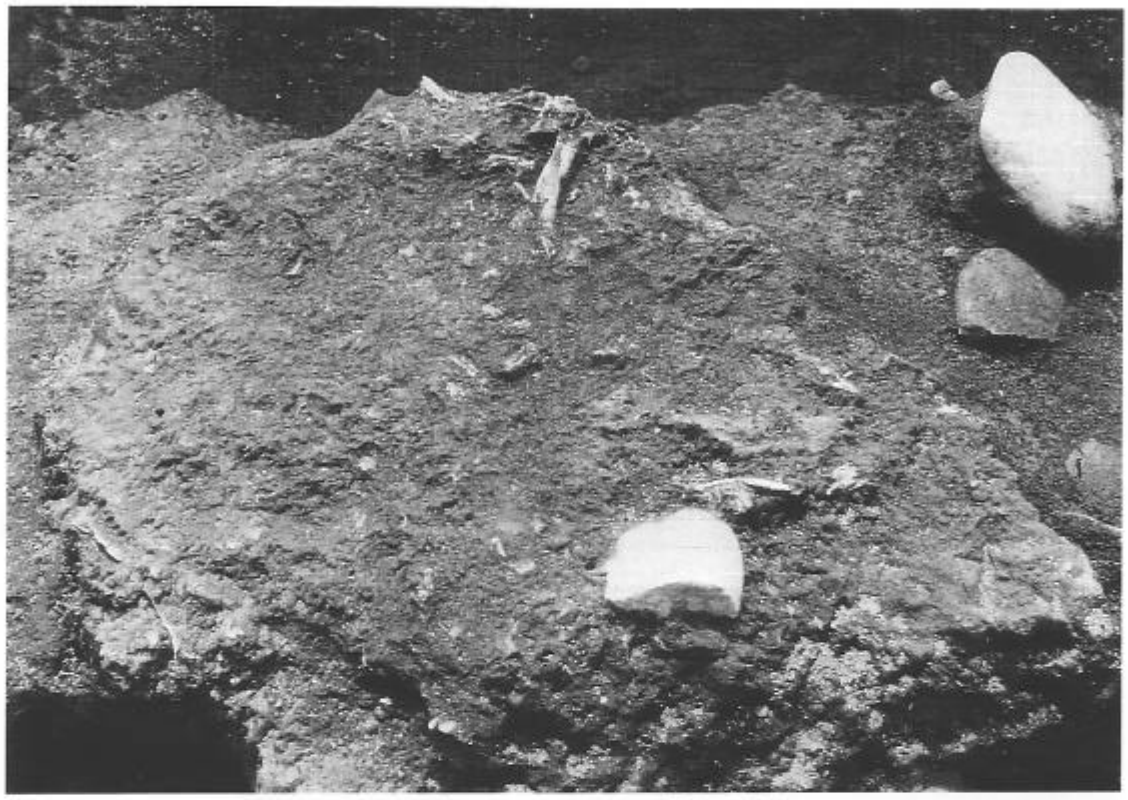


3.
第10区
SQ17組石

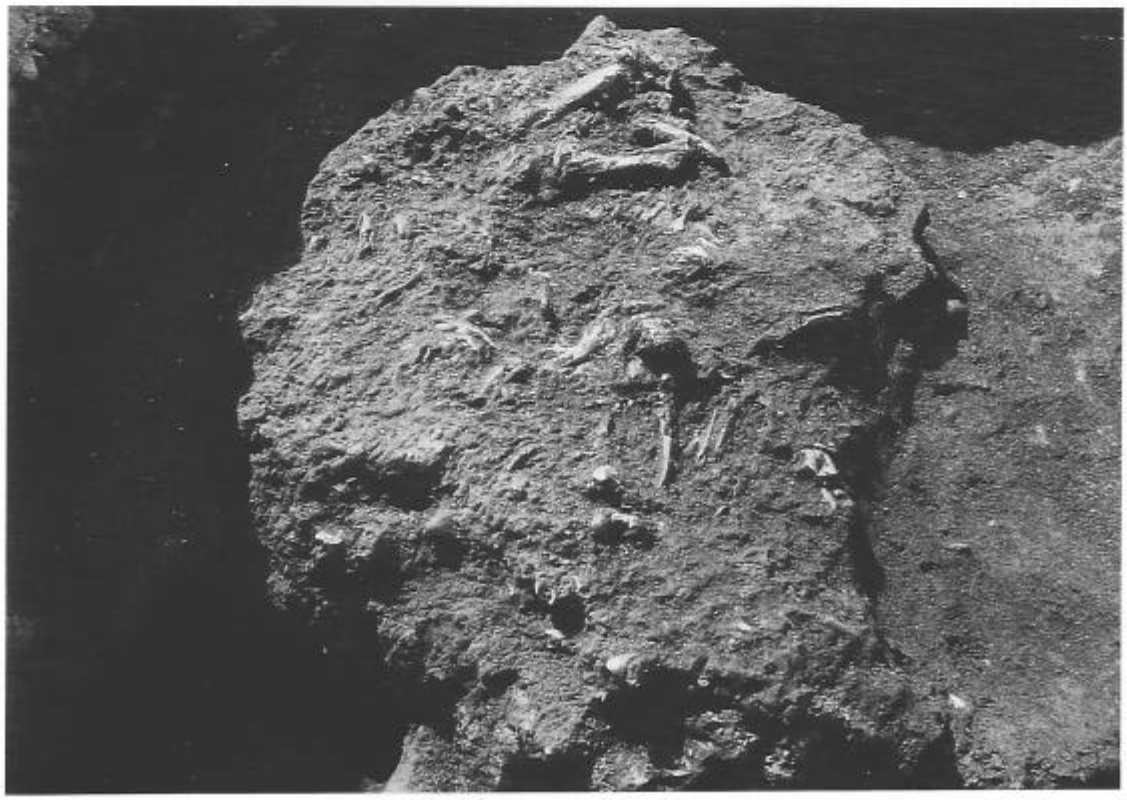
図版24

1．第2区遺物出土状況

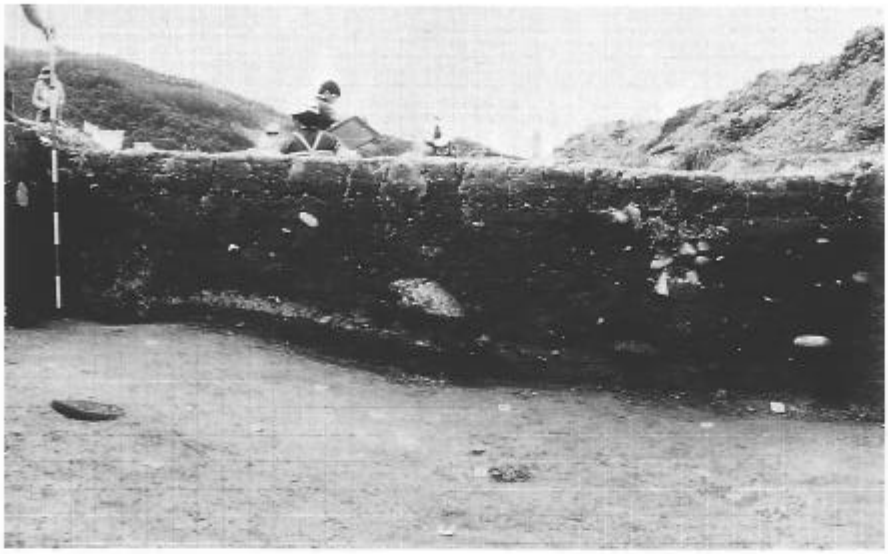
2．第2区RP69～76土器出土状況



1．第２区LH81拡張区骨出土状況



2．第２区LH81拡張区骨出土状況（掘り下げ後）



1.
第2区
KJライン土層断面

2.
第2区
RP55・56・57
土器出土状況

3.
第2区
RP107
土器出土状況

1.
第2区
RP61
土器出土状況

2.
第2区
土器出土状況

3.
第2区
大型石斧出土状況